

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

西都原地区遺跡

平成5～7年度 県営農村基盤総合整備パイロット事業
(尾鈴地区西都原工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996・2

宮崎県・西都市教育委員会

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

西都原地区遺跡

平成5～7年度 県営農村基盤総合整備パイロット事業
(尾鈴地区西都原工区) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996・2

宮崎県・西都市教育委員会



西都原の整備前の圓場

序

西都市教育委員会では、平成5～7年度宮崎県一つ瀬土地改良事務所の委託を受けて、県営農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴地区西都原工区に伴う発掘調査を実施いたしました。本書は、その発掘調査結果の報告であります。

今回の調査では、寺原地区において、大集落跡の存在が想定される古墳時代初めの頃の住居跡群や、7世紀初めから前半の墓道を伴う横穴墓群など貴重な遺構に加え、西都原で初めて完全な形の古墳人の人骨が横穴墓から発見されました。また、縄文時代早期の遺構・遺物も検出され、古い時代から生活の適地として利用されていたことが判明するなど、大きな成果をあげることができました。

この報告書が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導委員の先生方、宮崎県教育庁文化課・宮崎県一つ瀬土地改良事務所をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々並びに、地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成8年2月29日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

例　　言

1. 本書は、平成5年度～7年度県営農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴地区西都原工区に伴い実施した西都原地区遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県一つ瀬土地改良事務所の委託を受けて、西都市教育委員会が主体となり実施した。
3. 発掘調査は県文化課主事東憲章、市社会教育課主事養方政幾・同主事補岩田陽子が担当し、図面の作成については調査員のほか県文化課補助員の援助を得、一部を業者に委託した。
4. 遺物の実測・拓本・トレースは調査員のほか、東担当分は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターにて整理補助員、養方担当分は西都市歴史民俗資料館にて整理作業員の協力を得て行った。
5. 本書に使用した方位は座標北・磁北で、レベルは海拔絶対高である。
6. 本書に使用した記号は以下のとおりである。

S A <堅穴式住居跡>	S B <掘立柱建物跡>	S D <土塙墓>	S C <土坑>
S E <溝状遺構>	S I <集石遺構>		
7. 本書に使用した空中写真は㈱スカイサーベイに、自然科学分析は㈱古環境研究所に委託した。
8. 平成6年度調査にて横穴墓から人骨が出土し、分析を鹿児島大学歯学部口腔解剖学教室の小片丘彦教授に依頼した。
9. 本書は第Ⅰ章～第Ⅲ章を養方が、第Ⅳ章・第Ⅴ章を東と養方が分担執筆し、文責は目次に示した。編集は養方が行った。
10. 調査で出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館において保管している。

目 次

第Ⅰ章.はじめに.....	(義方).....	1
第1節.調査に至る経緯.....		1
第2節.調査の体制.....		2
第Ⅱ章.遺跡の位置と歴史的環境.....	(義方).....	3
第Ⅲ章.調査の概要.....	(義方).....	5
第Ⅳ章.調査の記録.....		17
第1節.平成5年度の調査.....		17
(1)18号支線道路.....	(義方).....	17
(2)19号支線道路.....	(義方).....	17
(3)20号・21号支線道路.....	(義方).....	17
(4)22号～26号支線道路.....	(東).....	17
(5)1号小排水路.....	(東).....	19
(6)27号支線道路.....	(義方).....	24
(7)28号～30号支線道路.....	(東).....	43
(8)31号～34号支線道路.....	(東).....	43
(9)35号支線道路.....	(義方).....	50
(10)A区.....	(東).....	55
(11)B区.....	(東).....	55
(12)C区・D区.....	(東).....	60
(13)E区.....	(義方).....	60
第2節.平成6年度の調査.....		64
(1)1号支線道路.....	(義方).....	64
(2)2号小道路.....	(義方).....	66
(3)2号支線道路.....	(義方).....	72
(4)3号支線道路.....	(義方).....	72
(5)4号・5号支線道路.....	(東).....	74
(6)6号・7号支線道路.....	(東).....	74
(7)8号支線道路.....	(東).....	74
(8)9号～12号支線道路.....	(東).....	84
(9)13号～17号支線道路.....	(東).....	84

(10) F区	(養方)	108
(11) G区	(養方)	108
(12) H区	(養方)	108
(13) I～K区	(養方)	108
(14) 旧競馬跡	(養方)	108
第3節 平成7年度の調査		113
(1) 27号支線道路	(養方)	113
第V章 16号支線道路横穴墓群出土の人骨について		128
第VI章まとめ		137
1. 縄文時代の集石遺構について	(養方)	137
2. 27号支線道路の集落について	(養方)	137
3. 4号支線道路の大溝について	(東)	139
4. 16号支線道路の横穴墓群について	(東)	140

表 目 次

遺物観察表(1)	118
遺物観察表(2)	119
遺物観察表(3)	120
遺物観察表(4)	121
遺物観察表(5)	122
遺物観察表(6)	123
遺物観察表(7)	124
遺物観察表(8)	125
遺物観察表(9)	126
表11 西都6-2号墓熟年女性頭蓋の計測値(mm)および示数	130
表12 頭蓋計測値(mm)および示数の比較	131
表13 顔面平坦度3示数の比較	132
表14 西都6-2号墓人骨の頭蓋形態小変異	132
表15 西都6-2号墓熟年女性四肢骨の計測値(mm)および示数	132
表16 大腿骨、脛骨の計測値(mm)と示数の比較	134
表17 推定身長の比較(cm)	134

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4	第26図 27号支線道路SD1・SC1実測図、出土遺物実測図	42
第2図 西都原地区遺跡周辺図	7~8	第27図 28号支線道路S D 1実測図及び出土遺物実測図	44
第3図 平成5・7年度調査区域図	9~10	第28図 31号支線道路遺構分布図	45
第4図 平成6年度調査区域図	11~12	第29図 31号支線道路検山遺構実測図	47
第5図 平成5・7年度検出遺構分布図	13~14	第30図 出土遺物実測図	48
第6図 平成6年度検出遺構分布図	15~16	第31図 33号支線道路S A 1実測図	49
第7図 19号支線道路SA1・2実測図 出土遺物実測図	18	第32図 34号支線道路S B 1実測図	49
第8図 23号支線道路遺構分布図	20	第33図 35号支線道路S I 1実測図	50
第9図 23号支線道路S I 1・2実測図 出土遺物実測図	21~22	第34図 A区SE1・2実測図及びSE2出土遺物実測図	51~52
第10図 23号支線道路S E 1実測図	23	第35図 B区遺構分布図	53~54
第11図 1号小排水S A 1・S E 1・2実測図	23	第36図 B区S A 1実測図	56
第12図 出土遺物実測図	24	第37図 B区S A 1出土遺物実測図	57
第13図 27号支線道路遺構実測図(1)	25~26	第38図 B区S D 1実測図及び出土土器実測図	57
第14図 27号支線道路遺構実測図(2)	27~28	第39図 B区遺構外出土遺物実測図	58
第15図 27号支線道路S A 1出土遺物実測図	31	第40図 C区遺構分布図	59
第16図 27号支線道路S A 2出土遺物実測図	32	第41図 D区遺構分布図	59
第17図 27号支線道路S A 3出土遺物実測図	33	第42図 E区遺構分布図	61
第18図 27号支線道路S A 3・4出土遺物実測図	34	第43図 E区S I 1~4実測図	62
第19図 27号支線道路S A 5~7出土遺物実測図	35	第44図 E区S I 5~7実測図 出土遺物実測図	63
第20図 27号支線道路S A 8出土遺物実測図	36	第45図 1号支線道路焼甕出上状況図	64
第21図 27号支線道路S A 9出土遺物実測図	37	第46図 1号支線道路出土遺物実測図	65
第22図 27号支線道路S A 9・10出土遺物実測図	38	第47図 2号小道路S I 1実測図	66
第23図 27号支線道路S A 11出土遺物実測図	39	第48図 2号小道路SE1・SC1・S A 1出土遺物実測図	67
第24図 27号支線道路S A 13・14・S C 2出土遺物実測図	40	第49図 2号小道路S C 1出土遺物実測図(1)	68
第25図 27号支線道路S A 14・15・S C 2出土遺物実測図	41	第50図 2号小道路S C 1出土遺物実測図(2)	69

第51図	2号小道路S C 1出土遺物実測図（3）	70	第70図	3号墓道実測図	96
第52図	2号支線道路S E 1・2実測図	71	第71図	3号墓道出土遺物実測図	97
第53図	3号支線道路遺構分布図　出土遺物実測図	73	第72図	4号墓道実測図	99
第54図	4号支線道路大溝平面図　土層断面図	75～76	第73図	4号墓道出土遺物実測図	100
第55図	4号支線道路大溝出土遺物実測図	77	第74図	5号墓道実測図	101
第56図	6号支線道路上層断面図及び出土遺物実測図	78	第75図	4号墓道・5号墓道出土遺物実測図	102
第57図	8号支線道路S A 1実測図、出土遺物実測図	79	第76図	6号墓道実測図	103～104
第58図	8号支線道路S A 1・2分布図	80	第77図	6-2号実測図	105～106
第59図	8号支線道路S A 1出土遺物実測図	80	第78図	6-2号円墳周溝出土遺物実測図	107
第60図	8号支線道路S A 2実測図、出土遺物実測図	81～82	第79図	F～H区遺構分布図	109
第61図	8号支線道路S A 3実測図、出土遺物実測図	83	第80図	I区出土遺物実測図	110
第62図	12号支線道路遺構分布図	85	第81図	旧競馬場跡S C 1・S D 1・S E 1実測図	111
第63図	16号支線道路遺構分布図	87～88	第82図	旧競馬場跡S D 1出土遺物実測図	112
第64図	1号墓道実測図	90	第83図	27号支線道路（西側）遺構実測図	114
第65図	2号墓道実測図	90	第84図	27号支線道路（西側）SA6～8出土遺物実測図	115
第66図	1-1号実測図	91	第85図	27号支線道路S A19出土遺物実測図	116
第67図	2-1号実測図	92	第86図	27号支線道路S A21出土遺物実測図	117
第68図	1号墓道1-1号出土遺物実測図	94	第87図	西都6-2号墓人骨頭蓋	129
第69図	2号墓道2-1号3号墓道出土遺物実測図	95	第88図	下顎正中部に見られる集合性歯牙腫	133

第Ⅰ章. はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県一つ瀬土地改良事務所では平成元年度から西都原地区的県営農村基盤総合整備パイロット事業が進められており、すでに畑地灌漑に伴うバイオライン埋設事業については平成3年度に完了している。しかし、面工事、いわゆる圃場整備については、西都原台地が西都原古墳群の所在する台地で、文化財保護法では特別史跡として、宮崎県公園条例では特別地域及び普通地域として自然景観をそのままに風致保存がなされており、工事によって地形が大きく変わり、自然景観に悪影響を及ぼすのではないかと懸念されたことから、文化財部局と開発部局との意見がなかなかまとまらなかった。しかし、なるべく自然地形そのままを利用する西都原方式の圃場整備の実施と、重要な遺構が検出された場合には計画変更又は保存措置を講じること、また、道路部分と削平される部分については発掘調査を実施するということで合意に達し、平成5年度寺原地区周辺から西都原台地の圃場整備事業が実施されることとなった。

なお、圃場整備は平成5・6年度の計画であったが、平成6年度27号支線道路から古墳時代はじめの住居跡群が検出され、保存措置が講じられることとなり、その保存方法について協議を重ねたが、当年度内に合意に達せず、この27号支線道路の整備のみ平成7年に持ち越された。

最終的には、住居跡群が検出された部分の道路移設も含め検討されたが、27号支線道路が寺原集落と西都原とを繋ぐ主要道路で、寸断されると不便であり、また、移設も土地問題などで困難であることから、地下遺構に影響を及ぼさないよう盛土を行うなど工法を工夫して道路整備をすることで合意した。

発掘調査は、宮崎県一つ瀬土地改良事業所の委託を受けて、平成5～7年度にかけて西都市教育委員会が主体となり実施したが、調査員については調査区域が広範囲で期間も限られていることから県文化課に依頼(平成5～6年度)、主事の東憲章氏に協力していただいた。

調査期間は、平成5年度が平成5年10月6日～平成6年3月16日、平成6年度が平成6年9月22日～平成7年2月16日、平成7年度が平成7年9月20日～平成7年10月20日である。

第2節 調査の体制

(平成5年度・平成6年度)

調査主体 西都市教育委員会

教育長 平野 平

社会教育課長 三輪 公洋

同文化財係長 伊達 博敏

同文化財主事補 鹿嶋 修一

調査員 社会教育課主事 薮方 政幾

派遣調査員宮崎県文化課主事 東 憲章

発掘調査作業員

黒川秋・椎葉重満・椎葉智佐子・篠原時江・黒木トシ子・緒方タケ子・長谷川クミエ
藤原秋子・川崎ヒロ子・緒方シヅエ・押川ツル・押川美歌子・佐伯民孝・杉田ヨシ・横山ヨシ
横山ナオ子・川野照夫・黒木恒雄・児玉国子・押川幸子・河野ツヤ子・河野キミ子・金丸美保
大野寅男・酒井清子・岩谷 徹・仲原宗光・西川 清・西川 突・長友百合子・横山訓啓
横山廣利・浜田スミ・金丸トミ子・横川春子・宮 キミ子・中武マキ・大平キクエ・河野達也

遺物整理作業員

福田頼子・沼口和代・北崎京子・関屋香津子・蓑方玉江・片岡紀子・松浦フミエ・酒井悦代

(平成7年度)

調査主体 西都市教育委員会

教育長 平野 平

社会教育課長 三輪 公洋

同文化財係長 伊達 博敏

同文化財主事補 鹿嶋 修一

調査員 社会教育課主事 薮方 政幾

同 主事補 岩田 陽子

発掘調査作業員

佐伯民孝・杉田ヨシ・横山ヨシ・椎葉重満・椎葉智佐子・緒方タケ子・押川ツル
岩田はる子

遺物整理作業員

福田頼子・沼口和代・北崎京子・関屋香津子

宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター整理補助員

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方には標高50m～80mの通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在し、また、南九州独特の埋葬形態を有する地下式墳も12基確認されている。

この西都原台地の中央部には、明治28年12月4日陵墓参考地として治定を受け、特別史跡西都原古墳群には含まれない男狹穂塚・女狹穂塚の2基の巨大古墳がその偉容を誇っている。男狹穂塚（全長217m・高さ18m）・女狹穂塚（全長174m・高さ15m）はともに九州随一の規模を誇る前方後円墳で、10.5haの静肅な照葉樹林に囲まれた森に保存されている。

その他、特色ある古墳として男狹穂塚の西側には大正時代の学術的な発掘調査によって、重要文化財指定の舟形埴輪と子持家形埴輪を出土した169号墳があり、女狹穂塚の南東50mには西都原古墳群で唯一横穴式石室を有し、全国的にも稀有な土累を周囲に巡らす鬼の窟古墳（円墳）がある。

西都原台地は、周りを標高約30程の中間台地が取り囲んでいるが、その南側中間台地には奈良時代に建立された一国一寺の日向國分寺・同尼寺跡が保存され、また、東側中間台地の寺崎地区（寺崎遺跡）では、県及び市教育委員会により実施された遺跡所在確認調査等によって、律令時代の造構とともに多量の古代瓦等が確認され、日向國府の有力な候補地として位置づけられる。さらに、平成元年度実施した尾筋地区の遺跡所在確認調査では、弥生時代を中心とした集落跡が確認され、昭和63年度平田・童子丸新設道路に伴う酒元遺跡の発掘調査では、古墳時代中期中葉から後葉、つまり、男狹穂塚・女狹穂塚が構築された時期頃の集落跡が検出されており、この中間台地は歴史的にも価値の高い地域になっている。

ところで、西都原地区遺跡は、寺原遺跡・丸山遺跡・原口遺跡・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼び名で、いずれも西都原台地上に位置している。原口遺跡は台地南側周辺地域、寺原遺跡は御陵墓の南側で原口遺跡の北側に位置し（寺原集落の東側周辺地域）、丸山遺跡は台地北側周辺地域、西都原遺跡は台地ほぼ中央部に位置する御陵墓の東側周辺地域に位置している。これら遺跡内からは、丸山遺跡（平成元年度）で縄文時代早期の焼縄群、原口第2遺跡（平成2年度）からは古墳時代後期の竪穴住居跡2軒、寺原第1・第4遺跡（昭和58・59年度）からは弥生時代終末の竪穴式住居跡3軒などが確認されている。また、同台地北東端の新立遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡20軒が検出されており、このような意味からも、西都原台地は西都原古墳群をはじめ様々な時代の造構・遺物等が保存される重要な地域として位置づけられる。



1. 西都原古墳群 2. 御陵墓（男狹穗塚・女狹穗塚）
 3. 丸山遺跡・4. 西都原遺跡・5. 寺原遺跡・6. 原口遺跡（西都原地区遺跡）
 7. 原口第2遺跡 8. 寺原第1遺跡 9. 新立遺跡 10. 日向国分寺跡
 11. 日向國分尼寺跡 12. 酒元遺跡 13. 寺崎遺跡

第1図 遺跡位置図 ($S=1/25,000$)

第Ⅲ章. 調査区の設定と概要

西都原地区遺跡については、調査に先行して県文化課にて試掘調査が行われ、竪穴式住居跡をはじめピット群や溝状遺構などのほか、弥生土器・土師器・中近世陶磁器などの遺物も確認された。発掘調査はこれらの結果をもとに、道路及び削平によって地下遺構の保存が困難な部分について実施した。調査面積は、対象面積の約600,000m²に対して約90,000m²（平成5年度△40,000m²・平成6・7年度△50,000m²）にも及んだ。

なお、平成7年度については、住居跡群が検出されたため整備が延期になっていた27号支線道路の西側部分約60m²の調査を行った。

平成5年度の調査は、御陵墓の南側から西都原運動公園の北側に挟まれた地域が対象となった。

調査の結果、集石遺構11基をはじめ竪穴式住居跡22軒・掘立柱建物跡1棟・土壙墓3基及び多数の土坑・ピットなどが検出された。特にII工区中央部を東西に延びている27号支線道路の西側拡幅部分からは、14軒もの竪穴式住居跡が重複して検出され、また、隣接した畠地にも住居跡が確認されることから大集落跡の存在が想定された。いずれの竪穴式住居跡も共伴遺物から4世紀はじめから後半のものと推定される。

集石遺構は縄文時代早期、竪穴式住居跡は弥生時代後期から古墳時代はじめ、掘立柱建物跡、土壙墓は古代のものと推定されるが、このなかで、保存が良好な集石遺構については、西都市歴史民俗資料館の展示資料として活用するため、液体窒素及び発砲硬質ウレタンのそれぞれの方法によって1基ずつ保存措置を行った。

平成6年度の調査は西都原台地の北端で西都原資料館の東側にあたる地域及び御陵墓の東側地域、さらに、鬼の窟古墳の南側を中心とした地域が対象となった。

調査の結果、縄文時代早期の集石遺構1基をはじめ竪穴式住居跡4軒・横穴墓6基・円墳周溝・土壙墓1基・土坑1基・掘立柱建物跡1軒・大溝などが検出された。特に16号支線道路の予定になっていた部分からは、円墳周溝に隣接して墓道を伴った横穴墓が6基検出された。

墓道は台地縁辺の斜面に5m間隔に6本掘り込まれ、それぞれの正面あるいは側面に玄室が掘り込まれており、外見的には横穴墓そのものであるが、玄室の内部構造などは地下式墳と酷似していることから、注目される遺構である。このような形のものは県内では類例がなく、横穴墓及び地下式墳の墓制を考えるうえでは画期的な資料である。いずれも副葬品及び共伴遺物などから7世紀はじめから前半の頃のものと推定される。なお、6-2号墓からは完全な形の人骨が出土したことから、鹿児島大学歯学部口腔解剖学教室の小片丘彦教授に調

査・分析を依頼した。

また、4号支線道路から検出された大型の溝状遺構は地下レーダー探査のデータと合わせると第3古墳群を取り囲むように方形状に延びることが確認されており、自然地形を利用していると考えられるが、編年的なことも含めて注目される遺構である。

平成7年度の調査では、平成6年度同様4世紀はじめから後半の竪穴住居跡が7軒検出されたが、いずれも東側に集中している。2~3軒重複していると思われるが、狭範囲のため不明な部分も多い。

以上が検出された遺構・遺物であるが、これらのなかで、27号支線道路の竪穴式住居跡群、8号支線道路及び8号新設道路の竪穴式住居跡3軒、16号支線道路の横穴墓群と円墳周溝などについては計画変更を含め保存の措置がとられることになった。

なお、今回は自然科学分析を㈱古環境研究所に委託して行ったが、分析したのは火山灰・植物珪酸体・花粉・寄生虫卵分析の4項目である。

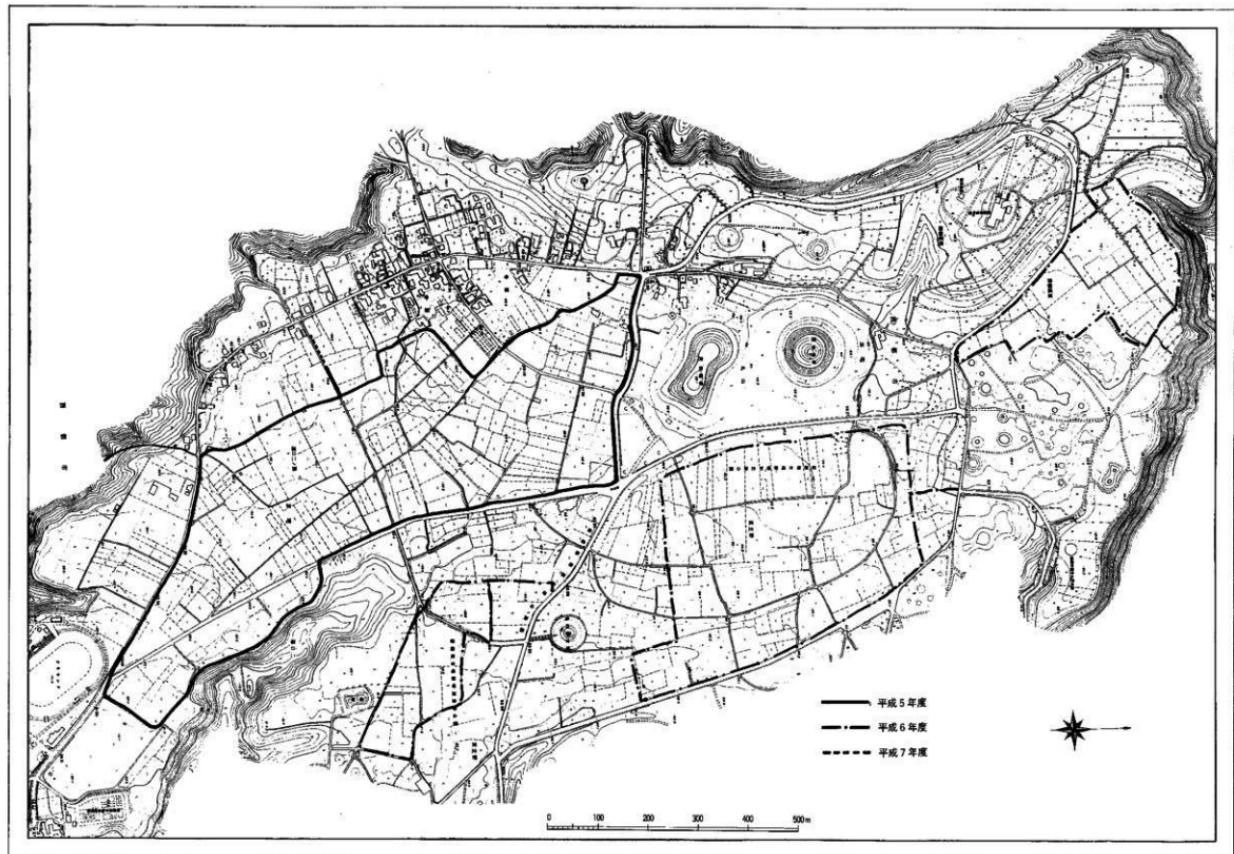
火山灰分析では、アカホヤ火山灰層の下位に霧島－浦牟田スコリア、さらに下位に約16,000~10,000年前の霧島一小林軽石に由来する火山灰が検出されている。

植物珪酸体分析では、関東周辺でも認められる約10,000年を境にしてクマザサ属主体のイネ科植生からネザサ節・スキ属を主体とした草原植生に植生変化することが確認されるなど、注目される調査結果になっている。

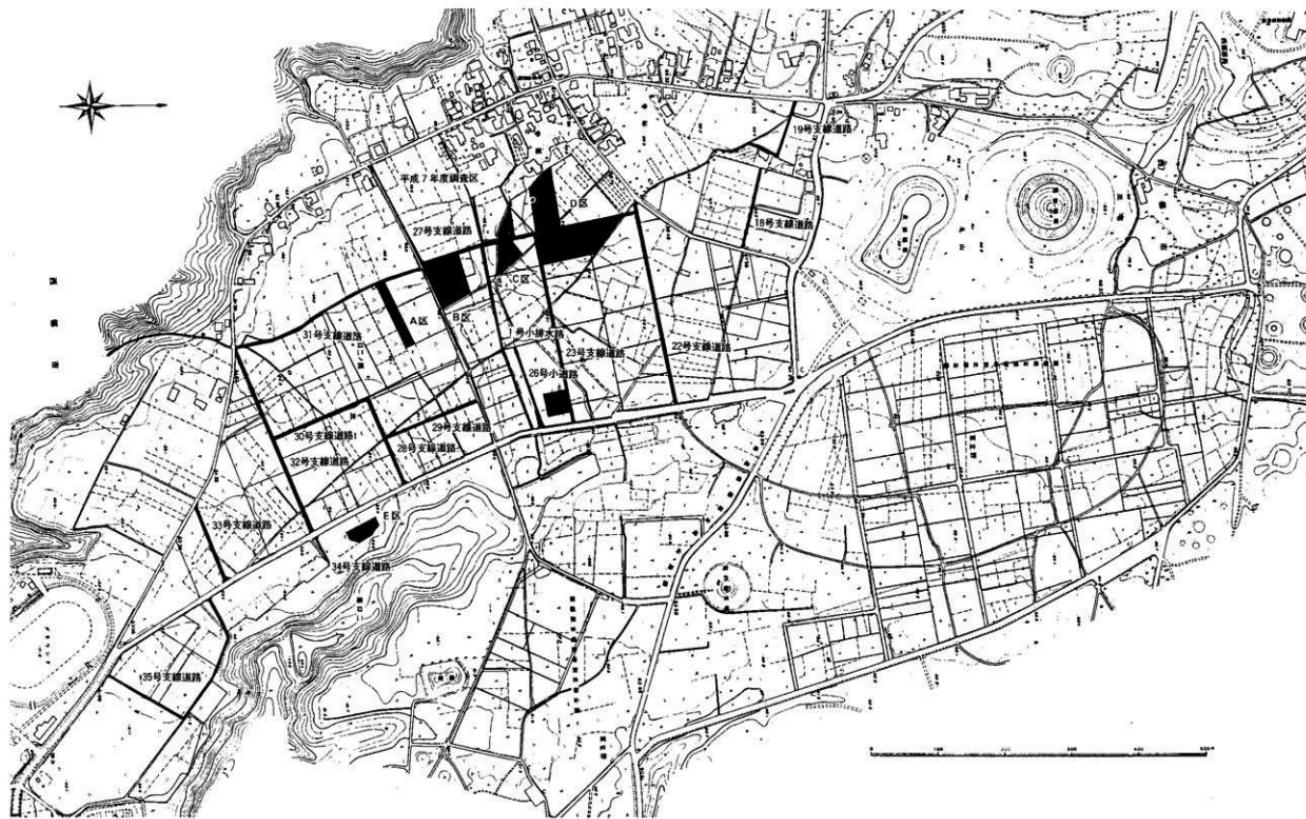
花粉分析では、わずかな花粉・胞子しか検出されず、植生や農耕の復元は困難であったようである。

寄生虫卵分析では、鞭虫や異形吸虫類・マンソン裂頭条虫・毛頭虫類などが検出され、周囲にある程度の人口密度があったことが示唆されている。

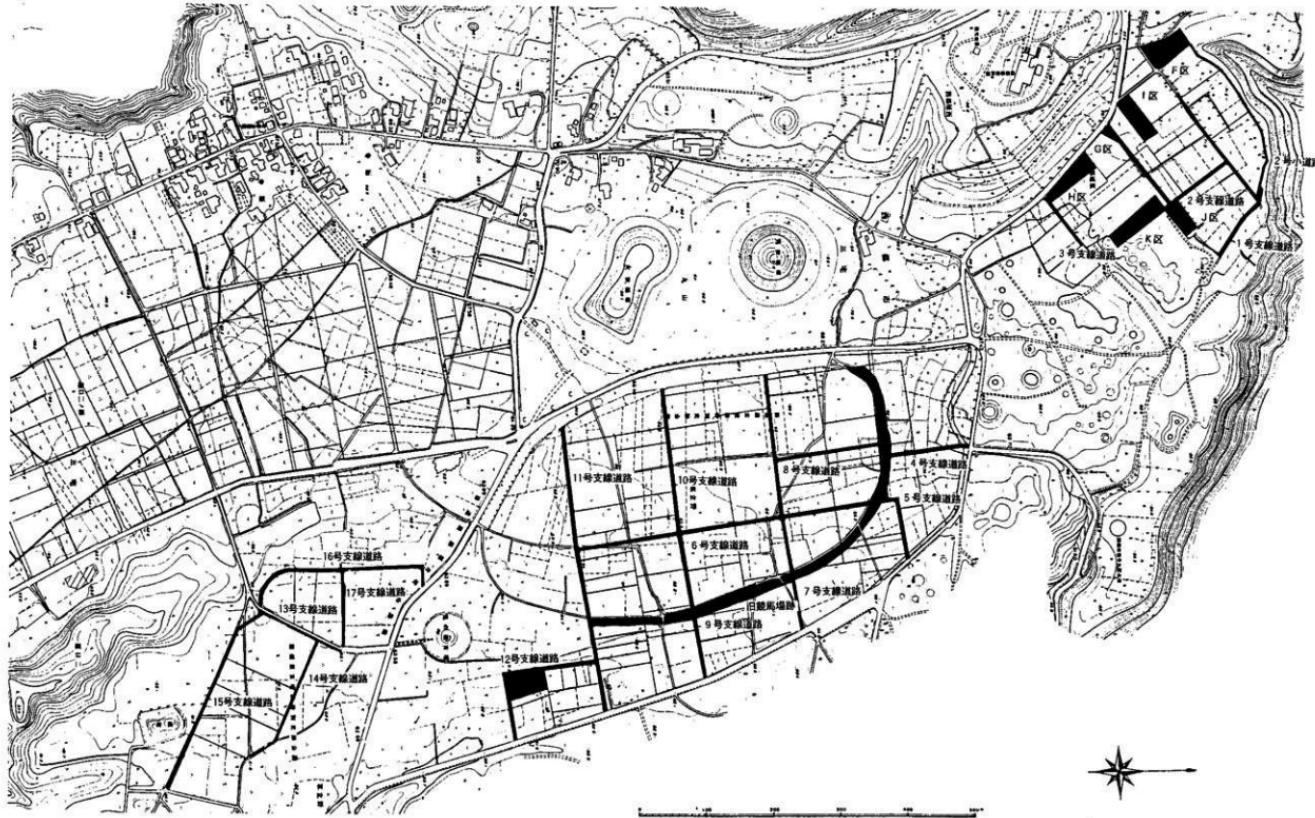
このように、自然科学分析ではいろいろなことが解明され、大きな成果をあげることができ、詳細な分析結果を本報告に掲載する予定であったが、頁数が限られていたことによりできなくなってしまった。よって、本報告では、参考及び引用するのに終始したが、貴重な西都原の分析結果であるため、西都原古墳研究所年報に掲載することになった。



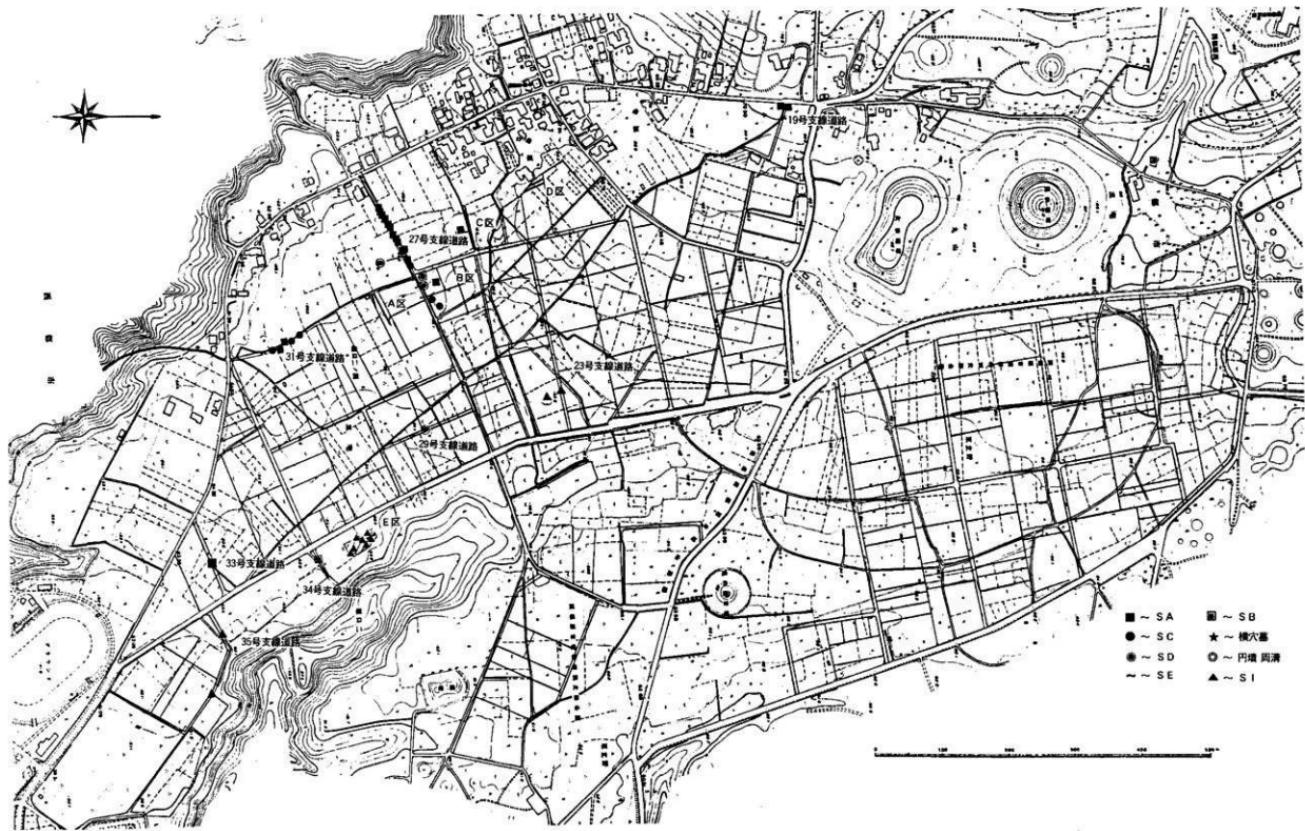
第2図 西都原地区道路周辺図 ($S=1/6,000$)



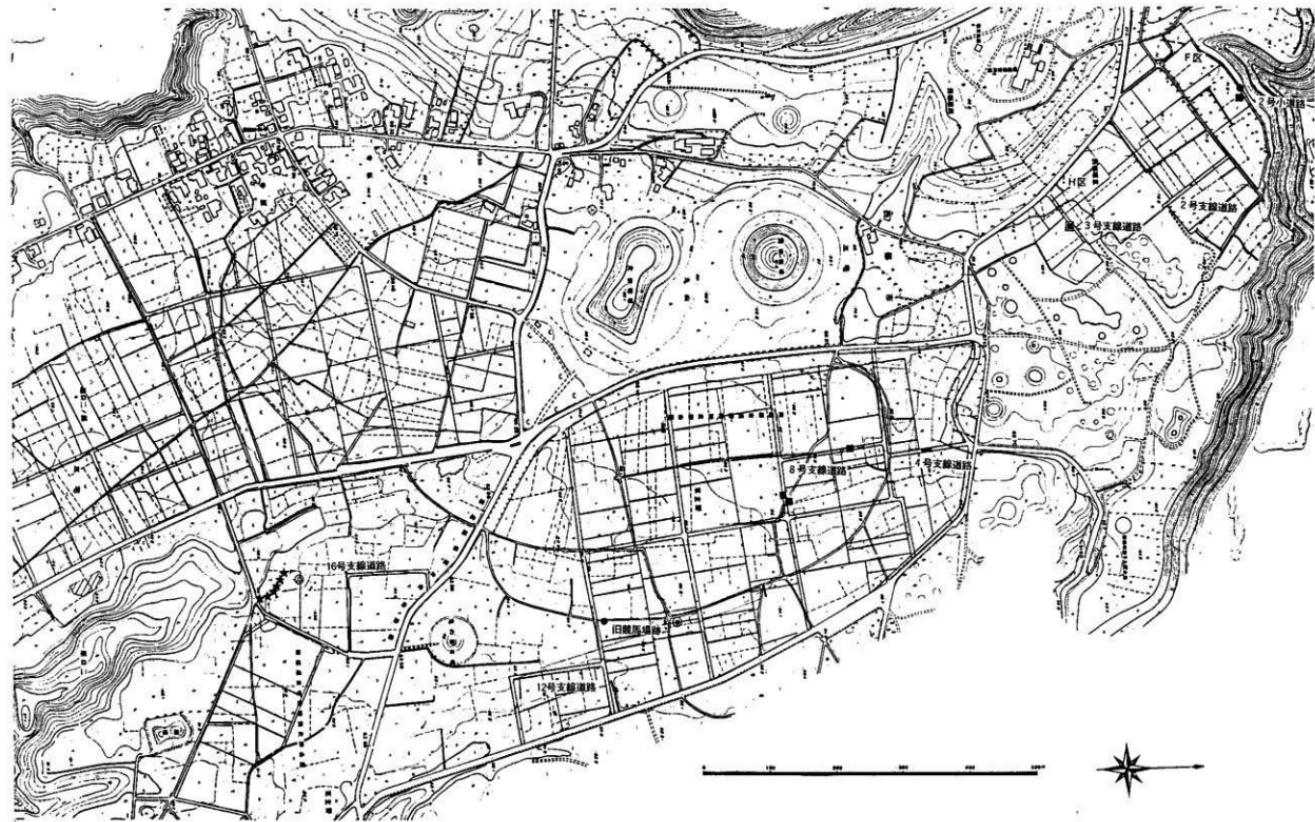
第3図 平成5・7年度 調査区域図 (S=1/6,000)



第4図 平成6年度 調査区域図 (S=1/6,000)



第5図 平成5・7年度 検出構造分布図 (S = 1 / 6,000)



第6図 平成6年度 検出構造分布図 ($S=1/6,000$)

第Ⅳ章. 調査の記録

発掘調査は、道路部分と工事によって削平される部分について実施したが、あまりにも広範囲で、調査箇所も多く、しかも、各地点より遺構・遺物が検出され、混乱を生じるおそれがあることから、時代・遺構に関係なく、年度毎に道路番号の早い順に報告することにした。

第1節. 平成5年度の調査

(1) 18号支線道路

御陵墓・女狭穂塚の南180㍍、東西に延びた道路である。アカホヤ火山灰層の残存状況は良好であったが、遺構・遺物とも確認できなかった。

(2) 19号支線道路

18号支線道路の南西に隣接した道路である。道路北部から堅穴式住居跡2軒が検出された。いずれも、アカホヤ火山灰層面で確認された。

S A 1は、南側を後世の溝、北側を耕作等によって削平されているため、規模は不明瞭であるが、一辺2.7m前後の方形プランの住居跡と推定される。床面は凸凹で、検出面からの深さ0.1mを計る。柱穴は確認できなかった。(第5図)

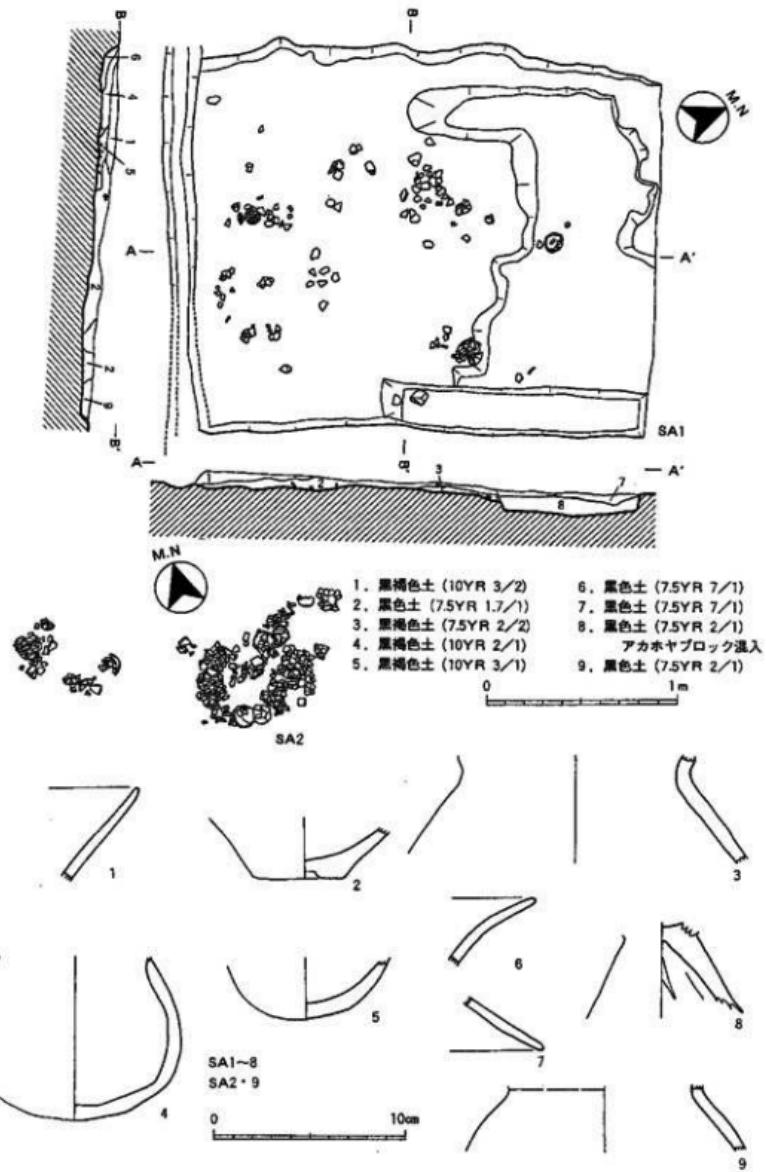
遺物は、攪乱を受けていない南側を中心に土師器壺・壺・高杯など約150点が出土しているが、いずれも小片である。1は中央部が上げ底になっている壺の底部、2は口縁部が直線的に開く壺の口縁部である。3・4は丸底で、胴下部に最大幅をもつ壺、5は小型丸底壺の底部と思われる。6はわずかに外反しながら口唇部に至る高杯の口縁部で、口唇部は丸い。7は高杯の裾部、8は「ハ」字状に広く高杯の脚部破片である。

S A 2は、S A 1に隣接した南側から検出された住居跡であるが、検出面と床面との高低差がなく、プランは確認できなかった。しかし、検出面が床面であると確認できること、また、遺物の出土状況などから判断して想定した住居跡である。柱穴は確認できなかった。遺物は、約200点ほどが出土しているが、いずれも小片で判断が難しいが、壺や壺などの破片と思われる。9は胴中央部に最大幅をもつ壺の頸部から胴上部の破片である。(第5図)

時期は出土土器から、古墳時代前期に比定される。

(3) 20・21号支線道路

20号支線道路は、女狭穂塚の南南東120㍍、18号支線道路の東側に近接した道路であるが、県教育委員会による試掘調査の際、すでにアカホヤ火山灰層下層の黒褐色土までも削平されていることが確認されていたことから、調査対象から除外された。21号支線道路は、20号支線道路の南側、東西に延びる道路で、アカホヤ火山灰層は残存していたものの、遺構・遺物



第7図 19号支線道路 SA1・SA2実測図 (S=1/60) 出土遺物実測図 (1/3)

は確認できなかった。

(4) 22号～26号支線道路

22号支線は幅5m、全長280mである。表土下にはアカホヤ火山灰が残存していたが、表土が約20cmと浅く、桑根や畑作の耕作で攪乱が著しい部分も見られた。表土中から若干の遺物の出土が見られたが、土器類はいずれも小片で図示し得るものはない。石錐が出土している(10)。遺構は検出されていない。

23号支線は幅5m、全長280mである。路線東端部周辺はアカホヤ火山灰が見られず、約15～20cmの表土下には縄文時代早期の包含層である黒褐色土が見られた。2基の集石遺構を検出している(第8・9図)。

S I 1は約1.3×1.1mの範囲に礫が集中している。ほとんどが河原石と思われる砂岩であるが、火を受け拳大に割れたものが多い。掘り込みは見られず、中央から北西部にかけて礫が失われている。若干の炭化物も見られた。

S I 2は1.4×1.2mの範囲に礫が集中している。拳大の砂岩が多く、火を受け赤変したものが多く見られた。掘り込みは見られず、中央から南西部にかけて礫が失われている。S I 2の周辺には、約4・5mの範囲で散礫が見られた。S I 2内の礫と接合するものが見られ、S I 2からかき出されたものと思われる。周辺で土器の出土は見られなかった。

23号支線中央部付近で、南北に延びる溝状遺構が検出された。(第10図)。埋土下位から中位にかけて若干の礫の流れ込みが見られた。石皿の欠損品(11)が1点出土している。時期は不明である。

24号支線は幅5m、全長320mである。南東から北西に延びる溝状遺構1条が検出されたが、他に遺構は見られず遺物の出土もない。

25号・26号支線からは、遺構・遺物ともに検出されていない。

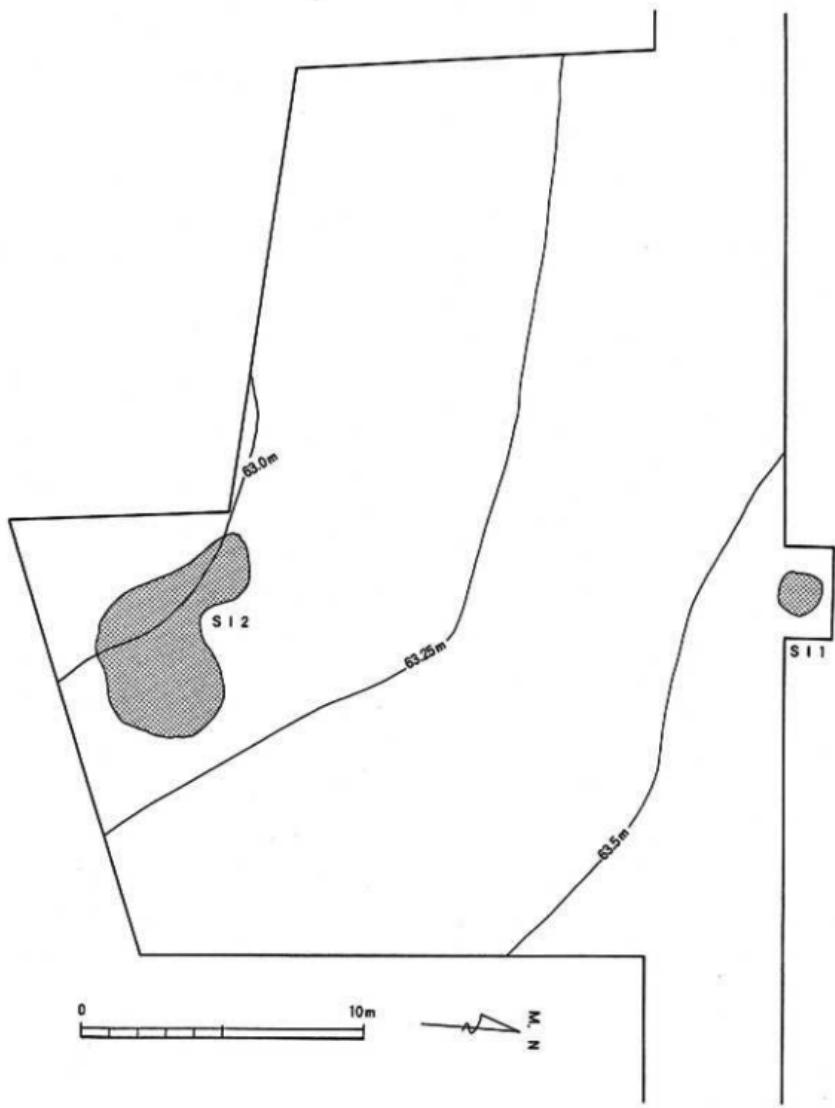
(5) 1号小排水路(第11図)

幅3m、全長350mである。東側において若干の陶磁器片が出土したが、遺構は確認されていない。西端部で1基の方形竪穴と2条の溝状遺構が検出されている。

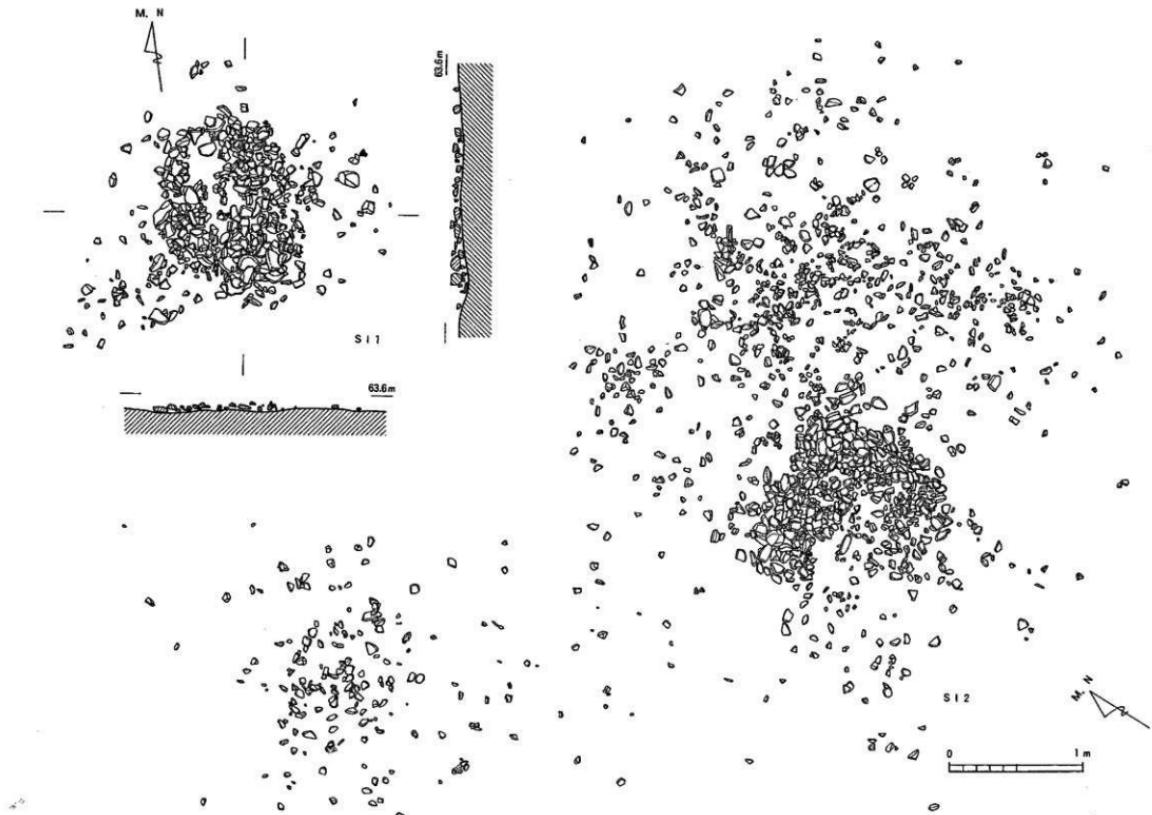
S A 1は2.8×2.6m、セクション壁での観察で深さ50cmを測る。土器細片が出土しているが、時期を比定し得るものはない。

S E 1はほぼ南北に延び、検出面での幅1.5m、深さ40cmを計るが、セクション壁での観察では更に約40cm上位から掘り込まれている。多くの遺物、礫が埋土下位から出土している。

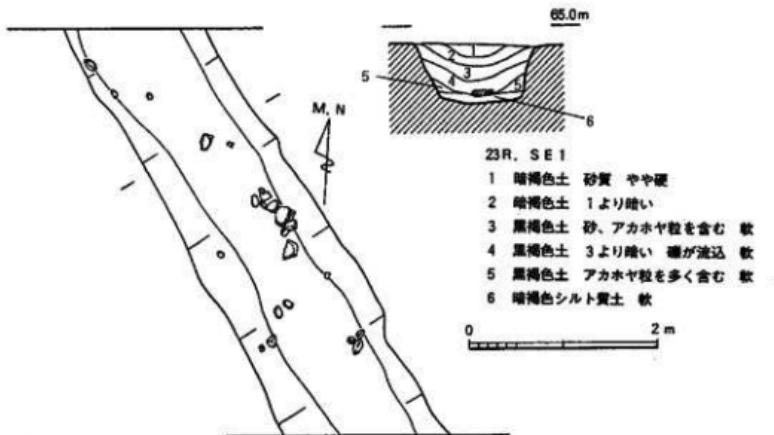
13は瓶の牛角状把手である。14は土師質の壺で、底部は糸切りである。15は須恵器壺の頸部である。若干の自然釉が見られる。16は備前焼のすり鉢である。内面に間隔をあけて施される6条単位の櫛描きが見られる。17は石錐の欠損品である。



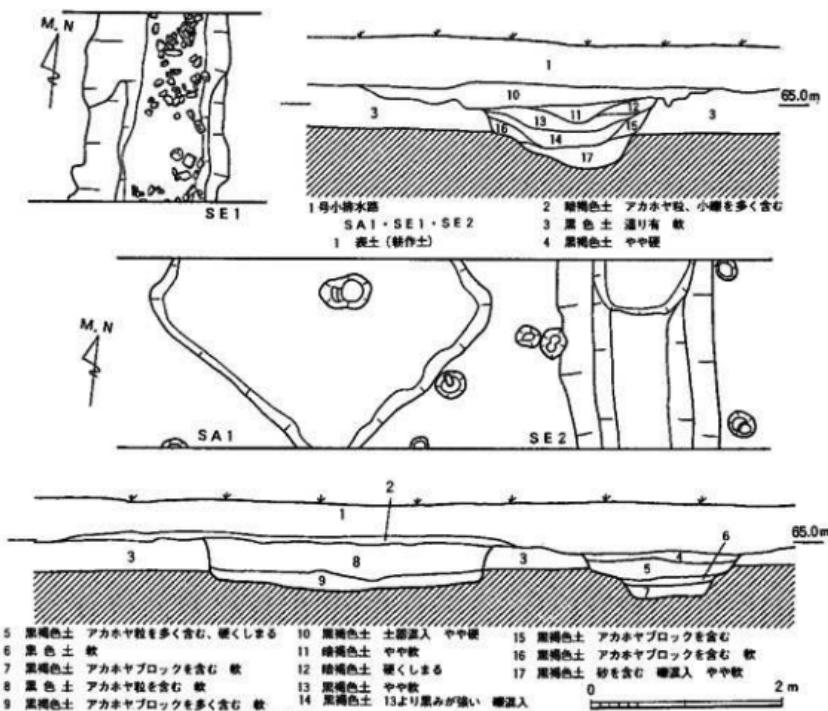
第8図 23号支線道路構造分布図 ($S = 1/200$)



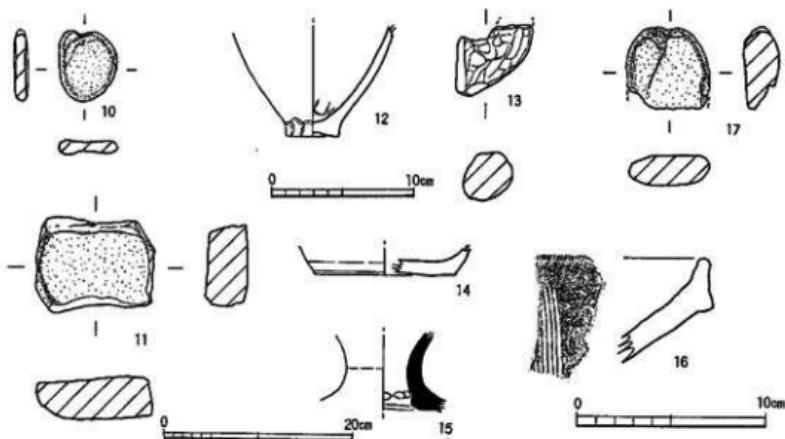
第9図 23号支線道路 S11・2実測図 ($S=1/30$)



第10図 23号支線道路 SE 1 実測図 ($S=1/60$)



第11図 1号小排水 SA 1, SE 1・2 実測図 ($S=1/60$)



第12図 出土遺物実測図 (22R、23R、1号排水)

(10.12.13.17→1/4, 11→1/6, 14~16→1/3)

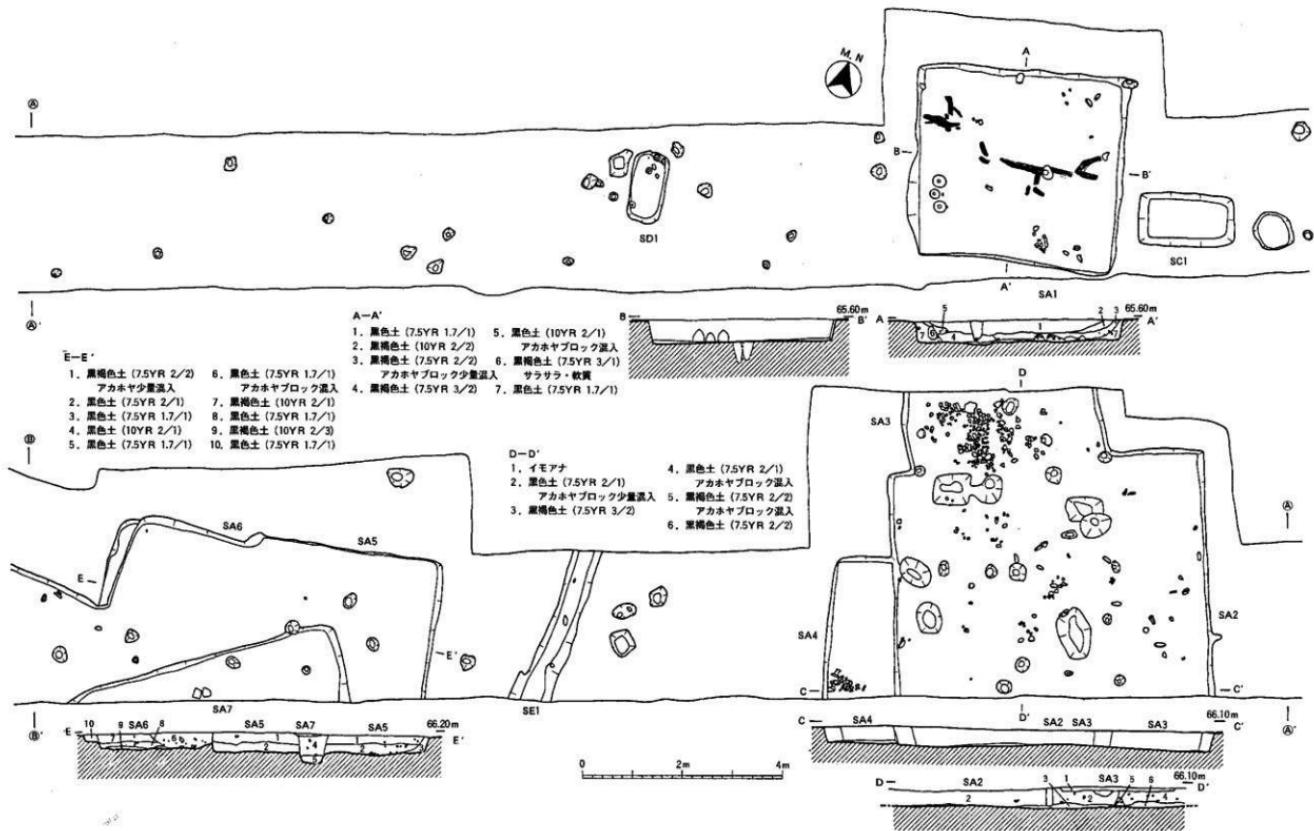
12は包含層出土の壺である。底部は上げ底で、内外面に指頭痕が残る。弥生後期に比定されよう。

(6) 27号支線道路

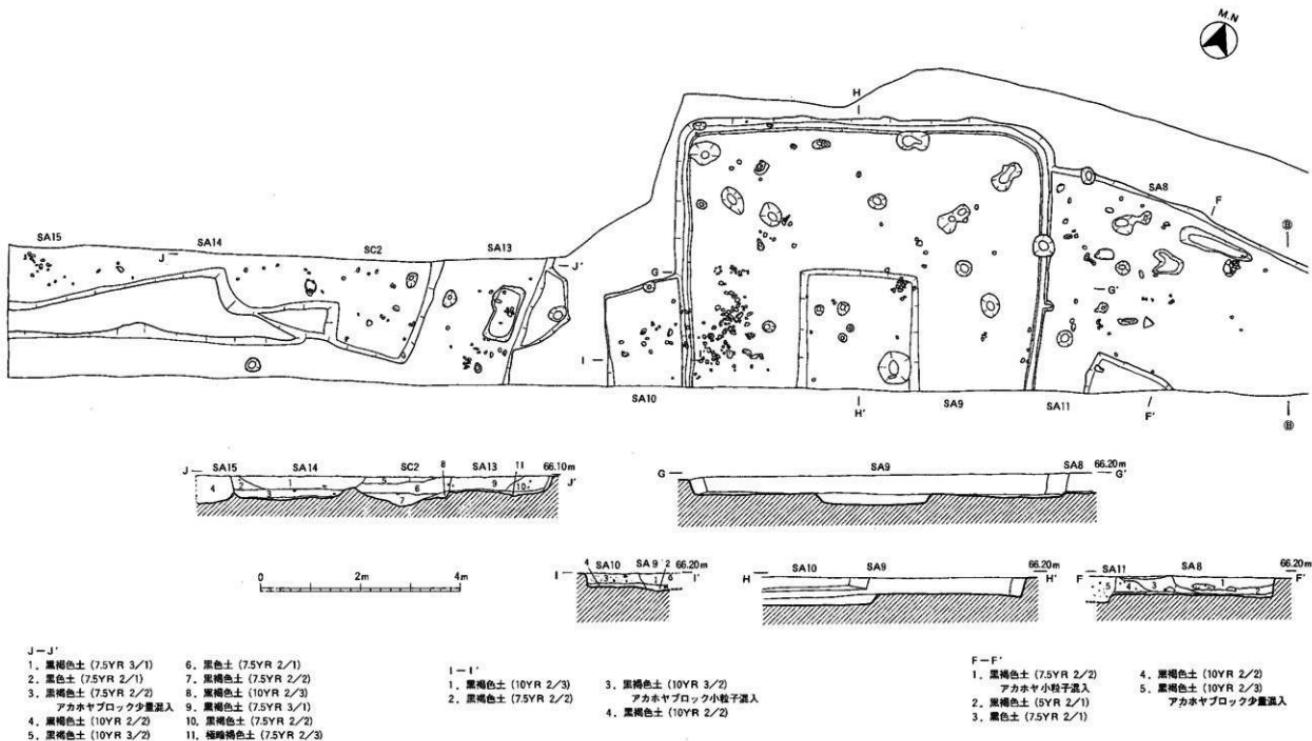
寺原地区のはば中央部、東西に延びている道路で、寺原集落と西都原とを繋ぐ主要道路である。この道路からは、竪穴式住居跡群及び土壙・土坑などが検出されているが、いずれも西側に集中している。なお、現道部分も調査を行う予定であったが、平成6年度から県教育委員会を主体として実施されている大規模遺跡整備事業、いわゆる古代ロマン再生事業に本地域の住居跡の整備が取り入れられることとなり、一応現状のまま保存する工法で工事が実施されることになったことから、調査対象から除外された。

平成5年度の調査で3.0m×85.0mの範囲内に14軒、平成7年度の調査で1.6m×42.0mの範囲内に7軒の総計21軒の竪穴式住居跡が重複して検出されたが、平成7年度分については後述する。(第13・14図、第83図)

S A 1は、長軸4.25m・短軸3.90mの規模を有する方形プランの住居跡で、検出面からの深さ0.4mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。中央部周辺に集中して炭化物が見られる。(第13図) 遺物は壺・小型丸底壺・高壺・鉢などの土器が出土している。18~20は口縁部がわずかに外反した壺で、いずれも南東隅に並んで伏せた状態で出土した。18は胴中央部、19・20は口縁部と胴中央部に最大幅を有している。底部は丸底気味の平底で、上げ底



第13図 27号支線道路構造実測図(1) (S=1/80)



第14図 27号支線道路造橋実測図(2) (S=1/80)

のものも含まれている。21は小型丸底壺で口縁部が短く内湾するタイプ、22~24は高坏で、脚部はラッパ状に広いている。25・26は鉢で高台を持つもの(26)も含まれている。(第15図)

S A 1 の西19.5mから、住居跡が3軒重複して検出された。3軒のうち S A 2 がいちばん新しく S A 3・S A 4 を切っている。規模的には S A 2 が一辺6.5m、S A 3 が一辺3.9m、S A 4 は不明で、いずれも方形プランを呈している。床面は平坦で、検出面からの深さ S A 2 は0.3m、S A 3 は0.4m、S A 4 は0.25mを計る。主柱は S A 2 は確認できなかつたが、S A 3・S A 4 は柱穴の検出状況からともに2本と推定される。(第13図)

遺物は、S A 2 から壺・壺・高坏・ミニチュア土器やすり石などが出土している。27~29は壺の底部で、いずれも平底であるが、S A 1 の壺同様中央が上げ底のもの(29)も含まれている。また、外面に叩き調整痕を残すものも多い。30は直口した口縁部を持つタイプの壺で、外面には叩き調整痕を残す。31・32は外反した口縁部で胴部が球状に膨らむ小型丸底壺である。35・36は高坏の脚部で、わずかに広きながら裾部に至っている。37は丸底、38は平底の手捏ねのミニチュア鉢である。39・40は砂岩製のすり石である。(第16図)

S A 3 からは、壺・壺・高坏・鉢やすり石などが出土している。41~44は外反あるいはわずかに外反する壺の口縁部から胴部、45・46は径の小さな壺の底部である。外面に叩き調整痕を残すものも多い。47は外面に叩き調整痕を残し、外反する口縁部を持つ壺、48は壺の頭部、49は球状の胴部に丸底の壺、50は口縁部が長く内湾気味で、胴部が球状に膨らむ小型丸底壺である。51~54は高坏で、51は口縁部に稜を持ち、54・55は脚部が直線的に広いている。56は平底の鉢、57は砂岩製のすり石である。(第17図)

S A 4 の器種は少なく、壺・高坏が出土している。57~60は壺で、わずかに外反している。61は坏部のほとんどが欠損した高坏で、脚部は長く、直線的に広きながら裾部に至っている。外面は丁寧なヘラ磨き調整が施されている。(第18図)

S A 4 の西8.0mからは7軒の住居跡が重複して検出された。これら住居跡群については、概要報告書にて8軒重複していると報告したが、検討の結果、S A 12について、S A 9号のほぼ中央部に位置していること、また、長方形であまりに小規模であること、さらに、時代は下るもの8号支線道路から中央部に方形の掘込みを有するタイプの住居跡が検出されたことから、本住居跡も同タイプのものと判断し、本報告では同一住居跡内の遺構として取り扱うこととした。これらの住居跡は、幅0.5×長さ22.5mの範囲内に検出されたものであるが、いずれも方形プランを呈している。規模的には5号住居跡が一辺3.7m、6号~8号・10号・11号住居跡が一部分の検出及び切られているため規模不明、S A 9号住居跡が一辺7.7mを計る。また、検出面からの深さは、S A 5 が0.7m、S A 6 が0.3m、S A 7 が0.58m、S A 8 が0.36m、S A 9 が0.4m、S A 10 が0.26m、S A 11 が0.52mを計る。このなかで、

S A 9 は唯一壁帶溝を持つタイプのもので、最大規模を有する。壁帶溝の幅0.08m・深さ0.04mを計る。中央の掘込みの長軸不明・短軸2.3m・深さ0.1mで、主柱は、4本と推定される。(第13・14図)

遺物は、全体的には少ないものの、各住居跡から甕・壺・鉢などの土器が出土している。

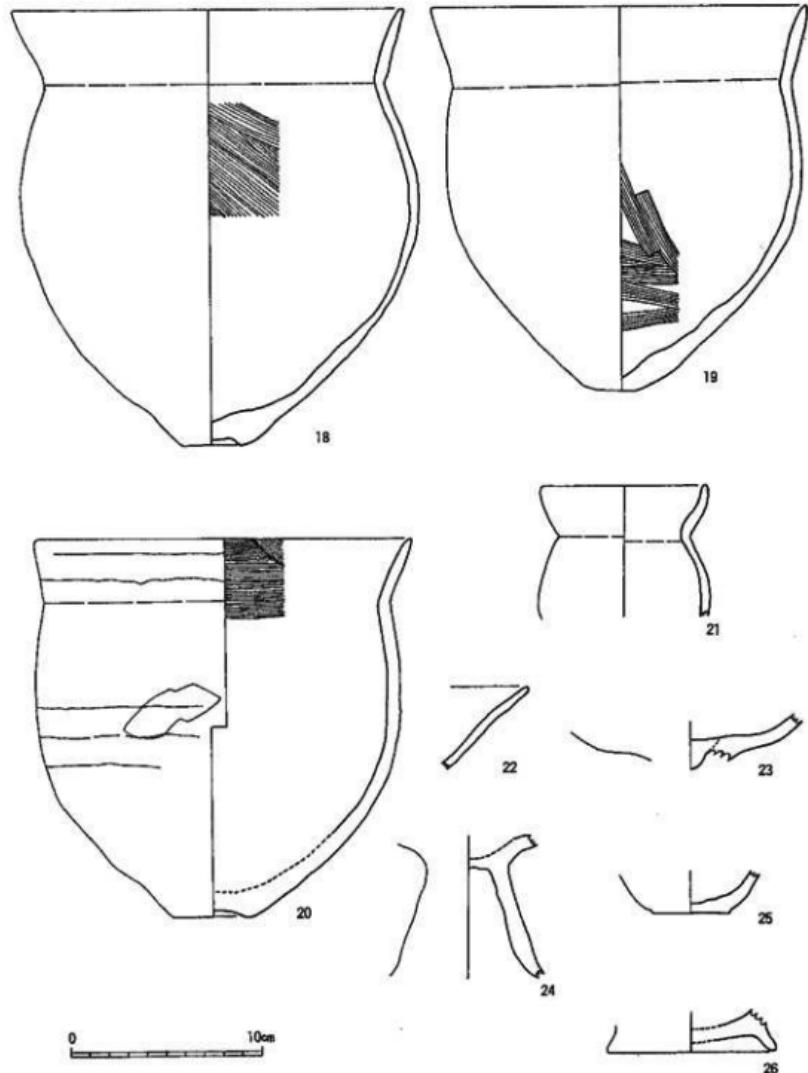
S A 5 からは、壺・高坏・鉢などが出土している。62～65は壺の口縁部、66は壺の底部である。67・68は高坏の裾部であるが、68は内面に段を有している。69は鉢の口縁部である。(第19図)

S A 6 からは、甕・壺・高坏・鉢・ミニチュア土器が出土している。70はわずかに外反した甕の口縁部、71・72は平底の甕の底部である。73・74は壺の口縁部である。75はスマートで直線的に広き、76は太く短い高坏の脚部である。77は内湾する鉢の口縁部、78はミニチュアの鉢である。(第19図)

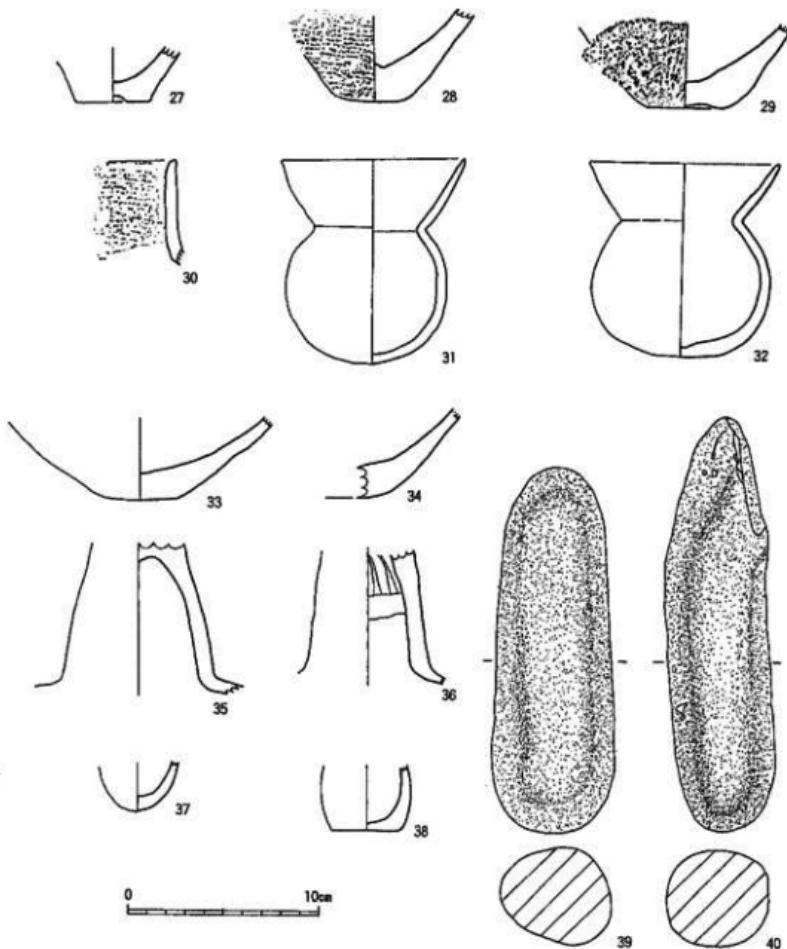
S A 7 からは、甕・壺・高坏・鉢が出土している。79・80はわずかに外反した甕の口縁部、81・82は平底の壺の底部である。83は壺の頭部、84は球状に膨らむ壺の胴部である。85は高坏の口縁部、86は直線的に広がる高坏の脚部、87は内湾する鉢の口縁部である。(第19図)

S A 8 からは、甕・壺・高坏・ミニチュア土器などの土器のほかに石包丁・石皿などの石器が出土している。87～91はわずかに外反した甕の口縁部で、口唇部が丸くおさめられているもの(87・88)と平坦に仕上げられているもの(90・91)がある。また、外面に叩き調整痕が残っているものが多く含む。92は叩き調整痕を残す甕の胴上部である。93は平底、94は丸底に近い平底の甕の底部である。いずれも外面に叩き調整痕を残す。95は内湾気味に外方向に延びた壺で、端部は丸くおさめられている。97・98は壺の口縁部、99～101は壺の頭部から胴上部である。102～104は高坏の口縁部で、102は口縁部が直口し稜を有しているもの、103は直線的に広いもの、104は受部が水平で稜を有しているものである。105は脚部がエンタシス状に延び、106はやや広がり気味に延びている高坏の脚部である。108は両脇抉入の長方形石包丁で、頁岩製である。109～111はいずれも砂岩製の石皿である。(第20図)

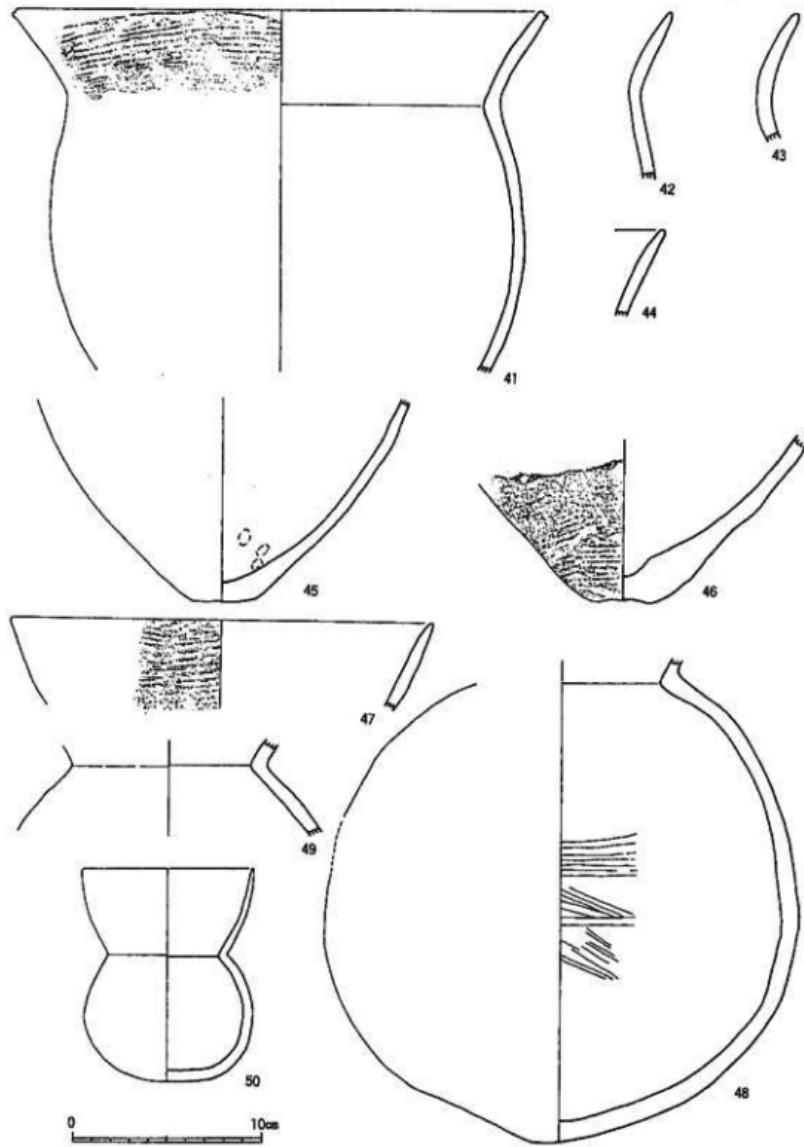
S A 9 からは甕・壺・高坏・鉢などが出土している。112・113は甕の口縁部で、胴部が張るもの(112)と張らないもの(113)がある。114～117は甕の底部で、丸底のもの(114・115)、平底(117)及び上げ底で平底のもの(116)が含まれている。118～124は壺で、118は内湾気味に直口に立ち上がる口縁部を持ち、球状に胴部の膨らんだものである。121は内湾した直口の口縁部で、頭部に刻目突帯を持つもの、122は胴下部に最大幅をもつものである。125～135は高坏で、125は受部が掘曲し、わずかに陵を持ち、直線的に広がるもの、127は口縁部に段を有するものである。132は「ハ」字状に広がる脚部、133は直線的でスマートな脚部を有するものである。136～139は平底の鉢の底部である。(第21図)



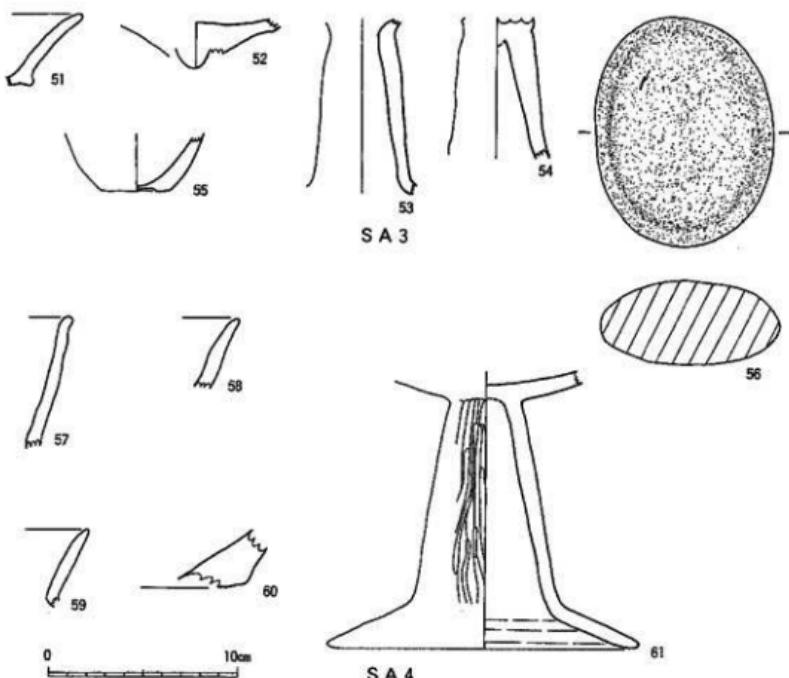
第15図 27号支線道路 SA1出土遺物実測図 (S=1/3)



第16図 27号支線道路 SA2出土遺物実測図 ($S=1/3$)



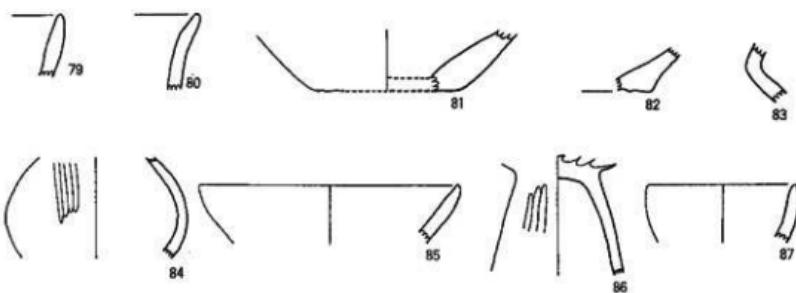
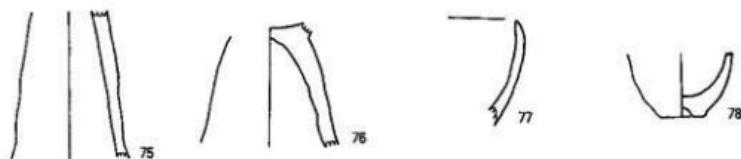
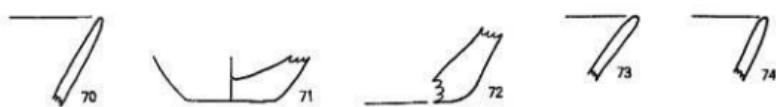
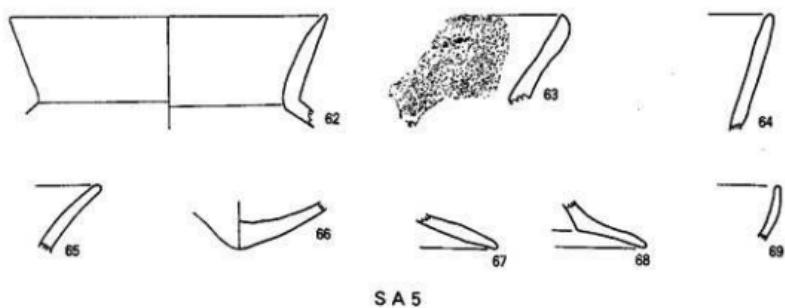
第17図 27号支線道路 SA3出土遺物実測図 (S=1/3)



第18図 27号支線道路 SA3・SA 4出土遺物実測図 ($S=1/3$)

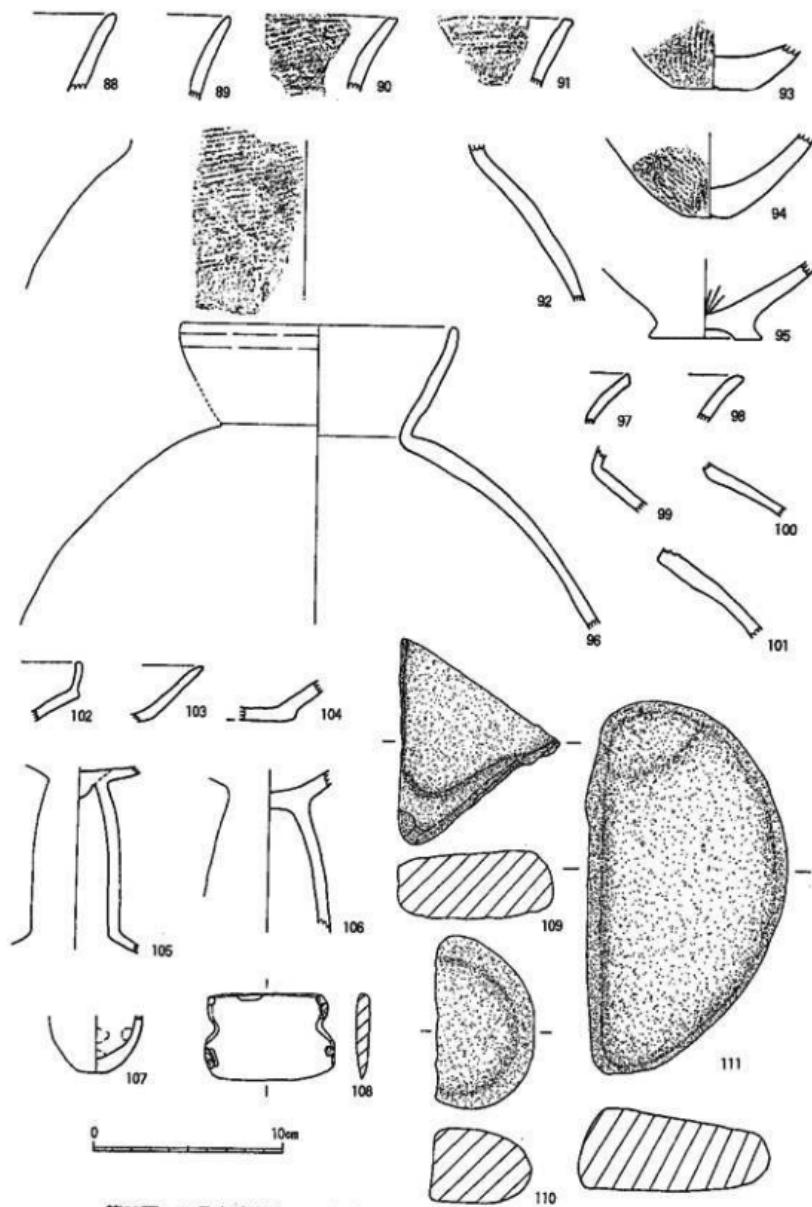
SA10からは、壺・高坏などが出土している。140はわずかに外反し、胴上部に最大幅を持つ壺の口縁部、141はわずかに外反した口縁部を有し、頸部はあまりくびれず、胴部も膨らまないタイプの壺である。142～147は壺の底部で、平底のもの(142・146・147)、丸底気味のもの(143?・144)、張り出しているもの(148)が含まれている。148は楕状に広く高坏の口縁部、150は直線的、152は「ハ」字状、153はエンタシス状に延びる高坏の脚部である。(第22図)

SA11は、遺物は少なく、壺と壺が出土している。153～155はいずれも壺の底部で、丸底気味のもの(153)と平底(154・155)が含まれている。156は直口した口縁部の上半分が、さらに内湾しながら広がるタイプの壺である。157は口唇部の平坦な壺、158は二重口縁壺の口縁部で、いずれも小片である。(第23図)

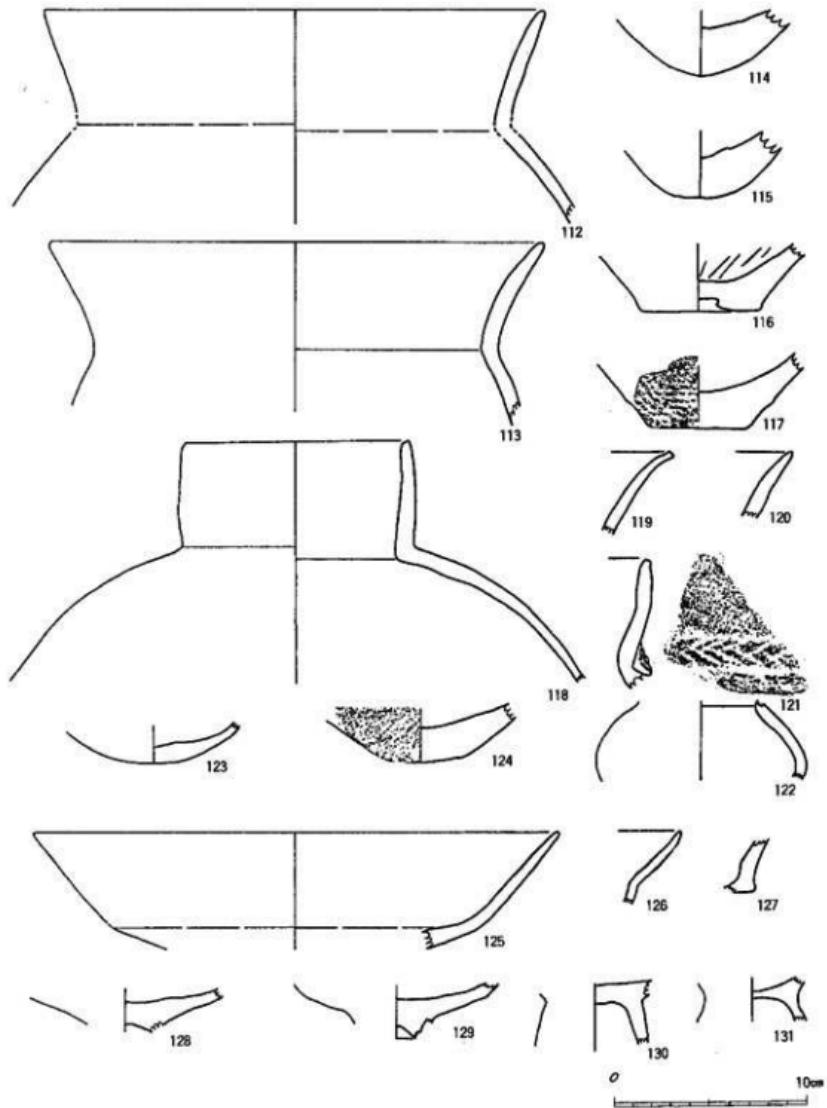


0 10cm

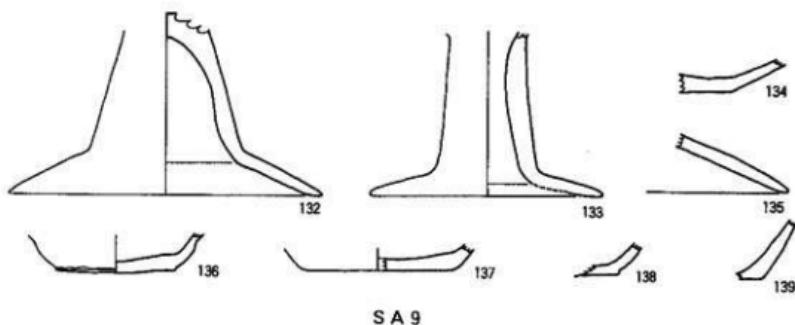
第19図 27号支線道路 SA5~SA7出土遺物実測図 (S=1/3)



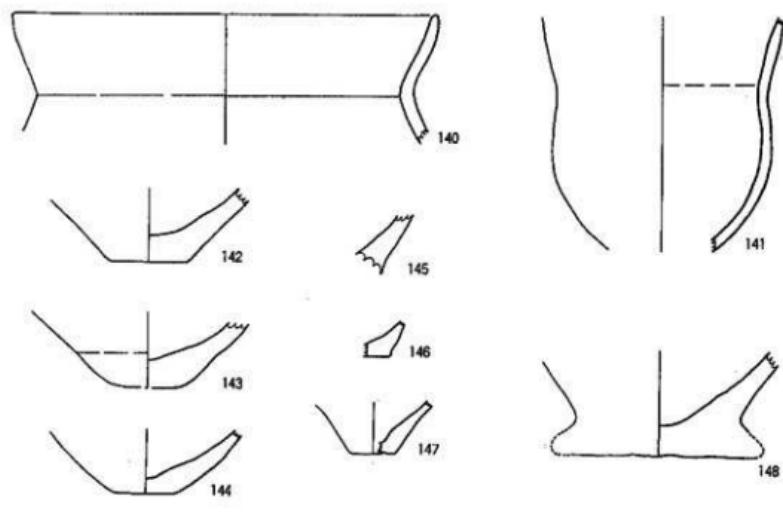
第20図 27号支線道路 SA8出土遺物実測図 (S=1/3) (109~111→1/6)



第21図 27号支線道路 SA9出土遺物実測図 (S=1/3)



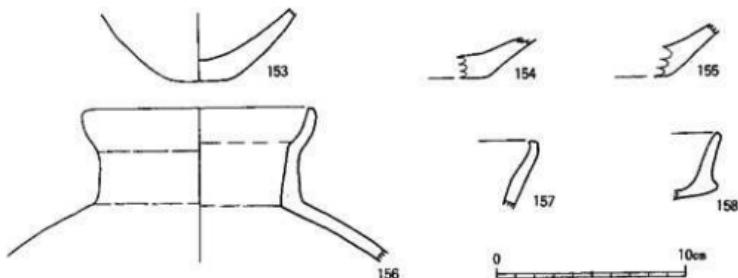
S A 9



S A 10

0 10cm

第22図 27号支線道路 SA9・SA10出土遺物実測図 (S=1/3)



第23図 27号支線道路 SA11出土遺物実測図 (S=1/3)

S A 11の西2.0m、3軒の住居跡と1基の土坑が重複しているが、狭範囲のため、規模が確認できるのは13号住居跡のみで、一辺5.4mを計る。床面は平坦で、検出面からの深さ0.3~0.5mを計る。

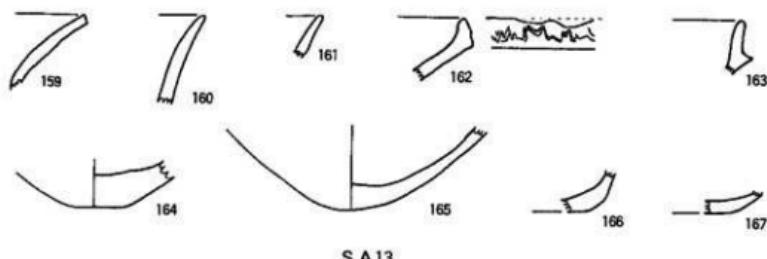
S A 13からは、壺・壺・鉢などが出土しているが、量的には少ない。159は口唇部の平坦な壺、160は丸く仕上げている壺の口縁部である。162・163は二重口縁壺で、162には粗雑な波状文が施されている。164・165は壺の底部、166・167は鉢の底部である。(第24図)

S A 14はS C 2と重複しているが、切り合い関係がはっきりしないことから、同じ遺構からの出土として掲載する。168はわずかに外反した壺の口縁部で、頭部はあまりくびれず、丸底気味の底部を有している。169~173は壺の底部であるが、いずれも平底で、上げ底のもの(169・170)も含まれている。174・175はわずかに陵を有する高壺の壺部、178・179は直線的に広く高壺の脚部、180・181は「ハ」字状に広がった高壺の脚部で、182は高台付の鉢である。(第24・25図)

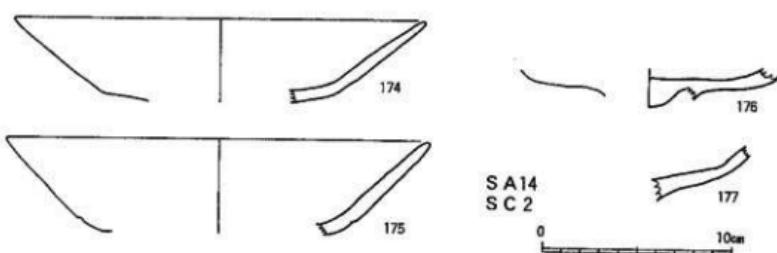
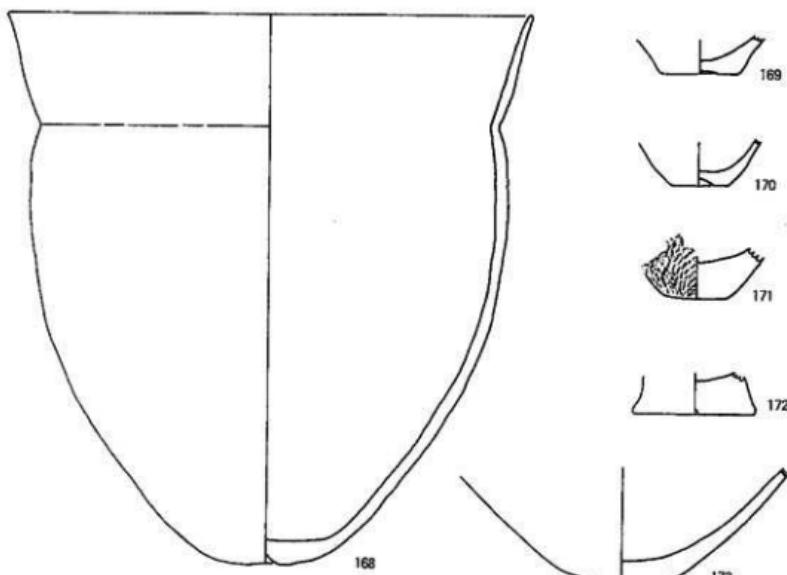
S A 15からは、壺と鉢などが出土している。183は直口気味の口縁部を有する壺で、外面には叩き調整痕が残されている。184は平底、185は丸底の壺の底部である。186は鉢の口縁部、187は鉢の上げ底の底部である。(第25図)

S D 1はS A 1の西5.4mの位置から検出されたもので、長軸1.44m・短軸0.72m、隅丸の長方形プランを呈している。検出面からの深さ0.16mを計る。

遺物は、土師質壺7点が出土しているが、いずれもヘラ切り底で、直線的に体部が広くタイプのものである。底面は平坦のものと丸みを持つものがあり、底部と体部の境にはわずかに陵を有する。法量的には口径12.2cm~13.4cm・器高4.2cm~4.7cm・底径6.9cm~7.9cmを計る。(第26図)



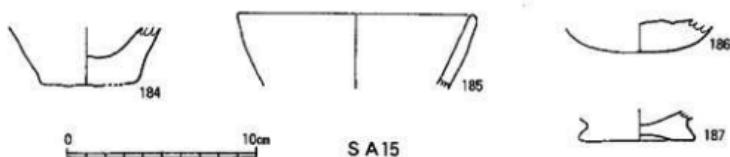
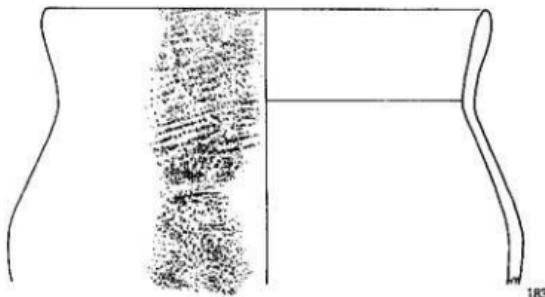
S A13



第24図 27号支線道路 SA13・SA14・SC 2 出土遺物実測図 (S=1/3)

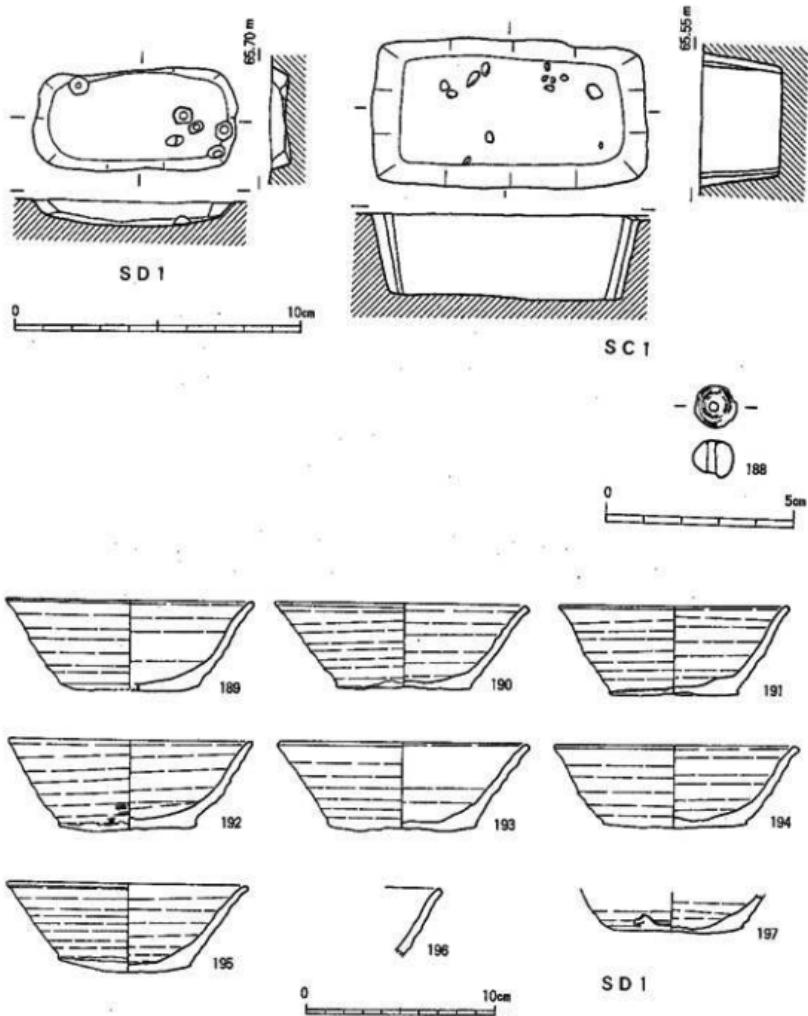


SA14・SC 2



第25図 27号支線道路 SA14・SC2・SA15出土遺物実測図 (S=1/3)

SC 1は、SA 1の東1.0mから検出されたもので、長軸1.94m・短軸1.04mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは0.43mを計る。壁面には灰白色の粘質土を張りつけている。遺物は、中央部分が貫通した丸玉(188)が1点のみ出土している。この丸玉の材質は、石質でもなく、また、ガラス質でもないことから、考えられるものとして真珠があげられるが、不明な点も多く、紹介のみに終始する。(第26図)



第26図 27号支線道路 SD1・SC1実測図 (S=1/40)
(188→2/3, その他1/3)

(7) 28号～30号支線道路

29号支線は幅4m、全長140mである。土壙墓1基が検出された(第27図)。SD1は2.0×0.7mの略長方形プランで、深さ20cmを計る。北端床直上に土師質の壺が伏せた状態で2点、南端埋土上位に4個体の土師質の壺と黒色土器碗が1点出土している。また中央西壁際の床上には、刀子1振が切先を下(南)に、刃を外側(西)に向かって立った状態で出土した。それぞれの出土状態から、北端床上の壺は枕として使用され、南端の壺・碗は墓への供献品、刀子は体側に置かれた副葬品と見ることができる。198～203は土師質の壺で、底部はヘラ切りである。底部と体部の境に段を有し直線的に立ち上がるもの(198～200)、器高がやや高く体部が内湾気味に立ち上がるもの(201～203)に分けられる。201の底部は、やや外に張り出し厚みのある円盤状となる。204は黒色土器碗で、内面及び外面口縁部付近は丁寧にミガキが施される。底部はヘラ切りされた後、高台が張りつけられる。高台内には放射状に指頭痕が残る。205は現存長35cmで、鋸のため開部は観察できない。木質等の残存は見られなかった。遺物から9世紀後半の年代が与えられる。

28号、30号支線からは、遺構・遺物ともに検出されていない。

(8) 31号～34号支線道路

31号支線は幅5m、全長400mである。方形竪穴2基、溝状遺構2条、土坑数基と若干のビットを検出している(第28・29図)。

SA1は3.0×2.6m、検出面からの深さ20cmを計る。ビット3基が見られたものの遺構に伴うものではない。内面がヘラ削りされる土師質の壺(206)が出土している。

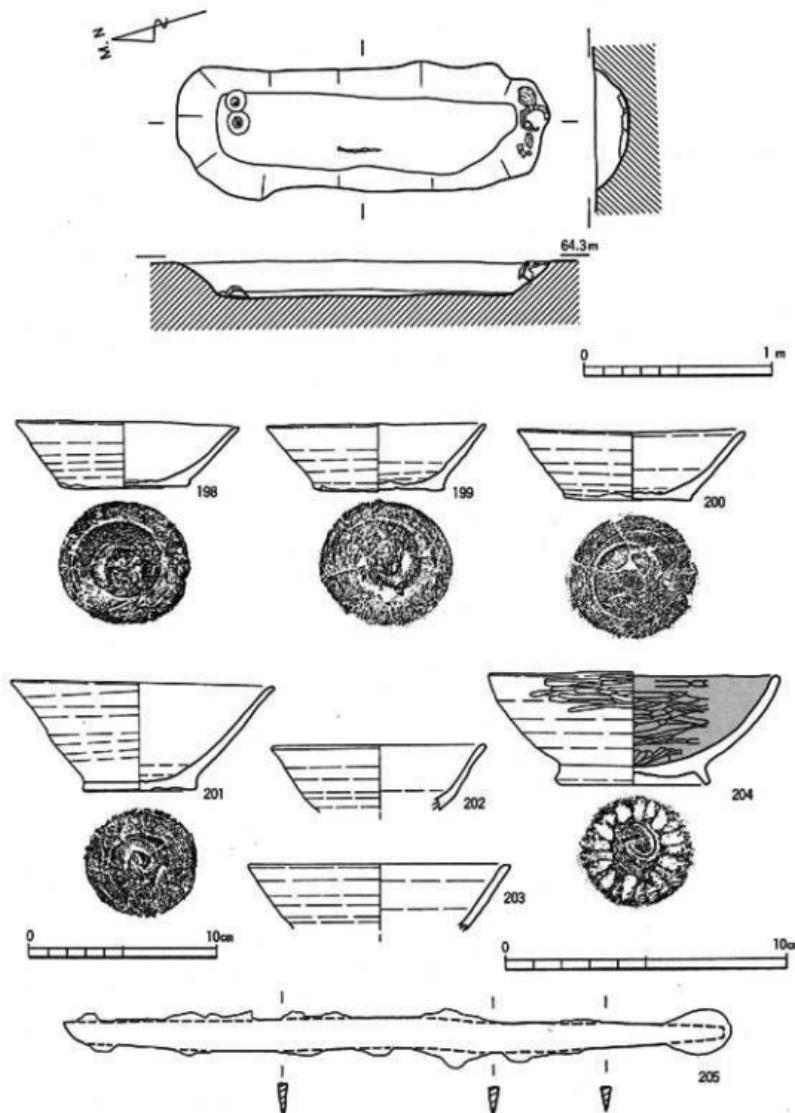
SA2は2.5×2.4m、検出面からの深さ20cmを計る。一部に後世の擾乱が見られ、柱穴は確認されていない。土師質の壺(207)が出土している。

SC1は1.2×0.6mの長方形土坑で、検出面からの深さ40cmを計る。南西隅は擾乱を受けている。床上から鉄片(刀子か?)が1点出土している。

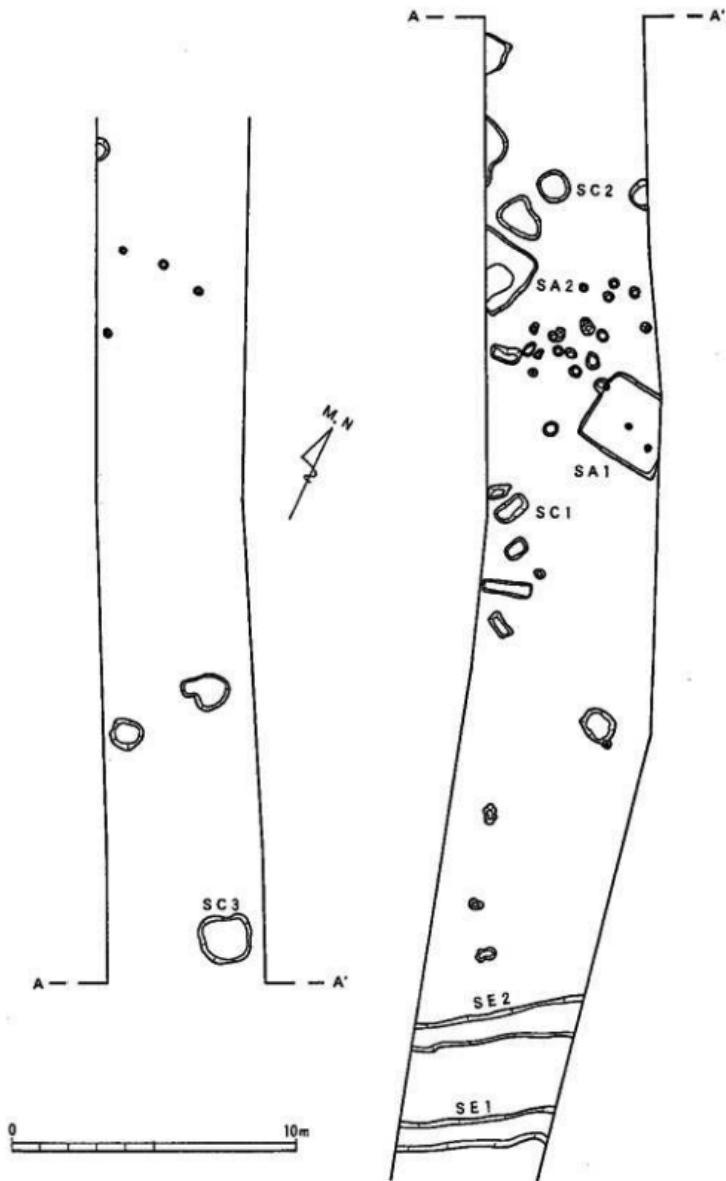
SC2は1.2×1.0mの楕円形土坑で、検出面からの深さは15cmを計る。床面から土師質の壺が出土している。208・209はほぼ完形で、ヘラ切り底である。208は底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的に延びる。209は底部と体部の境に段を有する。体部はやや内湾気味である。210～212は直線的に延びる壺の口縁部である。213は断面三角形の高台を持つ。9世紀後半から10世紀前半の年代が与えられよう。

SC3は1.7×1.6mの不整円形土坑で、検出面からの深さは40cmを計る。北東隅に馬齒が検出され、馬の埋葬土坑と思われる。埋土上位から石錘(214)が出土しているが、遺構の時期は比定し得ない。

SE1, SE2はほぼ平行して東西方向に延びる溝状遺構である。幅約1m、深さ15cmと



第27図 29号支線道路 SD 1 実測図 ($S = 1/30$)
及び出土遺物実測図 (205 → 1/2, 他は 1/3)



第28図 31号支線道路造橋分布図 ($S = 1/200$)

規模もほぼ同じくする。S E 1 から砂岩製の砥石(215)が出土している。遺構の性格、時期は不明である。

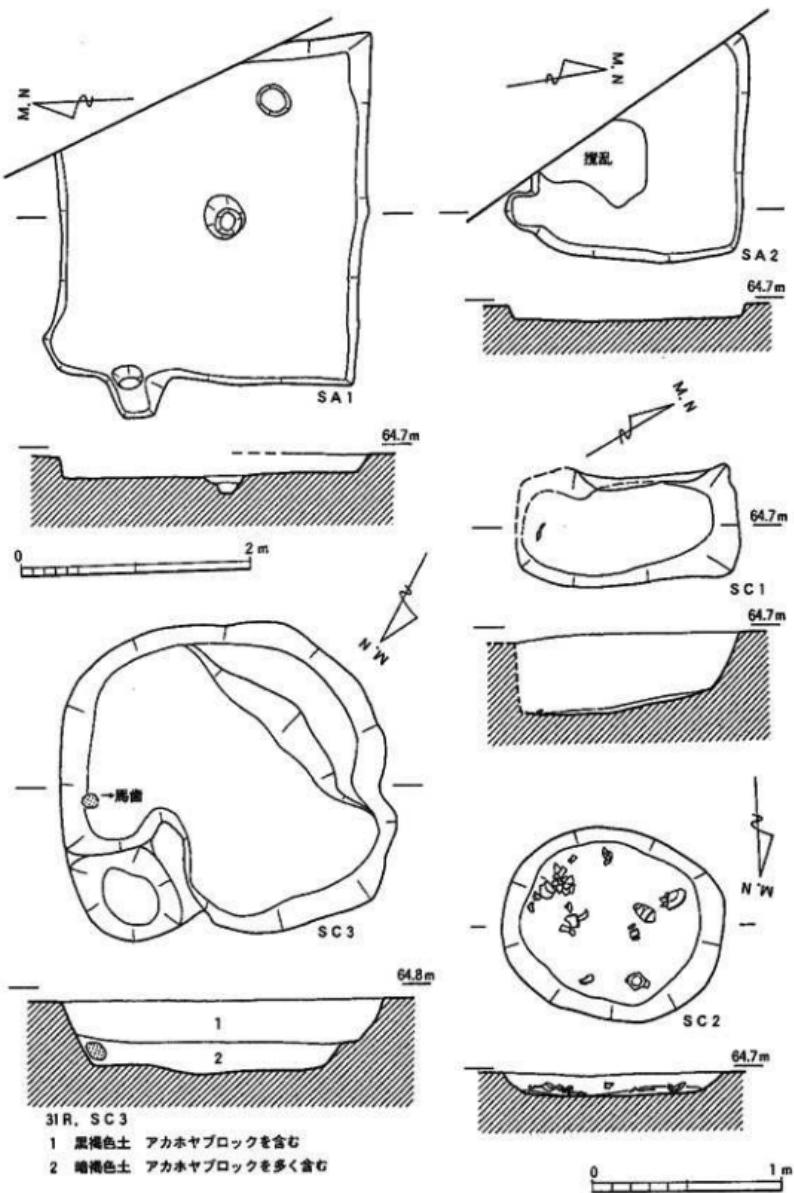
32号支線からは遺構は検出されていない。表土中から石包丁の破片1点が出土している。216は頁岩製石包丁で、両面からの穿孔が見られる。

33号支線は幅5m、全長120mである。竪穴住居1基、溝状遺構1条が検出された(第31図)。

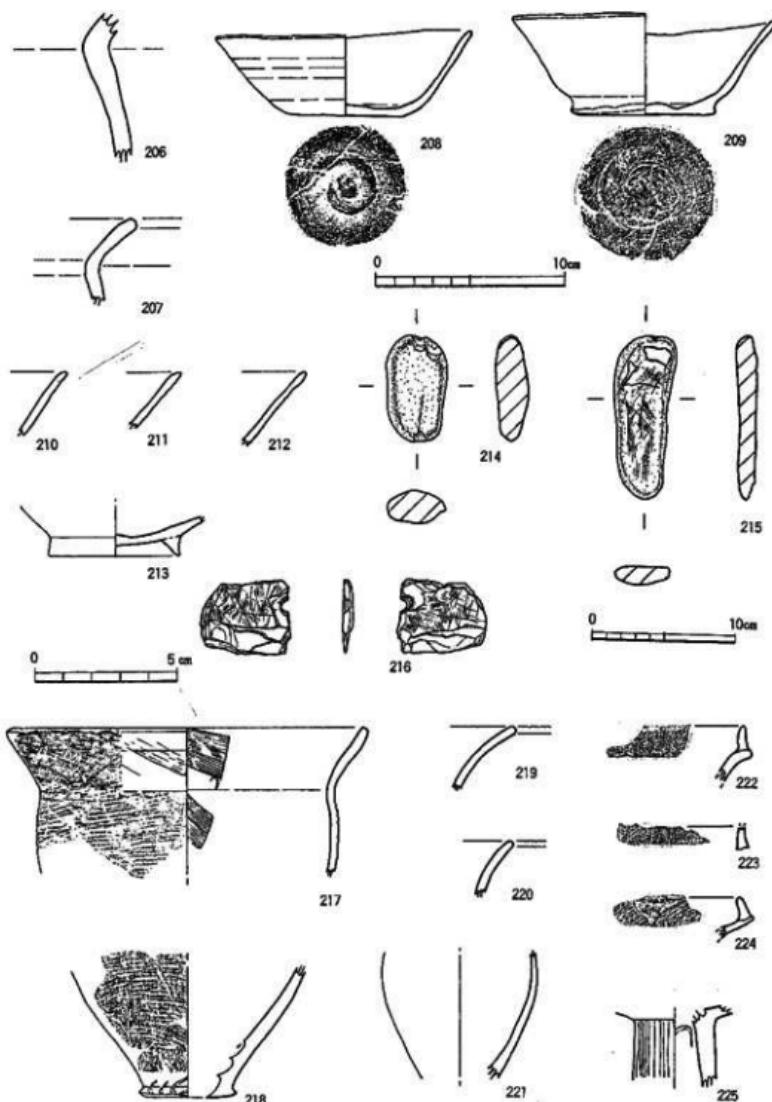
S A 1 は3.7×3.2mで、検出面からの深さ30cmを計る。柱穴6基を検出したが、主柱穴は東西壁沿の2基で、四隅のものは補助柱的なものと思われる。床中央には円形の窪みが検出され、炭化物を多く含む黒色土が見られた。埋土中から弥生土器が出土しているが、全て床面からやや浮いた状態であった。217、218はタタキを持つ壺で、同一個体の可能性が高いが接合はできなかった。底部は平底で、外に張り出した外器面には指頭痕が明瞭である。胴部の張りは弱く、外面にタタキ、内面に斜めのハケメが見られる。頸部の屈曲は緩やかで、やや内湾気味の口縁は長く延びる。219、220はやや外反する壺の口縁である。221は小型の壺である。222~224は複合口縁壺の口縁部で、222、223には横描波状文が、224にはヘラ描きの鋸歯状文に斜線の組み合わせ文が施される。225は高壺の脚部で、縦方向のミガキが顕著である。出土土器から弥生後期後半に比定されよう。

S E 1 は南北に延びる溝状遺構であるが、遺物の出土は見られず、性格・時期ともに不明である。

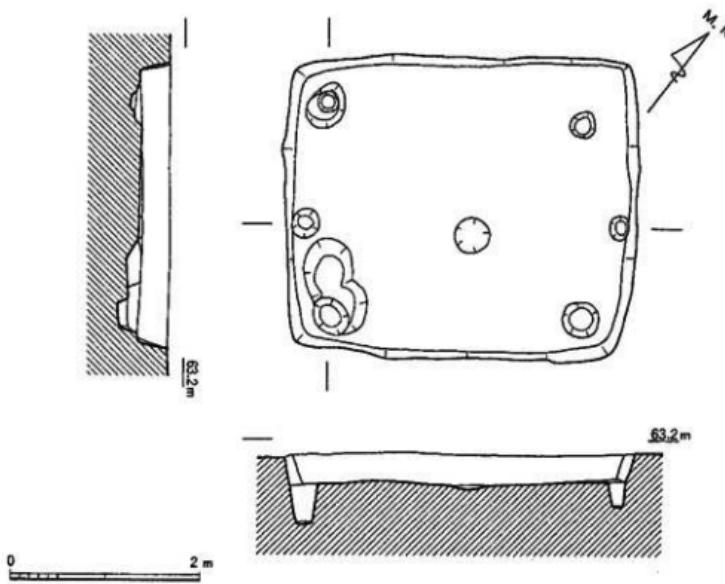
34号支線は幅4m、全長40mである。掘立柱建物1棟が検出された(第32図)。1×2間の東西棟である。遺物は出土していない。



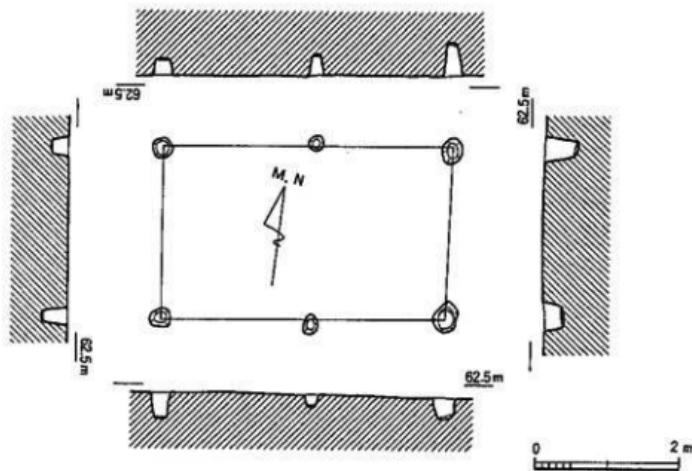
第29図 31号支線道路検出透構実測図 (S A→1/50, S C→1/30)



第30図 出土遺物実測図 (31R~33R) (206~213→1/3,
214・215→1/4, 216→1/2, 217~225→1/4)



第31図 33号支線道路 S A 1 実測図 ($S = 1/60$)



第32図 34号支線道路 S B 1 実測図 ($S = 1/80$)

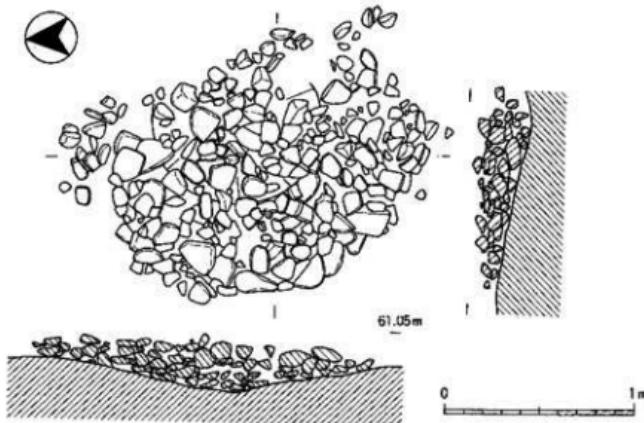
(9) 35号支線道路

圃場整備対象区の最南端、L字状に伸びた道路である。北側部分から縄文時代早期の集石遺構及び焼碟群、南側から溝状遺構が検出された。

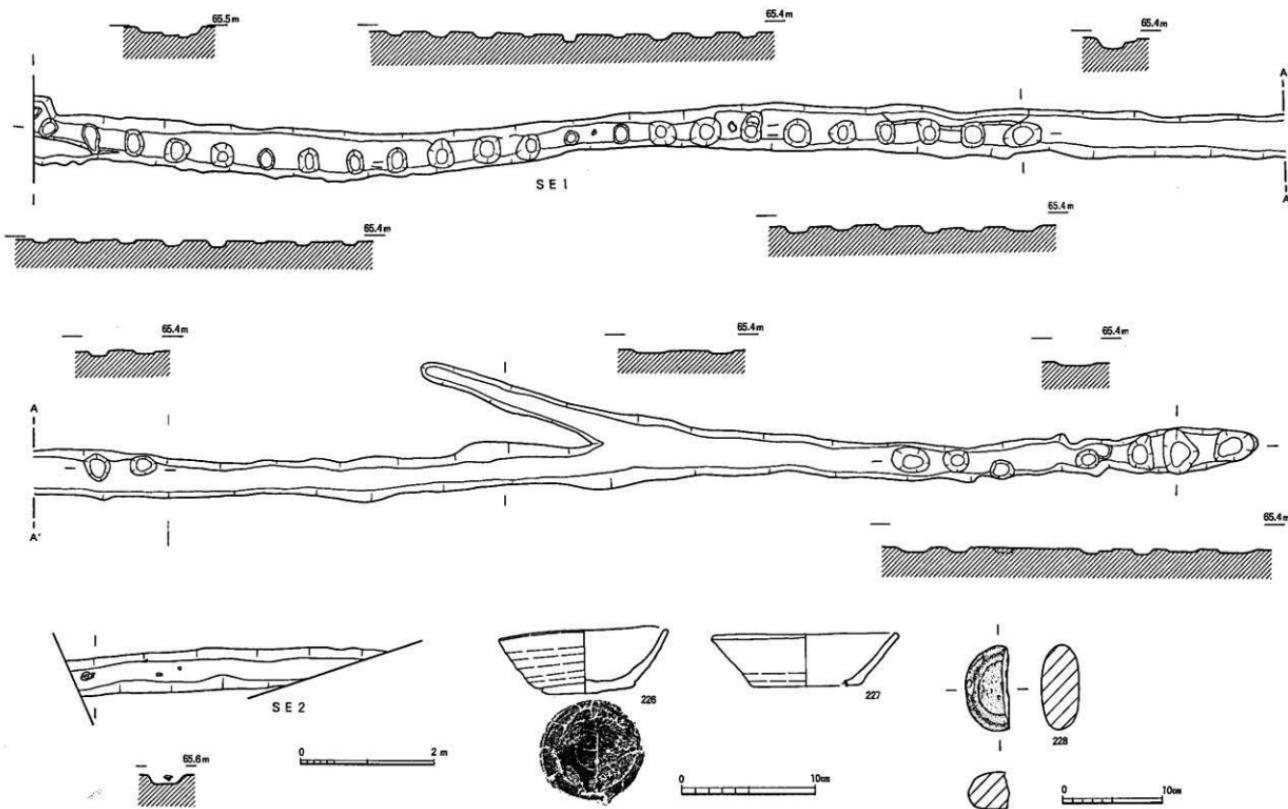
S I 1は、わずかな掘込みを有するタイプのもので、掘込み内には大きめの碟が密に集積されている。掘込み径0.86m・深さ0.18mを計る。わりと角碟が多く、碟は火を受け、赤く変色している。底部には配石は見られない。(第33図)

S I 2は、径1.2mを計るものであるが、保存状態が良好であることから、西都市歴史民俗資料館にて展示保存する運びとなった。このようなことから今回は液体窒素により一時的に地表面を凝固させ、それを剥ぎ取る方法にて行うことになり試みたが予想以上に液体が浸透せず、地表面の数ヶ所しか凝固しないことから失敗、結果的には全体をそのまま移設することとなり、重機により周囲を剥ぎ取り、梱包して移設を行った。

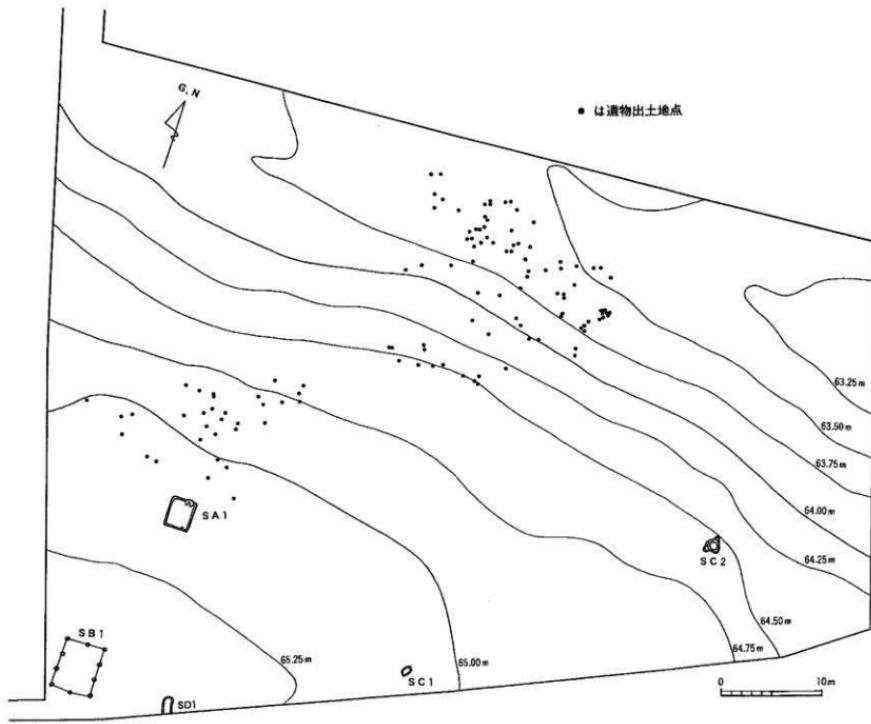
S Eは、南側の東西に伸びた道路部分からL字あるいは幾条にも分枝したものが検出された。幅0.55~0.85m、深さ0.16~0.36mを計る。時期は遺物が出土しておらず不明であるが、検出状況などから後世のものと推定される。



第33図 35号支線道路 SII 1実測図 (S=1/30)



第34図 A区 SE1・2実測図 (S=1/60) 及びS区出土遺物実測図 (226・227は1/3, 228は1/4)



第35図 B区 遺構分布図 ($S = 1/400$)

(10) A区（第34図）

A区は約2,000m²で、溝状遺構2条が検出された。

S E 1は東西方向に約37mにわたり検出された。幅70cmの溝内には平均径35cmのピットが約40cm間隔で並んでいる。ピットの埋土は、濁りのある灰褐色土で非常に硬く締まっている。S E 1東端より約10mの位置で北側に向て二股に分かれ、約3m延び消滅している。遺構内から遺物は出土していない。

S E 2はA区南西隅に検出された。幅60cm、検出面からの深さ15cmである。埋土中位から土師質の坏2点、磨石1点が出土している。226はヘラ切り底で、底部と体部の境に明瞭な段を持つ。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。227は底部から口縁にかけて大きく開きながら直線的に延びる。228は砂岩製である。

(11) B区（第35図）

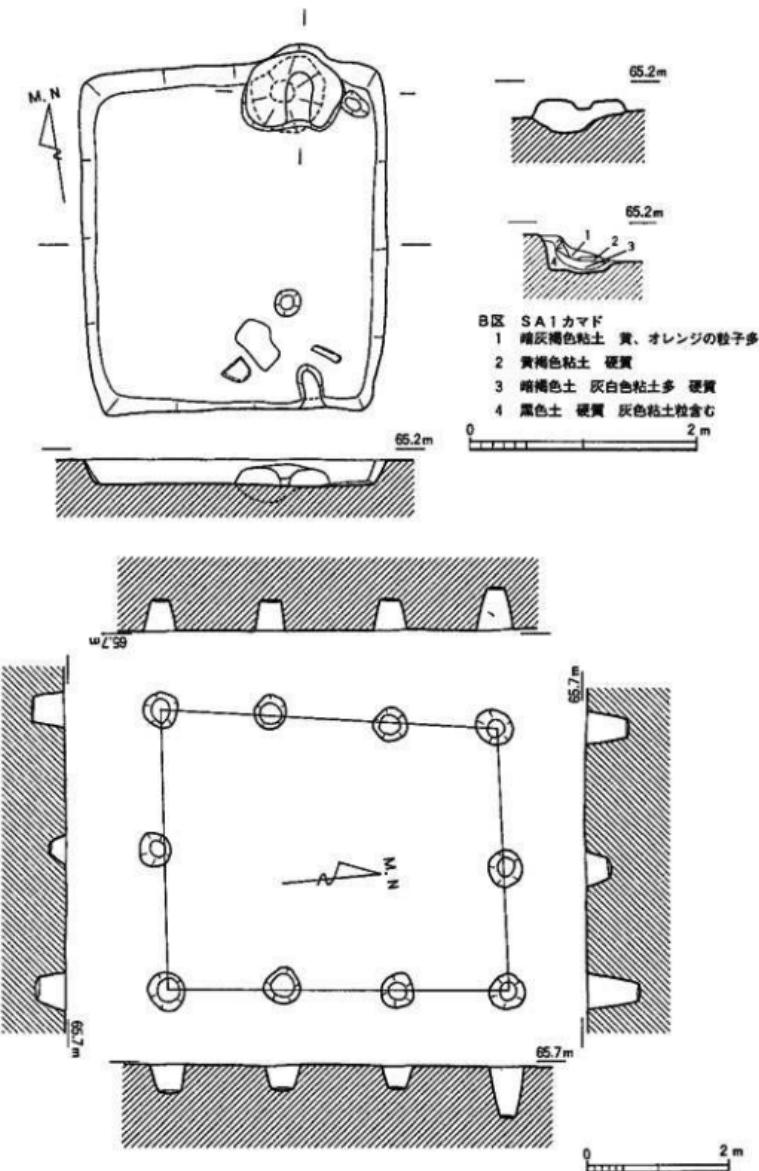
B区は約4,500m²で、堅穴状遺構1基、掘立柱建物1棟、土坑2棟、土壙墓1基が検出され、包含層から多くの遺物が出土している。（第36～39図）

S A 1はカマドを持つ方形堅穴で、3.0×2.6m、検出面からの深さ25cmを計る。柱穴は中央やや南東寄りに1基検出したが、上屋を支持する主柱穴とは考え難い。カマドは北壁やや東寄りに、白色粘土により造られている。煙道は伴わない。カマド周辺には、炭化物粒と赤化した粘土粒が多く含む灰が見られた。カマドの右、床面北東隅に深さ約15cmのピットが見られ、完形の土師質の坏が出土している。カマドを除去すると、浅い皿状の落ち込みが検出された。南壁には、北壁のカマドと同質の白色粘土の張り出しが見られ、また付近の床上にも同質の粘土塊が検出されている。これらは、火を受けた形跡は見られなかった。床面積は約6.7m²と小規模であり、カマド屋と考えられる。S A 1からは、数点の土師質土器片と石皿の欠損品2点が出土している。229はカマド横のピットから出土した坏である。底部はヘラ切り底の坏で、底部から口縁部へ直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。230は床上から出土している。ヘラ切り底の坏で、底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。231、232はともに砂岩製の石皿である。遺物より9世紀後半から10世紀前半の年代が与えられよう。

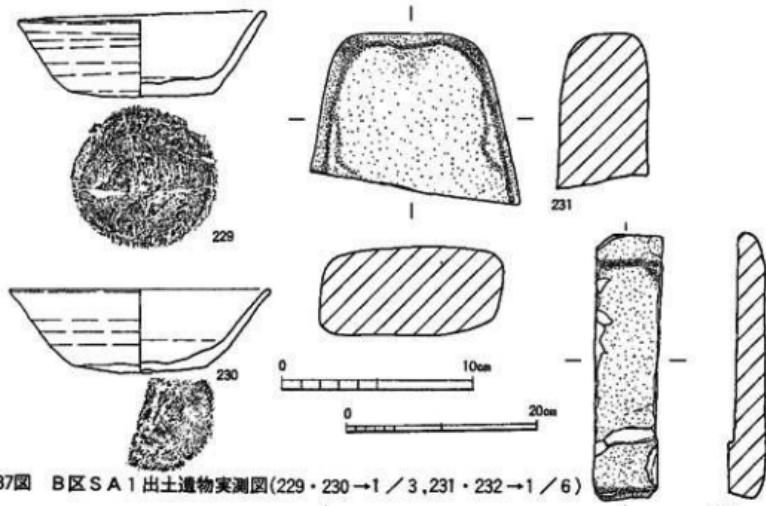
S B 1は2×3間で南北棟である。柱穴の平均径は50cmで、黒色土の埋土に柱痕は不明瞭であった。S B 1の床面積は約18.2m²と推定される。遺物は出土していない。

S C 1は長方形、S C 2は不整円形の土坑で、ともに獸骨片が検出されたが、細片のため獸種は判断し得ない。

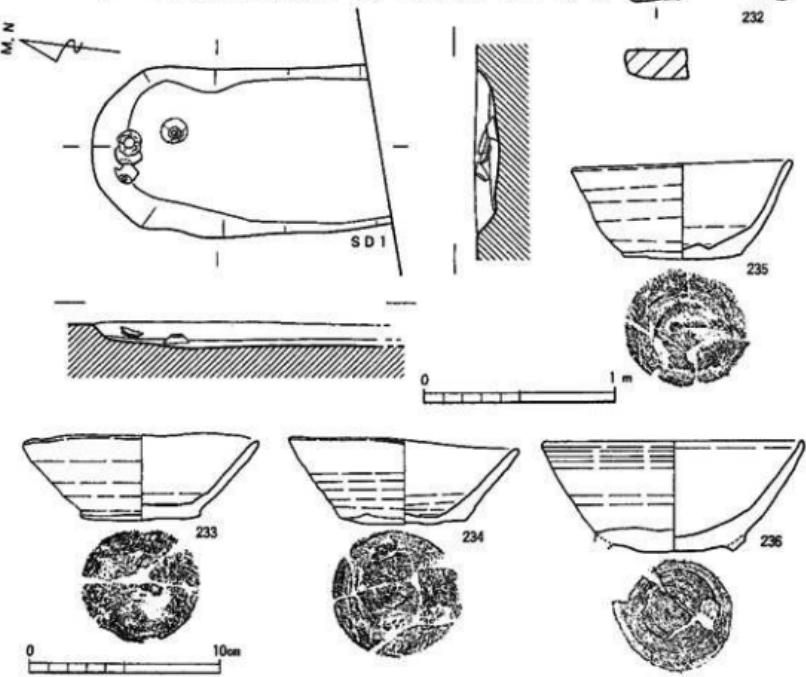
S D 1は梢円形の土壙墓である。床面北隅に4個体の土師質の坏が出土した。いずれもヘラ切り底である。233、234は体部から口縁部にかけて直線的に延びる。235、236はやや内湾気味であり、236には高台の剥離痕が残る。遺物より9世紀後半から10世紀前半の年代が与



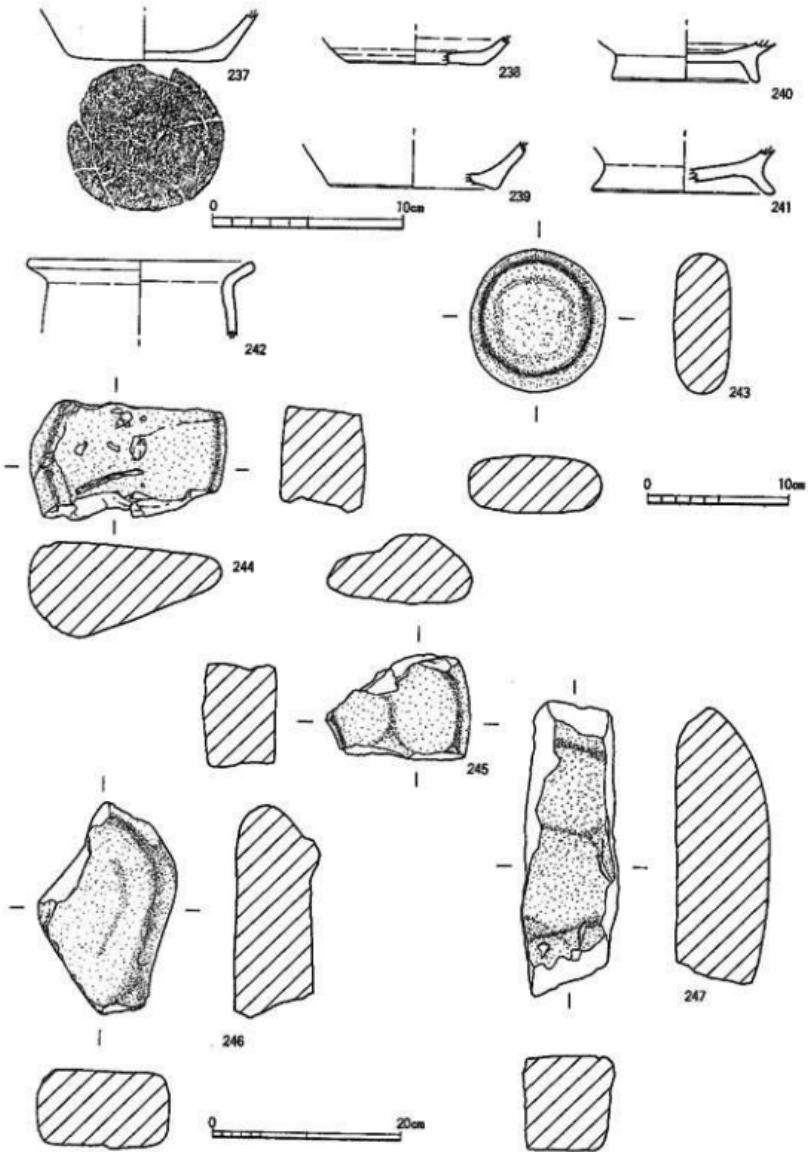
第36図 B区 SA1 ($S=1/50$)・SB1 ($S=1/80$) 実測図



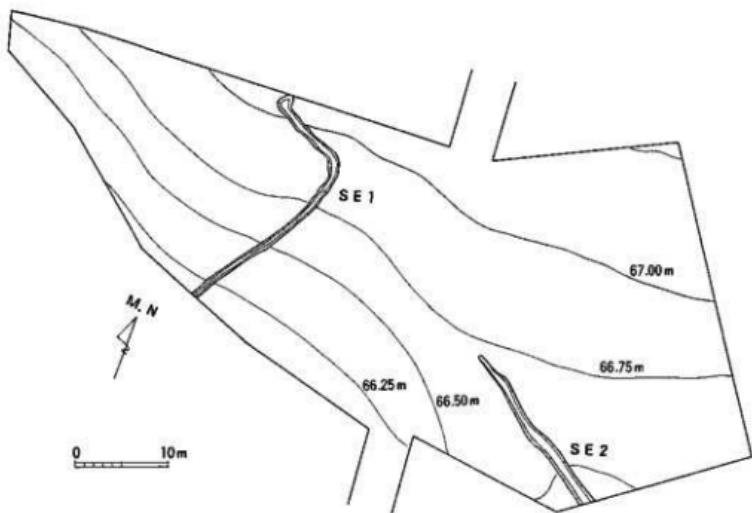
第37図 B区 SA 1 出土遺物実測図(229・230→1 / 3, 231・232→1 / 6)



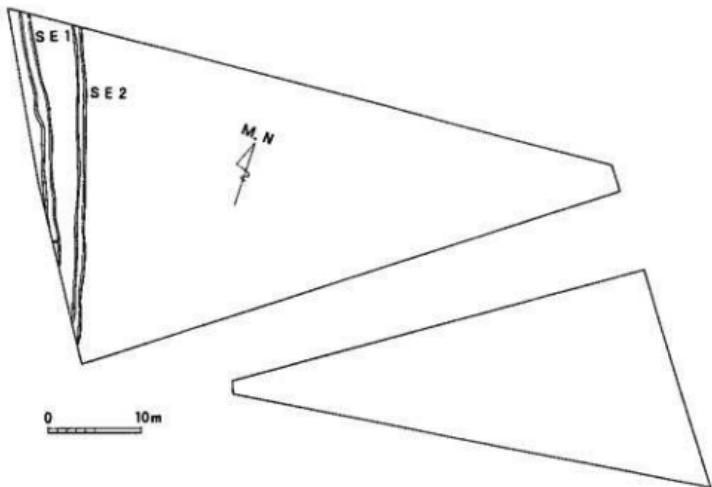
第38図 B区 SD 1 実測図 ($S = 1 / 30$) 及び出土土器実測図 (1 / 3)



第39図 B区 遺構外出土遺物実測図 (237~241 → 1/3, 242・243 → 1/4, 245~247 → 1/6)



第40図 C区 造構分布図 ($S = 1/600$)



第41図 D区 造構分布図 ($S = 1/600$)

えられる。

B区包含層からは平安時代の土師質土器、磨石、石皿等が出土している。237はヘラ切り底の壺である。240、241は高台付の底部で、241は大きく外に張り出す。242は壺で、「く」字形に屈曲する頸部に張りの弱い胴部を持つ。243は尾鈴山系酸性岩の磨石である。244~247は砂岩の石皿である。

(12) C区、D区 (第40~41図)

C区は約2,100m²、D区は約1,750m²で、それぞれ溝状遺構2条を検出した。図示はしていないが、溝内及び包含層から近世~近代の陶磁器小片が出土している。

(13) E区 (第42~44図)

西都原台地の南東、台地縁辺部で、32号支線道路の東側に位置している。アカホヤ火山灰層は、すでに削平されて確認できなかったが、アカホヤ火山灰層下層の黒褐色土より縄文時代早期の集石遺構7基及び溝状遺構2条が検出された。礫は、いずれも火を受け、赤く変色している。

遺物は、縄文土器が総計16点出土しているが、いずれも集石遺構と共に伴しない。無文がほとんどで、貝殻条痕文系土器が若干含まれている。248は貝殻腹縁により綾杉状に刺突が施されている平底の深鉢である。

S I 1・S I 2は、ほとんど上面が削平されていて、底部部分しか確認できない。掘込みを有しないタイプのもので、礫もまばらである。(第43図)

S I 3も底部部分しか確認できない。わずかに掘込みを有している。掘込み径0.72m・深さ0.07mを計る。礫は0.55×0.65mの範囲内にまばらに出土している。(第43図)

S I 4も底部しか確認できない。掘込みを有しないタイプのものであるが、掌大の礫が3個残存しており、底面には配石を施していたと思われる。礫は0.8×1.0mの範囲内にまばらに出土している。(第43図)

S I 5は、掘込みを有しないタイプのもので、径0.85mの範囲内に礫がわりと密に集中している。(第44図)

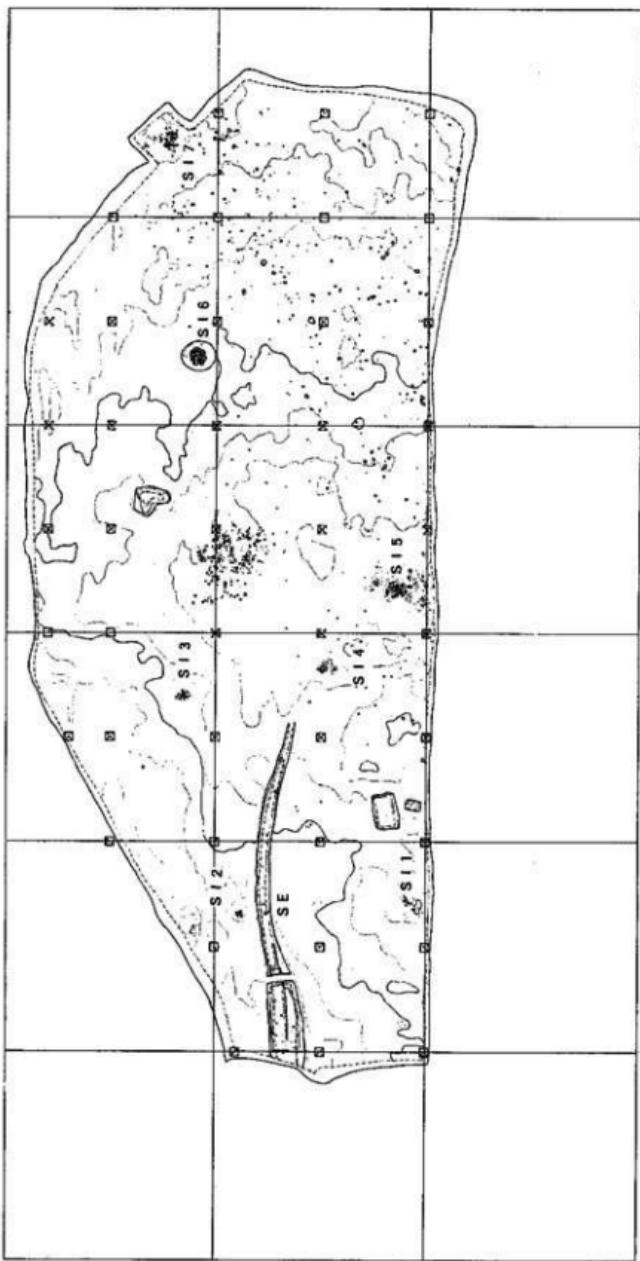
S I 6は、本地域のなかでいちばん保存状態が良好なものであることから、このまま資料として保存措置が講じられることになり、発砲硬質ウレタンによって梱包を行った。梱包する際、深い掘込みを有するタイプのもので、底面には配石を有していることが確認された。径0.9m、掘込み内に礫が密に集積されている。(第44図)

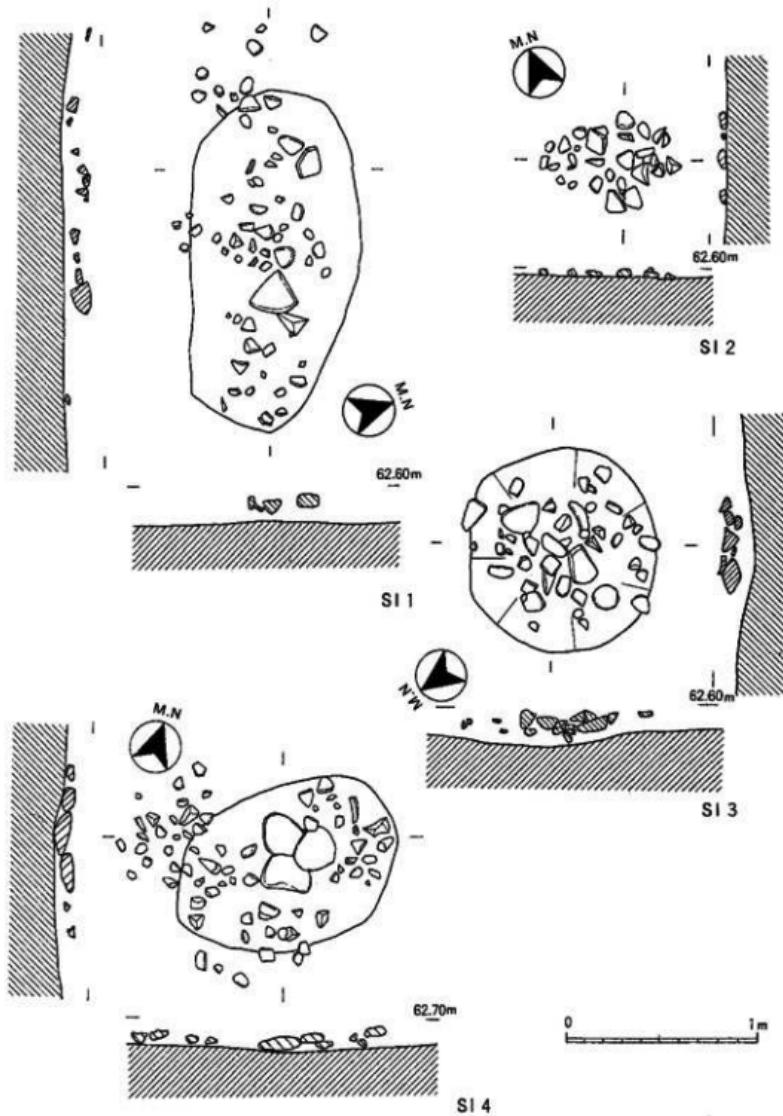
S I 7は、底部しか確認できない。わずかな掘込みを有している。掘込み径0.56m・深さ0.05mを計る。礫は1.0mの範囲内にまばらに出土している。(第44図)

2条の溝状遺構が、北辺中央部で合流して南に延びている。南へ行くにしたがって幅が狭くなっている、16m程で消滅している。最大幅0.8mを計る。遺物は、出土していない。

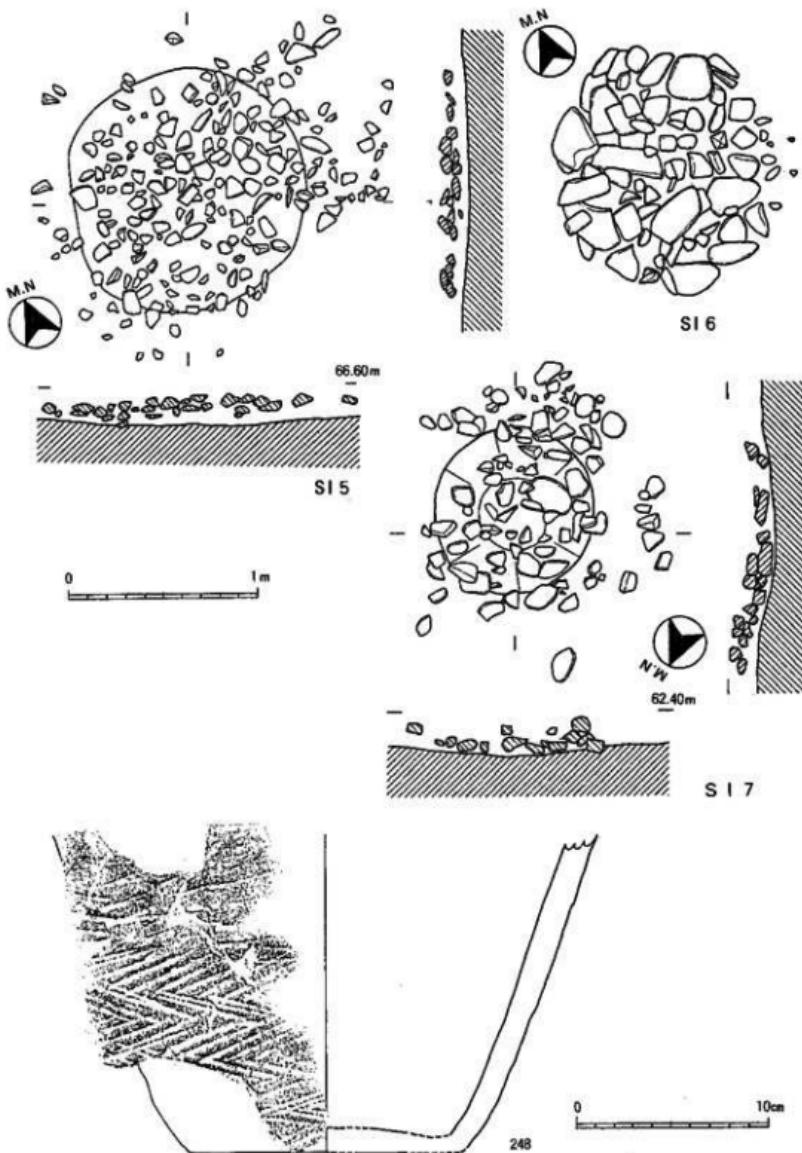
0 10m

解42図 E区遺構分布図 (1/400)





第43図 E区 SI1~SI4実測図 ($S=1/30$)



第44図 E区 SI5～SI7実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (1/3)

第2節 平成6年度の調査

(1) 1号支線道路

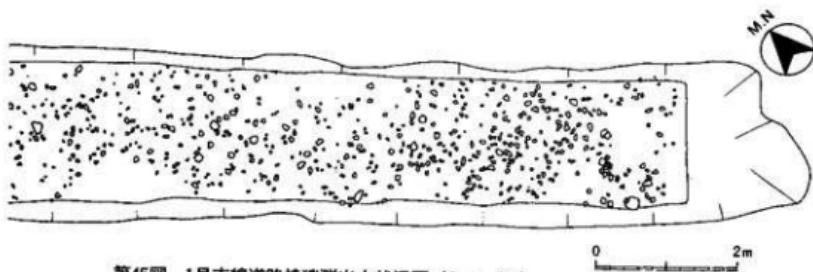
西都原台地の北方、西都原資料館東側地域（平成6年度I工区）に位置する道路であるが、本地域には1号支線道路のほか2号小道及び2号・3号支線道路が含まれる。（第4図）

1号道路からは、遺構は検出されなかったが、アカホヤ火山灰層下層より焼燐群が出土しており、周辺地域には集石遺構の存在が想定される。

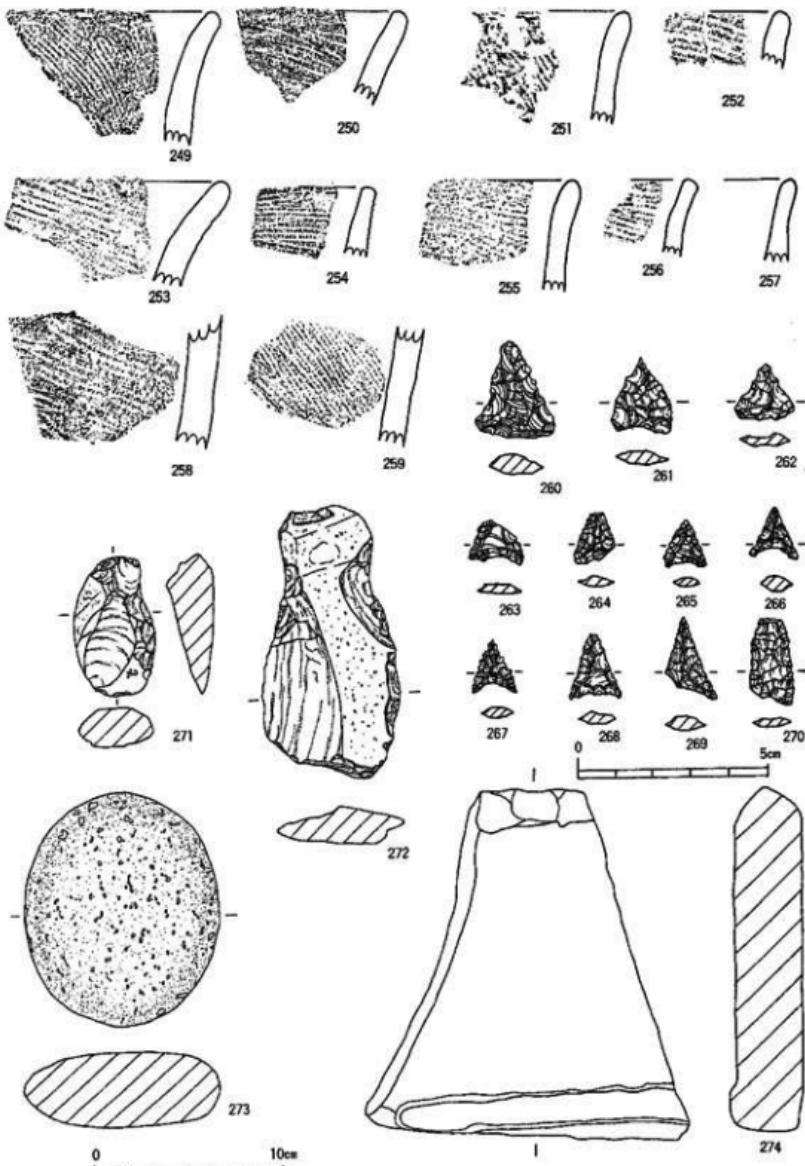
遺物は、縄文土器をはじめ弥生土器や陶磁器など総計800点ほど出土しているが、縄文土器が圧倒的に多く、全体の97%以上を占めている。縄文土器は、そのほとんどがアカホヤ火山灰層下層の黒褐色土から出土しているが、貝殻条痕文系土器及び無文土器が主体を成している。このなかで、貝殻条痕文系土器は前平式土器に含まれるものと思われる。

その他、弥生土器や陶磁器などが出土しているが、いずれも攪乱土（表土）から出土したものである。

249～257は外面に斜めあるいは横方向に貝殻条痕文が施された深鉢の口縁部である。内面はナデ調整のものが多く、口唇部は丸く仕上げられているものと平坦なものとがある。258・259は同じく貝殻条痕文が施された深鉢の脇部である。いずれも縄文早期の貝殻条痕文系土器の破片である。260～270で石鏃で、形式としては三角形のもの（260～267）、二等辺三角形のもの（268・269）、砲弾形のもの（270）がある。また、基部では、平基式のもの（260・262）と凹基式のもの（261・263～270）に分かれる。石材は、黒曜石のものとチャートのものが多い。271は小型の局部磨製石斧、272は雑に仕上げられている有肩の打製石斧である。いずれも頁岩製である。272は砂岩製の石皿である。（第46図）



第45図 1号支線道路焼燐群出土状況図 (S=1/80)



第46図 1号支線道路出土遺物実測図 (249~259・271~274→1/3, 260~270→2/3)

(2) 2号小道路

1号道路の北側、西都原台地最北端に位置する道路で東西に延びている。(第44図) 道路東側部分は、すでにアカホヤ火山灰層は削平されていたが、アカホヤ火山灰層下層の黒褐色土から焼穀群と集石遺構1基が検出された。

道路中央部分は、アカホヤ火山灰層は残存しているが、中央に行くにしたがって深くなり、最深部では1.4mにも及んでいることから、中央部周辺がゆるやかな谷地形であったことを示している。アカホヤ火山灰層面で、竪穴式住居跡1軒・土坑1基及び溝状遺構2条が検出された。(第48図)

遺物は、東側部分を中心に縄文土器が50点、中央部分の土坑内から弥生土器が550点の総計550点が出土している。縄文土器は、いずれも小片で、無文及び貝殻条痕文系土器が主体を成している。

S I 1は、底面に配されている環が花弁状を呈するタイプのもので、わずかに底部付近のみが遺存している。掘込みは浅く、径0.70m・深さ0.15mを計る。環は、円環が多く、火を受け赤く変色している。(第47図)

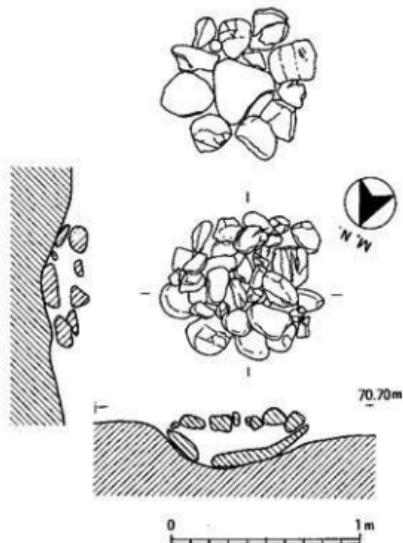
S Aは、道路のほぼ中央部から、北東隅のみ検出された。よって、そのほとんどが南側畠地に広がっているため、規模は不明瞭であるが、壇高0.6mを計る。遺物は、わずかに弥生

土器が1点出土しているのみである。刻目突帯を有する下条式系の壺(275)で、口唇部にも刻目が施されている。あまり胴部の張らないもので、口径26.4cmを計る。また、表面は丁寧な縱方向、裏面には横方向のハケ目調整が施されている。(第48図)

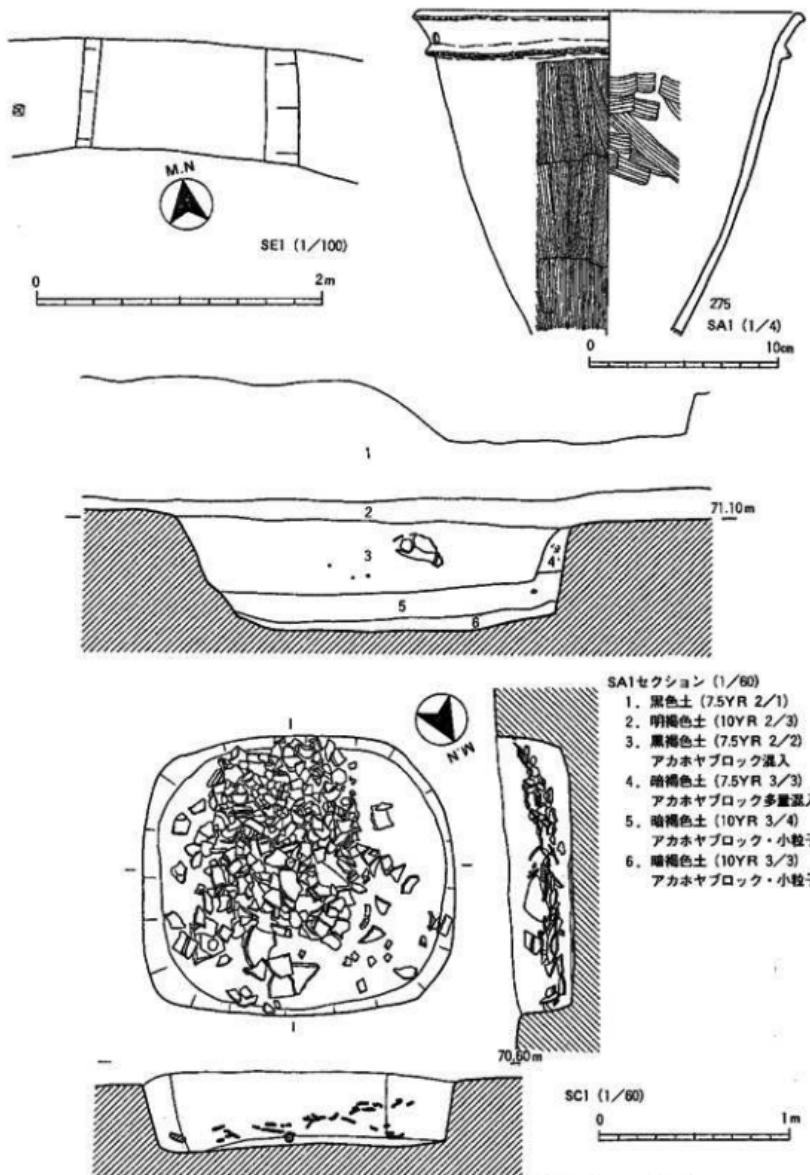
S C 1は、多量の土器片が混入している土器溜りで、隅丸方形状のプランを呈し、長軸1.64m、短軸1.47m、検出面からの深さ0.38mを計る。(第48図)

遺物は、壺と壺が最も多く、その他、高壺や鉢など約500点程が出土している。(第49~51図)

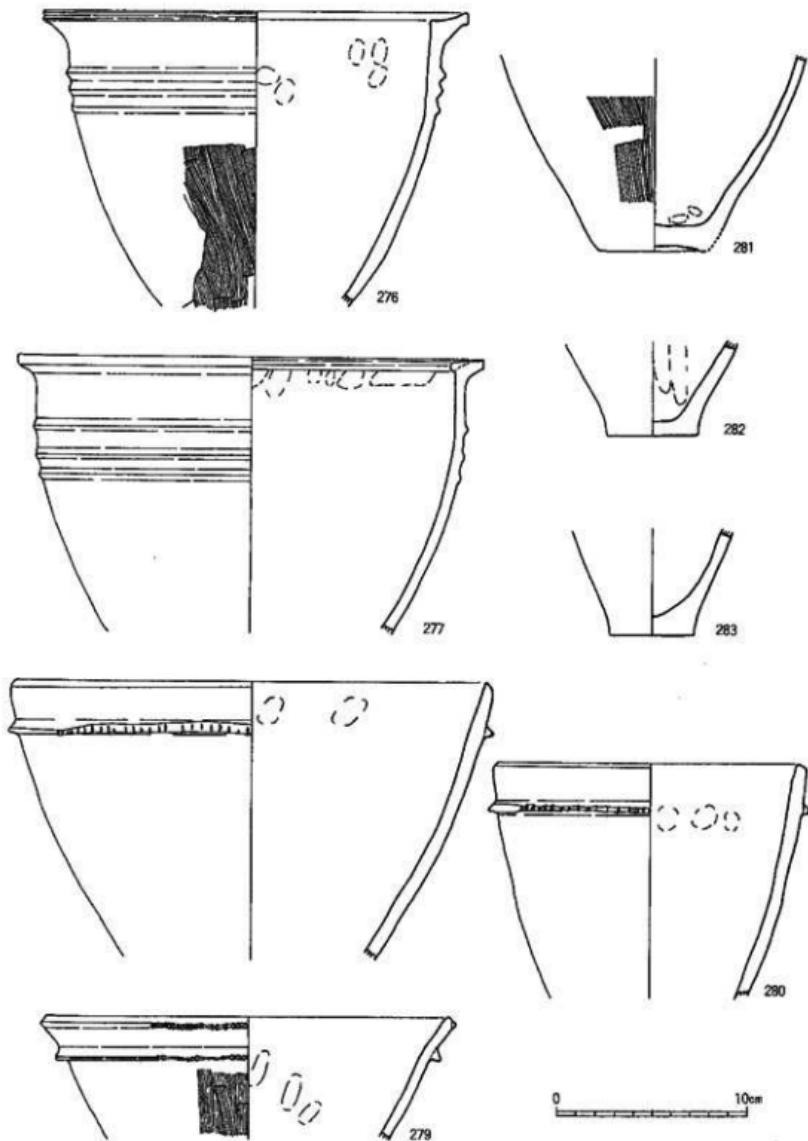
壺は、口縁部が逆「L」字状を呈したもの(276・277)と刻目突帯を有するもの



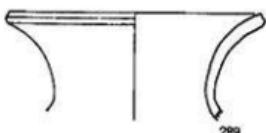
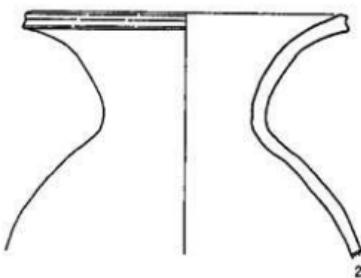
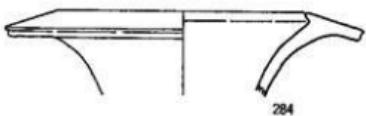
第47図 2号小道路 SI1実測図 (S=1/30)



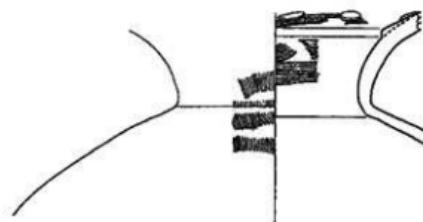
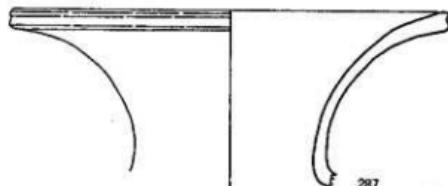
第48図 2号小道路 SE1・SC1・SAセクション実測図 (1/60, 1/100)
SA1出土遺物実測図(1/4)



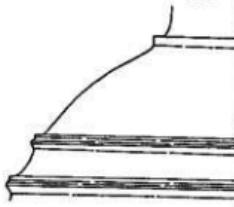
第49図 2号小道路 SC1出土遺物実測図(1) ($S=1/4$)



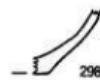
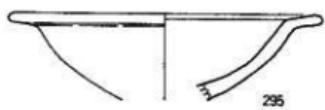
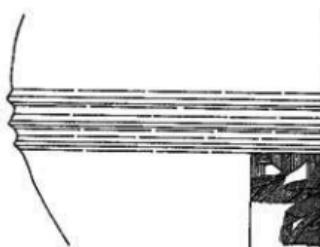
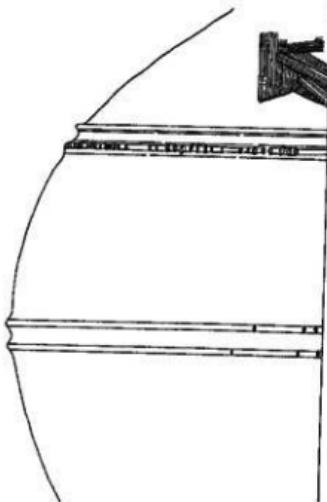
289



0
10cm



第50図 2号小道路 SC1出土遺物実測図(2) (S=1/4)



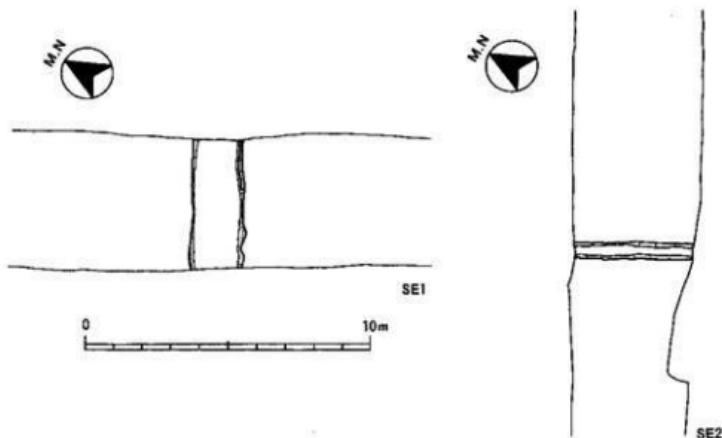
第51図 2号小道路 SC1出土遺物実測図(3) ($S=1/4$)

(278～280)がある。276・277は口縁部が逆「L」字状を呈したもので、胴上部に3条の突帯を巡らしている。278～280は刻目突帯を有する下城式系の壺で、下がり気味の突帯に刻目が施されているが、なかには279のように口唇部に刻目が施されているものもある。壺は、鋤先状口縁部のもの(284・285)と頸部から外反しながら口縁部に至るもの(286～290)がある。284は、鋤先状口縁の端部が下がっているもの、285は水平のもの、291は逆に端部が上がって、円形浮文が施されているものである。286～290は頸部から外反しながら立ち上がり口縁部に至る壺で、そのほとんどが口縁端部が厚く、口唇部が若干窪んでいる。

295はゆるやかに内湾しながら立ち上がる高坏の坏部で、口縁部は水平状に掘折している。口唇部は丸く仕上げられている。296は口縁部が逆「L」字状に屈折した鉢の口縁部で、口唇部は丸く仕上げられている。297は口縁部が短く外反し、球状の膨らんだ胴部を有する鉢、298は平底の鉢の底部である。

時期は出土土器の特徴から弥生時代中期末から後期初項に比定される。

S E 1・S E 2は、中央部と西側から検出されている。中央部のものは、現存長2.0m・幅3.7m、西側のものは、現存長約40.4m・幅0.3～0.6m・深さ0.08～0.2mを計る。遺物は出土していないため、年代は不明であるが、検出状況などから後世のものと推定される。(第52図)



第52図 2号支線道路 SE1・SE2実測図(S=1/200)

(3) 2号支線道路

2号道路は、本地域のほぼ中央、東西に延びている道路である。わずかに、溝状遺構2条が中央部と東側から検出されたのみである。(第4図)

SE1は、現存長4.2m・幅0.6m・深さ0.2m前後、SE2は、現存長4.6m・幅1.25m・深さ0.35m前後を計る。

遺物は出土しておらず、時代的なことは不明であるが、検出状況などから後世のものの可能性が強い。(第52図)

(4) 3号支線道路

2号道路の南140m、東西に延びた道路である。溝状遺構3条・掘立柱建物跡1棟及びピット群が検出された。(第53図)

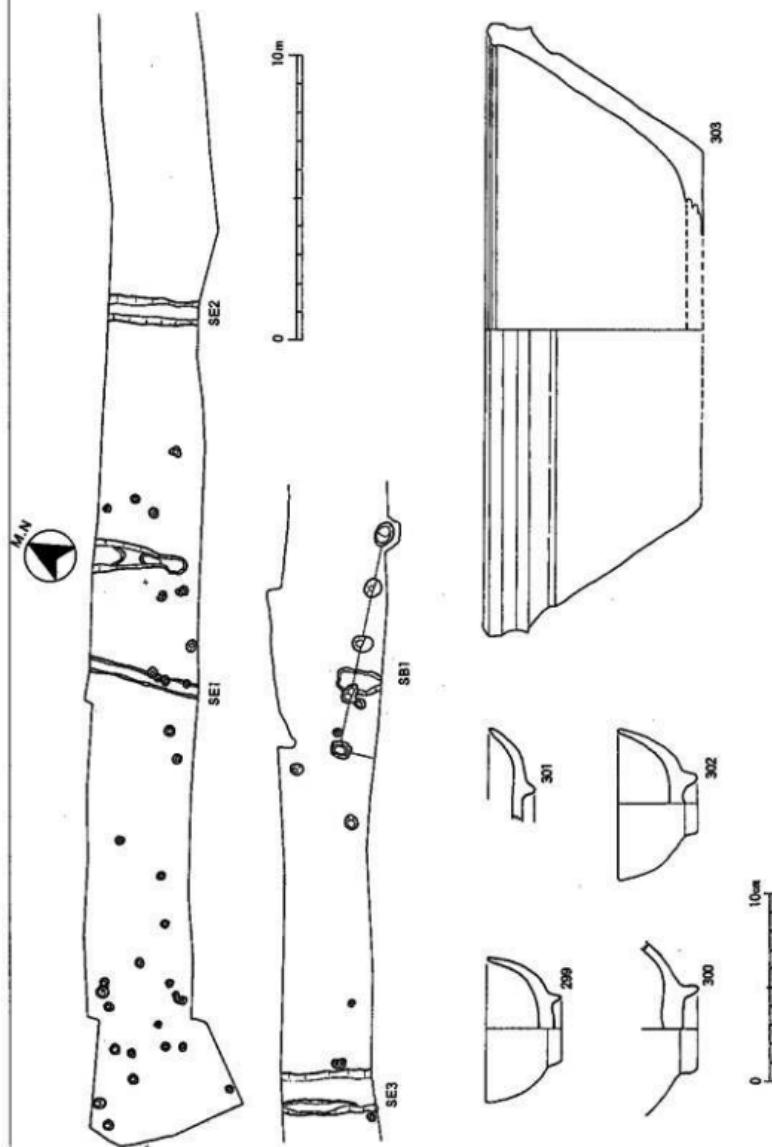
SB1は、東側から掘立柱建物跡の北辺部分が検出された。柱穴は、径0.5~0.85m、深さ0.57~0.65m、柱穴間1.3m前後を計る。主軸の方向はW-40°~S、遺物は出土していない。時期は遺物が出土しておらず不明である。

SE1~SE3は、いずれも道路西側から検出されたもので、平行して延びている。SE1は現存長4.0m・幅0.35m・深さ0.04~0.11m、SE2は現存長3.15m・幅0.9m・深さ0.3m、SE3は現存長3.25m・幅1.55m・深さ0.5m前後を計る。

遺物は、擂鉢・染付などがSE3から出土している。299は山が描かれた染付碗、300は直線と葉が描かれた染付皿、301・302は陶器碗である。

西側を中心に42個程のピット群が検出された。すべて円形で、径0.2~0.55m・深さ0.2~0.4mを計るが、掘立柱建物跡は確認できなかった。

第53圖 3号支線道路遺跡分布図 (S-1/200)、出土遺物実測図 (1/3)



(5) 4号、5号支線道路

4号支線は幅5m、全長120mである。幅約15mの大規模な溝が検出された（第54図）。検出面からの最大深は約1.5mである。埋土中には砂を多く含む層や、粘土との細互層が見られ、流水の作用で埋没したものと思われる。セクション壁の観察では、北壁際に約1.5mの幅で埋没後の再掘削の形跡が見られた。溝埋土の土壤サンプリングを行い、火山灰検出同定分析、植物珪酸体分析、花粉分析等の自然科学分析を行った。その結果、霧島新燃岳軽石（1717年噴出）、桜島文明テフラ（1471年噴出）、霧島御鉢延暦スコリア（788年噴出）が検出された。また、溝内はヨシ等が生育する比較的湿潤な環境であったことが判明した。埋土下位から弥生土器、中位から上位にかけて古代から中世にかけての土器類が出土した（第55図）。304は大壺で、大きく肥厚させた口縁部下に断面台形の突帯が付く。305は頸部が「く」字形に屈曲する壺で、胴部は丸く張る。306は頸部下に刻目突帯が付く。307から309は壺の底部である。307は平底で、脚台状の底部はやや外に張り出す。308、309は若干の上げ底となる。310、311は壺の口縁である。310は鈎先状口縁で、312と同一個体の可能性が高いが接合点は見られなかった。313は、胴部に断面三角形の3条の突帯が付く。314、315は壺の胴部から底部であるが、外器面は丁寧なミガキが施される。316、317は小型の高壺の脚である。以上の弥生土器は、中期後半から後期前半に比定されよう。318は頁岩製の砥石である。319～323は土師質の壺、高台である。319は直線的に延びる口縁である。320は底部と体部の境に段を有する。321は底部にヘラ切り痕が残る。322、323は外に向かって張り出す高台である。

(6) 6号、7号支線道路

6号支線は旧競馬場を南北に横断し、幅5m、全長480mである。部分的にアカホヤ火山灰が削平された部分も見られたが、全体的には比較的良好な土層の遺存状況であった。アカホヤ上面では遺構は検出されなかったが、旧競馬場中央部がやや高く、周辺部に向かって緩やかに下る旧微地形が観察された。土層観察のために設定したトレンチから叩き石が出土した（第56図324）。土層の観察から旧石器時代に遡る可能性が指摘される。

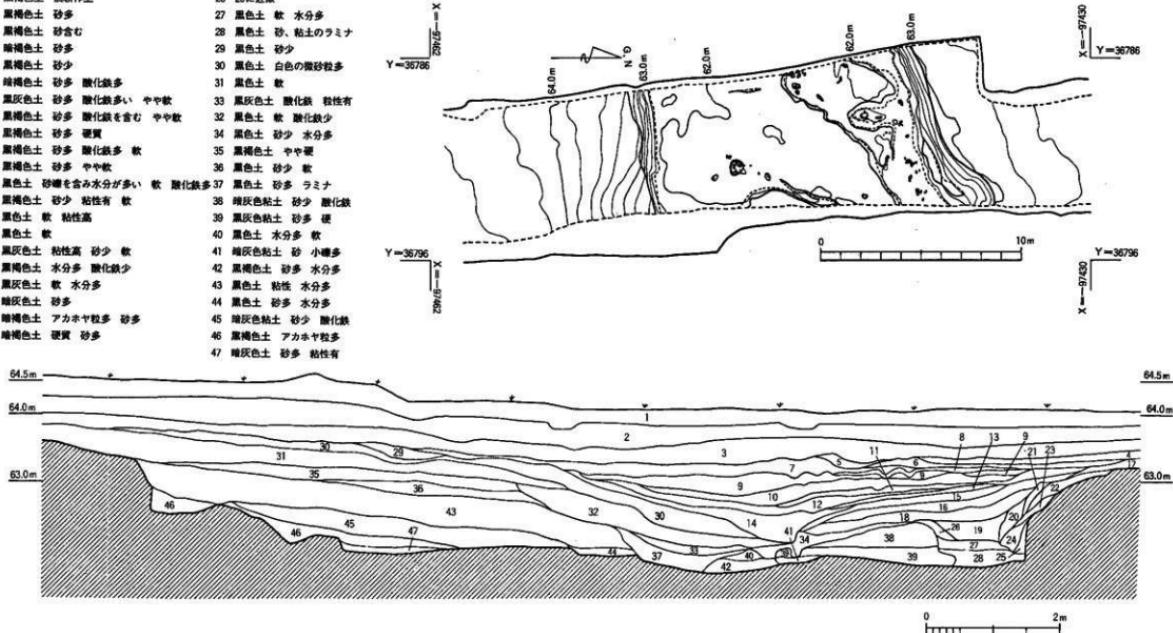
7号支線は6号に直交し、幅5m、全長180mである。遺構等は検出されていない。

(7) 8号支線道路

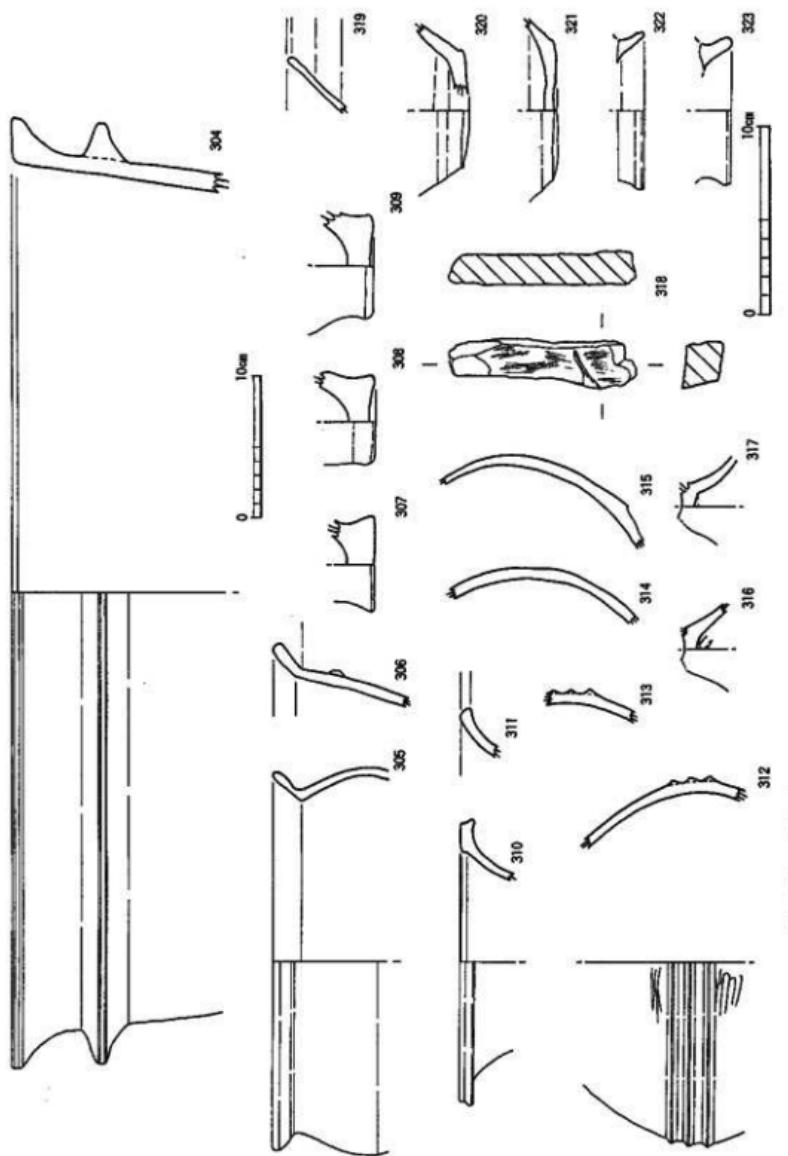
8号支線は、6号に直交する幅5m、全長220mと、T字状に分岐する幅5m、全長160mの路線である。縦穴住居3基が検出された（第57図～第61図）。

S A 1は5.2×4.7mの方形プランで、検出面からの深さ50cmを計る。床中央部から南東壁にかけて約15cm程の段差が見られる。主柱穴は2基で、約90cmと深い。南コーナーは擾乱を受けている。北西壁及び北東壁際には幅約15cm、深さ5cmの壁帶溝が見られた。貼床、焼土等は見られなかった。弥生土器、磨製石鏃、砥石、叩き石、石皿が出土した。325は壺

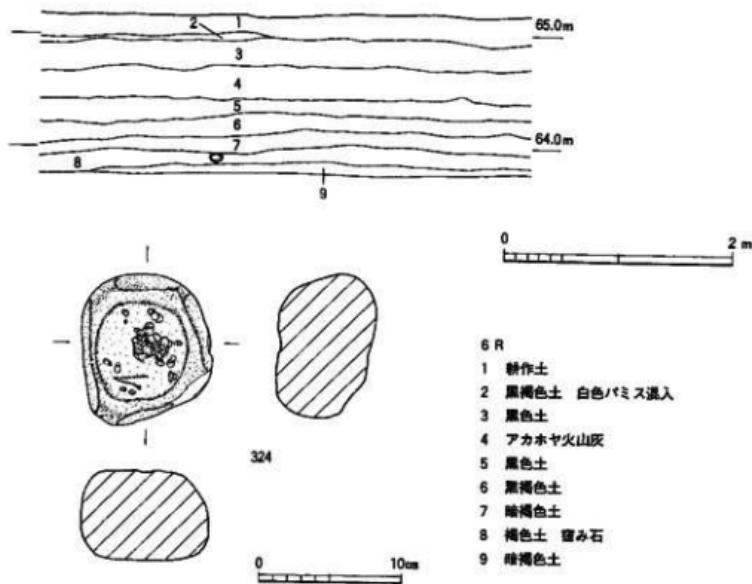
4 R. 大溝	
1 黒土 (耕作土)	24 増灰色 砂多 腐化鉄多
2 耕作土 (原土)	25 滅色土 アカホヤ混入多
3 黒褐色土 旧耕作土	26 20に近似
4 黒褐色土 砂多	27 黒色土 粘 水分多
5 黒褐色土 砂含む	28 黒色土 砂、粘土のミナ
6 黒褐色土 砂多	29 黒色土 砂少
7 黒褐色土 砂少	30 黒色土 白色の微粒物多
8 黒褐色土 砂多 酸化鉄多	31 黒色土 粘
9 黒褐色土 砂多 酸化鉄多い やや軟	33 黒灰褐色土 酸化鉄 硬性有
10 黒褐色土 砂多 酸化鉄を含む やや軟	32 黑色土 粘 腐化鉄少
11 黒褐色土 砂多 硬質	34 黑色土 砂少 水分多
12 黒褐色土 砂多 酸化鉄多 軟	35 黒褐色土 砂や葉
13 黒褐色土 砂多 やや軟	36 黑色土 砂少 硬
14 黒色土 砂礫を含み水分が多い 軟	37 黑色土 砂少 ラミナ
15 黒褐色土 砂少 粘性有	38 増灰色粘土 砂少 腐化鉄
16 黒褐色土 粘 性高	39 増灰色粘土 砂少 硬
17 黒色土 軟	40 黑色土 水分多 軟
18 黒褐色土 粘性高 砂少 軟	41 増灰色粘土 砂 小砂多
19 黒褐色土 水分多 酸化鉄少	42 黑褐色土 砂多 水分多
20 黒褐色土 軟 水分多	43 黑色土 粘性 水分多
21 増灰色土 砂多	44 黑色土 砂多 水分多
22 増褐色土 アカホヤ混多 砂多	45 増褐色粘土 砂少 腐化鉄
23 増褐色土 硬質 砂多	46 黑褐色土 アカホヤ混多
24 増褐色土 砂多	47 増褐色土 砂多 硬性有



第54図 4号支線道路大溝平面図 ($S = 1/200$)、土層断面図 ($S = 1/60$)



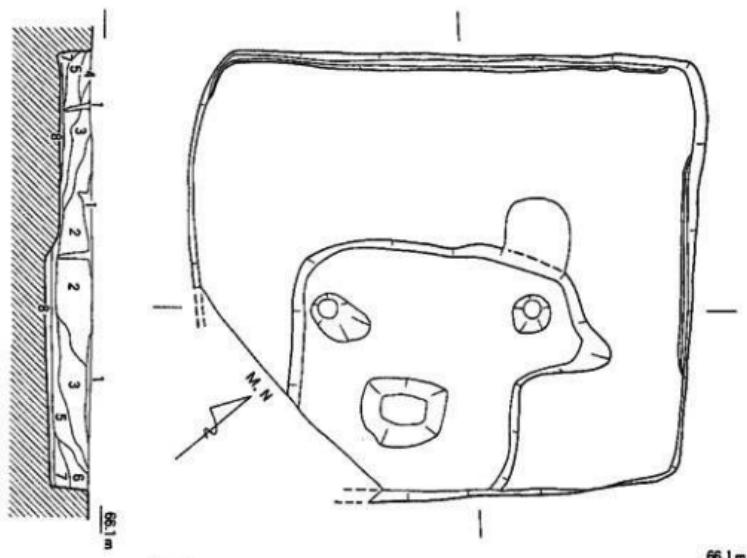
第55圖 4号支線道路大溝出土遺物実測図 (304~318→1/4, 319~323→1/3)



第56図 6号支線道路土層断面図 ($S = 1/50$) 及び出土遺物実測図 (1/4)

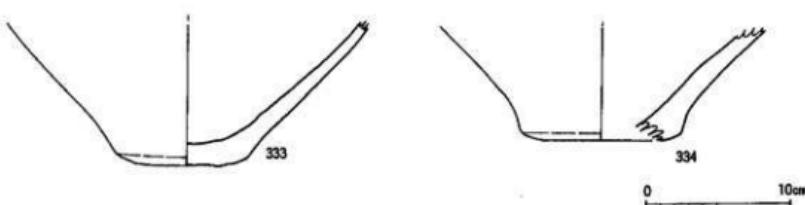
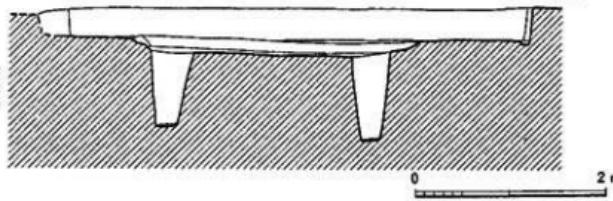
の口縁である。326は壺の底部である。内側が大きく剥離している。327、328は壺の口縁である。329～332は壺の胴部で、329には5条、他は2～3条の突帯を持つ。333、334は壺の底部で、ともに平底である。335、336は緑泥片岩製の摩製石鎌である。337～339は砂岩製の砥石である。340は砂岩製の叩き石で、中央部に敲打痕が明瞭である。341は砂岩製石皿の欠損品である。出土土器より中期後半に位置付けられる。

S A 1 の北東部約3.5mに、S A 2 が検出された。旧競馬場内に整備事業前まで存在した農道法面にあたり、上段では検出面からの深さ60cmを計り、下段では床面近くまで削平を受けていた。部分的に確認されない箇所があったものの壁帶溝が巡っており、プランを確定できた。7.4×5.8mの長方形プランで、北東コーナーは内側に入り込んでいる。床面中央から南壁にかけて15cm程の段差が見られる。主柱穴は2基で、中央やや南寄りに浅い落ち込みと更に2基の小ピットが検出された。小ピットに対応する位置の南壁が内側に緩やかなカーブを描いており、この位置が入口であろうと考えられる。住居の大部分が削平を受けていたため出土遺物は少なかった。342、343は鉢である。342は口縁が外に開き、343は内湾する。

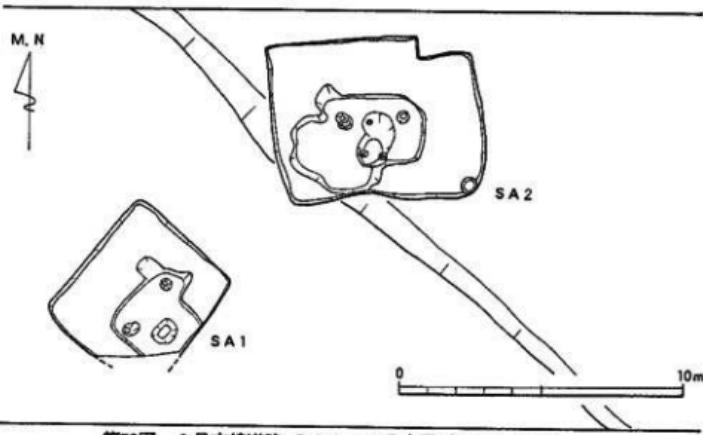


8R. SAI

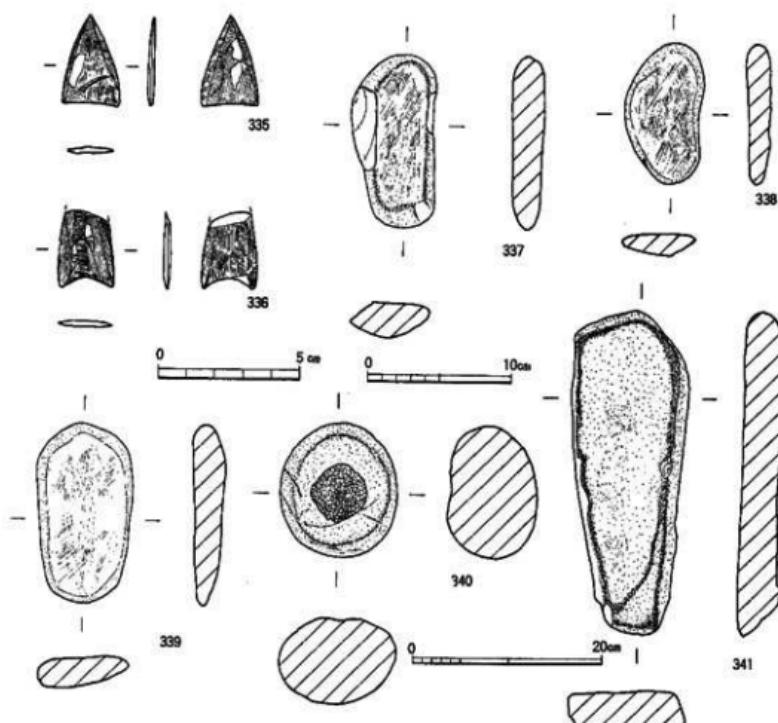
- 1 耕作による擾乱
- 2 黒色土 砂質 軟
- 3 黒色土 アカホヤ粘を少々含む
- 4 黒褐色土 アカホヤ粘を多く含む
- 5 黒褐色土 アカホヤ粘を多く含む
- 6 黒褐色土 4, 5より黒みが強い
- 7 黒褐色土 やや軟
- 8 暗褐色土 硬質



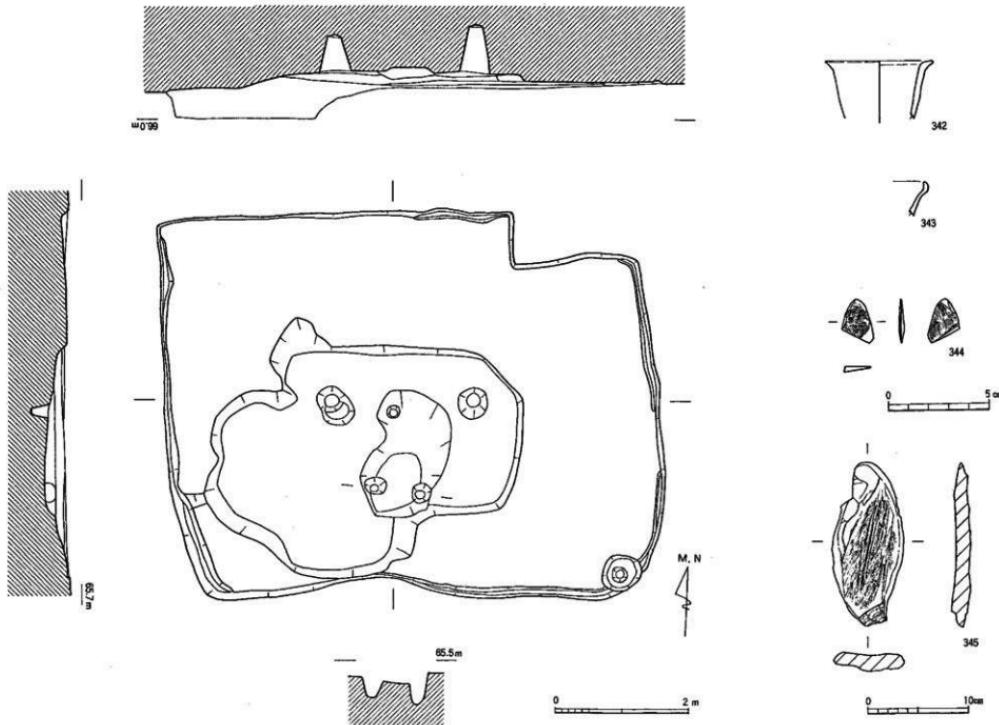
第57図 8号支線道路 SAI実測図 (1/60) 出土遺物実測図 (1/4)



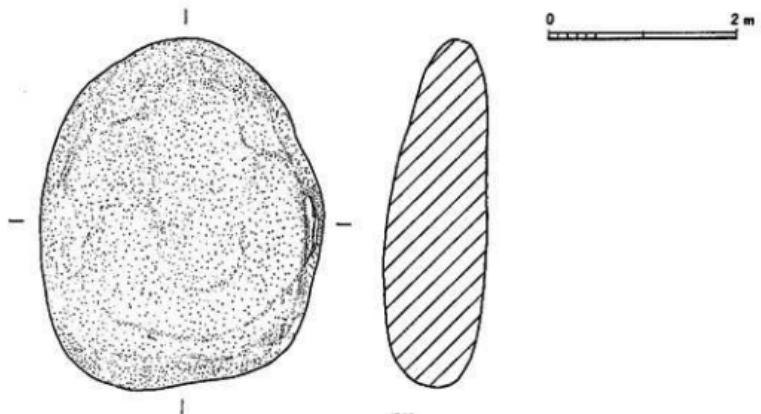
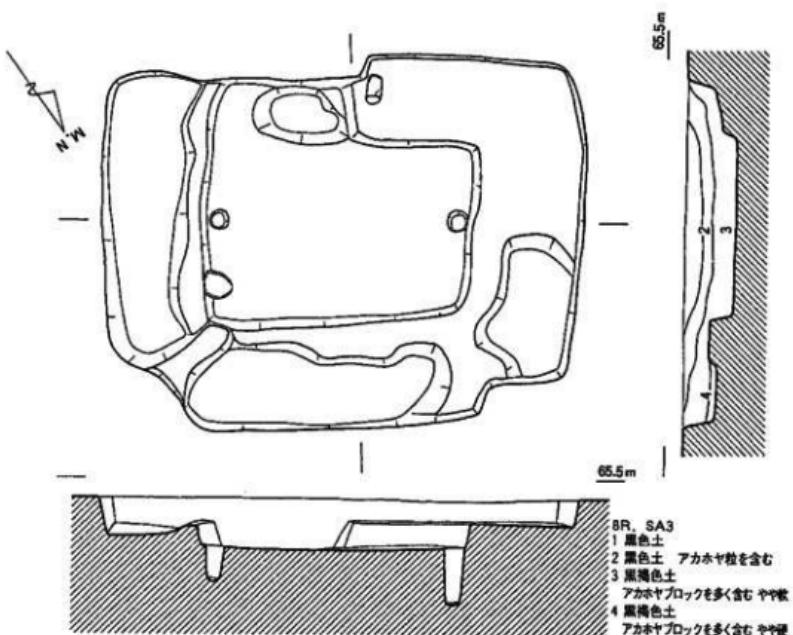
第58図 8号支線道路 SA 1 + 2 分布図 ($S = 1/200$)



第59図 8号支線道路 SA 1 出土遺物実測図 (335・336→1/2, 337~340→1/4, 341→1/6)



第60図 8号支線道路 SA 2 実測図 ($S = 1/60$) 出土遺物実測図 (344→1/2, 他は1/4)



第61図 8号支線道路 SA 3 実測図 (S=1/60) 出土遺物実測図 (1/6)

344は摩製石鐵の未製品である。両面に摩痕が見られるものの、刃部は未処理である。綠泥片岩製。345は頁岩製の砥石である。擦痕が顯著である。

S A 3は、S A 1、2から約120m離れた位置に検出された。5.1×3.9mの長方形プランで、北東壁がやや外に張り出し、南西壁がやや内側に入り込んでいる。床面中央から南西壁にかけてL字条に約25cm程低くなり、周囲がベッド状となる。主柱穴は2基である。南西壁際に浅い落ち込みが見られ、この位置の壁が内側に入ることから入口と推定される。北東コーナーには、間仕切り状に掘り残された突出壁が見られた。焼土、壁帶溝等は確認されなかった。住居内から土器の出土は見られず、石皿1点(346)のみ出土した。

(8) 9号～12号支線道路

9～11号支線は旧競馬場を東西に横断する。土層の遺存は良好であったが、遺構・遺物は検出されていない。

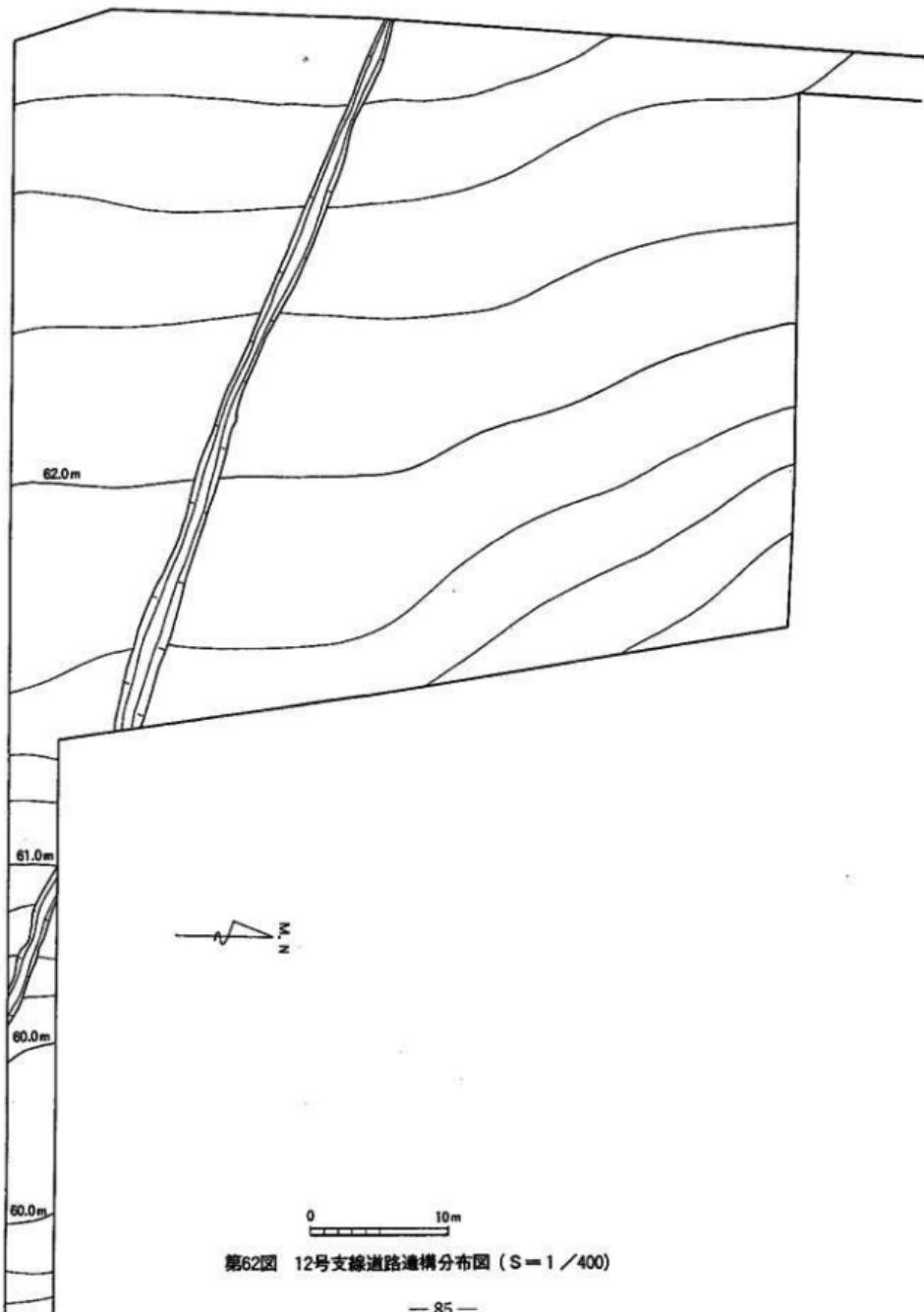
12号支線は幅4m、直角に曲がる全長240mである。路線に抉まれる部分が削平を受けるため拡張して調査を行った。溝状遺構1条が検出された(第62図)。東西に直線的に延びるもので、遺物の出土は見なかった。性格、時期ともに不明である。路線東端には浅い谷地形が見られ、この位置で土壤のサンプリングを行い、火山灰検出同定分析、植物珪酸体分析等の自然科学分析を行った。その結果、霧島御鉢延暦スコリア(788年噴出)が検出され、ネザサ節の生育が旺盛であったことが判明した。

(9) 13号～17号支線道路

13号～15号、17号支線からは顯著な遺構・遺物は検出されていない。

16号支線は幅4m、全長300mである。円墳周溝1基、墓道を伴う横穴墓6基を検出した(第63図)。なお、検出された遺構を保存するため、隣接の市有地との換地が行われた。調査後は遺構に砂・土納を詰め、現況復帰と現状保存に努めた。

円墳周溝は、全周の約5分の1が調査区内に検出されたが、その後、径を確認するためにトレチを設定した。二重の周溝で、第1周溝は径14m、検出幅170cm、深さ60cm、第2周溝は径18m、検出幅60cm、深さ10cmである。第2周溝に重なるように円形の土坑が1基検出された。径100cm、深さ50cmで、馬齒が約1頭分検出された。第1周溝から須恵器が出土している。408、409は無蓋の高坏で、同一個体と思われるが接合点は見られなかった。坏部には鋭い稜線が見られ、口唇部は先細りとなる。脚部は長脚2段透かしで、三方向に長方形の切り込みが見られる。脚端部は内側へ折り返される。410は甕である。小型化した体部は、その高さの上部3分の1の位置に最大径を持ち、肩は張っている。体部に2条の沈線が見られ、その間に径約1.5cmの穿孔が見られる。頸部は基部が細く、ラッパ状に外反する。口縁部は頸部との境に段を有し、大きく開きながらもやや内湾気味に延びる。411は甕の胴部で



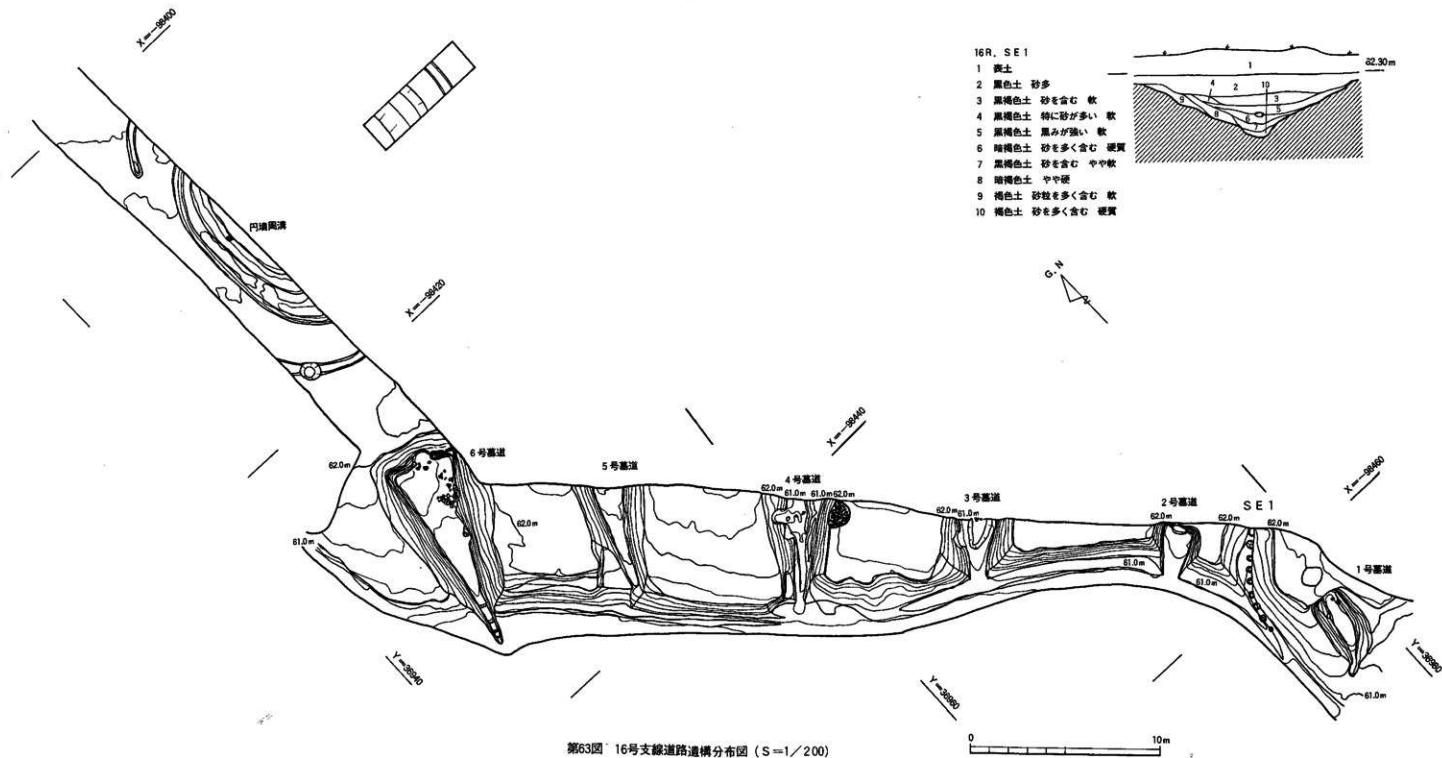
第62図 12号支線道路構造分布図 ($S = 1/400$)

ある。外器面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が見られる。高坏、越の形態上の特徴から、陶邑編年のⅡ型式5段階に位置付けられよう。

横穴墓群は、16号支線の南東端、東西に延びる浅い谷地形に南面する緩斜面上に位置する。約5~7m間隔で6条の墓道が検出された。それぞれの墓道に対して1~2基の主体部が、墓道のつきあたり及び側面に構築されている。

1号墓道（第64図）は、長さ2.3m、検出面での最大幅1.1m、深さ1.1mを計る。墓道入口は南西側から入る下りスロープ状となる。途中、北に方向を変え、つきあたりに主体部（1-1号墓）を持つ（第66、68図）。墓道床面と羨道床面には約10cmの段差がある。羨道は長さ85cm、幅70cm、高さ70cmである。玄室は半入り・両袖・楕円形プランで、奥壁がやや張り出している。天井が陥没しているため天井形態を正確に把握し得ないが、ドーム形であろうと思われる。掘削、整形にはU字鋸先が用いられており、刃先の湾曲した約17cm幅の整形痕が確認された。玄室規模は210cm×150cm、推定での天井の高さは90cmである。玄室内には人頭大の河原石5、6個がまとまって置かれている箇所が左右二か所にあり、左側の礫周辺には土師器、須恵器が8個体見られた。玄室中央には河原石1個と須恵器・平瓶が置かれていた。玄室右手前（羨道正面）には、河原石1個と耳環1個が出土している。人骨等の遺存は見られず、埋葬人数、追葬の有無、頭位等は不明である。347~349は土師器碗で、丁寧なナデ調整の後、丹塗りされている。347、348は口縁部下に稜線を持つ。349は底部外面にヘラ記号が見られる。350、351は蓋坏のセットである。天井部外面および底部外面は、ヘラによる切り離し後粗くナデしており、ヘラ記号が見られる。口径はともに10cm前後と小型化したものである。352、353は須恵器坏身である。たちあがりは低く内傾している。口径はともに10cm以下である。底部はヘラ切り後未調整である。外面に自然釉が厚く付着しているが、ともにヘラ記号が見られる。354は坏身である。たちあがりは見られない。ヘラ切り離し後、底部外面にケズリが施される。355は平瓶である。丸みを持った体部は、その高さの上部3分の1の位置に最大径を持ち、肩は張っている。口頸部の基部は細く、外反しながら延びる。体部下半部に回転ヘラ削りが見られる。356は大甕である。外器面に格子目タタキ、内面に円弧状の当て具痕が残る。玄室内から出土した破片と墓道出土のものが接合している。357は耳環である。須恵器は陶邑編年のⅡ型式6段階に位置づけられるが、354の坏はさらに時期が下る可能性がある。

2号墓道（第65図）は、長さ2.6m、検出面での最大幅2.5m、深さ1.7mを計る。つきあたりに主体部（2-2号墓）を持つ（第67、69図）。羨道前には板閉塞のためと思われる長さ110cm、幅25cm、深さ15cmの溝が見られる。羨門両脇の壁面には、溝の両端から約80cmの立ち上がりで段差が確認された。閉塞板の痕跡と思われる。また、溝に接するように墓道床

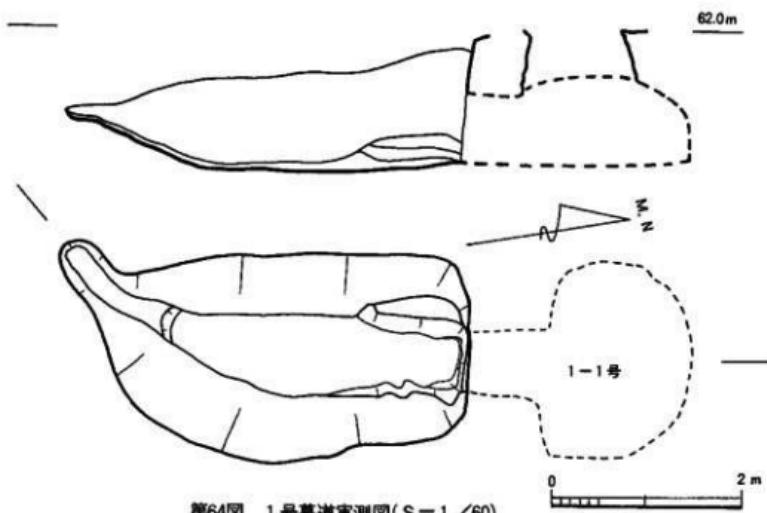


第63図 16号支線道路構造分布図 ($S=1/200$)

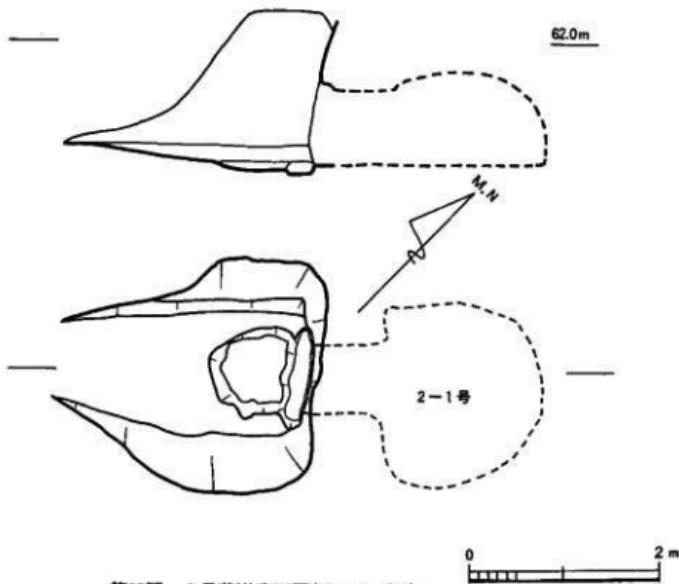
面に略方形の浅い落ち込みが確認された。羨道は長さ80cm、幅75cm、高さ80cmである。玄室は平入り・両袖で、平面プランは奥壁が外に張り出し半円形とも言うべき形状である。天井はドーム形でU字彫先と手斧による掘削、整形痕が残る。玄室規模は195cm×170cm、天井の高さは98cmである。玄室内には10個の人頭大の河原石が配され、その配置は前後に2カ所の屍床を意図している。人骨は遺存状態が良好でなかったものの、下顎骨、歯、大腿骨等が見られ、少なくとも2体以上（成人と幼児）の埋葬が行われたと思われる。羨道より入って左側が頭位となる。遺物は、玄室内から土師器碗、須恵器蓋坏、鉄鎌、刀子が、墓道羨門横から須恵器提瓶が出土している。358は土師器碗である。口縁部内面に稜を持つ。器面は若干の風化が見られるが、丁寧なナデ、一部ミガキ調整後に丹塗が施されている。359は坏蓋で、天井部はヘラ切り後に粗い削りが見られる。天井部内面には朱が付着している。360の坏身は著しく器高が低く、たちあがりも短く内傾し、受け部端とほぼ同じ高さである。底部はヘラ切り後に回転ケズリで整えられている。361は坏身で、全体に梢円形に歪みが見られる。そのため、実際のたちあがり部は図示したよりも内傾していたものと思われる。底部はヘラ切り後ナデ調整されている。362の提瓶は、墓道羨門横に出土した。比較的厚みのある体部は、マキアゲ・ミズビキにより成形され、中心部を円盤状の粘土で蓋をしている。体部背面には回転ヘラケズリが観察される。363、364は方頭の鉄鎌である。363の刃部は若干湾曲する。364の茎部に矢柄の一部が残存する。関部は鏃のため詳細な観察が行えないが、斜間であろうと思われる。現状での重量はそれぞれ23.3g、24.5gである。365、366は刀子である。柄の木質が残存している。

3号墓道（第69～71図）は約3m検出されたが、さらに北側調査区外に延びており全容は明らかにできなかった。検出面での最大幅3.8m、深さ2mを計る。左側壁に主体部（3-1号墓）が検出されたが、墓道つきあたりにさらにもう1基の主体部の存在が予想され、複数の主体部を持つ墓道である。3-1号墓は墓道床面から約50cm上がった位置に掘削されている。羨道に流れ込んだ土を除去し、玄室の確認を行った結果、人骨の遺存は見られなかつた。遺構の保護と今後の整備活用のため、玄室内に立入っての精査、実測、遺物の取り上げ等は行わず、土納にて羨道を塞ぎ、墓道部のみの調査を行った。なお、玄室内確認時に得た3-1号墓の概略は、羨道の長さ30cm、幅50cm、高さ45cm、玄室は平入り・両袖・梢円形プランでドーム天井であった。玄室規模は120cm×60cm、天井の高さ35cmと小型のものである。遺物は須恵器の坏身が1点見られた。

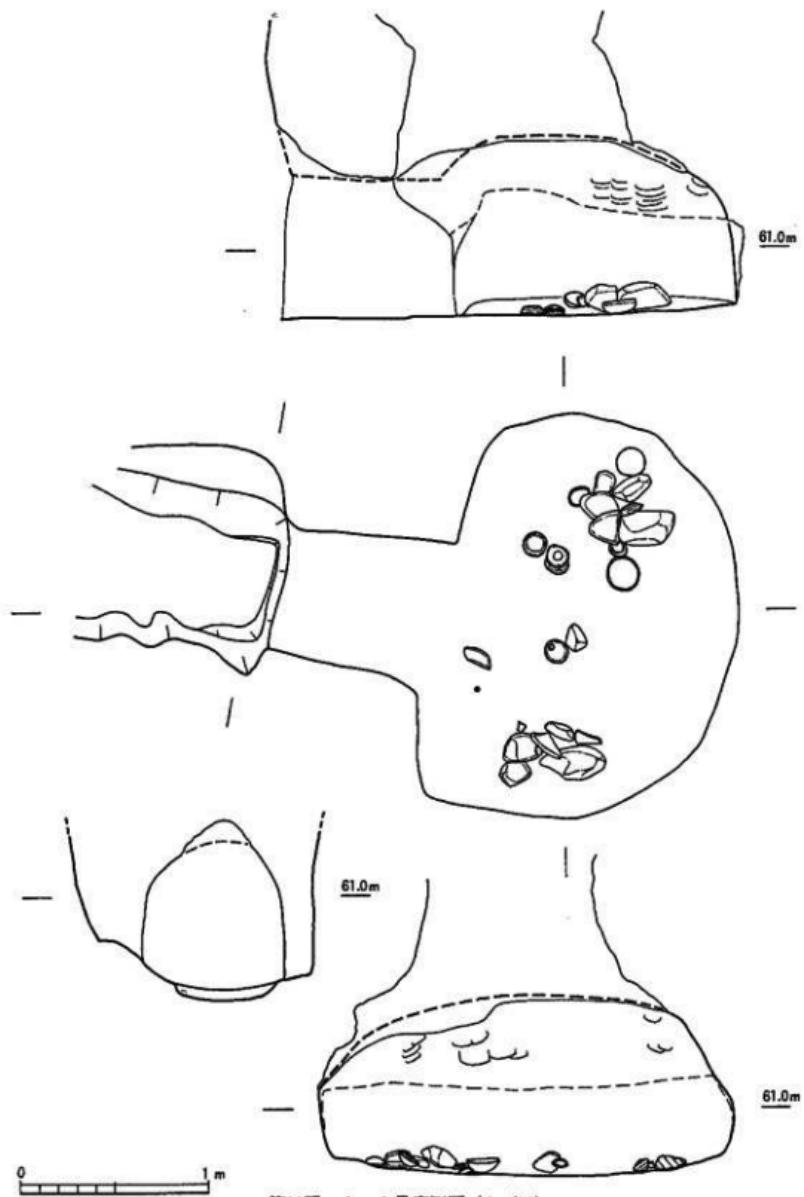
3号墓道床面は緩やかな下りスロープで、約1.6mの位置で20cm程段落ちしている。調査区北壁で墓道の横断面上土層図を作成した。墓道床面から約3分の1の高さまでは、一括の埋戻しと思われる混上層が見られた。中位から上位にかけては自然埋没と思われるが、埋土中



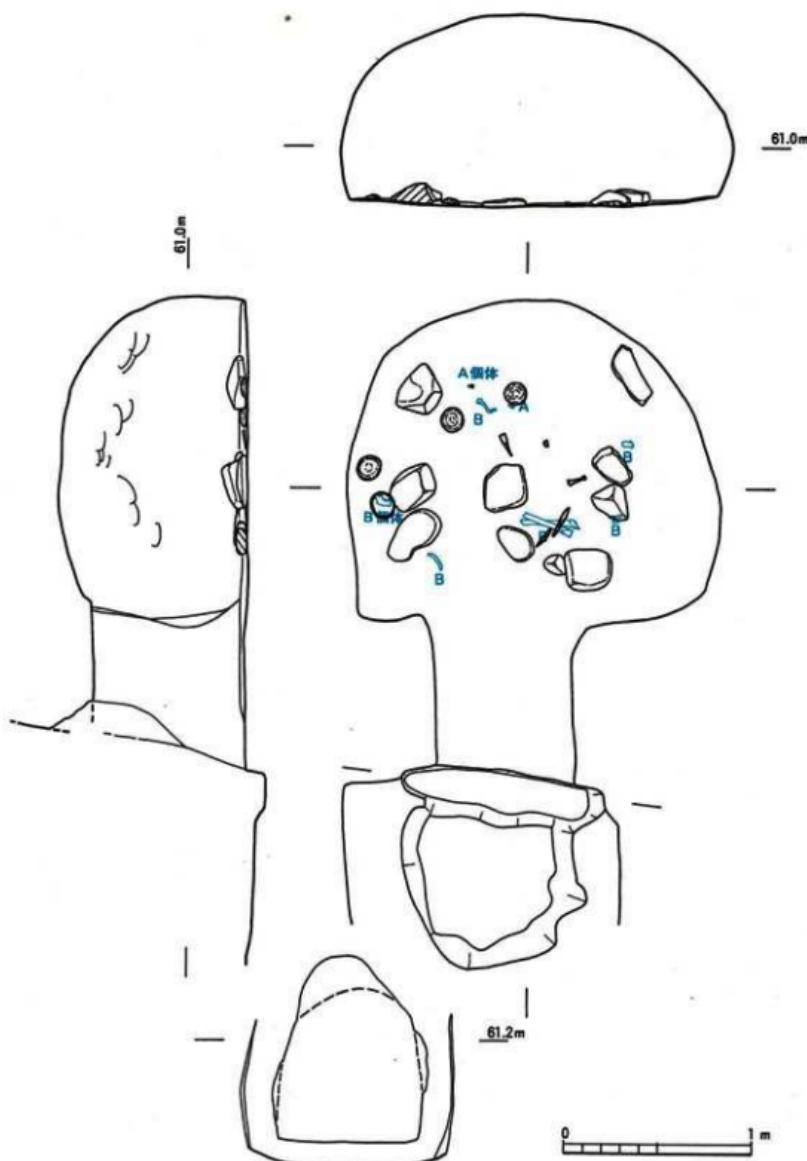
第64図 1号墓道実測図 ($S = 1/60$)



第65図 2号墓道実測図 ($S = 1/60$)



第66図 1-1号実測図 (1/30)



第67図 2-1号実測図 ($S = 1/30$)

に須恵器大甕片や坏蓋、耳環等の遺物の混入が見られ、また、焼土や炭化物も見られた。367は坏蓋である。天井部上面はヘラ切り後軽くナデ調整を行っている。368は大甕で、口縁部外面に突帯1条を持つ。胴部外面には格子目タタキの後横ナデ、内面には円弧の当て具痕が残る。369～374は須恵器大甕片である。372は1号墓道、4号墓道出土の破片と接合している。

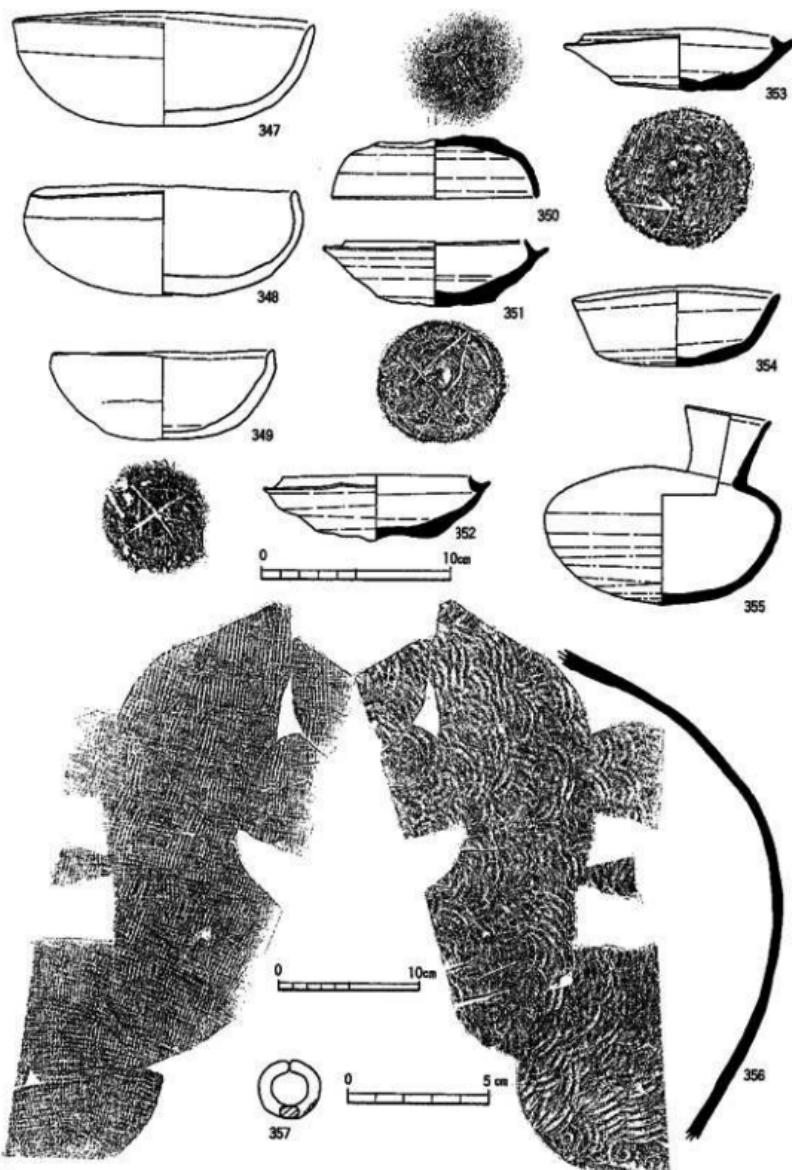
4号墓道（第72・73・75図）は約5.4m検出されたが、3号墓道と同じくさらに北側調査区外に延びており全容は明らかにできなかった。検出面での最大幅4m、深さ1.8mを計る。左側壁に主体部（4-1号墓）が検出されたが、墓道つきあたりにさらにもう1基の主体部の存在が予想され、複数の主体部を持つ墓道である。4-1号墓は、3-1号墓に同じく玄室内の確認を行ったが、人骨の遺存は見られず、遺構の保護と今後の整備活用のため、玄室内に立入っての精査、実測、遺物の取り上げ等は行わず、土納にて羨道を塞ぎ、墓道部のみの調査を行った。なお、玄室内確認時に得た4-1号墓の概略は、羨道の長さ110cm、幅80cm、高さ65cm、玄室は平入り・両袖・梢円形プランでドーム天井であった。玄室規模は260cm×160cm、天井の高さ70cmで、遺物は見られなかった。

4号墓道は約3分の1の高さまでを一括で埋戻されており、埋土中位から上位にかけての自然埋没土中から多くの遺物が出土した。378～384は土師器碗である。内湾しながら立ち上がった口縁部がやや内傾するもの（378、379）、外反するもの（380）、直口のもの（381～384）が見られ、多くは口縁部下に稜を持つ。385は土師器壺である。外器面は丁寧なナデ、内面には指頭痕が明瞭に残る。386～388は須恵器の坏身である。いずれもたちあがりが短く内傾する。386の底部はヘラ切り後未調整で、ヘラ記号が見られる。389、390は須恵器壺である。胴部最大径が約3分の1の高さに見られ強く肩が張る。沈線により区画された範囲には櫛状工具による斜位の刺突文が施される。391は須恵器壺の蓋である。天井部上面はヘラ切り後、粗いナデが行われる。392は須恵器壺の底部である。393は須恵器甕である。内外面ともにタタキの後縦方向にナデ調整を行っている。394は須恵器大甕である。格子目タタキの後横方向のカキ目が見られる。395は耳環である。396は刀子である。刀身に木質が残る。

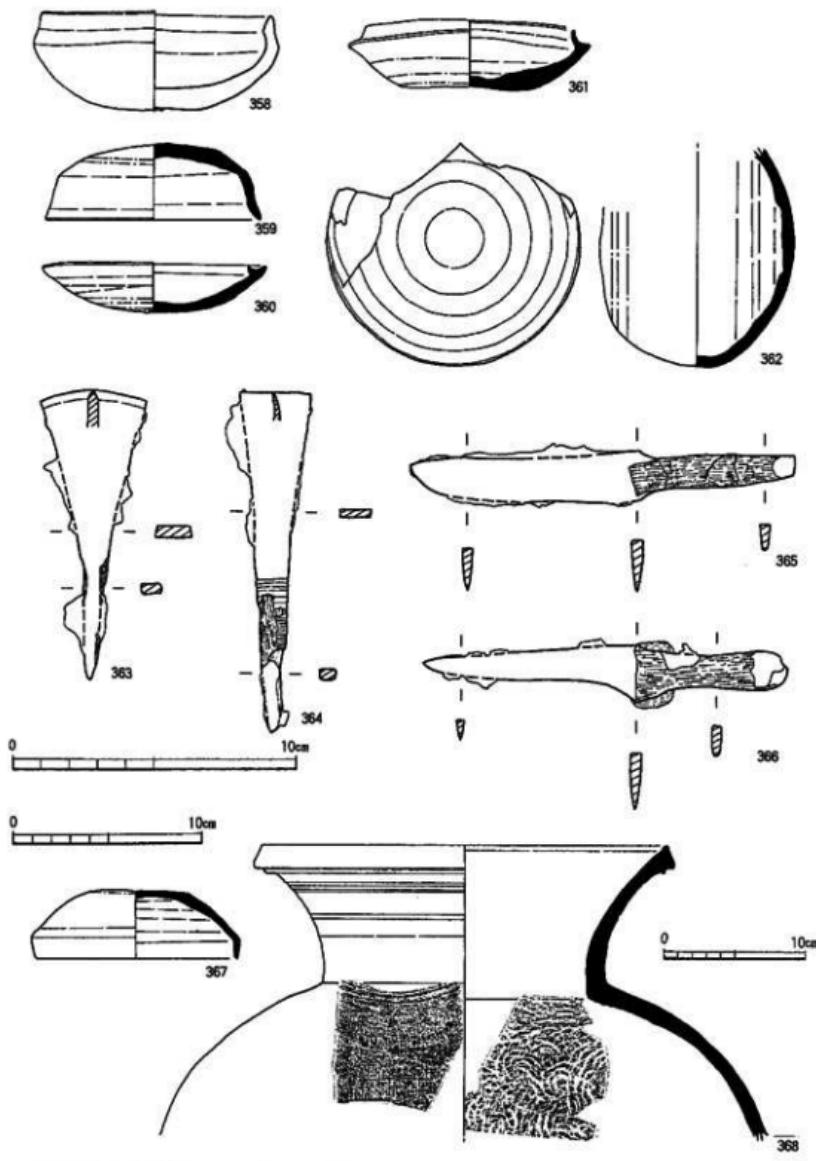
4号墓道検出面横に、縄文時代早期の集石遺構1基が見られた。

5号墓道（第74、75図）は約6m検出されたが、3号、4号墓道と同じくさらに北側調査区外に延びており全容は明らかにできなかった。検出面での最大幅3.7m、深さ1.5mを計る。主体部は検出されなかったが、墓道つきあたりに主体部が存在するものと思われる。墓道入り口床面より完形の須恵器大甕（397）が出土した。埋土中からは不明銅器1点（398）が出土したのみである。

6号墓道（第76～78図）は16号支線のコーナーにあたり、ほぼ全容を調査することができた。検出された6基の墓道の中で最大規模のものである。全長11.6m、最大幅5.5m（下端での

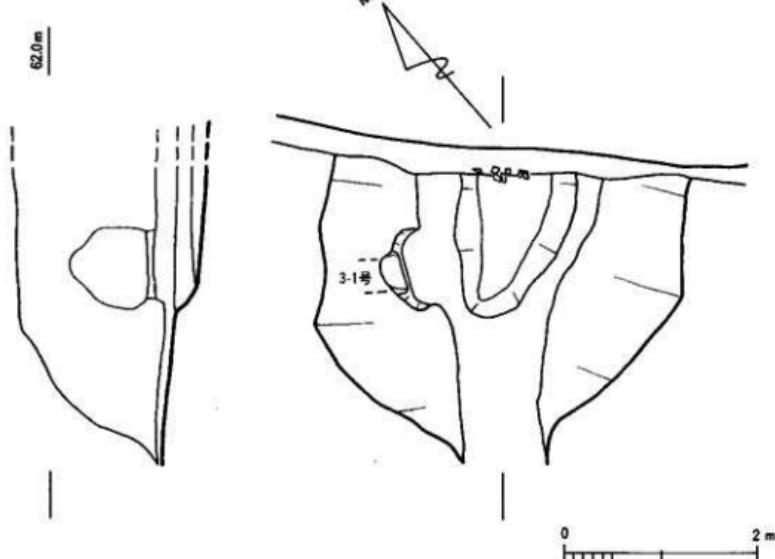
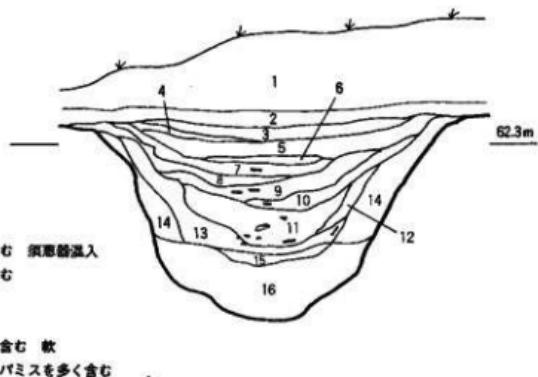


第68圖 1号墓道 1-1号出土遺物実測図 (347~355 → 1/3, 356 → 1/4, 357 → 1/2)

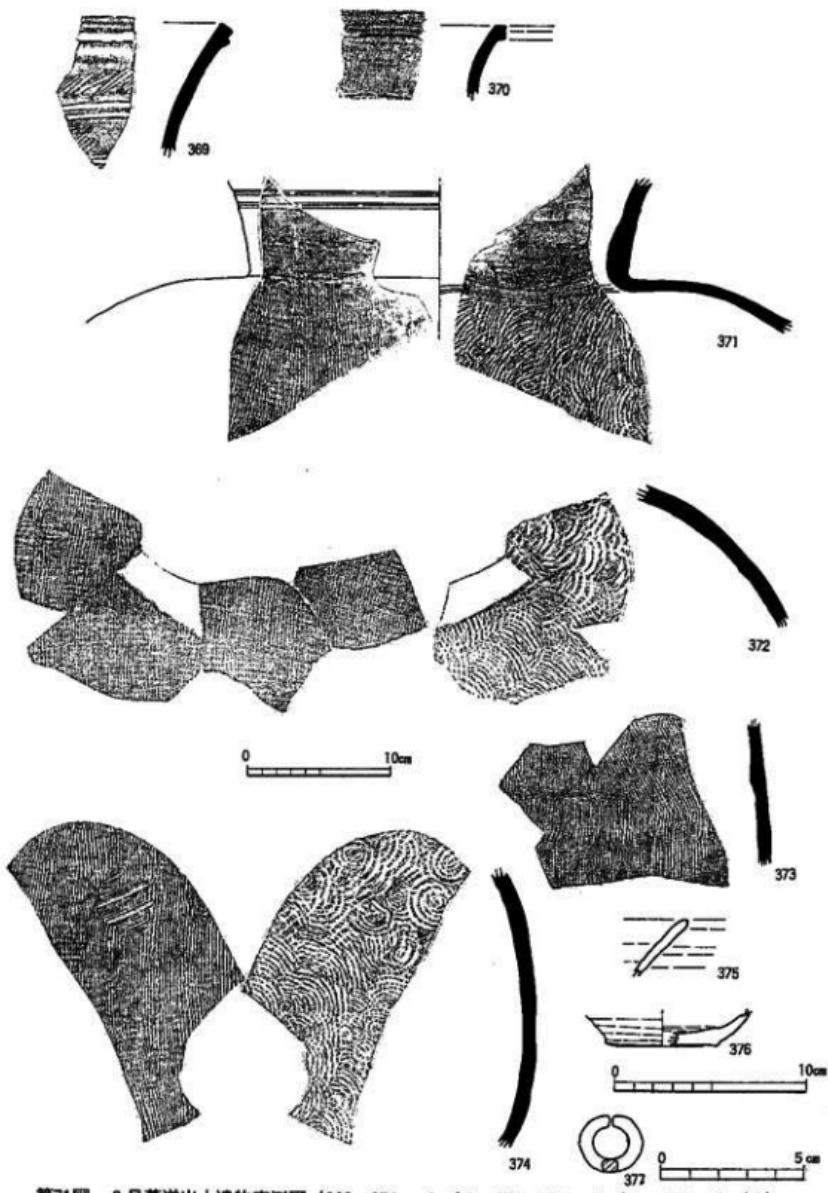


第69図 2号墓道 2-1号 3号墓道出土遺物実測図
 (358~361, 367 → 1/3, 362・368 → 1/4, 363~366 → 1/2)

- 3号基道
 1 肥土
 2 暗褐色土 砂粒多 アカホヤ粒少量含む
 3 暗褐色土 砂粒少 黒み強い
 4 暗褐色土 砂粒多 やや硬
 5 棕色土 砂粒を非常に多く含む やや硬
 6 暗褐色砂質土 硬
 7 黑褐色土 砂粒、炭化物粒を多く含む 須恵器混入



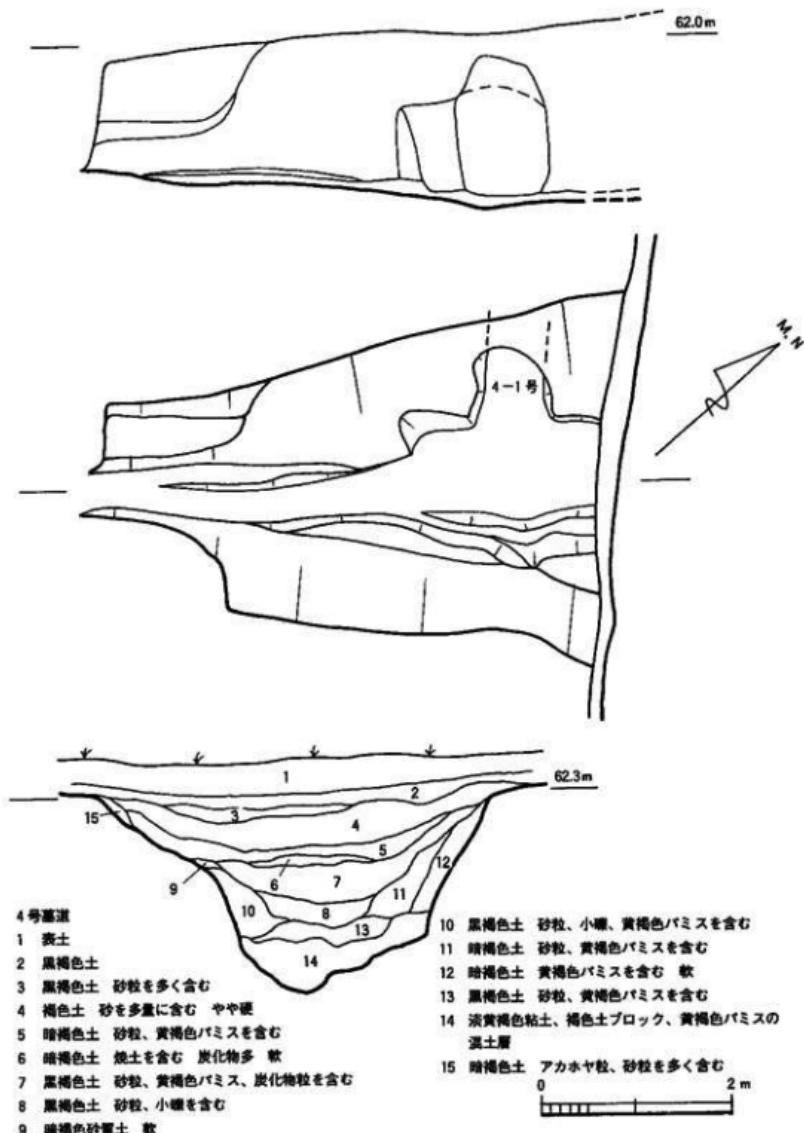
第70図 3号基道実測図 (S = 1 / 60)



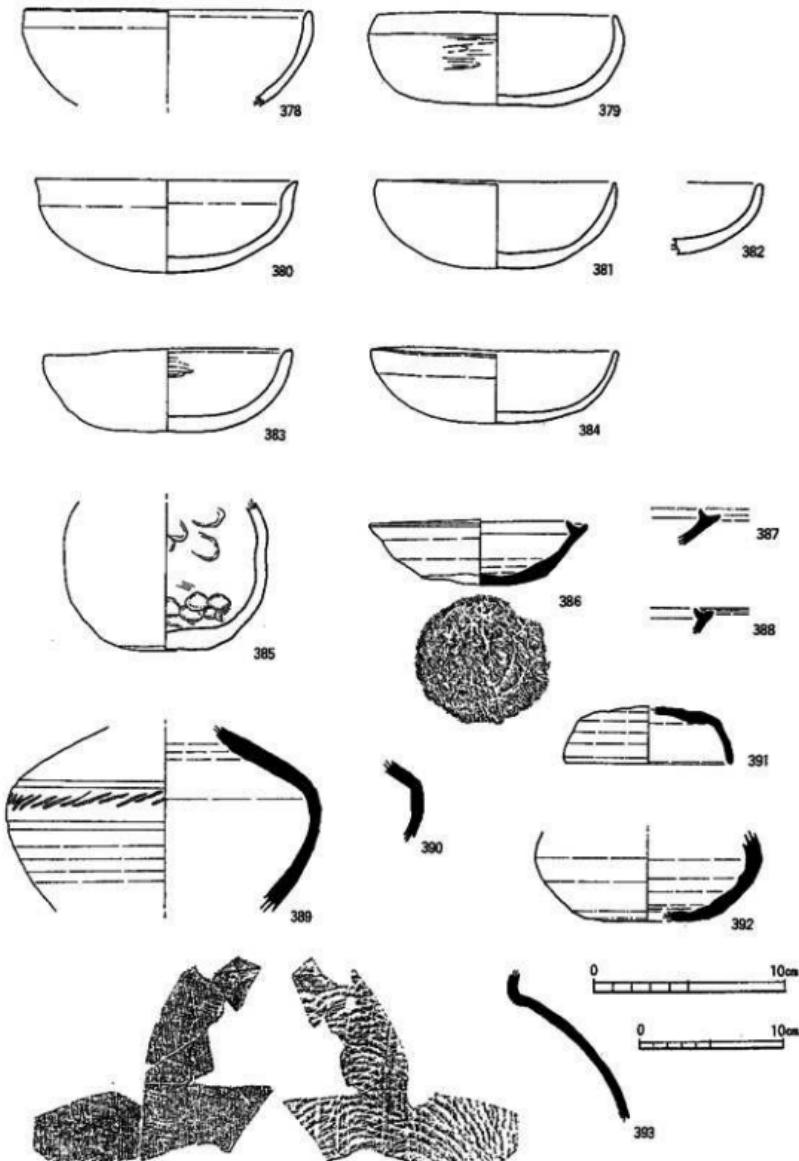
第71図 3号墓道出土遺物実測図 (369~374 → 1/4, 375・376 → 1/3, 377 → 1/2)

最大幅3.2m)、検出面からの深さ2.3mを計る。墓道入口は、階段上に5段の段落ちを持つ。床面は緩やかな下りスロープとなり、つきあたりの奥壁に1基(6-1号墓)、右側壁に1基(6-2号墓)、計2基の主体部を持つ。それぞれの主体部羨道前には、約10cm程度の浅い方形の掘り窪めが見られ、6-2号墓のものは約1.5m離れた墓道の左側壁にまで達しており、そのコーナー部には約50cmの高さにまで墓道壁面を抉り込んだ痕跡が残っている。閉塞は板を羨門に立てかけたものと思われ、板を固定するためと思われる河原石がそれぞれの羨門前に見られた。羨道に流れ込んだ土を除去し玄室内を観察した結果、6-2号墓に人骨の遺存が見られたため、内部の調査を行うこととし、人骨の見られなかった6-1号墓は、遺構の保護と今後の整備活用のため、玄室内に立入っての精査、実測、遺物の取り上げ等は行わないこととした。なお、玄室内確認時に得た6-1号墓の概略は、羨道の長さ130cm、幅120cm、高さ80cm、玄室は平入り・両袖・長方形(梢円形か?)プランでドーム天井であった。玄室規模は320cm×200cm、天井の高さ100cmで、遺物は須恵器壺・平瓶、土師器碗等が見られ、また、何らかの鉄製品の存在も確認された。

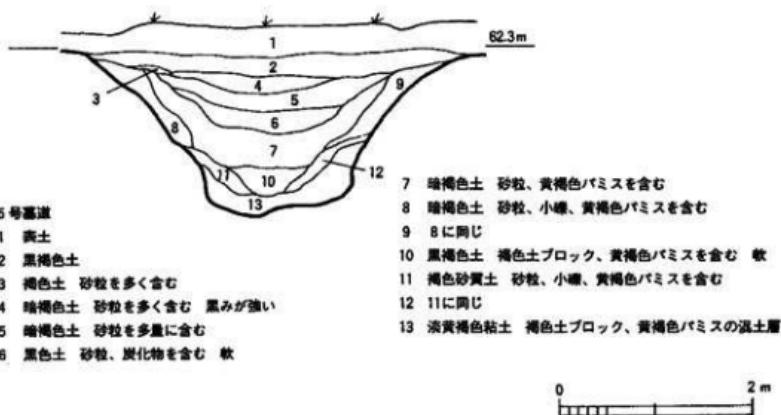
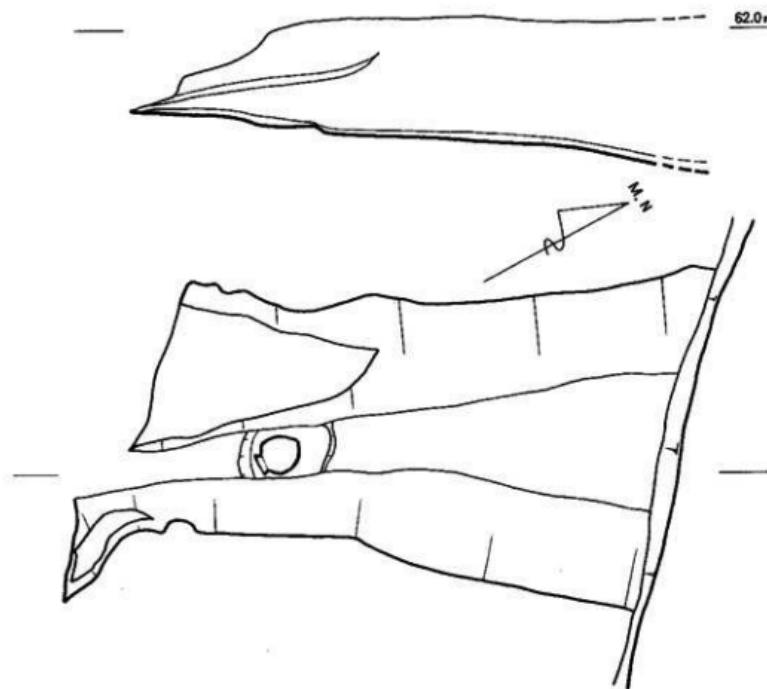
6-2号墓は羨道の長さ160cm、幅110cm、高さ65cm、玄室は平入り・両袖・梢円形プランでドーム天井であった。玄室規模は200cm×140cm、天井の高さ90cmである。掘削・整形はU字鋤先と手斧が使用され、天井や壁面に痕跡が確認された。床面は一面に拳大の河原石が敷かれる砾床で、羨道部から約10cmほど高くなっている。人骨は右に頭位を置き、1体分が完全な形で検出された。人類学的検討により、老年の女性であることが判明した。頭骸骨が右に横転しており、脊椎もそれに引っ張られるようにやや右に湾曲している。頭骸骨の横には須恵器の壺身2個を重ねて伏せたものが2セット見られた。脊椎を真っ直ぐに延ばし、頭骸骨を回転させ元に戻すと、2セットの須恵器の間に収まる。これらの須恵器は頭を固定する意図で配されたもので、天井の剥落等の衝撃で頭骸骨が動いたものであろう。頭骸骨を元の位置に戻すと、左耳の位置に耳環が見られた。また体側左脇の位置には、革製の鞘に収められた刀子が切っ先を下方外側にむけて添えられていた。人骨は実測した後取り上げて鹿児島大学に人類学的調査を依頼したが、取り上げた頭骸骨の中から耳環1個が発見された。すなわち、6-2号墓の被葬者は両耳に耳環を付け、体側に刀子を添えられた状態で埋葬されたことになる。その他の遺物としては、主軸からやや左寄りの奥壁際の須恵器蓋壺のセットが見られた。399、400は奥壁際に置かれていた蓋壺のセットである。ともにヘラ切り後未調整である。401-404は枕として使用された壺身である。401はヘラ切り後未調整、402はヘラ切り後丁寧な回転ナデが施される。403、404はヘラ切り後軽くナデが行われている。403にはヘラ記号が見られる。いずれも口径が10cm前後と小型のもので、たちあがりも短く内傾する。陶邑編年のII型式6段階に位置づけられよう。405の刀子には刀身を包むように革膜が付着している。406と407は耳環である。



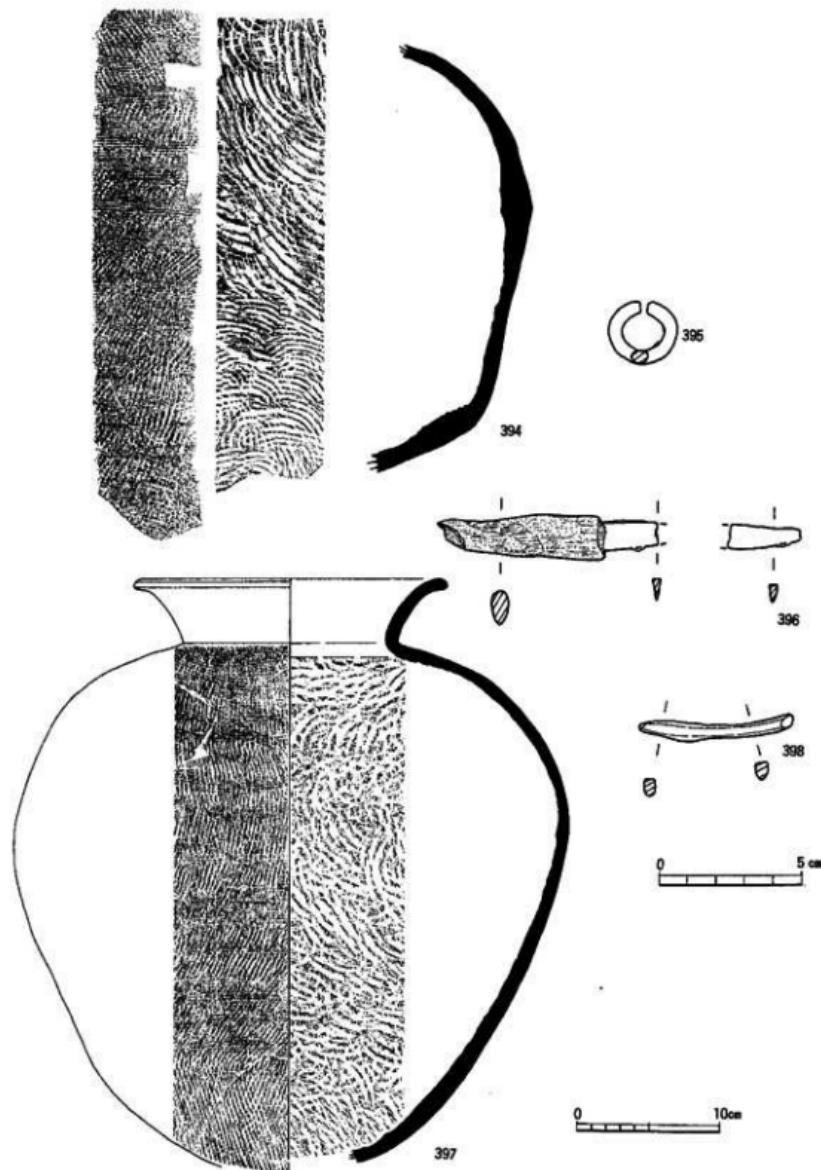
第72図 4号墓道実測図 (S = 1/60)



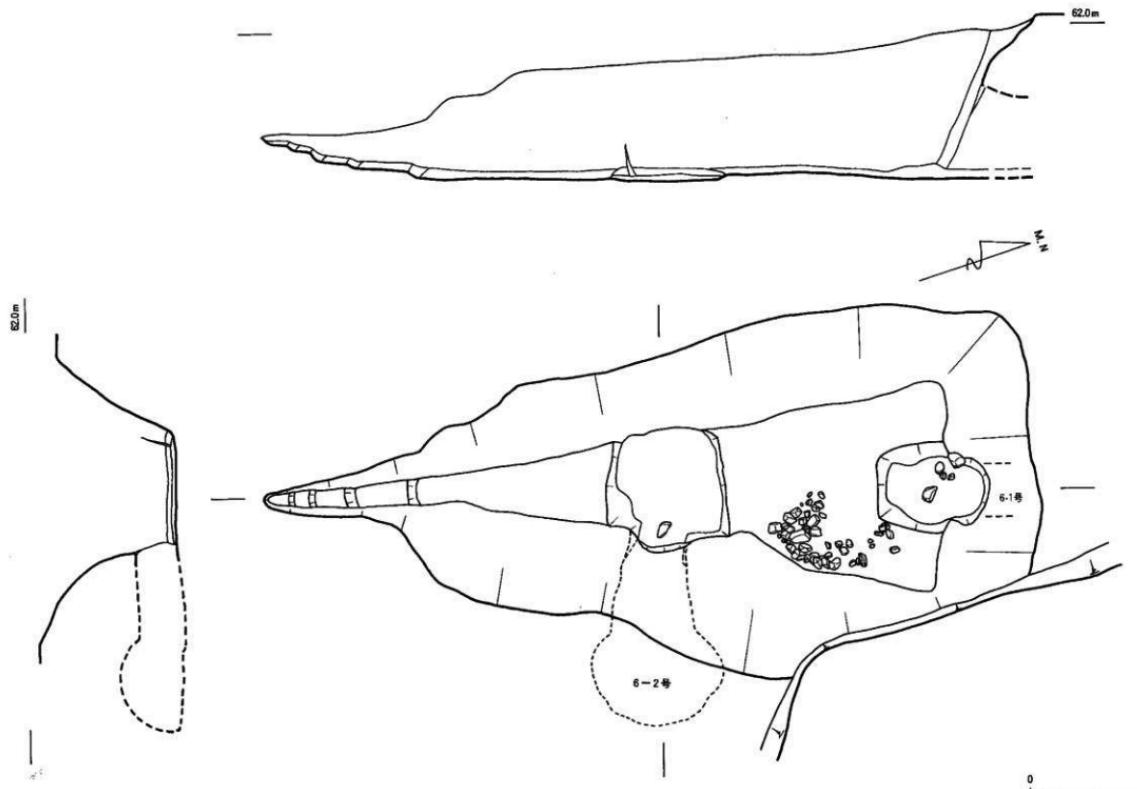
第73図 4号墓道 出土遺物実測図 (378~392→1/3, 393→1/4)



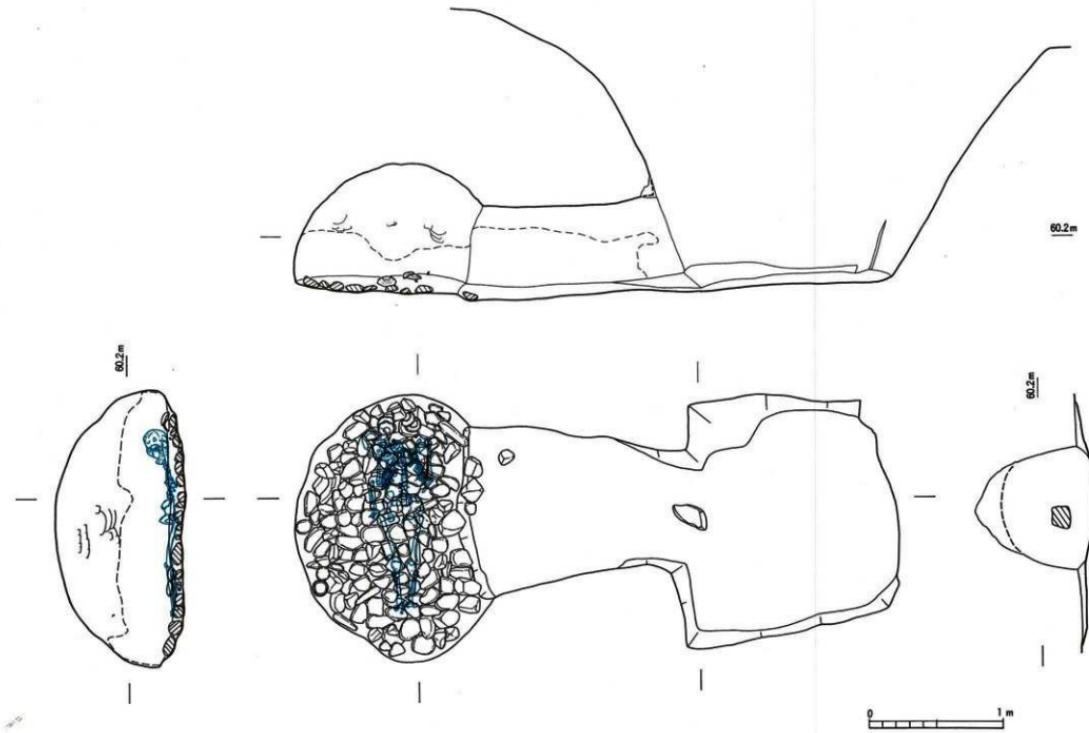
第74図 5号基道実測図 ($S = 1/60$)



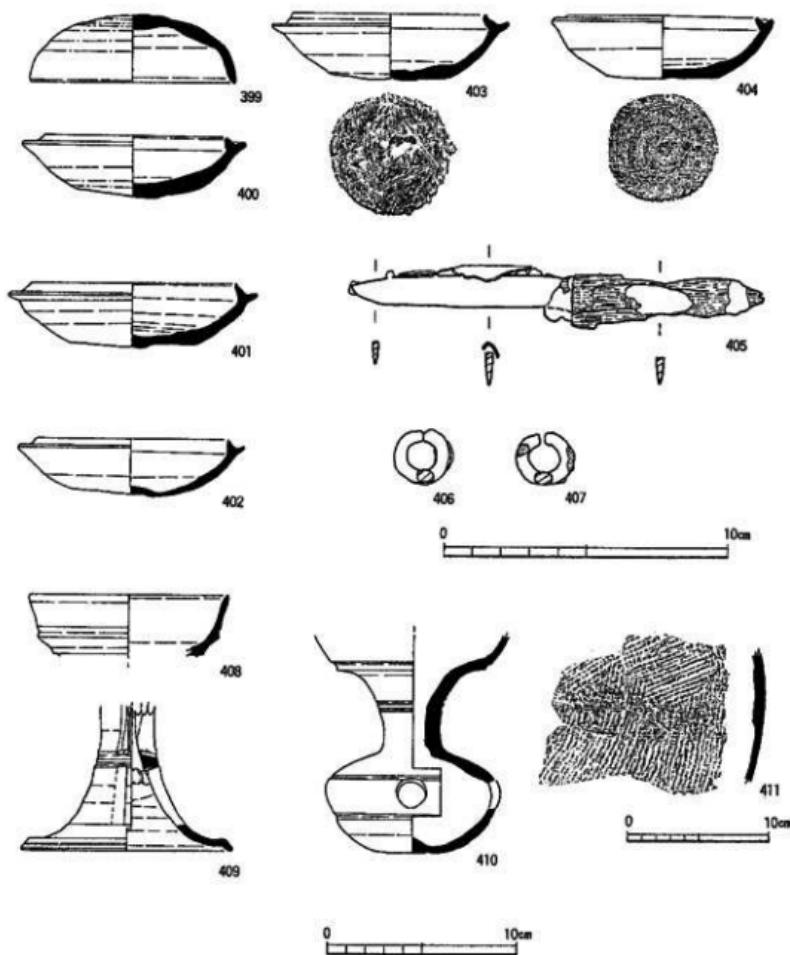
第75圖 4號墓道・5號墓道出土遺物實測圖 (394・397→1/4, 395・396・398→1/2)



第76図 6号墓道実測図 ($S = 1/60$)



第77圖 6-2号実測図 ($S = 1/30$)



第78図 6-2号、円墳周溝出土遺物実測図
(399~404・408~410→1/3, 405~407→1/2, 411→1/4)

(10) F区（第79図）

西都原資料館の東側、溜池になることから調査対象になった地域である。調査面積約2,000m²、溝状遺構3条及びピットが検出された。

S E 1は、調査地の東側で、南から北へと延びており、現存長14m・幅0.8~1.6m・深さ0.12~0.25mを計る。

S E 2は、調査地の中央部、南から北へと延びているが、途中で寸断している。現存長48m・幅0.2~0.4m・深さ0.04~0.15mを計る。

S E 3もほぼ中央部、西南西から北北東に延びているもので、S E 2と中央部でクロスしている。現存長18.5m・幅0.3~0.7m・深さ0.04~0.11mを計る。

いずれも、遺物は出土しておらず、不明な点が多いが、検出状況などから後世のものと推定される。

ピットは、調査地の北側に集中して検出された。径0.15~0.3m・深さ0.27~0.5mを計る。遺物は出土していない。

(11) G区（第79図）

2号支線道路西端に接した三角形の地域で、240m²が削平されることにより調査対象となった。遺構検出面はアカホヤ火山灰層で、11個のピットが確認されている。径0.25~0.3m・深さ0.16~0.40mを計る。

遺物は、出土していない。

(12) H区（第79図）

G区の南東50mで、調査面積は1,760m²である。検出面はアカホヤ火山灰層であるが、ところどころ削平されている。南側より蛇行した溝状遺構が1条検出された。S E 1は、現存長8.4m・幅0.7m前後・深さ0.17~0.28mを計る。遺物は出土していない。

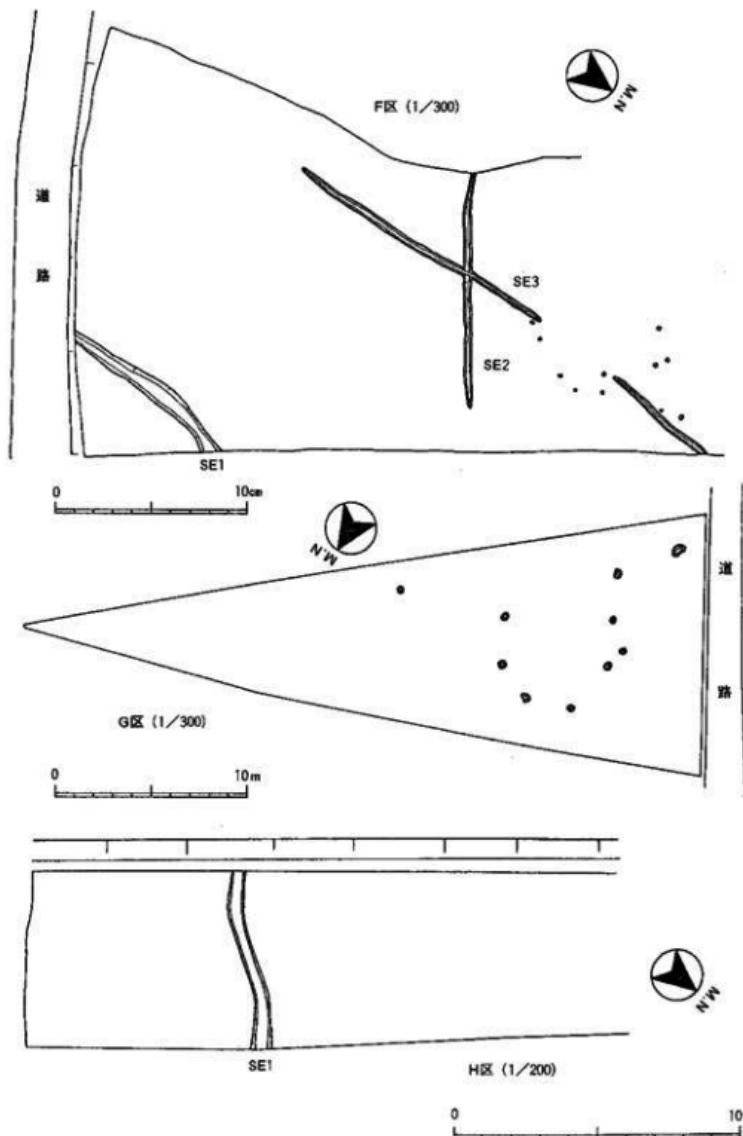
(13) I区～K区（第4図）

栗の木が抜根されることにより遺構に影響を及ぼすと考えられることから、調査対象となった地域で、総面積5,300m²を要する。

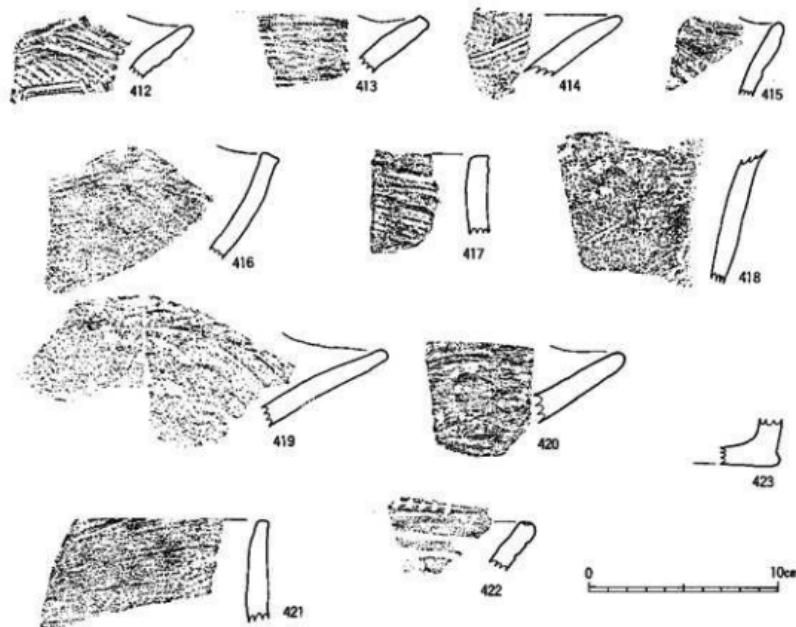
いずれの区も遺構は検出されなかったが、J区からは縄文時代後期の包含層が確認され、190点ほどの縄文土器が出土した。無文のものが多いが、貝殻腹縁による連続刺突と沈線を施したもの(412)や凹線文(422)が施されたもの、また、波状口縁のもの(413・416・419)など、縄文時代後期後半のものと思われる。調整は貝殻腹縁によるものとナデによるものに分けられる。

(14) 旧競馬場跡（第4図）

御陵墓と西都原台地東側古墳群に挟まれた、広大な地域に巡る競馬コースの一部分を畠地



第79図 F～H区通構分布図 ($S=1/200, 1/300$)



第80図 I区出土遺物実測図 (S=1/3)

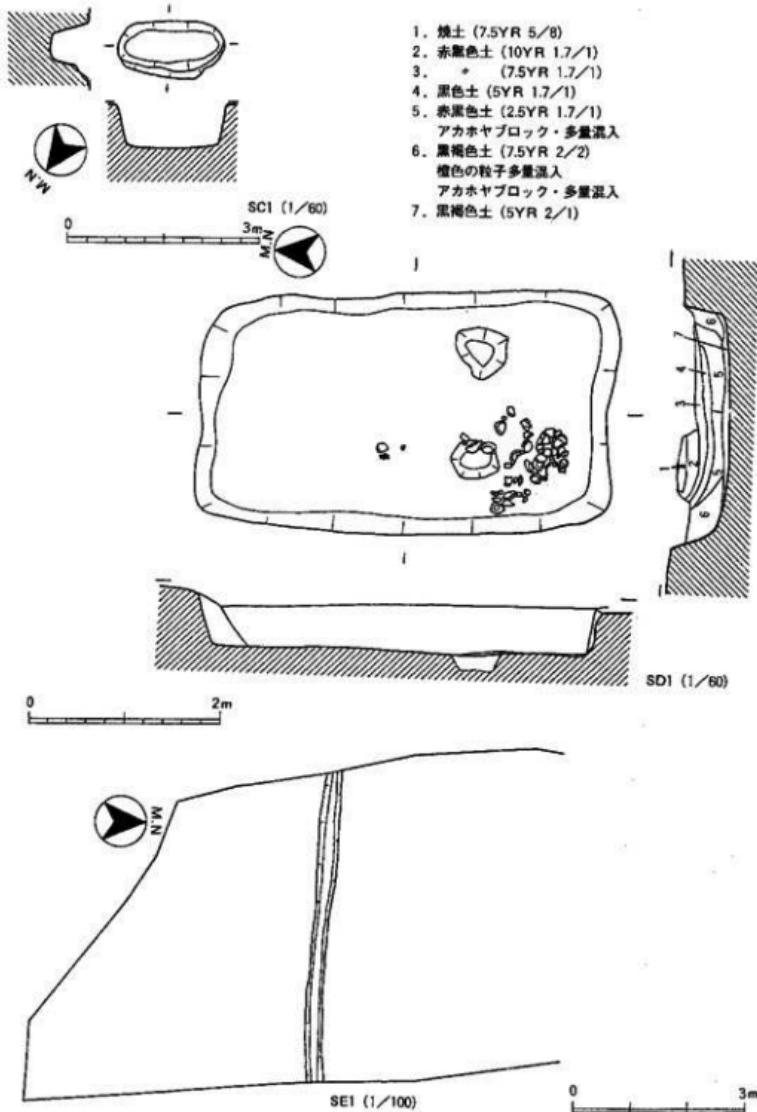
にするため削平されることから、調査の対象となったもので、10,350m²にも及んだ。しかし、予想以上に遺構は検出されず、わずかに土壙墓1基と土坑1基及び溝状遺構2条等が検出されたのみである。

S D 1は、競馬場跡の東中央部から検出された隅丸長方形プランのもので、長軸2.85m・短軸1.71mを計る。底面は平坦で、検出面からの深さ0.39mを計る。底面南よりに浅めのピットが対で確認されるが、不整形である。径0.35m前後・深さ0.14mを計る。(第81図)

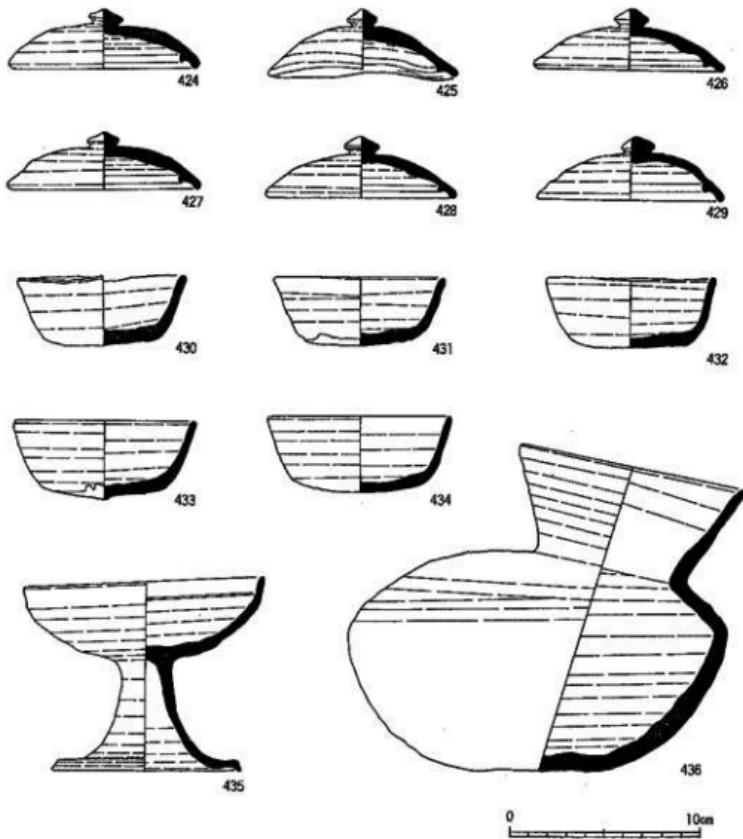
遺物は、すべて須恵器で、坏蓋(424~429)・坏身(430~434)・高坏(435)・平瓶(436)が南西部部分に集中して総計13点出土した。(第82図)

坏蓋は、いずれも天井部には摘み及び口縁内部には返りを有するもので、口唇部は丸く仕上げている。法量も一定しており、口径10cm前後・器高3.0~3.3cmを計る。

坏身は、ヘラ切り底で、平底に受部が直線的に立ち上がるタイプのものである。口唇部は丸く仕上げられている。法量は口径8.8~9.5cm・器高3.5~4.4cm・底径5.0~6.0cmを計る。



第81図 旧競馬場跡 SCI・SD1・SE1実測図 ($S=1/60, 1/100$)



第82図 旧競馬場跡 SD1出土遺物実測図 (S=1/3)

高杯は、脚がラッパ状にのび、裾部には稜を有するもので、杯部は内湾しながら口縁部に至り、口縁部では若干外反している。口唇部は丸く仕上げられ、口径12.4cm・器高9.9cm・底径9.0cmを計る。

平瓶は、口径11.7cm・器高17.1cm・底径6.5cmを計るもので、胴上部に自然釉が付着している。時期は出土土器から7C後半に比定される。

S E 1は、土壤墓の北115m、東西に延びたもので、現存長11.0m・幅0.5~0.7m・深さ0.23m前後を計る。(第81図)

遺物は出土しておらず時期は不明である。

第3節 平成7年度の調査

(1) 27号支線道路

本年度は、平成5年度実施した27号支線道路の西側にあたる67.2m²の調査を実施した。調査は拡幅される部分のみであったが、窓穴式住居跡7軒及びピット群が確認された。(第83図)

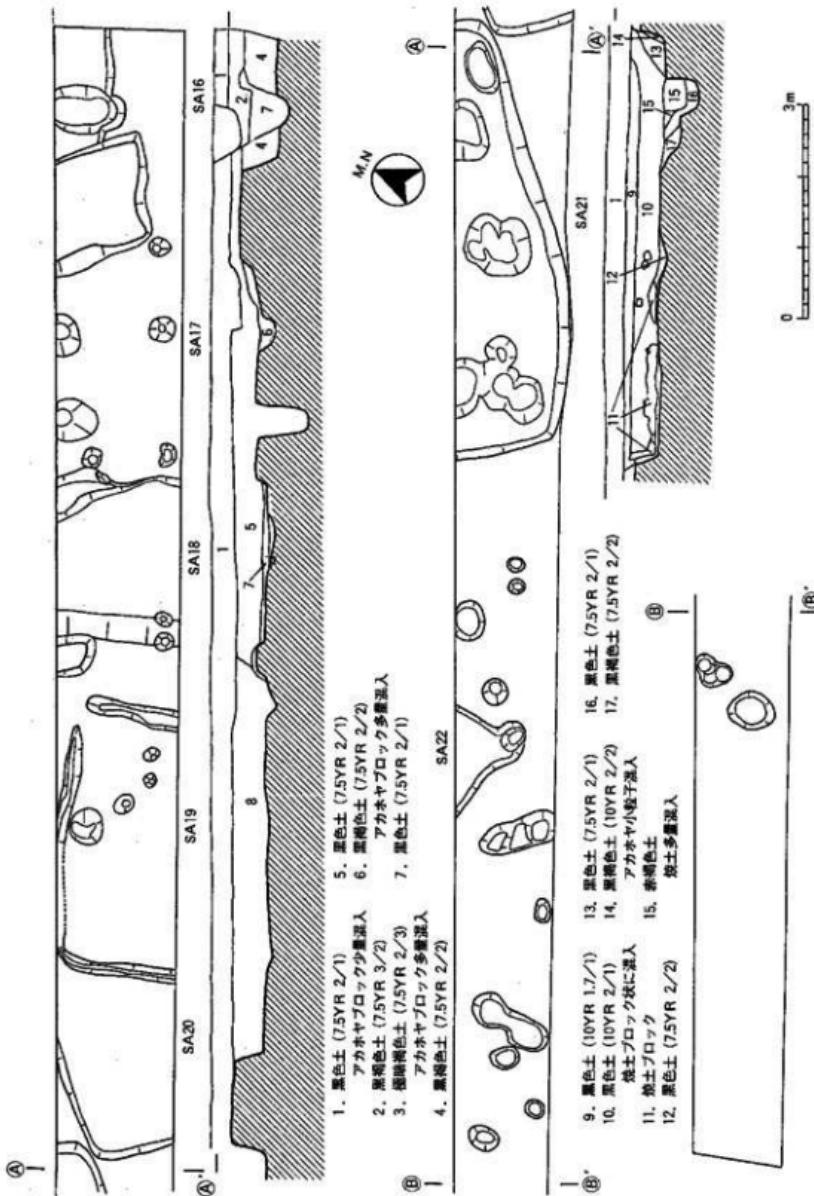
S A16は、調査地の東端より検出されたが、擾乱を受けており、規模的なことは不明である。検出面からの深さ0.44mを計る。遺物は、壺・壺・高坏が出土しているが、量的にも少なく、小片である。437はわずかに外反した壺の口縁部、438も外反した壺の口縁部、439は高坏の脚部である。

S A17~20はS A16の西側、1.6×40mの範囲内に4軒の住居跡が重複している。いずれも、狭範囲のため、一部分しか検出されておらず、規模的なことは不明であるが、唯一、19号住居跡のみ確認できる。19号住居跡は、壁帶溝を有するもので、一辺3.9m・壁帶溝幅0.15~0.20m・深さ0.08~0.12mを計る。検出面からの深さ17号が0.24m、18号が0.4m、19号・20号が0.44mを計る。

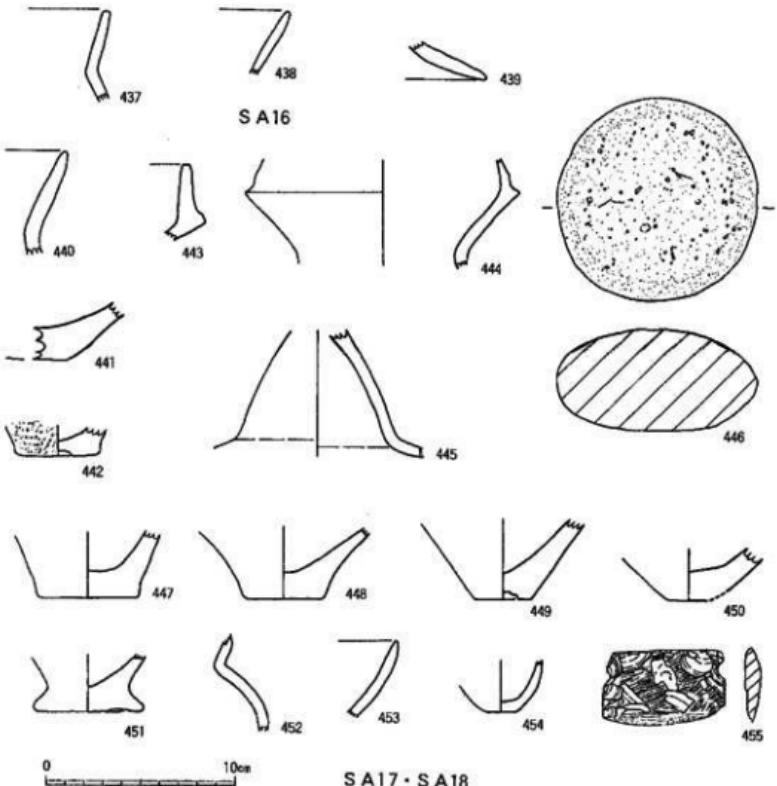
遺物は、各SAから出土しているが、S A17とS A18は切り合い関係がはっきりつかめず、S A17・18として取り扱う。440はわずかに外反した壺の口縁部、441・442・447~451は壺の底部で、平底のもの(441・447・448)、平底で上げ底のもの(442・449)、丸底気味のもの(450)、張り出しているもの(451)などが含まれている。443は口縁上部が直口した二重口縁壺、444は「く」字状を呈した複合口縁壺の口縁部である。445は「ハ」字状の高坏の脚部、452・453はいずれも小型丸底壺の破片である。454は平底のミニチュア鉢である。446はすり石、447は長軸側挿入の長方形石包丁である。

S A19からは、壺・壺・高坏・鉢が出土している。456は直口気味、457・458はわずかに外反した壺の口縁部で、外面叩き調整痕が残されているもの(456)も含む。460は線刻絵画文を有する壺の胴部で、外面はタテハケ後磨き調整が施されている。461は胴部が球状に膨らんだ小型丸底壺の胴部~底部、463は丸底で、大型の壺の底部である。465は直線的に広がる高坏の脚部、446は水平状に近い、大きく外反した口縁部を持つ鉢の破片である。

S A21はS A20の西側に隣接している。一辺7.5mの大きな住居跡で、検出面からの深さ0.5mを計る。住居跡内には、多量の焼土が確認されることから、焼失住居跡の可能性も考慮される。いずれにしても、平成5年度確認された住居跡群も含めて最大規模のものである。467~470は壺の口縁部で、直口に近いもの(469・470)とわずかに外反したもの(467・468・471)がある。472~474は壺の底部で、丸底気味のもの(472・473)と平底のもの(474)がある。477・478は波状文が施された二重口縁壺の口縁部である。479~483はいずれも高坏の小片である。



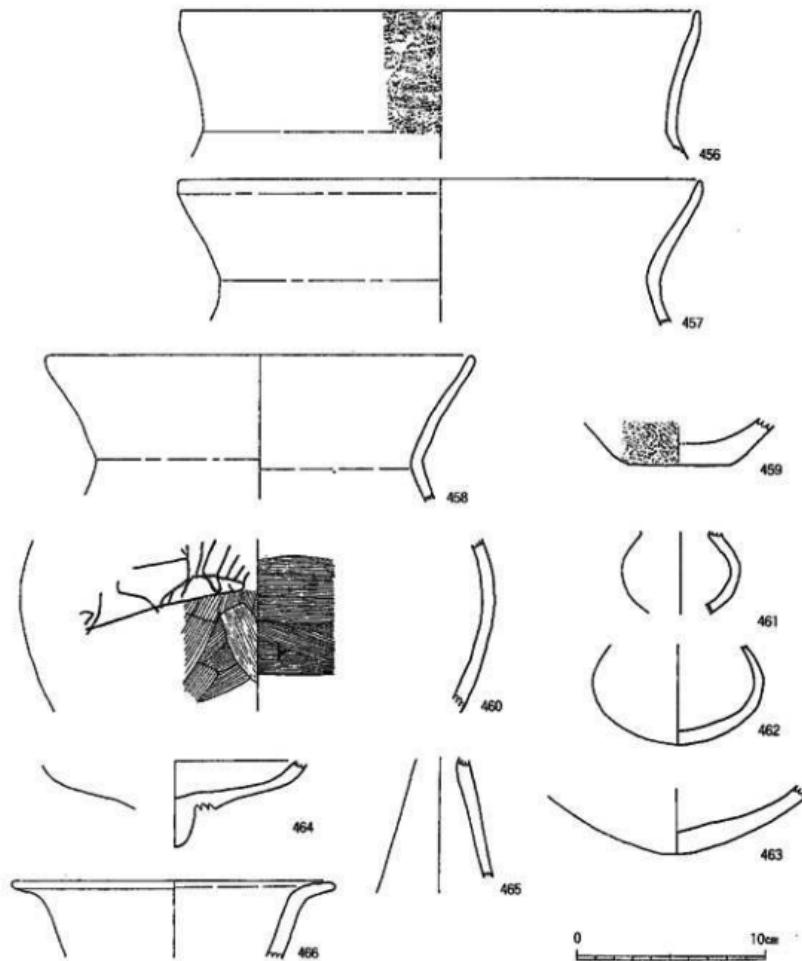
第83図 27号支線道路(西側) 造構実測図 (S=1/80)



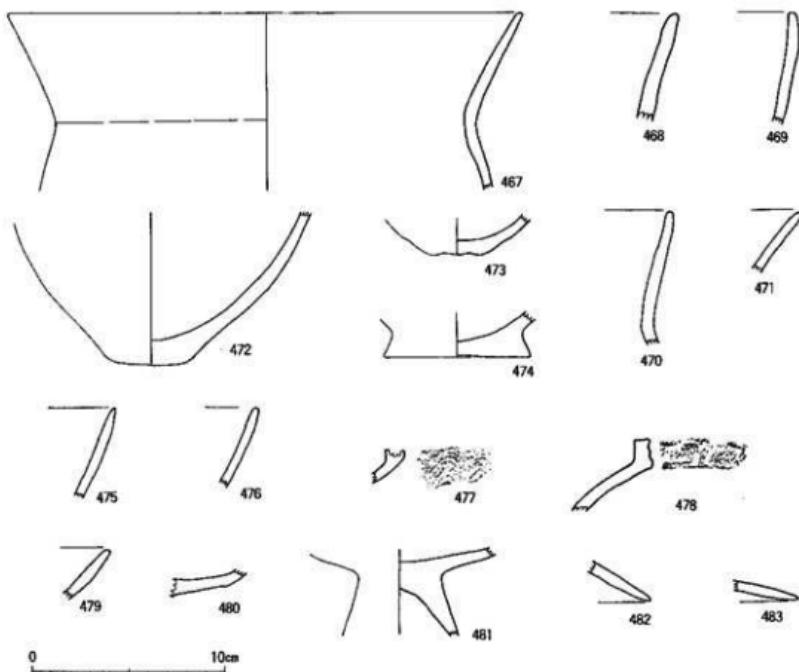
第84図 27号支線道路（西侧）SA6～SA8出土遺物実測図（S=1/3）

S A22はS A21の西側3.5m、南西隅部分のみ確認された。規範的なことは不明である。
検出面からの深さ0.36mを計る。遺物は、出土していない。

ビット群は西側に集中して検出された。いずれも円形で、径0.22m~0.60m、深さ0.08m~0.45mを計る。



第85図 27号支線道路SA19出土遺物実測図 (S=1/3)



第86図 27号支線道路SA21出土遺物実測図 (S=1/3)

西都原地区遺跡 遺物観察表(1)

着物 番号	出土地点	種別	器種・部位	法 異 (cm)	調 整 手法はか		色 感		焼 成	胎土の特徴	
					外 面	内 面	外 面	内 面			
1	SH-SAI	土師器	壺・底部	-	4.8	ナデ・黒斑有	風化著しい	板	板	* 2~3mmの砂粒を多く含む	
2	*	土師器	壺・口縁部	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	タ	タ	良好 1mmの砂粒、金色の砂粒多い	
3	*	土師器	・盤・制鉗	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄緑	黄緑	* 1mmの金色の砂粒含む	
4	*	土師器	・盤・底部	1.0	-	風化著しい・小形丸底盤 底部に黒斑有	風化著しい	板	浅黄緑	やや不良 *	
5	*	土師器	・底部	0.9	-	ミガキ・小形丸底盤、 底部に黒斑有り	ナデ	にぶい檻	良好	1mmの砂粒を含む	
6	*	土師器	凸平・縁部	-	-	ヨコナデ・縁部に黒斑有	ヨコナデ	青緑	純い黄緑	*	
7	*	土師器	・底部	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	浅黄緑	* 1mmの砂粒、金色の砂粒多い	
8	*	土師器	・脚部	-	-	ミガキ	ヘラケズリ	*	*	やや不良 1mm以下の砂粒が多く含む	
9	SHR-SAI	土師質	壺・腰帯・脚部	-	-	風化著しい	風化著しい	明褐色	明褐色	*	
12	汚小清水	糸生	鉢	(3.5)	-	ナデ・指痕有・黒斑有	ナデ・指痕有	板	檻	良好 黄色・茶色の砂粒を含む	
13	汚小清水 SH1	土師器	盤・把手	-	-	部分的に指痕有	-	浅黄緑	板	* 極端な茶色・乳白色・金色の砂粒を含む	
14	汚小清水	土師質	盤・調査用・底部	(7.3)	-	調査ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	
15	汚小清水 SH1	須恵器	壺・脚部	-	-	ナデ・自然鉢	ナデ・自然鉢、一部指痕有	青灰 暗灰	青灰 暗灰	檻	
16	汚小清水 SH1	須恵器	縁部・口縁部	-	-	凹凸ナデ	凹凸ナデ 擦挫きみ。(6条)	明赤褐 暗灰	にぶい檻	乳白色・青・黒色の砂粒を含む	
17	SH-SAI	土師器	壺・完形	20.0	2.9	23.1	ナデ・底部付近に黒斑有	ヨコハケ・ナナメハケ	浅黄緑	浅黄緑	1~3mmの砂粒を多く含む
19	*	土師器	・・・	19.8	1.4	20.4	ナデ・脚部下方付近に 黒斑有	ナナメハケ後ナデ	にぶい檻	にぶい檻	* 2mm以下の砂粒を多く含む
20	*	土師器	・・・	4	4.2	19.9	ヨコナデ・ナデ・脚部 中央付近に黒斑有	ヨコハケ・ナナメハケ ・執手有り有	浅黄緑	浅黄緑	*
21	*	土師器	・口縫・脚部	8.5	-	風化著しい	風化著しい	*	*	* 1~3mmの砂粒を多く含む	
22	*	土師器	萬字・口縁部	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄緑	板	* 1~2mmの砂粒を含む	
23	*	土師器	・・脚部	-	-	ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	* 3mm以下の金色の砂粒を多く含む	
24	*	土師器	・・切盛下方	-	-	ナデ	ナデ	浅黄緑	にぶい檻	* 1mmの金色の砂粒を多く含む	
25	*	土師器	鉢・底部	4.0	-	ナデ	ナデ	*	浅黄緑	* 1~3mmの砂粒を含む	
26	*	土師器	・・・	8.0	-	ナデ	ナデ	にぶい檻	浅黄緑	* 1mmの金色の砂粒を含む	
27	*-SA2	土師器	壺・・	3.8	-	風化著しい	風化著しい	板	板	* 1~2mmの砂粒を含む	
28	*	土師器	・・・	3.6	-	タタキ	ナデ	淡黄	浅黄緑	やや不良 2~3mmの砂粒を含む	
29	*	土師器	・・・	4.0	-	タタキ。ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	* 2mmの砂粒を多く含む	
30	*	土師器	壺・口縁部	-	-	タタキ	風化著しい	純い黄緑	*	* 1~3mmの砂粒を多く含む	
31	*	土師器	・・完形	9.7	0.5	10.8	ヨコナデ(風化著しい)・ 小形丸底盤	ヨコナデ・ナデ	浅黄緑	*	* 1mmの砂粒、金色の砂粒多い
32	*	土師器	・・・	9.9	0.9	10.3	ヨコナデ・ナデ・全体 に黒斑有	ナデ	褐灰	褐灰	* 2mmの砂粒を含む
33	*	土師器	・・武部	-	3.5	-	ナデ・黒斑有	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	2mmの砂の砂粒、金色の砂粒多い
34	*	土師器	・・・	-	-	風化著しい	風化著しい	*	*	1~3mmの砂粒を多く含む	
35	*	土師器	萬字・脚部	-	-	ナデ	ナデ	*	*	1mm以下の砂粒を含む	
36	*	土師器	・・・	-	-	風化著しい	風化著しい	*	*	* 1~2mmの砂粒を含む	
37	*	土師器	・・鉢・底	-	-	ナデ・黒斑有	ナデ	*	灰白	良好 2mmの砂粒を含む	
38	*	土師器	・・・脚・底部	-	3.6	-	ナデ	ナデ	浅黄緑	* 1mmの砂粒を含む	
41	*-SA3	土師器	壺・腰・脚部	27.6	-	タタキ・金面に條状有	タタキ	*	褐灰	やや不良 2~3mmの砂粒を含む	
42	*	土師器	・・・口縁部	-	-	タタキ痕(風化著しい)・ 脚部に條状有	タタキ痕(風化著しい)	*	浅黄緑	* 1~3mmの砂粒を含む	
43	*	土師器	・・・	-	-	タタキ痕(風化著しい)	タタキ痕(風化著しい)	*	*	* 1~3mmの砂粒を多く含む	
44	*	土師器	・・・	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	*	*	* 1~3mmの砂粒を含む	
45	*	土師器	・・・脚・底部	-	3.2	タタキ痕(風化著しい)・ 脚部に條状有	ヨコナデ・指痕調整痕	灰白	浅黄緑	* 2mmの砂粒を含む	
46	*	土師器	・・・	-	3.2	タタキ・ナデ	ナデ	浅黄緑	*	*	
47	*	土師器	壺・口縁部	22.2	-	タタキ	ヨコナデ	*	*	*	

西都原地区遺跡 遺物観察表(2)

遺物 番号	出土地點	種別	器種・部位	法 量 (cm) 内径 外径 高さ	調 査・手法ほか		色 調		焼 成	胎土の特徴
					外 面	内 面	外 面	内 面		
48	27R-SAS	土師器	・・頭部	-	-	-	ヨコナデ	浅黄橙	灰	やや不良
49	*	土師器	・・定形	9.1	2.4	11.1	ヨコナデ、ミザギ (-横開口、黒斑有)	ヨコナデ、ナデ	灰白	明褐色
50	*	土師器	・・頭部	-	1.6	-	タタキ底(風化著しい)	浅黄橙	灰白	やや不良
51	*	土師器	頭部	-	-	-	風化著しい	*	灰白	1~2mmの細粒を多く含む
52	*	土師器	頭部	-	-	-	風化著しい	*	浅黄橙	1~2mmの細粒を多く含む
53	*	土師器	・・頭部	-	-	-	風化著しい	*	*	良好
54	*	土師器	・・頭部	-	-	-	風化著しい	*	*	1mmの金色の砂粒を含む
55	*	土師器	鉢・底部	-	3.4	-	風化著しい	*	*	2mmの砂粒を含む
57	*-SA4	土師器	蓋・口縁部	-	-	-	タタキ底(風化著しい)	風化著しい	*	*
58	*	土師器	・・・	-	-	-	タタキ底(風化著しい)	風化著しい	*	1~2mmの細粒を多く含む
59	*	土師器	・・・	-	-	-	タタキ底(風化著しい)	ヨコナデ(風化著しい)	にぶい緑	にぶい緑
60	*	土師器	蓋・底部	-	-	-	風化著しい	浅黄橙	*	不良
61	*	土師器	高・身・脚部	-	15.8	-	ミガキ・黒斑有、保付有	ナデ、ヨコナデ	灰白	良好
62	*-SA5	土師器	蓋・口縁部	16.5	-	-	ヨンナデ(風化著しい)	ヨンナデ(風化著しい)	*	やや不良
63	*	土師器	・・口縁部	-	-	-	風化著しい	風化著しい	灰白	浅黄橙
64	*	土師器	・・口縁部	-	-	-	タタキ底	風化著しい	*	*
65	*	土師器	蓋・・	-	-	-	風化著しい	風化著しい	*	1mmの細粒を多く含む
66	*	土師器	・・底部	-	0.2	-	風化著しい	風化著しい	*	良好
67	*	土師器	高・身・脚部	-	-	-	ナデ	ヨコナデ	*	浅黄橙
68	*	土師器	・・・	-	-	-	風化著しい	風化著しい	黄	不良
69	*	土師器	鉢・口縁部	-	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	良好
70	*-SA6	土師器	蓋・・	-	-	-	タタキ底(風化著しい)	風化著しい	浅黄	浅黄
71	*	土師器	・・底部	-	4.8	-	タタキ底	風化著しい	浅黄橙	灰白
72	*	土師器	・・・	-	-	-	風化著しい	風化著しい	檻灰	2mmの砂粒を含む
73	*	土師器	蓋・口縁部	-	-	-	ナデ	ヨコナデ	鈍い黄	鈍い黄
74	*	土師器	・・口縁部	-	-	-	タタキ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙
75	*	土師器	高・身・脚部	-	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄	1mmの細粒を含む
76	*	土師器	・・・	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	檻灰
77	*	土師器	鉢・口縁部	-	-	-	ナデ	ヨコナデ、ナデ	*	良好
78	*	土師器	・・身・脚部	-	-	-	ナデ	ナデ	鈍い黄	鈍い黄
79	*-SA7	土師器	蓋・口縁部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄	浅黄
80	*	土師器	・・・	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	*	1~2mmの細粒を多く含む
81	*	土師器	・・底部	-	7.5	-	タタキ	ナデ	*	1~2mmの細粒を含む
82	*	土師器	・・・	-	-	-	風化著しい	風化著しい	灰白	檻灰
83	*	土師器	蓋・頭部	-	-	-	風化著しい	風化著しい	にぶい緑	浅黄橙
84	*	土師器	・・頭部	-	-	-	ミガキ・小形丸底有	ナデ	明褐色	明褐色
85	*	土師器	高・身・脚部	13.5	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	浅黄	*
86	*	土師器	・・脚部	-	-	-	ミガキ	風化著しい	*	浅黄
87	*	土師器	鉢・口縁部	7.6	-	-	風化著しい	風化著しい	檻	檻
88	*-SA8	土師器	蓋・・	-	-	-	ヨコナデ、 縫合付近に黒斑有	ヨコナデ、 縫合付近に黒斑有	明褐色	灰褐
89	*	土師器	・・・	-	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄	2mmの砂粒を含む
90	*	土師器	・・・	-	-	-	タタキ	ヨコナデ	*	1mmの砂粒を含む

西都原地区遺跡 遺物観察表(3)

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法寸(㎝)	調査・手法ほか		色調		焼成度	胎土の特徴	
					外	内	外	内			
91	JR-SAB	土師器	甕・口縁部	—	—	タタキ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	不良	2mmの砂粒を含む
92	*	土師器	*・肩部	—	—	タタキ・縦付着	ヨコナデ	桜	明褐色	*	2~3mmの砂粒を含む
93	*	土師器	*・底部	4.1	—	タタキ	ナデ	浅黄橙	褐色	やや不良	1~3mmの砂粒を含む
94	*	土師器	*・*	2.2	—	タタキ・縦付着	風化著しい	桜	にぶい檻	*	1~2mmの砂粒を含む
95	*	土師器	*・*	6.0	—	タタキ、ナデ	ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	*	1~3mmの砂粒を含む
96	*	土師器	甕・口縁部	14.3	—	ヨコナデ(風化著しい)	風化著しい	シ	シ	*	1~3mmの砂粒を多く含む
97	*	土師器	*・口縁部	—	—	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ	桜	桜	良好	1mmの金色の砂粒を含む
98	*	土師器	*・*	—	—	ヨコナデ・縦付着	ヨコナデ、ナデ	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	1mmの砂粒を含む
99	*	土師器	*・蓋・底部	—	—	ミガキ	風化著しい	*	*	良好	1mmの金色の砂粒を含む
100	*	土師器	*・肩部	—	—	風化著しい	風化著しい	*	*	やや不良	1mmの砂粒を多く含む
101	*	土師器	*・*	—	—	風化著しい	風化著しい	淡桜	*	良好	1mmの砂粒を含む
102	*	土師器	甕・口縁部	—	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	1mmの砂粒を含む
103	*	土師器	*・*	—	—	風化著しい	風化著しい	*	*	良好	1mmの金色の砂粒を含む
104	*	土師器	*・*	—	—	風化著しい	風化著しい	シ	シ	やや不良	1~2mmの砂粒を含む
105	*	土師器	*・脚部	—	—	風化著しい	ナデ	シ	シ	良好	*
106	*	土師器	*・*	—	—	風化著しい	風化著しい	シ	シ	*	*
107	*	土師器	身・側・底部	1.2	—	丁寧なナデ・縦付着	ナデ、指摩調整痕	灰白	浅黄橙	やや不良	1mmの砂粒を含む
112	*・SA9	土師器	甕・口縁部	26.1	—	風化著しい	風化著しい	にぶい檻	褐色	*	1~3mmの砂粒を含む
113	*	土師器	*・縫・底部	25.8	—	ヨコナデ(風化著しい)	ヨコナデ	浅黄橙	*	*	2mmの砂粒を含む
114	*	土師器	*・底部	0.5	—	タタキ	ハケメ(風化著しい)	*	黄橙	不良	1~3mmの砂粒を含む
115	*	土師器	*・*	2.0	—	風化著しい	風化著しい	*	灰白	やや不良	1~3mmの砂粒を多く含む
116	*	土師器	*・*	6.2	—	タタキ痕(風化著しい)	ヘラケズリ	*	浅黄橙	*	*
117	*	土師器	*・*	5.5	—	タタキ(風化著しい)	風化著しい	*	褐色	*	*
118	*	土師器	身・口縁部	11.7	—	タタキ痕(風化著しい)	風化著しい	*	浅黄橙	*	1~2mmの砂粒を多く含む
119	*	土師器	*・口縁部	—	—	ミガキ、タテハケ	ヨコナデ	*	*	良好	1mmの砂粒、金色の砂粒少ない
120	*	土師器	*・*	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	*	*	*	1mmの砂粒を含む
121	*	土師器	*・縫・底部	—	—	風化著しい	標記に同後文の痕半な突起	にぶい檻	浅黄橙	やや不良	大粒(3mm)の砂粒を多く含む
122	*・SA12	土師器	*・底部	2.5	—	風化著しい	風化著しい	黄橙	黄橙	*	1mmの砂粒、金色の砂粒多い
123	*・SA9	土師器	*・*	3.5	—	タタキ痕	ナデ	灰白	褐色	*	1~3mmの砂粒を多く含む
124	*	土師器	*・脚部	—	—	風化著しい	風化著しい	黄橙	黄橙	*	1mmの金色の砂粒を含む
125	*	土師器	身・底部	27.5	—	風化著しい	風化著しい	*	浅黄橙	*	*
126	*	土師器	*・口縁部	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	淡桜	*	良好	*
127	*・SA12	土師器	*・*	—	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	黄橙	やや不良	1mmの砂粒を多く含む
128	*・SA9	土師器	*・縫合部	—	—	風化著しい	風化著しい	*	浅黄橙	*	1~3mmの砂粒を多く含む
129	*	土師器	*・縫合部	—	—	ミガキ	ナデ	*	*	良好	1mmの金色の砂粒を含む
130	*	土師器	*・縫合部	—	—	風化著しい	風化著しい	*	*	やや不良	1mm以下の金色の砂粒を多く含む
131	*	土師器	*・*	—	—	風化著しい	ヘラケズリ(風化著しい)	*	*	*	1~2mmの砂粒を含む
132	*	土師器	*・脚・底部	15.4	—	ミガキ(風化著しい)	ヨコナデ	*	*	良好	*
133	*	土師器	*・*	12.2	—	ヨコナデ、ミガキ(風化著しい)	風化著しい	*	*	やや不良	1mmの砂粒を多く含む
134	*	土師器	*・縫合部	—	—	風化著しい	風化著しい	*	*	*	1mm以下の砂粒を含む
135	*	土師器	*・底部	—	—	風化著しい	風化著しい	*	*	*	1mm以下の金色の砂粒を含む
136	*	土師器	身・底部	6.3	—	風化著しい	ヨコナデ(風化著しい)	にぶい檻	にぶい檻	*	1mmの金色の砂粒を含む

西都原地区遺跡 遺物観察表(4)

遺物 番号	出土地點	種別	器種・部位	法 量(cm) 口径 底径 高さ	調 整 ・ 手法は か		色 調		地 成	胎土の特徴
					外 面	内 面	外 面	内 面		
137	27号-SAB	土師器	鉢・底部	- 7.6	- 風化著しい		浅黄緑	浅黄緑	やや不良	1m程の金色の胎土を含む
138	*	土師器	*・*	-	- ヨコナデ、ヘラケズリ 模様付	ヨコナデ	灰青緑	*	良好	*
139	*	土師器	*・*	-	- 風化著しい		浅黄緑	*	*	*
140	*-SA10	土師器	素口瓶-腹部	22.2	- タタキ痕	ナデ	灰白	灰白	やや不良	1~2mmの胎土を多く含む
141	*	土師器	*-口縁-腹部	-	- ナデ・小形妻・蝶付等	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	1~3mmの胎土、金色の胎土が多い
142	*	土師器	*・底部	4.0	- ナデ	ナデ	*	灰白	*	2mm程の胎土を多く含む
143	*	土師器	*・*	2.6	- タタキ痕、ナデ・周縁有	ナデ	*	浅黄緑	*	大粒(3mm)の胎土を多く含む
144	*	土師器	*・*	3.2	- タタキ痕	ナデ	*	*	*	*
145	*	土師器	*・*	-	- タタキ痕	風化著しい	*	に赤い斑	*	3mm程の胎土、金色の胎土が多い
146	*	土師器	*・*	2.4	- 風化著しい		*	浅黄緑	*	1~2mmの胎土を含む
147	*	土師器	*・*	10.8	- ナデ(風化著しい)	ナデ	*	灰白	*	1~2mmの胎土を多く含む
148	*	土師器	高平-口縁部	-	- 風化著しい		明緑	明緑	*	1m程の胎土を含む
149	*	土師器	*・脚部	-	- 風化著しい		黄緑	淡緑	*	*
150	*	土師器	*-周縁部	-	- ミガキ	ナデ、指痕調整痕	に赤い斑	緑	良好	1m程の金色の胎土を含む
151	*	土師器	*・*	-	- 風化著しい		浅黄緑	黄緑	やや不良	1m程の胎土を多く含む
152	*	土師器	鉢・底部	-	- 風化著しい		*	浅黄緑	*	1m程の胎土を含む
153	*-SA11	土師器	東-*	2.6	- 風化著しい		*	淡緑	*	1~2mmの胎土を多く含む
154	*	土師器	*・*	-	- ナデ	風化著しい	*	浅黄緑	*	1mm程の胎土、金色の胎土が多い
155	*	土師器	*・*	-	- 風化著しい		*	*	*	1m程の胎土を多く含む
156	*	土師器	素口瓶-腹部	12.0	- 風化著しい		*	*	良好	1~2mmの胎土を多く含む
157	*	土師器	*-口縁部	-	- ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	*	やや不良	1m程の胎土を多く含む
158	*	土師器	高平-口縁部	-	- 風化著しい		*	*	良好	*
159	*-SA13	土師器	素・口縁部	-	- ヨコナデ(風化著しい)	風化著しい	*	*	やや不良	1~2mmの胎土を多く含む
160	*	土師器	*・*	-	- 風化著しい		浅黄緑	赤い斑	*	1~2mmの胎土を含む
161	*	土師器	素-口縁部	-	- ヨコナデ・塗付等	風化著しい	に赤い斑	浅黄緑	*	1m程の胎土を含む
162	*	土師器	*・*	-	- ヨコナデ・複合口縁部 部分に波状文有	ヨコナデ	淡緑	*	*	*
163	*	土師器	*・*	-	- 風化著しい・複合口縁	風化著しい	浅黄緑	*	*	*
164	*	土師器	*・底部	3.8	- 風化著しい		*	に赤い斑	*	*
165	*	土師器	素-底部	1.0	- 風化著しい		*	*	*	1~2mmの胎土を多く含む
166	*	土師器	*・*	-	- 風化著しい		緑	浅黄緑	*	1m程の胎土を含む
167	*	土師器	*・*	-	- ミガキ・小形丸底等	ナデ	浅黄緑	*	良好	1m以下金色の胎土を含む
168	*-SA14	土師器	素・完形	27.6 2.7 28.9	風化著しい	ナデ、ヨコハケ後ナデ、 指痕調整痕	黄緑	黄緑	やや不良	1~3mmの胎土を多く含む
169	*	土師器	*・底部	4.2	- 風化著しい	風化著しい	浅黄緑	淡緑	*	2mm程の胎土を多く含む
170	*	土師器	*・*	3.0	- ナデ	ナデ	*	*	良好	1m程の胎土を含む
171	*	土師器	*・*	3.4	- タタキ	ナデ	赤い斑	淡山	やや不良	1~3mmの胎土を含む
172	*	土師器	*・*	6.4	- 風化著しい	風化著しい	灰白	黄緑	不良	1~3mmの胎土を含む
173	*	土師器	*-肩-底部	3.8	- 風化著しい	風化著しい	浅黄緑	浅黄緑	*	*
174	*	土師器	高杯-底部	21.5	- 風化著しい	風化著しい	緑	*	やや不良	1m程の胎土を含む
175	*	土師器	*・*	21.9	- 風化著しい	風化著しい	浅黄緑	浅黄緑	*	1~3mmの金色の胎土が多い
176	*	土師器	*-周縁部	-	- 風化著しい	風化著しい	*	淡緑	*	1m程の胎土を含む
177	*	土師器	*・*	-	- ミガキ(風化著しい)	ミガキ	緑	*	1m以下金色の胎土を含む	
178	*	土師器	*・脚部	-	- 風化著しい	風化著しい	浅黄緑	浅黄緑	*	1m以下金色の胎土を含む

西都原地区遺跡・遺物観察表(5)

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法 量(cm) 口径 底径 基高	調査・手法ほか		色 調		成 形	地上的特徴		
					外 面	内 面	外 面	内 面				
179	ZER-SA14	土師器	高杯・脚部	—	—	風化著しい	風化著しい	浅黄橙	浅黄橙	不良	1mmの砂粒を含む	
180	*	土師器	・周縁合部	—	—	風化著しい	ナデ	*	*	やや不良	1~2mmの砂粒を含む	
181	*	土師器	**	—	—	ミガキ	ナデ	*	*	*	1mmの金色の砂粒を含む	
182	*	土師器	鉢・完形	12.4	3.7	4.0	ナデ	ナデ	*	*	1~3mmの砂粒を含む	
183	*-SA15	土師器	堅口縁・網目	22.8	—	—	タタキ・煤付着	風化著しい	*	*	不良	2~4mmの砂粒を多く含む
184	*	土師器	**・底部	—	5.0	—	ナデ	ナデ	灰白	灰白	やや不良	1mmの砂粒を多く含む
185	*	土師器	**	—	3.5	—	ナデ	風化著しい	浅黄橙	明褐色	*	2mmの砂粒を多く含む
186	*	土師器	**	—	6.5	—	風化著しい	風化著しい	灰白	浅黄橙	*	1mm以下の金色の砂粒多い
187	*	土師器	身口縁・網目	12.2	—	—	ミガキ	ヨコナデ	橙	*	良好	1mmの金色の砂粒を含む
188	*-SD1	土師質	杯	13.0	7.3	4.6	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	*	1~2mmの砂粒を多く含む
189	*	土師質	杯・完形	13.3	7.1	4.3	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	橙	橙	*	2mmの砂粒を多く含む
190	*	土師質	杯	13.3	7.1	4.3	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	橙	橙	*	3mmの砂粒を多く含む
191	*	土師質	杯	(33.9)	6.9	4.6	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	*	*	*	黄色・金色・黒色の粒子を含む
192	*	土師質	杯・完形	12.8	7.1	4.7	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	*	にぶい橙	*	*
193	*	土師質	杯	(33.9)	7.9	4.5	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	*	橙	*	*
194	*	土師質	*	(33.9)	7.1	4.3	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	*	*	*	*
195	*	土師質	杯・完形	12.6	6.9	4.6	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	*	*	*	*
196	*	土師質	杯・口縁部	—	—	—	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	*	*	*	黑色・金色の粒子を含む
197	*	土師質	杯・底部	—	7.3	—	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	*	*	*	*
198	ZER-SD1	土師質	杯・完形	11.7	6.7	3.5	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	明褐色 浅黄橙	橙	*	黒色・金色の砂粒を多く含む 白色・金色の砂粒を含む
199	*	土師質	杯・完形	11.6	7	3.6	回転ナデ・風化している ヘラ切り底	回転ナデ	明褐色 浅黄橙	浅黄橙	*	黒色・金色の砂粒を多く含む 白色・金色の砂粒を含む
200	*	土師質	杯・完形	11.9	6.6	3.6	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	橙 浅黄橙	黄橙	*	黒褐色の砂粒を少混合
201	*	土師質	杯	13.7	6	5.7	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ	橙	橙	*	黒褐色の砂粒を少混合
202	*	土師質	平口縁・網目	(31.6)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	*	黒褐色の砂粒を含む
203	*	土師質	平口縁・網目	13.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	*	黒褐色の砂粒を含む
204	*	土師質	高台付・網 上口縁・網目	(3)	7.0	6	磨き・回転ナデ・近底ヘラ 切り底・斜底部の網目底	内側・磨き	後背模	黑	*	茶色・水色・灰白色の砂粒 を含む
205	ZER-SA1	土師質	裏・底部	—	—	—	ハケ目	ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	*	褐色・茶色・灰色・黑色・ 紅色の砂粒を含む
206	ZER-SA1	土師質	裏・底部	—	—	—	ハケ目	ハケ目	橙	橙	*	褐色・茶色・黑色・褐色の 砂粒を含む
207	*-SA2	土師質	裏・口縁部	—	—	—	丁寧なナデ・ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	*	褐色・茶色・黑色の砂粒を 多く含む
208	*-SC2	土師質	平口縁・完形	13.1	6.3	4.6	回転ナデ・ヘラ切り底・ 部色部有り	回転ナデ・一部黒色部 有り	にぶい橙 回転	にぶい橙 回転	*	黒褐色の砂粒を多く含む
209	*	土師質	堅口縁・底基	(31.7)	7.0	5.4	回転ナデ・ヘラ切り底	回転ナデ・中央部・底付 有り、表面有り	橙	橙	*	茶色・褐色の砂粒を含む
210	*	土師質	杯	—	—	—	ナデ・風化気味	ナデ・風化気味	黄橙	黄橙	*	褐色・茶色の砂粒を多く含む
211	*	土師質	杯	—	—	—	ヨコナデ・風化気味	ナデ・風化気味	にぶい橙 明褐色	にぶい橙 明褐色	*	茶褐色の砂粒を多く含む
212	*	土師質	杯	—	—	—	ナデ・風化著しい	ナデ・風化著しい	橙	橙	*	乳白色・褐色の砂粒を含む
213	*	土師質	杯	—	6.9	—	ナデ・風化気味 高台付・ナデ	ナデ・風化気味	にぶい橙	灰褐色	*	灰褐色・褐色の砂粒を多く含む
214	ZER-SA1	泥生	口縁・網目	(34.0)	—	—	口縁・ケルビング・ナデ・ ナデ・アーチ型・ナデ	口縁・工具ナデ ナデ・アーチ型・網目・ナデ	にぶい橙 回転	にぶい橙 回転	*	紺色・茶色の砂粒を含む
215	*	泥生	裏・底部	—	—	—	ヨコナデ・平行ナギ・ 平行ナギ・網目・底基	工具ナデ	にぶい橙	黑褐	*	灰褐色・褐色の砂粒を含む
216	*	泥生	裏	—	—	—	ハケ目	丁寧なナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	丸い圓錐状を含む
217	ZER-SA1	泥生	裏	—	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	白色の砂粒・丸い圓錐状を 含む
218	*	泥生	裏	—	—	—	ハケ目	丁寧なナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	灰褐色・褐色の砂粒を含む
219	*	泥生	裏	—	—	—	ハケ目	丁寧なナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	丸い圓錐状を含む
220	*	泥生	裏	—	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	白色の砂粒・丸い圓錐状を 含む
221	*	泥生	裏	—	—	—	粗いナデ	粗いナデ	灰褐色	灰褐色	*	灰褐色・灰・褐色・乳白色 の砂粒を含む
222	*	泥生	裏	—	—	—	柳葉波状文 ナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	茶褐色・褐色の砂粒を含む
223	*	泥生	裏	—	—	—	柳葉波状文 ナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	茶褐色・灰・褐色の砂粒を含む
224	*	泥生	裏	—	—	—	ハラ状工具による波状文 ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	*	茶褐色・茶褐色の砂粒を含む 半透明・半不透明の砂粒を含む
225	*	泥生	裏・網目	—	—	—	ナデ・磨き	ヨコナデ 一部工具状	浅黄橙	浅黄橙	*	浅黄橙・墨・透明の光沢 を含む

西都原地区遺跡 遺物観察表(6)

遺物番号	出土施設	種類	器種・部位	法寸(㎜) 〔横幅 厚径 縦高〕	表面 磨き度	調査・手法ほか		色調		焼成	胎土の特徴
						外 面	内 面	外 面	内 面		
226	A区-S22	土器質	平山形～底部	(12.9) (7.1)	4.7	回転ナデ、ヘラ切り底 斜方向のナデ ヨコナデ、風化気味	回転ナデ 斜方向のナデ ヨコナデ	橙	橙	良好	黒褐色の胎土を含む
227	*	土器質	口縁～底部	(12.4)	-	(3.8)	ヨコナデ、風化気味	*	*	*	灰褐色の胎土を多く含む
229	B区-S11	土器質	平山形～底部	(12.8) (7.0)	4.9	回転ナデ、ヘラ切り底 風化著しく調査不明	回転ナデ 風化著しく調査不明	青白 褐灰	青白 褐灰	*	青色、灰色、赤褐色の胎土を含む
230	*	土器質	平山形～底部	(11.0) (7)	4.6	ヘラ切り底 風化著しく調査不明	ヘラ切り底 風化著しく調査不明	浅黄橙	黄橙	*	青色、灰色、黒褐色の胎土を含む
233	B区-S11	土器質	环状はげ光形	12.2 6.2	4.5	回転ナデ、ヘラ切り底 風化気味	回転ナデ 風化気味	浅黄 青白	橙	*	青色、灰色の胎土を含む
234	*	土器質	平山形～底部	12 6.6	4.6	回転ナデ、ヘラ切り底 風化気味	回転ナデ 風化気味	黄橙	黄橙	*	青色の胎土を含む
235	*	土器質	环状口縁～底部	(11.9) (6.8)	5.2	回転ナデ、ヘラ切り底 回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ	橙	浅黄橙	*	青灰色の胎土を多く含む
236	*	土器質	高台付底部	(12.6)	-	回転ナデ、ヘラ切り底 高台内に黒斑	回転ナデ ミガキ	橙	ふく青白 灰灰白	*	褐色の胎土を少々含む
237	B区	土器質	坪	-	(8.1)	丁寧なヨコナデ ヘラ切り底	丁寧なヨコナデ ヘラ切り底	浅黄橙	浅黄橙	*	灰褐色の胎土を多く含む
238	*	土器質	坪	-	(7)	ナデ・ヘラ切り底	ナデ	浅黄	浅黄	*	毛打と光る銀鋸歯を少々含む
239	*	土器質	坪	-	(8.9)	ナデ・風化気味	ナデ	黄白	橙	*	褐色の胎土を少々含む
240	*	土器質	高台付底部	-	(7.6)	ヨコナデ 高台内ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	*	褐色の胎土を含む
241	*	土器質	高台付底部	-	(3.7)	ナデ	ナデ	橙	ふく青白	*	褐色の胎土を含む
242	*	土器質	坪	-	(10)	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙	*	灰・茶・褐色の砂粒を多く含む
248	E区	雑文	坪	-	-	貝殻摩擦で要方向に 剥離状に焼失	ミガキ、ナデ	にぶい青白	にぶい青白	やや不良	金・墨色の粒子を含む
249	1区	雑文	深鉢・山形部	-	-	ナナメ方向 貝殻摩擦	ナデ	にぶい青白	灰白	良好	褐色・灰色・白色の粒子を含む
250	*	雑文	*	-	-	ナナメ方向あらいナデ	ナデ	灰黄	*	*	*
251	*	雑文	*	-	-	ナナメ方向の貝殻摩擦	ナデ	褐	褐灰	*	*
252	*	雑文	*	-	-	*	ナデ	灰白	明闇灰	やや不良	施・灰・褐色・青色
253	*	雑文	*	-	-	*	ナデ	にぶい青白	浅黄	良好	*
254	*	雑文	*	-	-	ヨコ方向の貝殻摩擦	ナデ	灰黄	にぶい青白	やや不良	*
255	*	雑文	*	-	-	*	ミガキ	浅黄	灰黄	*	*
256	*	雑文	*	-	-	*	ナデ	灰白	明闇灰	*	*
257	*	雑文	*	-	-	ナナメ方向あらいナデ	ナデ	*	灰白	*	*
258	*	雑文	深鉢・底部	-	-	ナナメ方向 貝殻摩擦	ナデ	にぶい青白	にぶい青白	*	*
259	*	雑文	*	-	-	*	ナデ	明闇灰	にぶい青白	*	*
275	M区-S11	灰生	坪・口縁	13.2	-	ヨコナデ・ナデハケ、口 縁部下に孔有り	ナデ・ナデハケ、口 縁部下に孔有り	橙	橙	やや不良	1~2mmの砂粒を含む
276	M区-S11	灰生	坪・口縁	29.8	-	ヨコナデ・ナデハケ、 上部に窓有り	ナナメハケ、指端調整痕 上部に窓有り	明闇灰	明闇灰	*	1mmの金色の砂粒を含む
277	*	灰生	坪・口縁	32.6	-	ヨコナデ・ミガキ、 全面に窓有り	ヨコナデ、指端調整痕 窓有り	橙	如	*	1mmの金色の砂粒を含む
278	*	灰生	坪・口縁	33.1	-	ヨコナデ・ナデ、 窓有り	ヨコナデ・ナデ、指端 調整痕	*	浅黄	*	1~2mmの砂粒を多く含む
279	*	灰生	坪・口縁	28.1	-	ヨコナデ・タテハケ、 窓有り	ヨコナデ・ナデ、指端痕 窓有り	にぶい青白	良好	*	1~2mmの砂粒を含む
280	*	灰生	坪・口縁	20.0	-	ヨコナデ・ナデ、 窓有り	ヨコナデ・ナデ、 指端調整痕 窓有り	浅黄	浅黄	*	1~2mmの砂粒を多く含む
281	*	灰生	坪・口縁	7.5	-	タテハケ後ナデ、 下部に黒斑有	ナデ、指端調整痕 窓有り	にぶい青白	灰白	*	1~2mmの砂粒を含む
282	*	灰生	坪・底部	6.4	-	タテハケ後ナデ・ナデ	指端痕	*	浅黄	*	1~2mmの砂粒を含む
283	*	灰生	坪・口縁	5.8	-	風化著しい	風化著しい	灰白	橙	不良	*
284	*	灰生	坪・口縁	25.0	-	ナデ(風化著しい)	風化著しい	淡黄	淡黄	良好	1mmの砂粒を多く含む
285	*	灰生	坪・口縁	23.2	-	風化著しい	風化著しい	灰白	灰白	やや不良	1mm以下の砂粒を含む
286	*	灰生	坪・口縁	21.4	-	ヨコナデ・窓部が強い ヨコナデより凹	ヨコナデ・窓部が強い ヨコナデより凹	淡黄	*	*	1~2mmの砂粒を多く含む
287	*	灰生	坪・口縁	17.6	-	ヨコナデ・窓部が強い ヨコナデより凹	ヨコナデ・窓部が強い ヨコナデより凹	ヨコナデ	灰白	*	*
288	*	灰生	坪・口縁	21.4	-	ヨコナデ(風化)・ 赤色顔料一部残存	ヨコナデ(風化)・ 赤色顔料一部残存	浅黄	浅黄	*	1~2mmの砂粒を多く含む
289	*	灰生	坪・口縁	18.0	-	ヨコナデ・赤色顔料 部残存、無斑有	ヨコナデ(風化)・ 赤色顔料一部残存	灰白	灰白	*	1~2mmの砂粒を含む
290	*	灰生	坪・口縁	20.4	-	ヨコナデ・赤色顔料 部残存、無斑有	ヨコナデ・ナデ、 赤色顔料一部残存	*	浅黄	*	1~2mmの砂粒を多く含む

西都原地区遺跡・遺物観察表(7)

遺物番号	出土地点	種別	器種・部材	法蓋(cm)	調査・手法ほか				色調		焼成	胎土の特徴
					外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
291	24R-SC1	弥生	金口器・網目	-	-	-	タテハケ	ヨコハケ、ナデ・ 網目肥厚、円筒浮文有	黒	鈍い黄緑	良好	1~2mmの砂粒を多く含む
292	*	弥生	・垂・網目	-	-	-	風化著しい	風化著しい	灰白	淡黄緑	やや不良	1mm以上の砂粒を含む
293	*	弥生	・・・網目	-	-	-	タテハケ、ナナメハケ	ヘラケズリ、ナデ	鈍い黄緑	にぶい黄	*	1~4mmの砂粒を多く含む
294	*	弥生	・・・網目	-	-	-	(風化著しい)	ヨコナデ、ナナメハケ	明黄緑	鈍い黄緑	*	1~2mmの砂粒を含む
295	*	弥生	高环・牙昂	21.2	-	-	ヨコナデ、ナナメ	ヨコナデ、ナナメ・ 肥厚有	桜	桜	*	1~2mmの金色の砂粒を含む
296	*	弥生	印・口縁・網目	24.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ・ナナメハケ	灰白	灰白	*	1mmの砂粒を含む
297	*	弥生	・・・タ	-	-	-	ヨコナデ・[口縁]・ 指捺壓痕	[く]字状に外反	浅黄緑	浅黄緑	良好	1mmの砂粒を多く含む
298	*	弥生	鉢・深底	-	-	-	風化著しい	風化著しい	灰白	灰白	やや不良	1mmの砂粒を含む
304	4R-SB	弥生	大環・口縁・網目	18.0	-	-	ヨコナデ・一部黒變	ヨコナデ	桜	桜	良好	黄白色・茶褐色・黑色 有彩色・含む
305	AR-SE	弥生	口縁・網目	15.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	灰褐色砂粒を多く含む
306	4R-SE	弥生	口縁・網目	-	-	-	斜方向のナデ	斜方向のナデ	桜	黄緑	*	灰褐色・灰白色砂粒を多く含む
307	*	弥生	波形	(4.6)	-	-	ナデ	ナデ	鵝卵	鵝卵	*	灰褐色・灰白色砂粒を多く含む
308	*	弥生	直縁	6.3	-	-	ナデ	ナデ	にぶい程	鵝卵	*	基・褐色・灰白色砂粒を多く含む
309	*	弥生	波形	7.2	-	-	ナデ	ナデ	浅黄緑	鵝卵	*	基・褐色・灰白色砂粒を多く含む
310	*	弥生	直・口縁	(2.0)	-	-	ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	基・褐色砂粒を多く含む
311	*	弥生	口縁	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	基・褐色砂粒を含む
312	*	弥生	直・網目	-	-	-	横方向のミガキ	ヨコナデ	浅黄緑	灰	*	基・灰・口・波形・基褐色 の砂粒を多く含む
313	*	弥生	直・網目	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	灰オリーブ	*	基・灰・褐色・基褐色の 砂粒を多く含む
314	*	弥生	直・網目	-	-	-	タテ方向のミガキ・ 風壓	斜方向のナデ	にぶい程	明黄緑	*	基褐色砂粒を多く含む
315	*	弥生	直・網目	-	-	-	斜方向のミガキ	斜方向のナデ	浅黄緑	明黄緑	*	基褐色砂粒を多く含む
316	*	弥生	高环・舞部	-	-	-	ミガキ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	灰・素・白色の砂粒を多く含む
317	*	弥生	高环・網目	-	-	-	ナデ	ナデ・指捺痕	浅黄緑	浅黄緑	*	基・灰・白・乳白色の砂 粒を含む
319	*	上部質	杯・口縁	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	褐色砂粒を含む
320	*	土師質	牛頭器・直縁	6.3	-	-	圓軸ナデ	圓軸ナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	褐色・赤褐色の砂粒を含む
321	*	上部質	杯・底部	(1.3)	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	褐色砂粒を含む
322	*	土師質	高台付 波紋	(1.1)	-	-	ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	赤褐色砂粒を含む
323	*	土師質	高台付 波紋	(1.5)	-	-	ナデ	ナデ	桜	桜	*	黒褐色砂粒を多く含む
325	8H-SA1	弥生	直・口縁	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	基・灰・褐色砂粒を含む
326	*	弥生	直・底部	(5.0)	-	-	ヨコナデ	刺繡	にぶい青緑	-	*	赤茶灰・墨の砂粒を含む
327	*	弥生	直・口縁	-	-	-	刺繡	ナデ	明黄緑	明黄緑	*	基・灰・褐色砂粒を含む
328	*	弥生	直・網目	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	淡黄	*	褐色砂粒・赤褐色砂 粒に光る砂粒を含む
329	*	弥生	直・網目	-	-	-	ナデ	ヨコナデ	浅黄緑	浅黄緑	*	赤茶・灰・白・青・乳白 色の砂粒を含む
330	*	弥生	直・網目	-	-	-	ナデ	ナデ	桜	にぶい程	*	赤茶・灰・白の砂粒が 細かい砂粒を含む
331	*	弥生	直・網目	-	-	-	タテ・貼付突起	ナデ	にぶい程	桜	*	細・乳白色砂粒を含む
332	*	弥生	直・網目	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	黄緑	灰	*	灰・灰褐色の砂粒を多量 に含む
333	*	弥生	直・底部	8.1	-	-	ナデ	ナデ・底部に一部ス ケ付	暗	暗	*	灰褐色・浅黄・黄色砂粒を 多く含む
334	*	弥生	直・底部	(11.0)	-	-	丁寧なタテナデ・ヨ コナデ	ナデ	にぶい程	にぶい程	*	赤・灰・白の砂粒が 細かい砂粒を含む
342	8R-SA2	弥生	口縁・底部	(10.7)	-	-	工具ナデ・口縁部ス ケ	ヨコナデ	鵝卵	鵝卵	*	基・灰・乳白色的砂粒を 含む
343	*	弥生	直・口縁	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白	灰白	*	蓝色砂粒を少量含む
347	1号茎通 I-1号	土師器	碗・完形	15.7 8.5	6.1	ヨコナデ・丹塗り	ヨコナデ・丹塗	桜	桜	浅黄緑	*	細かい砂粒を含む
348	*	土師器	碗・完形	13.9 4.8	5.7	ナデ・工具痕・丹塗り	工具ナデ・丁寧なナデ	桜	にぶい程	*	細かい砂粒を含む	
349	*	土師器	碗・完形	11.5 3.5	4.7	押さ・ナデ・丹塗り	ナデ・丹塗	浅黄緑	桜	浅黄緑	*	細かい砂粒を含む

西都原地区遺跡 遺物觀察表(8)

遺物番号	出土地點	種別	器種・部類	法 番 (cm)		調 査・手 法 16 か				色 形		焼 成	粘土の特徴	
				口径	底径	高さ	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
350	1号墓壙 1-1号	須恵器	环身・定形	10.7	-	3.3	ヨコナデ・ヘラ切り ハラ切口有	ヨコナデ	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を多く含む	
351	*	須恵器	环身・定形	9.4	6.2	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を多く含む	
352	*	須恵器	环身・定形	9.9	6.0	3.5	ナダ・直筋ヘラ切り 直筋輪・附着褐色物付有	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を含む	
353	*	須恵器	环身・定形	10.0	6.7	3.2	ナダ・ヘラ切り 直筋ヘラ切り・全周に白陶輪	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を含む	
354	*	須恵器	环・定形	10.9	7.0	4.2	ナダ・直筋ヘラ削り ナダ・直筋ヘラ削り	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰・褐色砂粒を多く含む	
355	*	須恵器	平底・定形	4.4	6.5	10.7	ナダ・ケズリ	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を少數含む	
356	*	須恵器	環・網目	-	-	-	斜め片手持付・直筋輪 斜め片手持付・直筋輪	円弧高て具痕	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を含む	
358	2号墓壙 2-1号	土器類	甌 はぼん形	12.0	5.8	5.2	直筋輪と直筋輪間に開ける 大きな凹部の直筋輪	工具ナダ	浅黄櫻	青櫻	良好	灰	灰白色砂粒を含む	
359	*	須恵器	环蓋・定形	11.3	-	4.0	ケズリ・ナダ	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を少數含む	
360	*	須恵器	环身・定形	11.7	4.5	2.7	ナダ・ケズリ・ ヘラ削り・自然輪	ナダ・13棘部粘土付有	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を少數含む	
361	*	須恵器	环身・定形	11.1	6.7	2.7	ヨコナデ・直筋ヘラ削り 黄褐色付素物有	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を含む	
362	*	須恵器	提瓶	-	-	-	ナダ・ケズリ	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰・褐色の砂粒を含む	
367	3号墓壙	須恵器	环身・定形	10.6	5.3	3.1	ナダ・ヘラ削り 直筋輪	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰・灰白色的砂粒を含む	
368	*	須恵器	口縁・網目	(28.6)	-	-	ナダ・口縁部に多量の土によ ついた網目状の砂粒	ナダ・まばらに少量 の自然砂	黄灰	青灰	青灰	青灰	灰・灰白色的砂粒を含む	
369	*	須恵器	口・口縁	-	-	-	カキ口の接合・ヘラ状 只見川の斜め文様	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰・灰白色的砂粒を含む	
370	*	須恵器	口・口縁	-	-	-	ヘラ状丁字にもうタテ方 向のいき砂輪・只見川	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰・灰白色的砂粒を含む	
371	*	須恵器	大甌 脚付付近	-	-	-	沈底・喇叭狀工舟に よるナダ・平行タキ	ヨコナデ・円弧当て 具輪・自然輪	灰	灰	灰	灰	灰・深窓の砂粒を多く含む	
372	1号墓壙 1-1号	須恵器	甌・網目	-	-	-	硝子文タキ	円弧当て具輪	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を含む	
373	3号墓壙	須恵器	甌・網目	-	-	-	平行繩文と硝子文の 上からナダ	円弧当て具輪	灰	灰	灰	灰	白色砂粒を含む	
374	*	須恵器	甌・網目	-	-	-	硝子文タキ	円弧当て具輪	灰	灰	灰	灰	灰白色砂粒を含む	
375	*	土器類	环・口縁	-	-	-	回転ナダ	回転ナダ	橙	橙	橙	良好	灰白・淡黄・灰白色砂粒を含む	
376	*	土器類	环・底盤	-	5.9	-	回転ナダ・近縁ヘラ 削り	ナダ	橙	橙	橙	橙	灰・白・青灰色砂粒を含む	
378	4号墓壙	土器類	口縁・底盤	-	-	-	回転ナダ・丹塗り	回転ナダ・丹塗り	浅黄櫻	浅黄櫻	浅黄櫻	浅黄櫻	灰白色砂粒を少數含む	
379	*	土器類	碗・完形	12.3	8.5	4.8	丁寧なナダ	丁寧なナダ	橙	橙	橙	橙	灰白・淡黄・灰白色砂粒を含む	
380	*	土器類	口縁・底盤	(13.7)	(6.0)	4.9	ヨコナデ	丁寧なナダ・黒灰	橙	橙	橙	橙	淡黄・灰白・褐色砂粒を含む	
381	*	土器類	口縁・底盤	-	(3.5)	(4.6)	ナダ・一部剥離	ナダ	黄櫻	黄櫻	黄櫻	黄櫻	褐色砂粒を含む	
382	*	土器類	口縁・底盤	-	-	-	ヨコナデ・一部赤绘	ヨコナデ	橙	橙	橙	橙	灰・褐色砂粒を少數含む	
383	*	I型器	口縁・全体	(13.0)	5.5	4.3	ナダ・丹塗り	ナダ・丹塗り	浅黄櫻	浅黄櫻	浅黄櫻	浅黄櫻	灰・褐色の砂粒を少數含む	
384	*	土器類	碗	はぼん形	12.7	3.9	3.9	丁寧なナダ	ナダ	橙	橙	橙	橙	灰白・赤褐色・黑色の砂粒を含む
385	*	土器類	碗	はぼん形	-	(4.5)	-	丁寧なナダ・ナダ	指捺痕・ナダ	浅黄櫻	浅黄櫻	浅黄櫻	浅黄櫻	褐色砂粒を含む
386	*	須恵器	耳身完形	9.3	6.6	3.5	ナダ・ ヘラ切りと朱漆調、ヘラ記号	ナダ・ 仕上げナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を少數含む	
387	*	須恵器	耳身1縁	-	-	-	ナダ	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を少數含む	
388	*	須恵器	耳身1縁	-	-	-	ナダ	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰	
389	*	須恵器	長形盃 網目部	-	-	-	体部上面上に自然輪・ 体部中央に成輪と斜方 成輪、底部中央に化輪と斜方 成輪による鉛錆アーチ	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色・灰白色的砂粒を含む	
390	*	須恵器	長形盃 網目部	-	-	-	成輪・底部中央に化輪と斜方 成輪による鉛錆アーチ	ナダ	灰	灰	灰	灰	淡黄色・少白色の砂粒を含む	
391	*	須恵器	蓋	(5.6)	3	-	ナダ・ヘラ切り後ナダ	ナダ・ 仕上げナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を含む	
392	*	須恵器	蓋	剥離・生部	-	(6.5)	ナダ・成輪・ケズリ	ナダ	灰	灰	灰	灰	灰	
393	*	須恵器	蓋	剥離・器部	-	-	ヨコナデ・鳥居口タキ ヨコナデ・直筋輪	ヨコナデ・ 直筋輪	灰白	灰白	灰白	灰白	細粒砂を含む	
394	*	須恵器	蓋	剥離・器部	-	-	ヨコナデ・直筋輪	ヨコナデ・直筋輪	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を少數含む	
397	5号墓壙	須恵器	蓋	(21)	-	-	1.1横・カキ口 平縁・直筋輪	1.1横・ヨコナデ	灰白	灰白	灰白	灰白	灰・褐褐色の砂粒を多く含む	
399	6号墓壙 6-2号	須恵器	耳身完形	10.6	-	3.5	ナダ・ヘラ切りと朱漆 仕上げナダ	ナダ・ 仕上げナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色・灰白色的砂粒を多く含む	
400	*	須恵器	耳身完形	9.5	-	3.2	ナダ・ 頭突	ナダ・ 仕上げナダ	灰	灰	灰	灰	灰白色の砂粒を多く含む	

西都原地区遺跡 遺物觀察表(9)

植物 番号	樹木地點	種 別	器種・部位	法 量 (cm)			調 査 千 枝 は か			色 調	乾 成	胎土の特徴
				外 径	底 径	高 度	外 面	内 面				
401	6号屋敷 6-25	頸忍草	身舟山田版	10.6	6.6	3.5	ナデ、自然軸 ナラ切り後未調査	ナデ	灰	灰	堅	灰白色の砂粒を含む
402	*	頸忍草	身舟・完形	10	4.9	3	ナデ、自然軸 ナラ切り後未調査	ナデ 仕上げナデ	灰	灰	*	乳白色の砂粒を少量含む
403	*	頸忍草	身舟・完形	10.3	6.3	3.4	ナデ、ヘラ切り後未調査 ヘラ仕上	ナデ	灰	灰	*	乳白色の砂粒を少含む
404	*	頸忍草	身舟・完形	10	6	3.3	ナデ、同軸ナデ	ナデ	灰	灰	*	白色、灰白色、茶色の砂粒を含む
405	円墳 里山付近	頸忍草	高弓・耳附	10.0	-	-	ナデ	ナデ	灰	暗オリーブ	*	細胞を含む
409	*	頸忍草	高弓・脚	-	-	-	ナデ、自然軸 長脚、既二方達	ナデ・自然軸	灰	黄灰 灰	*	白色の砂粒を含む
410	*	頸忍草	通山田形	-	-	4.5	ナデ、完形、3条の沈板 ヘラ切り後ナデ	ナデ・未開発有	灰	灰白	*	乳白色の砂粒を少量含む
411	*	頸忍草	葉・網部	-	-	-	細かい平行タキと 秋子文タキア	円弧當て具痕	灰白	灰白	*	乳白色、蘭細胞を含む
412	I 区	深林	山形口緑	-	-	-	根状茎による連続 根状茎	ナデ	黒い黄緑	浅黄緑	やや不良	黒色、灰色、白色の粒子を含む
413	*	深林	山形口緑	-	-	-	貝殻多角形 ヨコナデ	貝殻多角形	黒い黄緑	明褐灰	*	黒色、灰褐色、白色の粒子を含む
414	*	深林	口緑部	-	-	-	ナメ方向、貝殻多角 ナデ	貝殻多角板	にいし	にいし	*	小石、白色、粒子を含む
415	*	深林	山形口緑	-	-	-	貝殻復縫による連続開片	貝殻多角	暗褐	黄褐色	*	黑色、灰褐色、白色の粒子を含む
416	*	深林	山形口緑	-	-	-	貝殻多角形ナデ 口緑部、貝殻復縫による割れ	貝殻多角	灰白	浅黄緑	*	黑色、灰褐色、白色の粒子を含む
417	*	深林	口緑部	-	-	-	ヨコナデ	ナデ	明赤褐色	橙	良好	黑色、灰褐色、白色の粒子を含む
418	*	深林	網部	-	-	-	ナメ方向、あらいいナデ	ナメ方向、あらいいナデ	にいし	にいし	やや不良	黑色、灰褐色、白色の粒子を含む
419	*	深林	山形口緑	-	-	-	ナメ方向、あらいいナデ	ナデ	浅黄緑	灰黄	*	黑色、灰褐色、白色の粒子を含む
420	*	深林	山形口緑	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白	青灰	*	黑色、灰褐色、白色の粒子を含む
421	*	深林	口緑部	-	-	-	ヨコナデ	貝殻多角	にいし	にいし	*	黑色、灰褐色、白色の粒子を含む
422	*	深林	口緑部	-	-	-	口隔壁、體状のもので 網狀 ナデ	ナデ	橙	黃綠	*	黑色、白色、灰色、金色の粒子を含む
423	*	深林	網部	-	-	-	ナデ	ナデ	明黄緑	灰黃綠	不良	黒色、白色、灰色、金色の粒子を含む
424	田代-SPI	頸忍草	耳垂・完形	10.0	-	3.1	ヨコナデ 全体の2/3自然軸付着	ヨコナデ	灰黄色	灰白色	堅	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
425	*	頸忍草	耳垂	9.9	-	3.1	ヨコナデ 自然軸付着少付着	ヨコナデ	灰色	灰色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
426	*	頸忍草	耳垂・完形	10.0	-	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
427	*	頸忍草	耳垂・完形	10.2	-	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
428	*	頸忍草	耳垂・完形	10.0	-	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
429	*	頸忍草	耳垂・完形	10.0	-	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
430	*	頸忍草	身舟・完形	8.9	5.9	3.6	ヨコナデ、ヘラ切り側 全体の1/4自然軸付着	ヨコナデ	派白色	灰黃色	*	2~4mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
431	*	頸忍草	身舟・完形	9.0	5.6	3.5	ヨコナデ ヘラ切り底	ヨコナデ	黄褐色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
432	*	頸忍草	身舟・完形	9.6	6.3	4.2	ヨコナデ底部 ヨコナデ側面 ヨコナデ側面ヘラ切り底ナデ	ヨコナデ	灰色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
433	*	頸忍草	身舟・完形	9.6	7.0	4.0	ヨコナデ ヘラ切り後	ヨコナデ	灰色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
435	*	頸忍草	身舟山田版	12.6	9.9	9.9	ヨコナデ 側面に自然軸付着	ヨコナデ	灰色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
436	*	頸忍草	平腹・完形	11.9	6.5	17.0	ヨコナデ 側面に自然軸付着	ヨコナデ	灰色	灰白色	*	1~3mmの細胞の砂粒を含む 黒色、白色の砂粒を含む
437	ZB-SA16	土師器	身舟・口緑部	-	-	-	タケキ板 (風化著しい)	タケキ板 (風化著しい)	黄褐色	黄褐色	やや不良	1~3mmの砂粒を含む
438	*	土師器	身舟・口緑部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	黄褐色	良好	1~3mmの金色の砂粒を含む
439	*	土師器	耳・口緑部	-	-	-	ミガキ	ヨコナデ	浅黄褐色	黄褐色	*	1~3mmの金色の砂粒を含む
440	*-SA17	土師器	身舟・口緑部	-	-	-	ミガキ	ヨコナデ	明褐	にいし	*	1~3mmの金色の砂粒を含む
441	*	土師器	・底部	-	-	-	ナデ	風化著しい	浅黄褐色	にいし	不良	1~3mmの砂粒を多く含む
442	*	土師器	・底部	-	-	-	ナデ	風化著しい	浅黄褐色	灰白	良好	1~3mmの金色の砂粒を含む
443	*	土師器	身・口緑部	-	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄褐色	浅黄褐色	やや不良	2~3mmの砂粒を多く含む
444	*	土師器	・口舟・口緑部	-	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄褐色	浅黄褐色	*	1~3mmの砂粒を多く含む
445	*	土師器	身舟・底部	-	-	-	風化著しい	風化著しい	浅黄褐色	浅黄褐色	*	1~3mmの金色の砂粒を含む
447	*-SA18	土師器	身・底部	-	-	5.0	タケキ板 (風化著しい)	タケキ板 (風化著しい)	浅黄褐色	浅黄褐色	良好	2~3mmの砂粒を多く含む

西都原地区遺跡　遺物觀察表

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法寸(㎝)		調査・手法はか		色調		焼成	粘土の特徴
				11往	外往	外	面	外	内		
448	27R-SAI8	土師器	壺・底部	-	4.0	-	タケキ痕・ナデ(風化 害らしい)・焼付着	ナデ	浅黄緑	淡黄	やや不良
449	*	土師器	***	-	3.0	-	タタキ	ナデ	*	浅黄緑	*
450	*	土師器	***	-	2.0	-	風化害らしい	風化害らしい	灰白	灰	* 1~3mmの砂粒を多く含む
451	*	土師器	***	-	5.6	-	風化害らしい	風化害らしい	灰白	灰	* 1~3mmの砂粒を多く含む
452	*	土師器	壺・口縁・脚部	-	-	-	風化害らしい・小形丸窓 ・脚部に焼付着	風化害らしい	浅黄緑	浅黄緑	良好 1mmの砂粒を含む
453	*	土師器	口・口縁部	-	-	-	ミガキ(風化害らしい)・ 小形丸窓	風化害らしい	鈍い黄緑	灰黄	*
454	*	土師器	壺・肩・底部	-	1.6	-	風化害らしい	風化害らしい	黄緑	黄緑	* 1mm以下の砂粒を含む
456	*-SAI9	土師器	壺・口縁・脚部	30.4	-	-	タタキ	ヨコナデ・焼付着	灰白	灰白	* 1~2mmの砂粒を多く含む
457	*	土師器	***	26.5	-	-	ヨコナデ・タタキ痕・ 焼付着	ナデ	*	*	やや不良
458	*	土師器	***	22.2	-	-	ヨコナデ・タタキ痕	ヨコナデ・ナデ	*	鈍い黄緑	良好 1mmの砂粒を多く含む
459	*	土師器	***・底部	-	5.2	-	風化害らしい	風化害らしい	淡黄	にぶい橙	やや不良
460	*	土師器	壺・脚部	-	-	-	タタケハゲ後ミガキ・露 ・品目有	ヨコハゲ・ナタメハゲ	橙	浅黄緑	良好 1mmの砂粒を含む
461	*	土師器	***	-	-	-	ミガキ・小形丸窓・ 品目有	ヨコナデ	褐色	褐色	*
462	*	土師器	***	-	-	-	風化害らしい	風化害らしい	黄緑	浅黄緑	やや不良
463	*	土師器	壺・底部	-	1.2	-	風化害らしい	ハケメ(風化害らしい)	浅黄緑	灰青	*
464	*	土師器	壺・口縁部	-	-	-	風化害らしい	風化害らしい	黄緑	黄緑	* 1mmの砂粒を含む
465	*	土師器	*・背部	-	-	-	風化害らしい	風化害らしい	橙	橙	* 1mmの砂粒を含む
466	*	土師器	壺・口縁部	17.2	-	-	風化害らしい	風化害らしい	浅黄緑	浅黄緑	* 1mm程の金色の砂粒を含む
467	*-SAI1	土師器	壺・口縁・脚部	22.5	-	-	タタキ痕(風化害らしい)	風化害らしい	黄緑	黄緑	
468	*	土師器	*・1脚部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄緑	浅黄緑	* 1~3mmの金色の砂粒を少額含む
469	*	土師器	***	-	-	-			*	*	1~2mmの砂粒を多く含む
470	*	土師器	***	-	-	-	風化害らしい・焼付着	風化害らしい	鈍い黄緑	橙	やや不良
471	*	土師器	***	-	-	-	風化害らしい	風化害らしい	橙	浅黄緑	* 1mm以下の中粒を含む
472	*	土師器	***・底部	-	4.0	-	タタキ痕(風化害らしい) ・黒斑有	風化害らしい	浅黄緑	褐色	* 1~3mmの砂粒を多く含む
473	*	土師器	***	-	2.6	-	ナデ(風化害らしい)・ 黒斑有	風化害らしい	*	浅黄緑	* 1~4mmの砂粒を多く含む
474	*	土師器	壺・底部	-	7.6	-	風化害らしい	風化害らしい	黄緑	明黄緑	* 2~3mmの砂粒を多く含む
475	*	土師器	壺・1脚部	-	-	-	風化害らしい	風化害らしい	*	黄緑	* 1mm以下の砂粒を含む
476	*	土師器	***	-	-	-	風化害らしい	風化害らしい	*	橙	*
477	*	土師器	壺・**	-	-	-	風化害らしい・壺口縁 下部・瓶状文有	風化害らしい	橙	浅黄緑	* 1mmの砂粒を含む
478	*	土師器	壺・**	-	-	-	ヨコナデ・瓶状頸く立 ち上がる・瓶状支	ヨコナデ	浅黄緑	灰白	良好
479	*	土師器	壺・1脚部	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	*	浅黄緑	* 1mm以下の砂粒を含む
480	*	土師器	*・2脚組合	-	-	-	ミガキ	ナデ	*	*	やや不良
481	*	土師器	*・合組	-	-	-	風化害らしい	淡黄	明黄緑	良好	1mm以下の砂粒を含む
482	*	土師器	*・柄部	-	-	-	ヨコナデ	風化害らしい	浅黄緑	浅黄緑	*
483	*	土師器	*・柄部	-	-	-	風化害らしい	風化害らしい	柄	浅黄緑	*

第V章 16号支線道路横穴墓群出土の人骨について

鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ

小片丘彦、竹中正巳、峰 和治

1995年1月、宮崎県西都市西都原古墳群台地南部の傾斜面辺縁から古墳時代後期に属する横穴墓が発見された。このうちの2基（2号墓道2-1号墓、6号墓道6-2号墓）に人骨が遺存していた。

2号墓道2-1号墓

・埋葬個体数および出土状態(第67図)

遺存する人骨は2個体分と考えられる。玄室の奥壁に近い位置にある歯だけの遺存をA個体、同じく羨道寄りにある骨群をB個体と呼ぶことにする。B個体の出土状態は、埋葬時の位置を保っていると思われる左大腿骨を除いて、本来の解剖学的位置を保っていないが、各骨片とも原位置と推定される位置から近いところにある。A個体は歯だけの遺存のため、埋葬原位置、埋葬体位ともに不明である。

また、埋葬順位については、玄室内での位置や保存の程度から、A個体、B個体の順に埋葬されたと考えるのが自然であろう。しかしA個体は、保存されにくい小児骨であるので、順位についての明確な判断は下せない。

A個体の所見

骨は残っていない。5本の歯すなわち、上顎左第2乳臼歯、上顎左大臼歯、上顎左第1大臼歯、上顎右第2大臼歯および下顎右第1大臼歯だけが遺存している。性別は不明である。年齢は、咬耗の状態、歯根の形成状況から6歳位の小児と考えられる。

B個体の所見

保存状態は悪く、頭蓋骨片、上顎骨右半側、左上腕骨片、左右大腿骨骨体および右踵骨だけが遺存している。やや頑丈な印象を与える大腿骨などから男性骨の可能性が強いが、確定はできない。下顎右第2および第3大臼歯の咬耗状態から壮年と推定される。

6号墓道6-2号墓

・埋葬個体数および出土状態(第77図)

玄室内の砾床上に1個体分の全身骨骼がほぼ完全に残っている。玄室の奥行きが1.1m、幅が1.6mと小さいこともあり、1個体だけの埋葬であったと考えられる。

埋葬姿勢は両腕を体の両脇に延ばした仰向けの伸展位である。顔面部に朱が少量付着している。出土時、頭蓋から第5頸椎までの部分は顔面を右に向けた状態で右肩の上にあり、解剖学的配列ではなかった。しかし、頸椎に刀傷など損傷が認められないことから、死後変化の過程で頸部が先に朽ち、頭頸部は右肩の上まで転位したものと推測される。その他の骨格は、解剖学的位置関係を保っている。

人骨の所見

・性、年齢

性別は寛骨の形状などから女性、年齢は恥骨結合面の所見、頭蓋縫合の癒合の程度、歯の咬耗度から熟年と判定される。

・形態学的所見

頭蓋



第87図は頭蓋の前面観と側面観である。鼻根部から鼻骨にいたる部位および頬上顎部の著しい平坦性がうかがえる。また、下顎骨は、枝幅が大きく、下顎切痕が浅く、体部が厚く頑丈で、掘り椅子型を示す。

頭蓋計測の結果を表11に示す。計測は、主にマルテン法(Knussmann, 1988)に従った。鼻根部の計測は、Suzuki(1969)の方法に従った。頭蓋計測値および示数の比較を表12に示す。

表11 那都6-2号墓老年女性頭蓋の計測値(mm)および示数

Martin's No.		Martin's No.		
1	頭蓋最大長	170	52	
8	頭蓋最高幅	138	頭窓高(左)	33
17	バジオ・ブレグマ高	126	頭窓示数(左)	30.5
8/1	頭蓋長幅示数	81.2	頭窓示数(右)	31.0
17/1	頭蓋長高示数	74.1	鼻幅	21
17/8	頭蓋額高示数	91.3	鼻高	48
1+8+17/3	頭蓋バジオ	146.7	鼻示数	43.8
3	バジオ・ブレグマ長	(163)	40+45+47/3 頭面状・幅	112.0
5	頭蓋底長	98	鼻骨最小幅	6
9	最小前額幅	78	上顎骨突出部起長	51
9/8	横前頭頸頂示数	56.5	口蓋幅	44
11	肉耳幅	128	觀示数	100.0
12	後頭幅	107	脛窓間示数	15.6
13	乳突幅	101	全顎面角	79
7	大後頭孔長	30	鼻顎面角	83
16	大後頭孔幅	26	齒槽側山角	67
16/7	大後頭孔示数	86.7	下顎圓錐突起幅	116
23	頭蓋水平周	506	下顎筋突起幅	90
24	横張長	300	下顎角幅	106
25	正中矢状張長	(355)	耳柱(高)	30
26	正中前額張長	122	下顎体厚(左)	15
27	正中顎頭張長	(126)	下顎体厚(右)	16
28	正中後頸張長	(104)	下顎頭高(左)	69
29	正中前頸張長	107	下顎頭高(右)	68
30	正中頸項張長	110	下顎枝高(左)	68
31	正中後頸張長	84	下顎枝高(右)	67
26/25	前頸矢状張長示数	(34.4)	下顎枝幅(左)	38
27/26	矢状前頸頭頂示数	(103.3)	下顎枝幅(右)	37
28/26	矢状前頸後頸示数	(85.2)	最小下顎枝幅(左)	38
29/26	矢状前頸側曲示数	87.7	最小下顎枝幅(右)	37
30/27	矢状前頸側曲示数	(87.3)	下顎(体)長	77
31/28	矢状後頸側曲示数	(80.8)	下顎反	106
40	顎長	98	下顎枝角(左)	124
45	頬骨弓幅	132	下顎枝角(右)	119
46	中顎幅	103	下顎示数(左)	55.9
47	顎高	106	下顎示数(右)	55.2
48	上顎高	64		
47/45	前額示数	80.3		
47/46	外耳・顎示数	102.9	顎面平坦度	
48/45	前額上顎示数	48.5	前額骨張	95.3
48/46	前額上顎示数	62.1	前額骨重総	9.8
43	上顎幅	100	前額骨平坦示数	10.3
44	尚脣高幅	96	鼻骨張	6.0
50	前額窓間幅	15	鼻骨重総	1.0
F	鼻根横張長	16.5	鼻骨平均示数	16.6
50/F	鼻根渦曲示数	90.9	頬上顎骨張	107.5
51	頬窓幅(左)	41	頬上顎骨重総	17.2
	頬窓幅(右)	42	頬上顎骨平坦示数	16.0

頭蓋は、頭蓋最大長が小さく、バジオ・ブレグマ高も小さい。頭蓋長幅示数は短頭に属す。本人骨の頭蓋長幅示数は、津雲繩文人より、わずかに大きい。また本頭蓋は、南九州出土の市の瀬、立切、原村上古墳人と同様、北部九州・山口古墳人、山陽古墳人に比べ、大きな値を示す。

表12 頭蓋計測値(mm)および示数の比較〔女性〕

Martin's No.	頭蓋骨 6-2号基 人骨	市の類 古墳人① (南九州)		立切 古墳人② (南九州)		麻村上 古墳人③ (南九州)		北部九州 ・山口 古墳人④		山陽 古墳人⑤		津雲 縄文人⑥	
		n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
1	頭蓋較大長	170	1 166	7	171.7	4	176.3	37	175.6	30	174.6	39	175.9
8	頭蓋較大幅	138	1 142	10	137.7	3	140.0	33	137.3	29	135.7	41	141.2
17	ハシ・オ・アレクマ高	126	1 130	8	129.5	6	131.0	30	129.6	22	130.6	28	127.1
8/1	頭蓋長幅示数	81.2	1 85.5	5	78.9	2	82.1	28	78.5	23	77.6	37	80.2
17/1	頭蓋長高示数	74.1	1 78.3	5	74.7	4	74.8	27	74.2	21	74.7	28	72.2
17/8	頭蓋幅高示数	91.3	1 91.6	5	98.0	3	95.7	21	93.9	17	95.8	27	89.5
45	頸骨弓幅	132	1 136	9	132.3	3	133.0	27	131.2	17	128.3	22	132.6
46	中額幅	103	1 100	13	97.9	3	94.7	31	100.4	24	97.7	21	99.6
47	額高	106	1 110	5	103.4	3	107.7	15	110.4	16	110.4	21	106.2
48	上額高	64	1 65	16	60.5	5	63.0	33	67.7	30	66.3	23	62.6
47/45	コルマン額示数	80.3	1 80.9	3	75.8	2	82.7	13	83.8	13	84.9	11	80.1
47/46	ウイルヒヨー額示数	102.9	1 110.0	5	102.5	2	114.2	12	109.2	14	113.1	15	108.9
48/45	コルマン上額示数	48.5	1 47.8	8	45.6	3	46.4	23	51.7	15	50.8	11	47.6
48/46	ウイルヒヨー上額示数	62.1	1 65.0	12	61.6	3	65.0	27	67.7	21	66.8	15	63.8
51	眼窩幅(左)	41	1 42	16	41.6	6	41.3	31	41.3	26	41.8	18	41.9
52	眼窩高(左)	33	1 34	16	32.8	6	33.0	34	33.9	27	33.1	14	33.8
52/51	眼窩示数(左)	80.5	1 81.0	15	78.9	6	79.9	31	82.2	26	79.3	14	81.5
54	鼻幅	21	1 28	18	26.2	5	26.8	32	25.9	33	25.4	26	25.4
55	鼻高	48	1 49	17	45.4	5	47.6	32	48.5	30	49.1	25	46.2
54/55	鼻示数	43.8	1 57.1	17	57.5	5	56.3	30	53.8	30	52.1	23	54.7
57	鼻骨最窄幅	6	1 8	18	8.6	6	9.0	33	7.7	31	7.4	18	8.8
50	前眼窩間幅	15	1 16	18	18.4	6	17.3	35	17.8	30	17.7	23	18.3
F	鼻根横弧長	16.5	1 18	18	21.7	6	19.7	35	19.8	25	19.6	10	22.1
50/F	鼻根湾曲示数	90.9	1 88.9	18	84.9	6	87.8	35	90.1	25	89.8	10	80.9

①松下・中谷(1986) ②松下ほか(1991) ③松下(1988) ④中嶋・木井(1989) ⑤池田(1993) ⑥清野・喜本(1926)

顔面頭蓋は、コルマン、ウイルヒヨーの各顔示数、各上顔示数の比較から、他の南九州古墳人同様、北部九州・山口古墳人、山陽古墳人に比べ、低・広顔傾向を示し、津雲縄文人と大差がない。鼻幅は小さく、鼻示数は比較集団中、最も小さい。鼻根湾曲示数は大きく、鼻根部は扁平である。

顔面平坦度の計測はYamaguchi(1973)に従った。顔面平坦度3示数の比較は表13に示す。前頭骨平坦示数、鼻骨平坦示数および顎上顎骨平坦示数はいずれも著しく小さい。従って、顔面の平坦性は著しい。

表13 顔面平坦度3示数の比較〔女性〕

		n	M
前頭骨平坦示数	西都6-2号墓人骨	10.3	
	古墳人(東日本)①	11	14.0
	縄文人(東日本)②	21	14.8
鼻骨平坦示数	西都6-2号墓人骨	16.6	
	古墳人(東日本)①	23	22.2
	縄文人(東日本)②	8	33.6
頬上顎骨平坦示数	西都6-2号墓人骨	16.0	
	古墳人(東日本)①	5	19.6
	縄文人(東日本)②	6	21.6

①山口(1988) ②Yamaguchi(1980)

表14 西都6-2号墓人骨の顎蓋形態小変異

	観察項目	右	左
1	前頭縫合残存	—	
2	眼窩上神經溝	—	—
3	眼窩上孔	—	+
4	9.4°小骨	—	
5	横後頭縫合残存	—	—
6	7.3°(11)小骨	—	—
7	後頸乳突縫合骨	—	—
8	頭頂切痕骨	—	—
9	頸管開存	—	—
10	後頸頸前結節	—	—
11	後頸頸傍結節	+	—
12	舌下神經管二分	—	—
13	7.2°小骨	—	—
14	卵円孔形成不全	—	—
15	ヘリカルス孔	+	+
16	翼棘孔	—	—
17	内側口蓋管骨橋	—	—
18	横頸骨縫合痕跡	+	+
19	床状突起間骨橋	—	—
20	額舌骨筋神經管	—	—
21	頸靜脈孔二分	—	—
22	左側横溝溝優位	—	
22	外耳道骨瘤	—	—
24	口蓋隆起	+	
25	下頸隆起	+	/

十有 一無 ／観察不能

表15 西都6-2号墓歯年女性四肢骨の計測値(mm)および示数

	Martin's No.	右	左
上顎骨	5 中央最大径	(20)	(19)
	6 中央最小径	(16)	(16)
	7 骨体載小周	57	57
	7a 中央周	(59)	(58)
蝶骨	4 骨体横径	16	/
	5 骨体矢状径	6	/
	5/4 骨体断面示数	37.5	/
大顎骨	1 最大長	388	390
	2 自然位長	385	385
	6 骨体中央矢状径	25	23
	7 骨体中央横径	30	29
	8 骨体中央周	85	83
	9 骨体上横径	34	33
	10 骨体上矢状径	22	21
	8/2 肌厚示数	22.1	21.6
	6/7 骨体中央断面示数	83.3	79.3
	10/9 上骨体断面示数	64.7	63.6
鎖骨	1 全長	328	329
	1a 最大長	333	332
	8 中央最大径	27	28
	9 中央横径	20	20
	10 骨体周	74	75
	8a 保養孔位最大径	31	31
	9a 保養孔位横径	22	23
	10a 保養孔位周	85	85
	10b 骨体最小周	70	71
	9/8 保養孔位断面示数	74.1	71.4
	9a/8a 保養孔位断面示数	71.0	74.2
	10/11 長厚示数	21.3	21.6
	4/5 骨体断面示数	/	84.6

頭蓋形態小変異の結果は表14に示す。観察基準はDodo(1974,1986)に従った。縄文人に出現頻度が低く、弥生以降人に高い頻度を示す眼窩上孔が左側に認められる。縄文人に出現頻度が高く、弥生以降人に低い頻度を示す舌下神経管二分は左右どちらにも認められない。縄文人に多く認められる横頸骨縫合痕跡は、左右側とともに認められる。外耳道骨瘤は左右どちらにも認められない。下頬隆起は右側に認められる。

歯および歯槽骨

歯式を以下に示す。

rc C ₄	C ₄	C ₂	C ₂	rc C ₄	rc
8	7	6	5	4	3
3	2	1	1	2	2
rc	C ₂	▽	1	2	3
● ● ● ● ●	3	2	1	4	5
rc	C ₂	▽	●	●	8

- 歯槽閉鎖
- rc 根尖部・歯根周囲の骨欠損
- c₂ う蝕第2度(象牙質まで)
- c₄ う蝕第4度(残根状態)
- ▽ 歯根のみ残存

咬合様式は反対咬合である。残存歯の咬耗はマルチンの1～3度にわたる。う蝕に罹患した歯が多い。根尖部・根尖周囲の骨欠損は4歯にみられる。上顎右中切歯と下顎右側切歯の唇側面の切端から根尖へかけては、磨耗面が形成されている。両歯の根尖部・根尖周囲の骨欠損については、辺縁性歯周炎の進行による骨欠損と考えられる。

下顎左右中切歯間歯槽骨の唇側面には、最大径2～4mmの不定形硬組織が3個認められる(第88図)。硬組織は、象牙質・セメント質様組織からなるものと考えられ、集合性歯牙腫



第88図 下顎正中部に見られる集合性歯牙腫(矢印)

と推定される。

四肢骨

四肢骨の計測はマルテン法(Knussmann, 1988)に従った。計測の結果を表15に示す。四肢骨は上腕骨、大腿骨、脛骨いずれも太い。大腿骨の粗線の発達は弱い。

大腿骨と脛骨の計測値と示数の比較を表16に示す。下肢骨の計測値のうち、大腿骨の骨体中央部と上部は横径が特に大きい。従って中央横断示数、上骨体横断示数は著しく小さい。脛骨の扁平性は弱い。脛骨と大腿骨の最大長の比は縄文人の値を上回る。

右大腿骨最大長から計算した推定身長は、148.3cm(ピアソン)、148.0cm(藤井)である。

表16 大腿骨、脛骨の計測値(cm)と示数の比較〔女性; 主として右側〕

部位	測定項目	西都-2号墓人骨		市の歴古墳人(南九州)①		立切古墳人(南九州)②		原村上古墳人(北九州)③		西日本古墳人④		縄文人⑤	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨 I	最大長	388	1 353	2 390.0	2 369.0	2 401.0	2 388.2						
6	中央矢状径	25	2 26.5	13 23.6	6 22.5	23 24.5	45 25.2						
7	中央横径	30	2 23.0	13 23.3	6 23.3	24 24.7	45 24.2						
6/7	中央横断示数	83.3	2 115.2	13 101.6	4 96.5	23 100.0	45 104.5						
8	骨体中央間	85	2 78.0	13 78.6	4 72.5	23 78.1	45 78.0						
9	骨体上矢状径	34	2 28.0	10 27.6	4 27.8	15* 30.4	42 28.4						
10	骨体上横径	22	2 21.0	10 20.3	4 20.8	15* 21.9	42 22.2						
10/9	骨体上横断示数	64.7	2 75.0	11 74.1	1 74.8	15* 72.1	42 78.2						
脛骨 Ia	最大長	328	—	2 318.5	1 302	3 310.0	17 324.4						
8a	栄養孔位最大径	31	1 26	5 29.0	5 25.0	11 29.5	37 30.5						
9a	栄養孔位横径	22	1 19	5 19.2	5 20.0	11 21.1	36 19.4						
9a/8a	栄養孔位横断示数	71.0	1 73.8	5 66.3	5 70.1	10 71.9	36 63.6						
長径比 脛骨最大長/大腿最大長		85.8	—	1 82.3	1 81.4	2 77.3**	17 83.6**						

①松下・中谷(1986) ②松下ほか(1991) ③松下(1988) ④池田(1988) *池田(1993) **平均値から換算

表17 推定身長の比較(cm) [女性; 主として右側, ピアソン法]

古墳人	西都-2号墓人骨		148.3
	n	M	
市歴古墳人(南九州)①	1	141.5	
立切古墳人(南九州)②	2	148.5	
原村上古墳人(北九州)③	3	145.0	
北部九州・山口④	15	150.2	
畿内⑤	2	147.8	
関東・東北南部⑥	9	149.7	
縄文人	津	147.3	
	青	16	147.3

①松下・中谷(1986) ②松下ほか(1991) ③松下(1988)

④中橋・水井(1989) ⑤池田(1993) ⑥山口(1985)

推定身長の比較を表17に示す。身長は津雲縄文人に比べ高い。また、市の瀬、立切、原村上の南九州古墳人と比較すると、立切古墳人に次いで高い。しかし、北部九州・山口古墳人や関東・東北南部古墳人よりは低い。

おわりに

宮崎平野部では、西都原古墳群をはじめ高塚古墳の分布密度が濃いにもかかわらず、南九州山間部に比べ保存状態の良い古墳人骨の出土が少ない。今回、西都市16号支線道路横穴墓群から出土した6-2号墓女性人骨は保存状態が極めて良好で、出土の少ない宮崎平野部における貴重な資料である。

本人骨は、日本列島における古墳人の中では、低額、低身長で、大脛骨の最大長に対して脛骨が相対的に長いという縄文人と共通する特徴を持つ。しかし、渡来人による遺伝的影響を大きく受けた、北部九州から東北南部にかけての古墳人同様、鼻根部が扁平で顔面が著しく平坦であるという非縄文的形質も持ち合わせている。縄文人の数値を下回るような低額・低身長の古墳人も存在する南九州にあって、本人骨は高額・高身長の部類に位置づけられることから、渡来者の遺伝的影響が多少なりとも及んでいたものと考えられる。

現在、宮崎平野部古墳人骨の出土が少ないこともあり、渡来人の遺伝的影響を強く受けた弥生・古墳人集団と縄文人との間で差異を示す顔面平坦度、頭蓋形態小変異、歯の形態について南九州内での地域差や集団差の検討は、まだ行われていない。今後、宮崎平野部の人骨資料が増加し、頭蓋や四肢骨の計測をはじめ顔面平坦度、頭蓋形態小異変、歯の形態などをはじめとする多面的な分析によって、平野部および山間部の各集団にどの程度渡来人による遺伝的影響が及んでいたかの問題が解明されることを期待したい。

文献

- Dodo, Y., 1974. Non-metrical cranial traits in the Hokkaido Ainu and the modern Japanese of recent times. *J. Anthropol. Soc. Nippon*, 82:31-51.
- Dodo, Y., 1986. A population study of the jugular foramen bridging of the human cranium. *Am. J. Phys. Anthropol.*, 69:15-19.
- 池田次郎, 1988. 吉備地方海岸部の縄文時代人骨—時代差と地域性の成立. 考古学と関連科学.
- 鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会. pp333-371.
- 池田次郎, 1993. 古墳人. 古墳時代の研究1. 雄山閣出版, 東京. pp27-95.

- 城一郎, 1938. 古墳時代人人骨の人類学的研究. 人類学報, 1:1-324.
- 清野謙次・宮本博人, 1926. 津雲貝塚人人骨の人類学的研究. 第二部頭蓋骨の研究. 人類学雑誌, 41:95-140;151-208.
- Knussmann, R., 1988. Martin/Knussmann-Anthropologie: Handbuch der vergleichenden Biologie des Menschen. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 松下孝幸, 1988. 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨. 高崎町文化財調査報告書, 第1集:57-158.
- 松下孝幸・中谷昭二, 1986. 宮崎県国富町市の瀬地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨. 国富町文化財資料, 第4集:145-185.
- 松下孝幸・佐伯和信・折原義行・小山田常一, 1991. 宮崎県西諸県郡高原町立切地下式横穴墓出土の古墳時代人骨. 高原町文化財調査報告書, 第1集:1-118.
- 中橋孝博・永井昌文, 1989. 弥生人形質. 弥生文化の研究Ⅰ. 雄山閣出版, 東京. pp23-51.
- Suzuki, H., 1969. Microevolutional changes in the Japanese population from the prehistoric age to the present-day. *J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V. Anthropology*, 3:279-309.
- Yamaguchi, B., 1973. Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo*, 16:161-171.
- Yamaguchi, B., 1980. A study on the facial flatness of the Jomon crania. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. D*, 6:21-28.
- 山口敏, 1985. 〈シンポジウム〉 国家成立前後の日本人—古墳時代人骨を中心にして—V. 東日本—とくに関東・東北南部地方. 季刊人類学, 16:70-82.
- 山口敏, 1988. 東日本の古墳・横穴墓出土人骨の顔面平坦度計測. 日本民族・文化の生成 1. 永井昌文教授退官記念論文集. 六甲出版, 東京. pp35-46.

第VI章.まとめ

1. 縄文時代の集石遺構について

今回の調査で、最古の時期のものとして、西都原台地北端の縁辺部にあたる地域（1号支線道路・2号小道）、そして、西都原台地南東部で北西に向かって谷地形が延びている西側台地縁辺部（23号支線道路・E区）から縄文時代早期の集石遺構12基及び焼碟群が確認された。

これら集石遺構12基は、そのほとんどがE区から検出されているが、残念ながらE区はすでに削平されている地域であり、SI6を除き底面部分しか遺存しておらず、形態など全体を把握できなかった。その他、23号支線道路から2基、また、2号小道からは、わずか1基のみしか集石遺構は検出されなかつたが、1号支線道路の東及び2号小道東側からは焼碟が全面に出土し、広範囲に分布していることが確認されたことから、周辺地域に多数の集石遺構の存在が想定される。

また、集石遺構は、拳大の碟が径0.8~1.5mの範囲に集積しているが、掘込みを有するもの及び有しないもの、さらに、掘込みを有するものは、底面に配石を有するものと有しないものに分かれる。掘込みは形状が摺鉢状を呈し、配石は花弁状のものが含まれている。

この集石遺構の性格については、形態や焼石及び炭化物が検出されることから、調理用の石蒸炉と考えられる。また、焼碟群は、碟の分布状況から廃棄碟と思われる。

共伴遺物は見受けられなかったが、周辺地域から無文土器と貝殻状痕文系土器が出土している。貝殻状痕文系土器は円筒深鉢で、土器の特徴から早期に位置づけられる。⁽¹⁾

いずれにしても、1号支線道路の南東約450m、西都原台地北東部にあたる新立遺跡からも多数の集石遺構が検出されており、周辺一帯は広範囲にわたり生活の適地として利用していたことが窺える。

2. 27号支線道路の集落について

平成5年度及び平成7年度の調査で、道路拡幅部分330m²の範囲内から21軒の住居跡が検出された。このなかで、単独検出されたのはわずか3軒で、その他は3~6軒の住居跡が重複しており、遺構密度がかなり高い地域であることが確認された。

これら住居跡からは、土師質壺をはじめ壺・鉢・高坏などが出土しているが、いずれも、須恵器及び鉄器を共伴するものは見あたらない。

土器の形態は、外反度合の少ない口縁部に丸底気味の底部を有する壺が主体を占め、外面には粗いタタキ調整痕を残すものが多く含まれていた。壺では、口縁部が直口し頸部に刻目突帯を有するものや、外反する口縁にさらに垂直に口縁が付く二重口縁壺、直口する口縁部に球状に膨らむ胴部を有するもの、外反する口縁部に球状に膨らむ胴部を有するものなどがある。

出土している。このなかで、SA19からは球状の胴部に線刻絵画文が施されたものが出土しているが、何を描いているのか一部分であるため判断がつかない。壺も壺同様、外面にタタキ調整痕を残すものが含まれるが、量的には少ない。高坏では、坏部にわずかの陵を有するものや楕状に延びるもの、脚部が直線的あるいはエンタシス状・「ハ」字状の延びるものなどが出土している。そのほか、鉢や小型丸底壺及びミニチュア土器などが出土している。

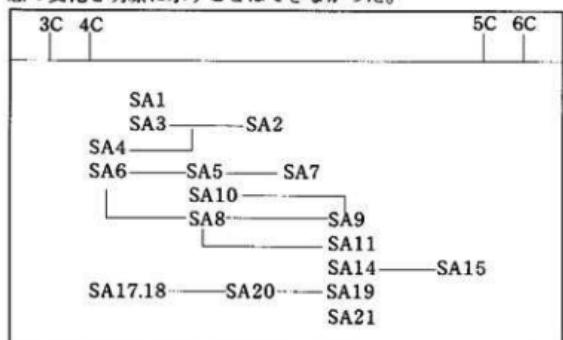
以上が土器形態の特徴を示したものであるが、類似する土器を出土する遺跡に新立遺跡・八幡上遺跡⁽²⁾・銀代ヶ追遺跡⁽³⁾がある。

新立遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代はじめの住居跡20軒が検出されている。壺・壺では類似しているものも含まれるが、全体的に外反度合が大きく、直口した口縁部及び刻目突帯を有する壺などは見受けられない。また、壺の胴部も球状のものよりも砲弾状のものが多いのも目に付く。そのほか、小型丸底壺でも新立遺跡のものは、口縁部が大きく広くタイプのものが含まれているなど、本遺跡のものとの形態の相違が見受けられる。

八幡上遺跡及び銀代ヶ追遺跡は、西都原台地の東方、一つ瀬川を隔てた対岸新田原台地上に位置する遺跡（新富町）であるが、むしろ、形態的には八幡上遺跡の1号・3号竪穴住居、銀代ヶ追遺跡の1号竪穴住居から出土している外反度合の少ない壺や、頸部に刻目突帯及び直口する口縁部を有する壺などのほうが類似している。なお、時期は若干新しいものも含め、4世紀後半から5世紀前半に比定されている。

このようなことをふまえながら考えると、本遺跡出土の竪穴式住居跡群は、新立遺跡の古い時期から八幡上遺跡・銀代ヶ追遺跡の新しい時期、つまり、古墳時代初頭から前期後半に比定され、比較的短い期間存続した集落であると思われる。

これらの住居跡の相互関係を、土器の特徴や土器の出土状況及びセクションの切り合い状況から復元すると次のようになるが、集落の存続された期間が短く、相互関係のみで土器形態の変化を明瞭に示すことはできなかった。



いずれにしても、住居跡群の周辺には多量の土器片が散布し、さらに、周辺畠地からは表面上ではあるが住居跡と思われる遺構が10軒以上も確認されたことから、本地域には同時期を中心にした大規模な集落が営まれていたことが想定される。

このように、これら住居跡群が検出されたことは、本調査の大きな成果であるが、別の観点からみると、興味ある調査結果となった。それは、これら住居跡が西都原古墳群が築造される直前を中心とした集落で、古墳を築造した人々の居住に関連した遺構が検出されなかつたことに起因する。このことは本地域に限らず、他地域においてもあてはまることで、新立遺跡の調査も、同様の調査結果となっている。それではなぜ、集落の存続がなされなかつたのか。それには、諸要因があると考えられるが、古墳の築造がなんらかのかたちで居住空間の移動にかかわっているものと想像される。つまり、古墳は権力の象徴であり、その古墳が在住する地域は神聖な地として位置づけた古代人の意識の変化によるものではなかろうか。いずれにしてもこのことは、この時期の住居跡が、西都原台地東側下に広がる中間台地の酒元遺跡などから検出されていることからも裏付けされ、謎の多い西都原古墳群の謎を解く鍵として注目される住居跡群である。

3. 4号支線道路の大溝について

4号支線で溝状遺構が検出された。アカホヤ火山灰上面での検出幅約15mの規模の大きなものである。溝内からは、弥生中期末から後期初頭に比定される土器類や石器、平安時代の土師質土器が出土している。8号支線に3軒検出された竪穴住居等、周辺に散在する該期の遺構からの流れ込みであろうと思われる。

4号支線周辺は畠地として利用されているが、その区画を見ると旧地形が良好に保存され継承されていることが判る。すなわち、南北両方向から下る段々畠状に区割りがされ、その最低面となる部分に溝状遺構が検出されたことになる。更に大きく目を転じ、第3集団と称される西都原台地北端の古墳群、陵墓参考地の男狹穂塚、西都原資料館周辺までを視野に入れ地形図を見ると、4号支線検出の溝状遺構が非常に興味深い地形上にのっていることが読み取れる。西都原資料館の南側から東向きに開析された谷地形は、男狹穂塚の北で約90°北に向きを変える。その後、再び東に向きを変え、検出された溝状遺構につながっている。4号支線付近で約90°北に向きを変え、台地下に向かい開析された谷地形につながっている。

第3集団の古墳群を見ると、密集する小円墳群の中に空白帯が存在していることが判る。前方後円墳である265号墳（船塚）やその北西に続く円墳群と、4号地下式横穴墓の墳丘と推定される111号墳を含む円墳群との間約30mには古墳が分布していない。等高線を見ると、この範囲が帶状にやや低くなっていることが判り、更には4号支線の溝状遺構を含む谷地形につながってくることに気づく。これらを結んでみると、南西角の開いた一辺約300mの方形の区画となる。平成6年度に西都市教育委員会が実施した地下レーダー探査では、この方形状区画の北辺となる位置に、4号支線検出溝状遺構と同規模の10数m幅の溝が確認されている。

古墳時代にこの方形の地形（区画）が意識されていたのか、否か。このことは古墳群の理解においては重要な意味を持つ。「方形区画」が人為的に手を加えられたものであり、区画の内外に分布する古墳の性格に相違がある可能性を指摘する意見もある。⁽⁷⁾しかし、4号支線検出溝状遺構を含め、この「方形区画」溝は自然地形によるものか、人為的なものかの判断は現段階ではつけ難い。西都市教育委員会は、市道改良に伴い平成6年度に発掘調査を実施し、この「方形区画」につながる溝状遺構を検出している。現在整理中であり詳細は明らかでないが、今後更なる資料の増加を待って慎重に検討すべき問題である。

4・16号支線道路の横穴墓群について

16号支線では、5～7m間隔に並んだ6基の墓道を検出し、それらに伴う6基の主体部を確認した。3～5号墓道は未完掘であり、更に3基以上の主体部が存在するものと思われる。6基の主体部の羨道には黒色土が流れ込んでいたが、流入土を除去し玄室内に人骨の遺存が見られるかの確認を行った。その結果、人骨の見られた2-1号墓、6-2号墓と天井部が陥没した1-1号墓のみ玄室内部の調査を行い、他は今後の整備活用のため土納にて羨道を塞ぎ現状保存の措置を取った。

各主体部の閉塞は羨門での板閉塞である。羨門の両脇には板を固定するための整形痕が残るものが多い。また、6-1号墓・6-2号墓には板の固定に使用されたと思われる河原石が見られた。墓道埋土の観察では、床面から約3分の1の高さまでは攪乱土が見られ、墓道および主体部を掘削した廃土で埋め戻されたものと思われる。その高さは閉塞板を覆う程度であったと推測される。墓道埋土の中位～上位は自然埋没の状況を示していたが、数カ所に焼土や須恵器大甕片が含まれており、祭祀が比較的長期にわたり行われていたものと推定された。また、1号・3号・4号の各墓道から出土した須恵器大甕片が接合しており、祭祀後にばらまかれたものと思われる。

横穴墓の年代的裏付けとして、玄室内および墓道から出土した須恵器類が重要な位置を占める。蓋坏は口径が10cm前後と小型化したものであり、ロクロからの切り離しも回転ヘラ切り未調整のものが多く見られた。坏身のたちあがりは短く内傾しており、受け部端の高さと変わらないものも見られる。こうした特徴は、陶邑編年のII型式6段階に位置づけられ、354の坏等一部III型式1段階に下るものも存在する。なお、横穴墓群北に検出された円墳周溝から出土した須恵器は、横穴墓群出土のものに比べ一段階遅ることがその形態的特徴から指摘される。II型式5段階に位置づけられよう。

今回の調査で発見された横穴墓は、多くの点で新しい知見をもたらした。

第1に、西都原の地で初めて確認された横穴墓であったこと。前方後円墳を中心に311基の高塚古墳からなる西都原古墳群には、これまでに12基の地下式横穴墓が確認されていたが、

横穴墓は皆無であった。西都市内では徳北横穴墓群⁽⁸⁾、千畳横穴墓群⁽⁹⁾が確認・調査されているが、立地、遺構形態の面では様相を異にする。

第2に、墓道を伴う横穴墓で、さらに一墓道に複数の主体部が掘削されていたことである。宮崎県内の横穴墓の分布は、阿蘇地方からの影響を受けている高千穂町を西限とし、東海岸沿いに宮崎市まで南下している。宮崎市蓮ヶ池横穴墓群では、他と異なり前室を持つ複室の構造で、長い墓道を伴う12号横穴墓が存在する。他の県内の横穴墓に墓道を伴う例はない。⁽¹⁰⁾一墓道に複数の主体部を伴うものとしては、大分県中津市上ノ原横穴墓群⁽¹¹⁾、福岡県行橋市竹並横穴墓群⁽¹²⁾、熊本県熊本市つづじヶ丘横穴墓群⁽¹³⁾などに見られる。もちろん、県内では初めての例である。

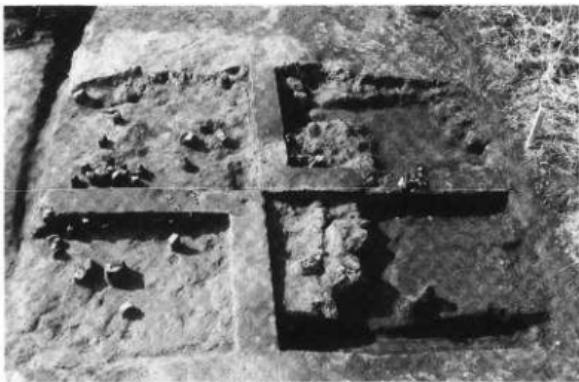
第3に、地下式横穴墓との関係が指摘されることである。当横穴墓群の玄室形態は、平入り・両袖・楕円形プランが多く、天井も低い。県内に分布する横穴墓にはこのような形態のものは見られず、多くは妻入り・長方形あるいは方形プランで屋根形の高い天井を持つものである。今回発見された横穴墓の玄室に似た構造は、地下式横穴墓に多く見られる。また、2-1号墓、6-1号墓、6-2号墓に見られた羨門前の方形の掘り窪めは、10cm程度の浅いものである。これは機能的には何らの意味を持たず、明らかに地下式横穴墓の豎坑を意識したものである。墓道を掘り抜き、その壁面から羨道と玄室を掘り抜くという形態的には通有の横穴墓を構築しながらも、主体部としては西都原の地に伝統的な地下式横穴墓を採用しているのである。玄室の形態・規模については、立地条件とりわけ土質に規制される面が大きいと考えられるが、付近には通有の横穴墓を構築し得る比高差の大きな丘陵斜面も存在しながら、敢えてこの地を占地しているところにこの墓制を営んだ集団の意識を読み取ることができよう。

これまで形態上の類似のみから語られることの多かった地下式横穴墓と横穴墓の関係であるが、積極的に示し得る根拠は皆無であった。今回の調査で発見された横穴墓は、両者の関係や地下式横穴墓の終焉の一様相を示唆している。地下式横穴墓を自らの墓制としていた集団（あるいは階層）が、横穴墓とその祭祀形態を探り入れ墓道を掘削し、主体部としては伝統的な地下式横穴墓を構築したものと思われる。平野部においては、5世紀中葉以降首長墓として存在していた地下式横穴墓も、平入りへの形態変化とともににより下位の階層をも含む均質的な墓制へと変質化しており、そこには社会構成の変化が予想される。あるいは、横穴墓の分布域拡大ともとらえられるが、主体部として西都原の地に伝統的な地下式横穴墓を採用しており、いずれの場合も地下式横穴墓が終焉を迎えようとする時期に両墓制の「折衷型」とも言える横穴墓が姿を見せることは注目されよう。

註

- (1) 「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 西都市教育委員会 1992
- (2) 「八幡上遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集 新富町教育委員会 1992
- (3) 「銀代ヶ迫遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集 新富町教育委員会 1992
- (4) 「酒元遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 西都市教育委員会 1989
- (5) 日高正晴 1958 「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻第4号
- (6) クロスカントリー大会用のコース選定に伴い、地下式横穴墓等の地下遺構の確認を目的として行った。
- (7) 北郷泰道 1994 「熊襲・隼人の原像」吉川弘文館 1994
- (8) 西都市教育委員会 1987 「囲横穴墓」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集
- (9) 日高正晴 1986 「日向における千畳横穴墓とその考察」『西都原古墳研究所年報』第3集 西都市教育委員会
- (10) 宮崎県教育委員会 1971 「蓮ヶ池横穴群調査報告書」
- (11) 大分県教育委員会 1991 「上ノ原横穴墓群II」
- (12) 竹並遺跡調査会編 1979 「竹並遺跡」
- (13) 熊本市教育委員会 1994 「つつじヶ丘横穴群」発掘調査概報I

図 版



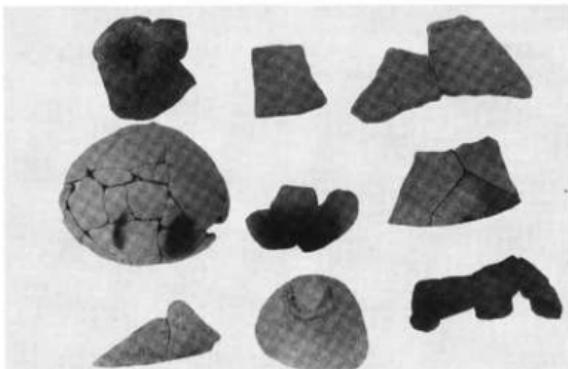
19号支線道路 SA 1



19号支線道路 SA 2(1)

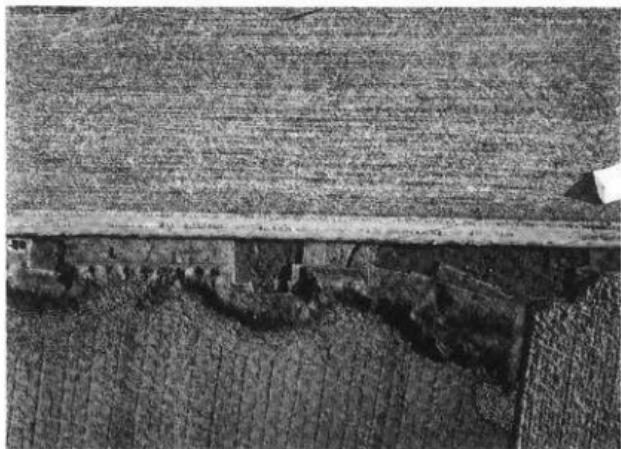


SA 2(2)



SA 1・SA 2 出土土器

図版2



27号支線道路 住居跡分布状況



S A 1 土器検出状況(1)



S A 1 土器出土状況(2)



S A 3 土器検出状況



S A 2～S A 4



SA 5~SA 8



SA 9・SA 10



SA 13~SA 15



SD 1

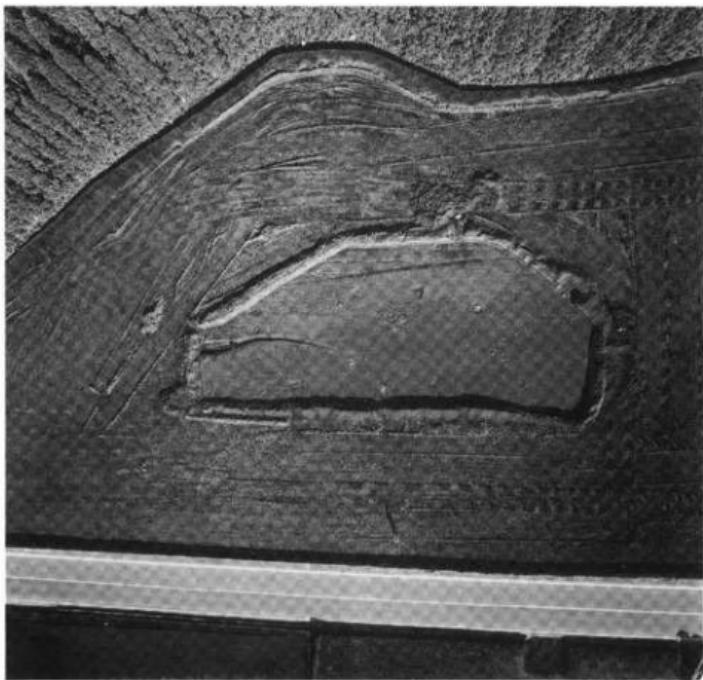
图版4



35号支線道路 S I 1



35号支線道路 S I 2



E区 S I 分布状况

図版5



S I 1



S I 2



S I 3



S I 4



S I 5



S I 6



S I 7

図版 6



27号支線道路 SA 1 出土土器



SA 1 出土土器



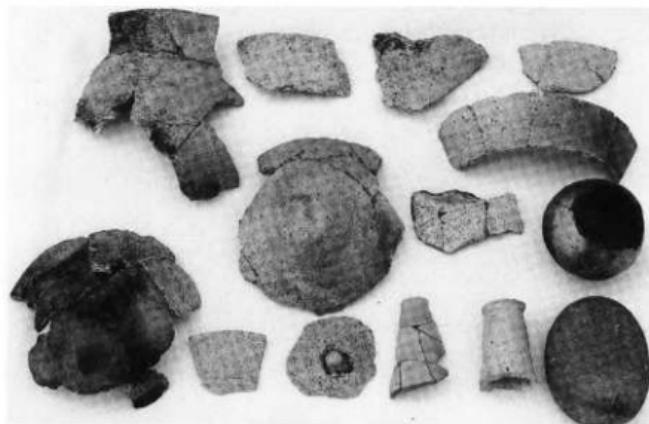
SA 2 出土土器(1)



SA 2 出土土器(2)



SA 2 出土土器(3)・石器



SA 3 出土土器(1)・石器



SA 4 出土土器



SA 5～SA 7 出土土器

図版8



S A 8 出土土器(1)



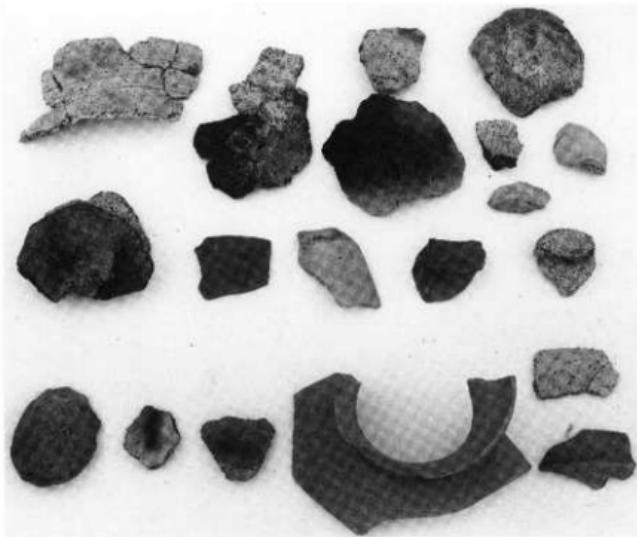
S A 8(2)



S A 8 出土石器



S A 9 出土土器

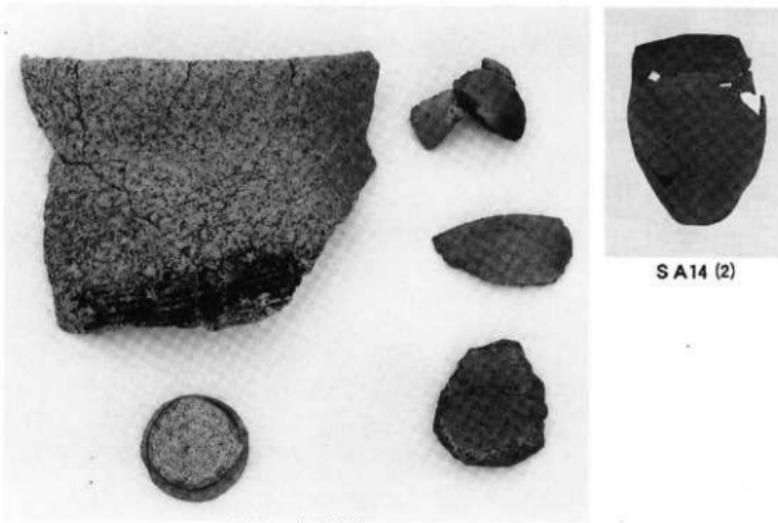


S A10・S A11・S A13 出土土器

図版10

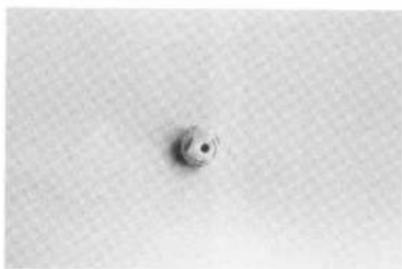


S A14 出土土器 (1)

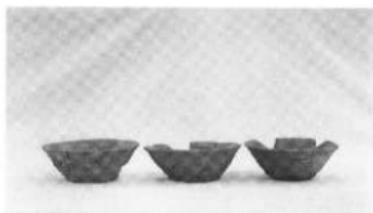


S A14 (2)

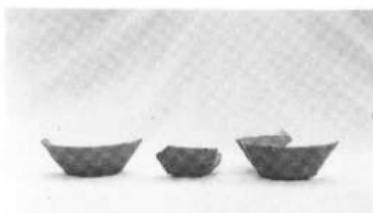
S A15 出土土器



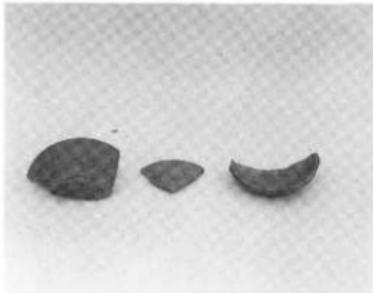
27号支線道路 S C 1 出土遺物



27号支線道路 S D 1 出土土器(1)



S D 1 出土土器(2)

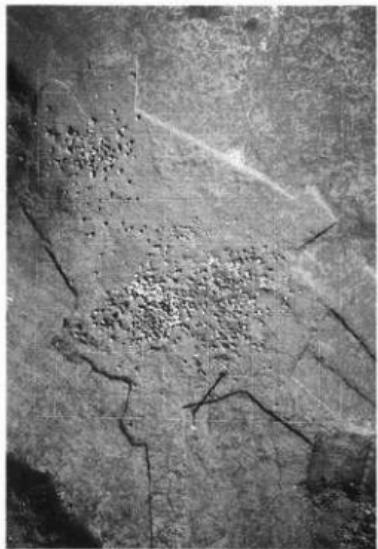


S D 1 出土土器(3)



E 区 出土土器

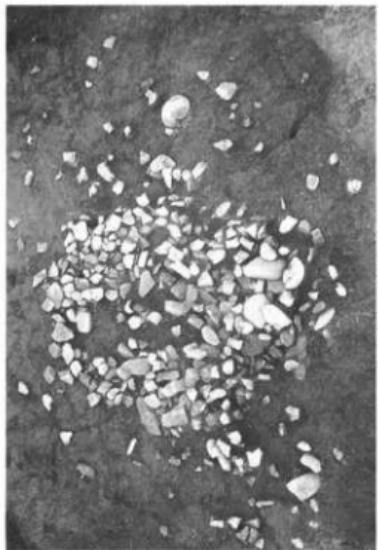
圖版12



23R・S12



1号小排水・SEE2



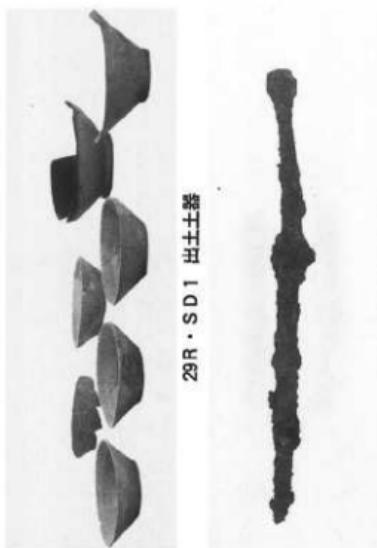
23R・S11



1号小排水・SA1



29R・SD1



29R・SD1 出土土器

29R・SD1 出土刀子

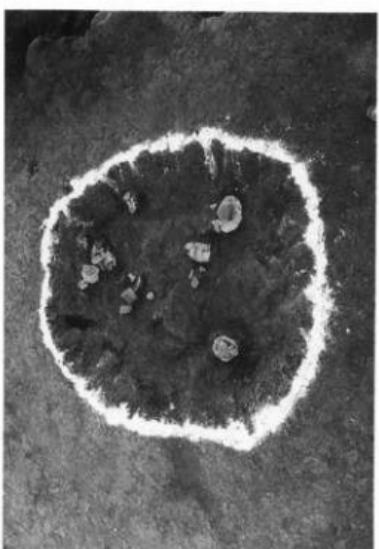
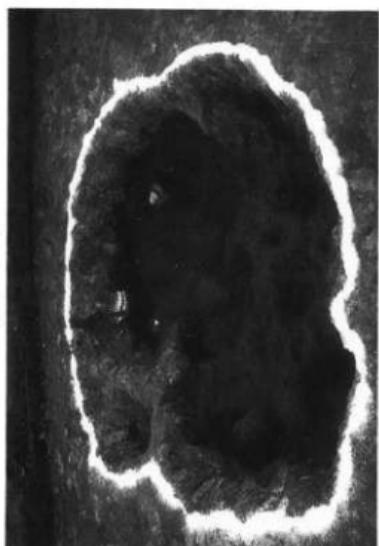


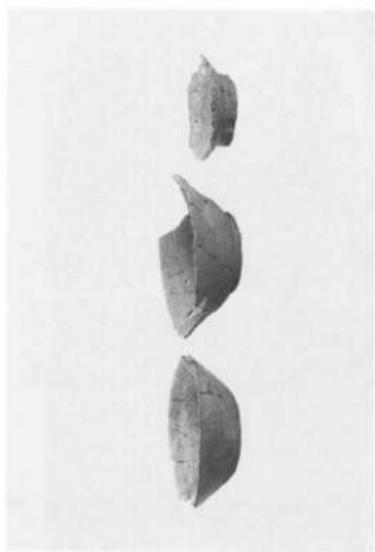
22R・23R・SE1、1号小排水・SE1 出土石器



1号小排水出土土器

図版14





31R・SC2 出土土器



34R・SB1

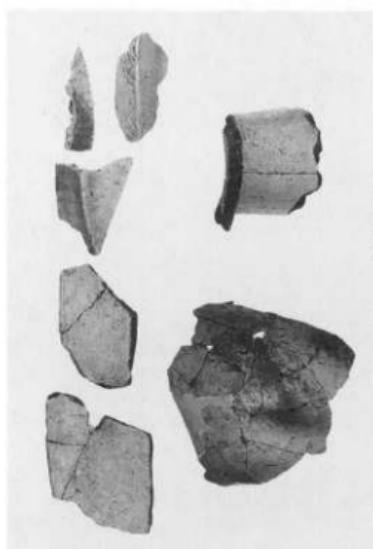


31R・32R 出土遺物

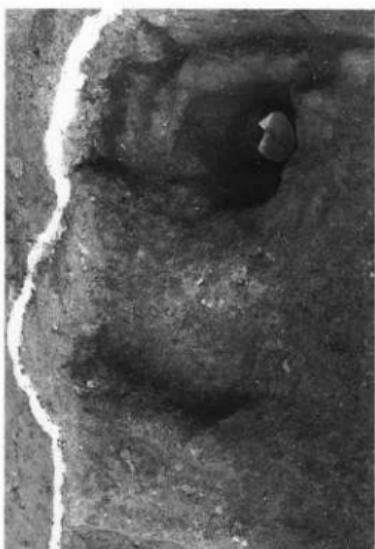


33R・SA1

図版16



33R・SA1 出土土器(2)



B区・SA1 カマド



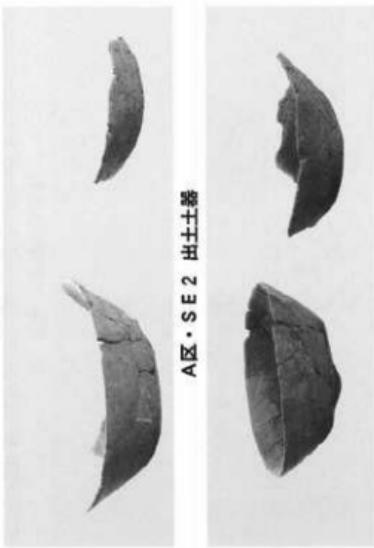
33R・SA1 出土土器(1)



B区・SA1

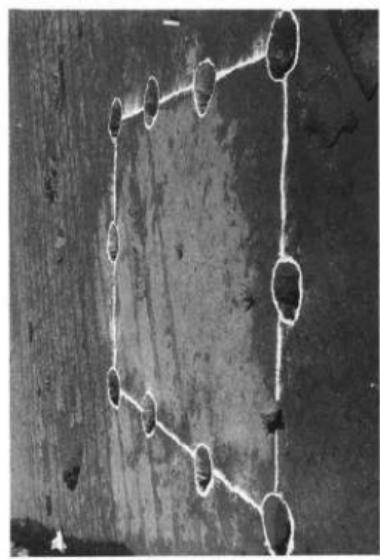


B区·SD1

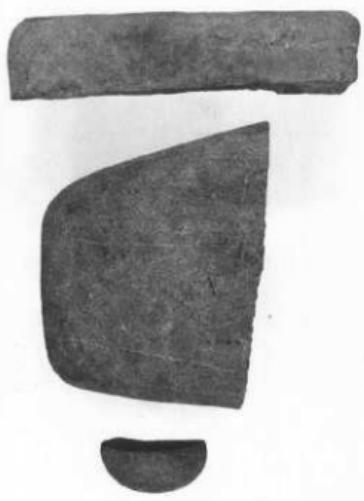


A区·SE2出土土器

B区·SA1出土土器

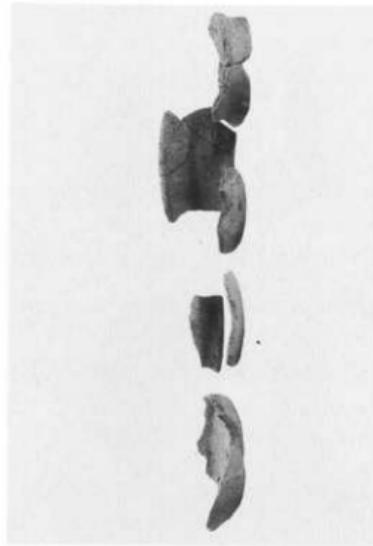


B区·SB1

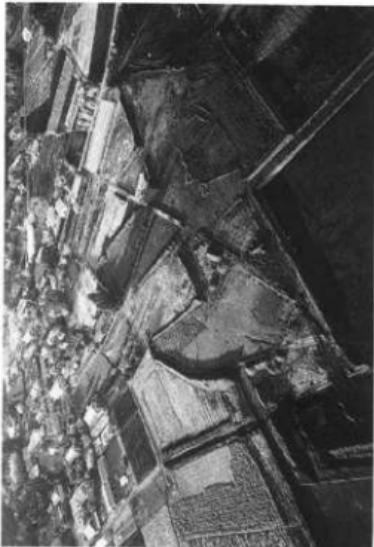


A区·SE2、B区·SA1出土石器

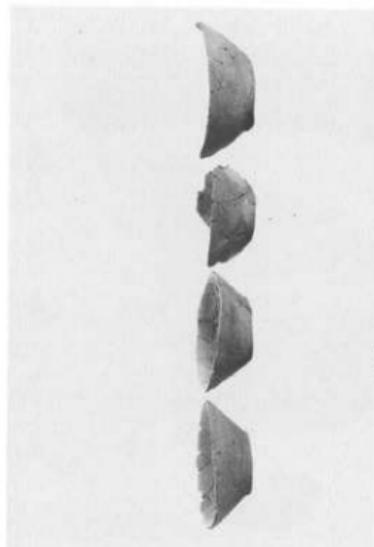
图版18



B区 包含层出土器



24R、C区、D区 全景



B区·SD1 出土土器



B区 包含层出土石器



1号支線道路 焼燻群検出状況



2号小道路 焼燻群検出状況



2号小道路 SC 1



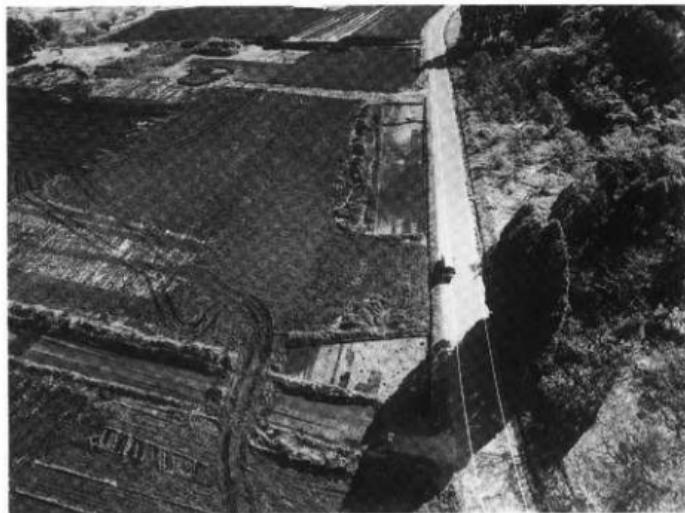
3号支線道路 SB 1



3号支線道路 SE 3



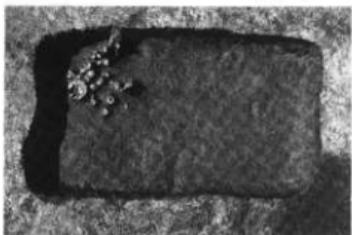
F区



G区・H区



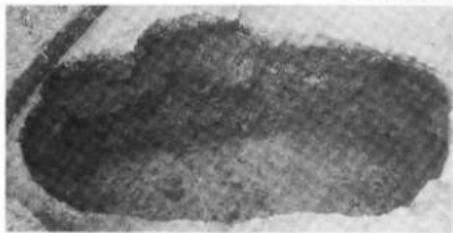
旧競馬場跡調査状況（空撮）



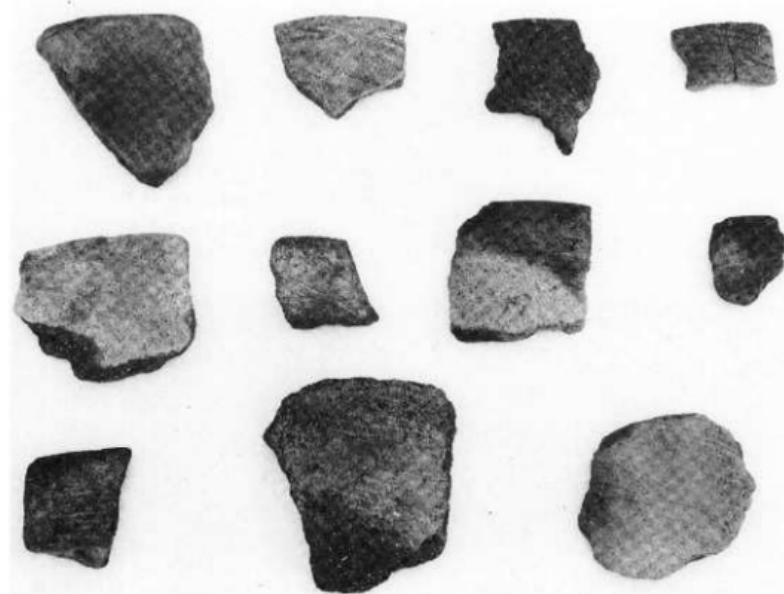
旧競馬場跡 SD 1(1)



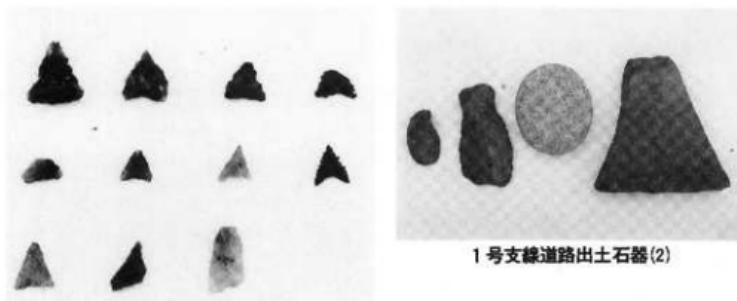
SD 1 土器出土状況 (2)



旧競馬場跡 SC 1



1号支線道路出土土器



1号支線道路出土石器(1)



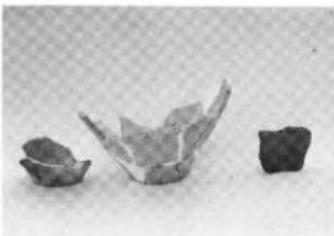
2号小道路
S A 1 出土土器



2号小道路 S C 1 出土土器(1)



S C 1 出土土器(2)



S C 1 出土土器(3)



S C 1 出土土器(4)



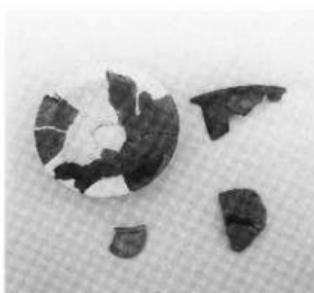
S C 1 出土土器(5)



S C 1 出土土器(6)



S C 1 出土土器(7)



S C 1 出土土器(8)



3号支線道路 S E 3 出土土器(1)



3号支線道路 S E 3 出土土器(2)



旧競馬場跡 SD 1 出土土器(1)



SD 1 出土土器(2)



SD 2 出土土器(3)



SD 2 出土土器(4)



SD 2 出土土器(5)



SD 2 出土土器(6)



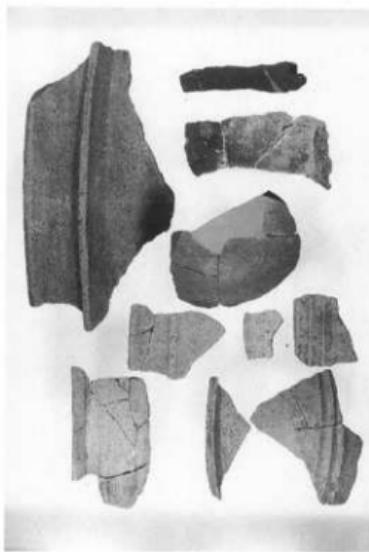
6 R 石器出土狀況



6 R 出土石器

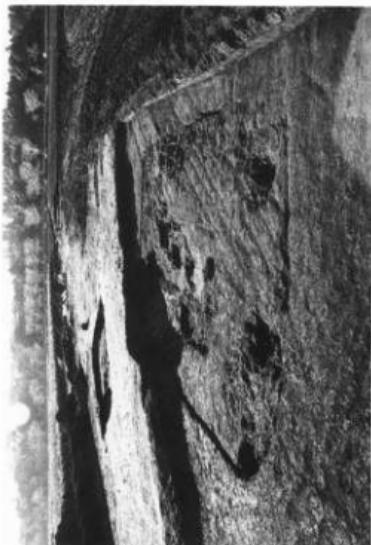


4 R · 大溝

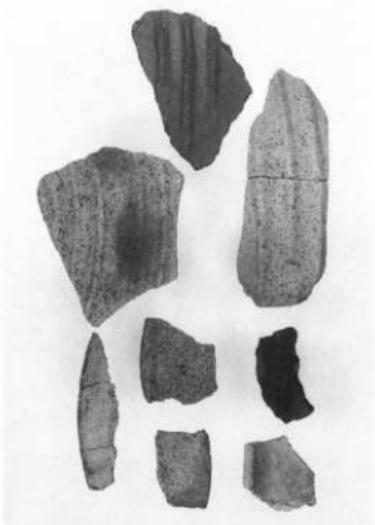


4 R · 大溝出土遺物

圖版28



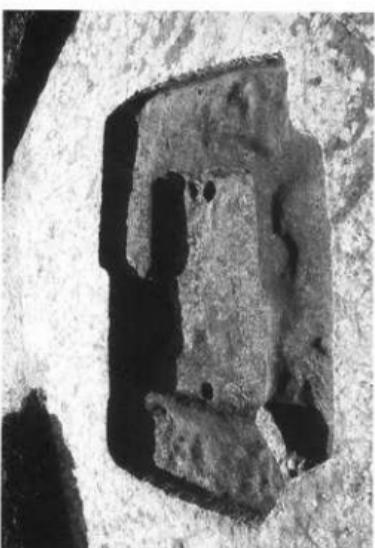
8R・SA2



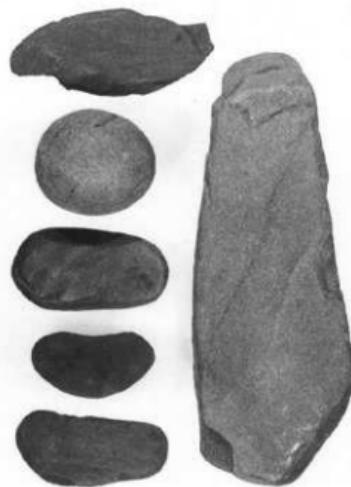
8R・SA1 出土土器(1)



8R・SA1



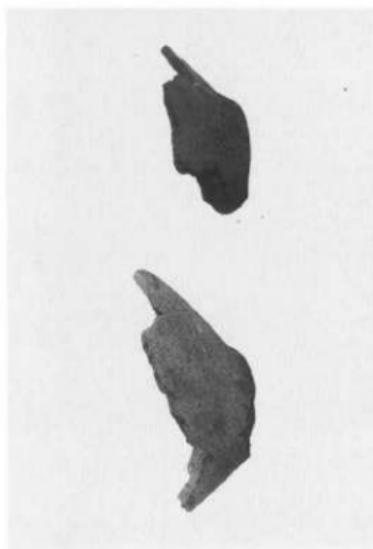
8R・SA3



8R・SA1、SA2、出土石器



8R・SA3 出土石器



8R・SA1 出土石器(2)



8R・SA1、SA2 出土石器

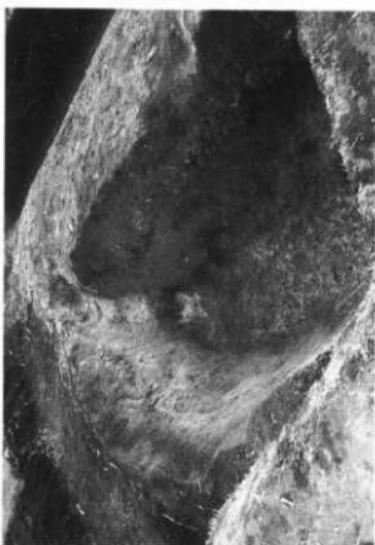
圖版30



16R・1号墓道



16R・橈穴墓群、円墳周溝



16R・1号墓道



1—1号墓 遺物出土状況(1)



1—1号墓 天井工具痕



16R・1—1号墓 蔓門



1—1号墓 遺物出土状況(2)



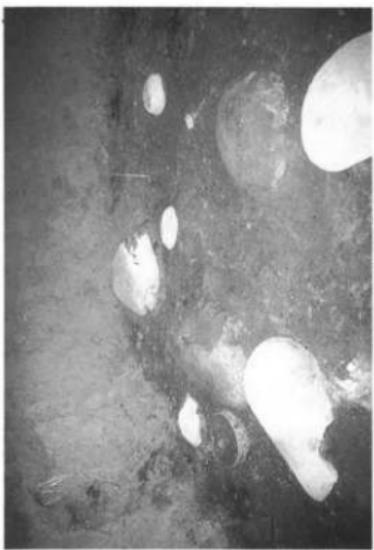
2—1号墓 玄室



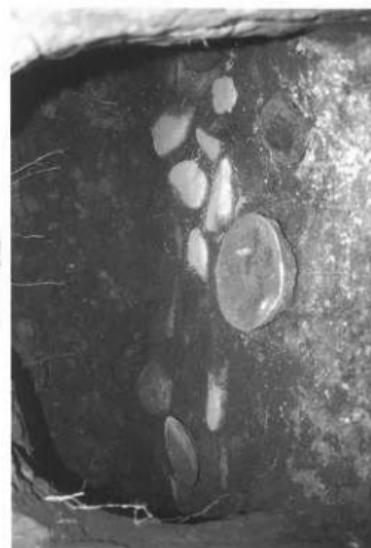
2—1号墓 遺物出土狀況(2)



16R·2号墓道



2—1号墓 遺物出土狀況(1)





4号墓道 遺物出土状況



4-1号墓 羨道前掘り込み



16R・4号墓道



5号墓道 墓土



16R・6号墓道



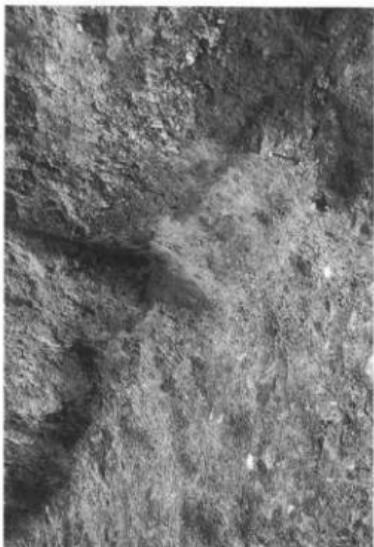
16R・5号墓道



5号墓道 遗物出土状况



6号墓道



6—2号墓前 壁面状態(2)



16R・6号墓道 6—1号墓、6—2号墓



6—2号墓前 壁面状態(1)



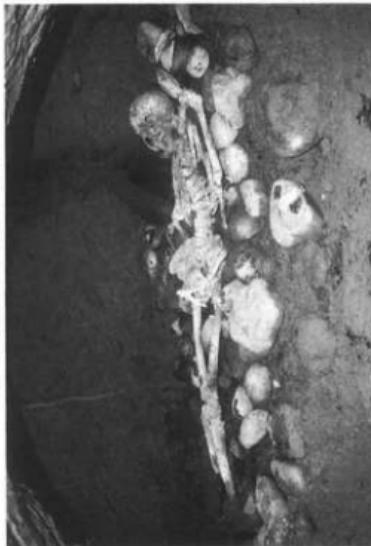
6—2号墓 天井工具痕



6—2号墓 人骨检出状况 (頭部)



6—2号墓 灰陶(玄室→外)



6—2号墓 人骨检出状况



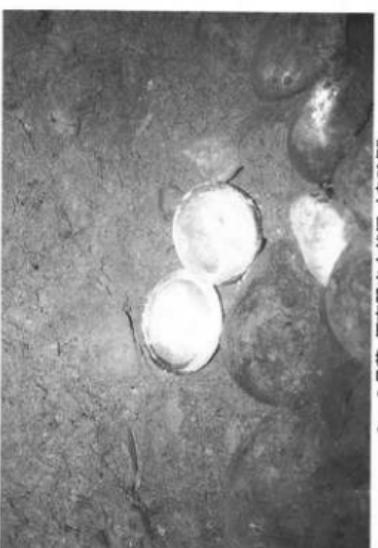
6—2号墓 頸飾器・耳環出土狀況



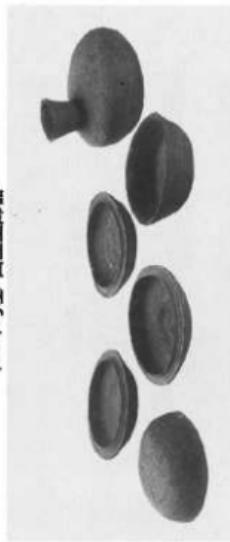
6—2号墓 刀子出土狀況



6—2号墓 遺物出土狀況



6—2号墓 頸飾器出土狀況（真實像）



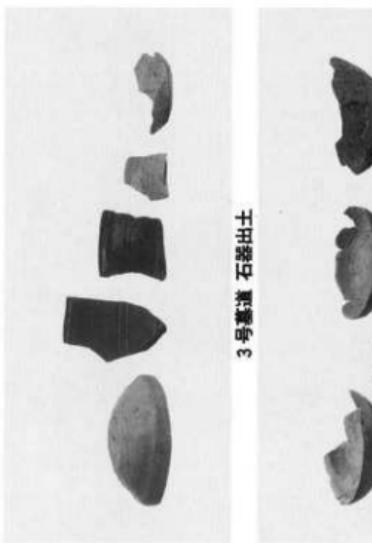
圖版40



4号墓道 出土須磨器(2)



5号墓道 出土須磨器



3号墓道 石器出土



4号墓道 出土土師器

4号墓道 出土須磨器(1)



6号墓群出土铁器



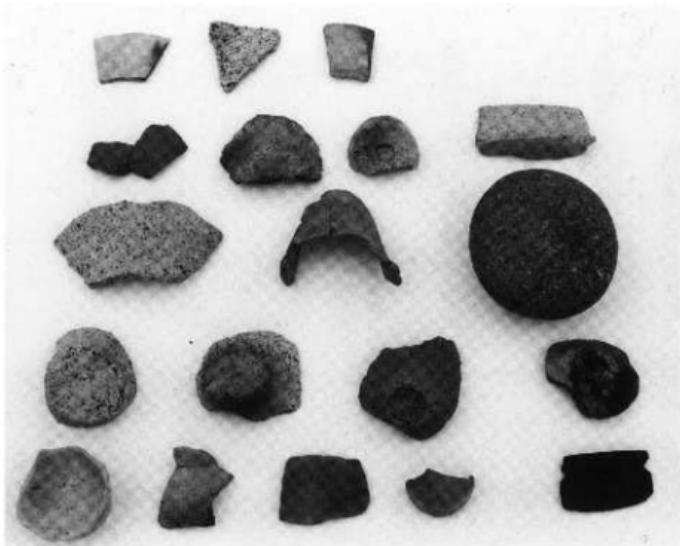
5号墓群出土铜器



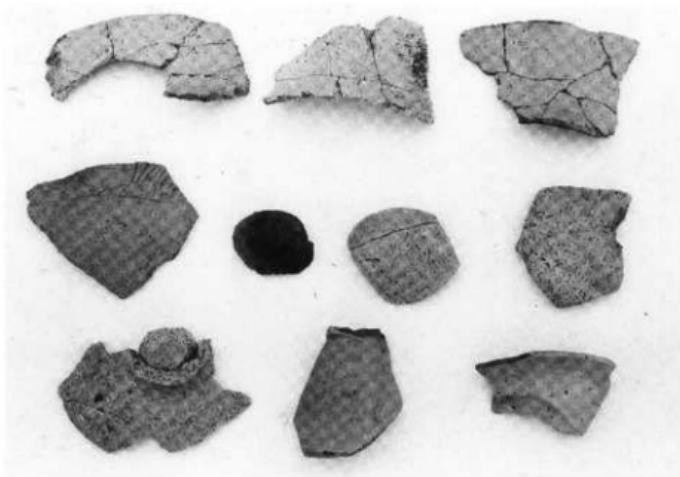
6—2号墓出土铜铃



5号墓群出土铜铃



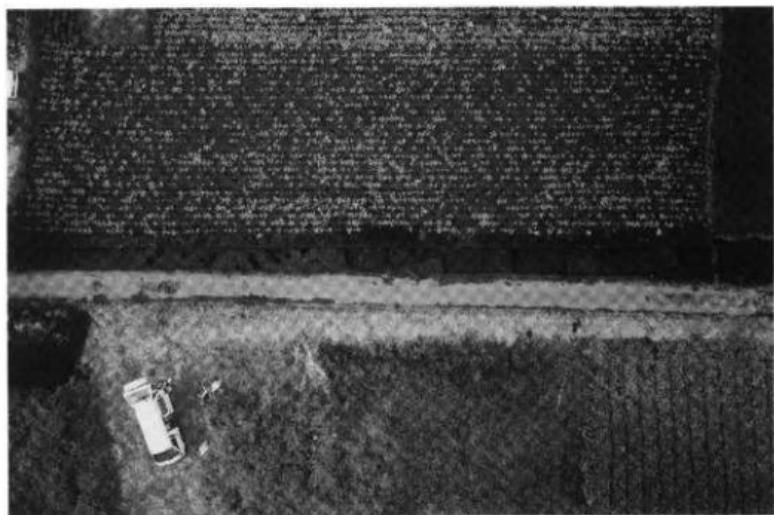
27号支線道路 S A17・S A18出土土器・石器



S A19出土土器



S A21出土土器



S A16~S A21 分布状況

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
西都原地区遺跡
平成8年2月発行
編集発行 西都市教育委員会
印刷所 なかむら印刷所

